

第191図 南地区出土木製品 (16)

W1062・1063は割材を利用した柄状の木製品である。W1062は細身の完形品である。握り部は断面円形で、裾が少し開く。その下位には方形で板状の突起が付き、その中央に小孔が穿たれている。握り部上位には、一段細く削られた長い角柱状の突出部があり、先端は鋭く尖る。その中位には目釘孔があり、木釘が残存している。

W1063は先端突出部が欠損するがW1062と同形と考えられる。握り部は断面楕円形で、中央から下位にかけて一段薄く削り込みをもち、裾が少し開く。その下位には半円形で板状の突起が付き、その中央に小孔が穿たれている。上位には一段細く削られた角柱状の突出部がある。

現状では、上位突出部に他の部材を取り付け、木釘によって固定した組合せの木製品であり、工具の柄あるいは、儀器的なものの柄と考えられている。

W1064は丸木を使用した断面蒲鋒形の棒状の木製品である。残存下端部分には大きな節があり、断面が円形状となる。片側を平坦にし、そこに別木を結合したものと思われる。頭部は三角形を呈し、頭部下と下位に一段細い部分を作る。これを利用して紐などを巻き付けたものと思われる。平坦面中央付近には横方向に幅約2.5cmの溝が削り込まれている。全面に加工痕が明瞭に残存しており、未成品あるいは未使用品の可能性がある。

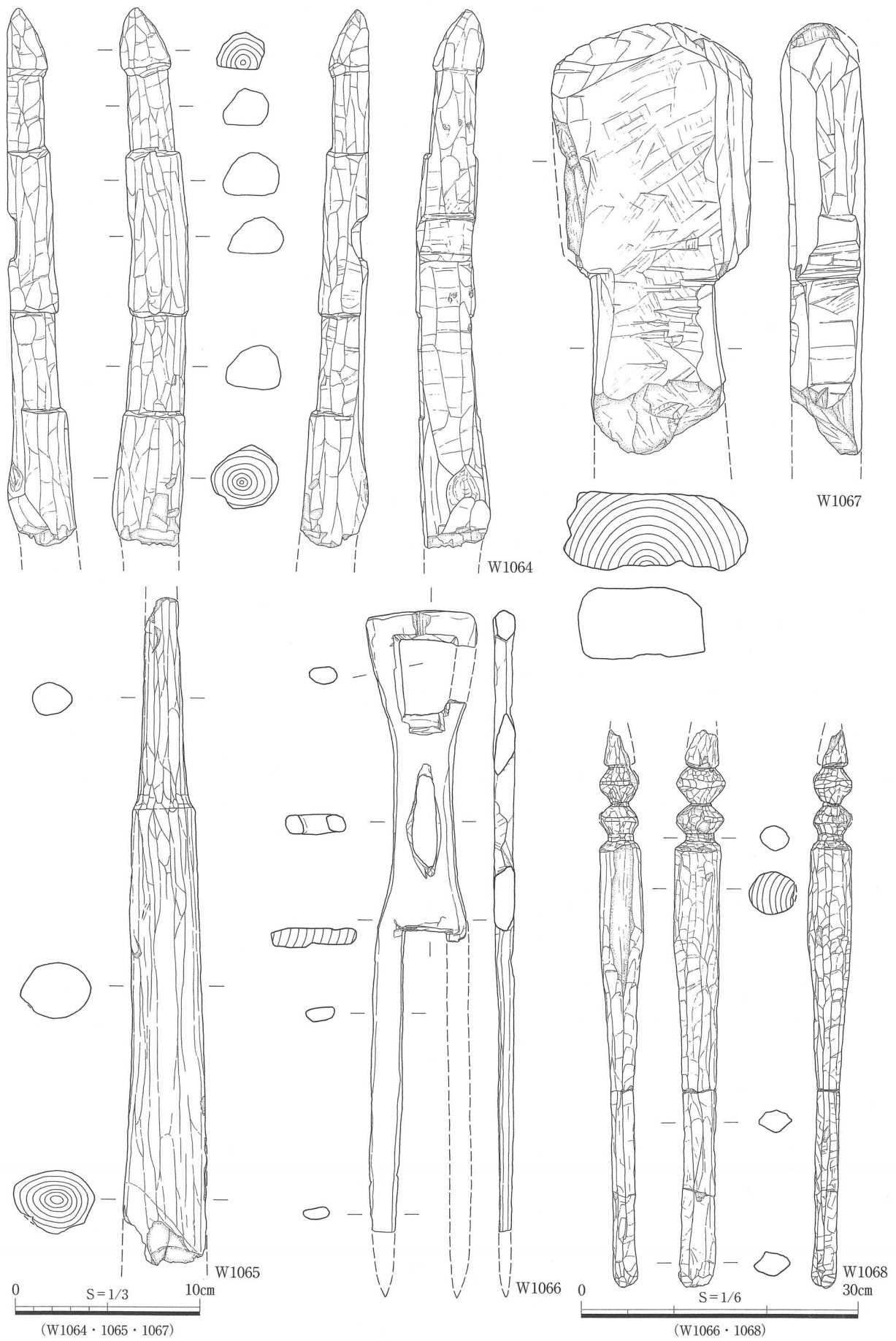
W1065は円柱状の用途不明品である。上位は一段細身の円柱形で、面取りの加工痕を明瞭に残す。下位部分は太く、下端に向かって徐々に太くなるようである。

W1066はW4004と同形の製品である。把手部は逆三角形状で体部に至り、体部上位から刃部に向かって徐々に幅を増し、刃部は二又で体部両側端部から取り付く。又間は方形に作られ直線的に垂下する。把手部には、前後面からの削り込みによって作られた縦長の逆台形を呈する孔がある。体部中央には縦長楕円形を呈する孔があり、その上下端は斜めに削られている。刃部断面は隅円方形の板状を呈し、刃先に向かって徐々に細くなる。

W1067は用途不明の未成品である。半截材を用い、図反対面は半截したままの状態調整痕はみられず、その他の面に粗い加工痕を残している。下端は欠損するが、頭部を一段幅広に作り出し、一木鋤の把手付近の未成品と類似した形態である。加工痕内に細かいキズがみられ、加工具の刃こぼれ状態を表していると考えられる。加工具幅は約2cmである。

W1068は下位端面に折取り痕を残すため用途不明未成品とした。頭部は、算盤玉のような形態のものが二段削り込まれ、その上位は上端を欠損するが、円錐状と想定できる。体部は上位部分が太く円柱状に作られ、体部中央に向かって緩やかに細くなり下端に至る。その体部中央の細身の部分は断面菱形であり、粗い面取り加工が施されている。加工具幅は約1cm。

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)	備考	保存 処理	樹種	共伴時期 (大和様式)
W1064	用途不明品	61次	SD-151BN	第8層	長(29.0)、幅3.7、厚3.6	未成品・未使用品の可能性あり	水	カヤ	Ⅱ-2・3
W1065	用途不明品	61次	SD-151	第5層	長(35.9)、幅4.4、厚3.4		水	サカキ	Ⅲ-1
W1066	用途不明品	69次	SD-1109C	第6層	長(66.5)、幅11.9、厚2.4	図反対面は炭化著しい。 W4009と同形	ラ	コナラ属 コナラ節	V・Ⅵ-1・2
W1067	用途不明未成品	65次	SK-202	第1層	長(23.3)、幅10.8、厚約4.0		ラ	ヤブニッケイ	Ⅱ-2・3
W1068	用途不明未成品	61次	SK-155	第2層	長(59.8)、径5.3	加工具幅:約1.0cm	ラ	サカキ	I?



第192図 南地区出土木製品 (17)

3. 石器

南地区の打製石器は、一部を除いてサヌカイト製であり、総重量は93.6546kgである。1㎡あたりの出土量は約52gと算出できる。そのうち第61次調査地から25.5698kg、第65次調査地から25.6025kg、第69次調査地から42.4823kg出土しており、1㎡あたりの出土量はそれぞれ、77g、47g、46gとなる。各器種の石器の内訳は第31表のとおりである。石鏃、石錐が他の地区より多い点は、南地区の傾向として注視される。また楔形石器や石核が西地区や中央区に比べて少なく、南地区における石器製作活動は、他の地区ほど盛んではなかったことがわかる。それにも関わらず豊富に製品が出土していることから、南地区の石器群が、他の地区よりも使用から廃棄に強い関連をもつ状況が想定できるだろう。

南地区の磨製石器は総数387点を数える。磨製石器が最も多く出土している地区であり、後述する砥石の様相と合わせて注目される。器種の内訳は第31表のとおりである。南地区では石庖丁の出土が際立っている。未成品や剥片も出土していることから、南地区において石庖丁の製作がおこなわれていた可能性が高い。また伐採斧、加工斧も一定量出土している。西地区同様、磨製石鏃や磨製石剣も数点確認されている。

石製品は340点ある。そのうち、砥石の出土数は南地区が最も多く、とりわけ第69次調査地から多く出土している。「置砥」とみられる大形の砥石や特徴的な使用痕をもつ砥石の大半は当調査地の資料である。南地区の砥石は、大きさ、形状、使用痕、砥石目など後述する砥石の分類項目をほぼ網羅している。また第65次調査地からは、青銅器鑄造に関係すると思われる砥石もあり注目される（「特殊遺物・考察編」第6節 青銅器鑄造関連遺物の項を参照）。

礫石器は149点ある。敲石が最も多く確認されており、盛んな石器製作活動が想定できる。こうした様相は打製石器の傾向とは合致せず、南地区の敲石には、他の地区よりも磨製石器製作や植物質食料の加工に用いられた敲石が多く含まれている可能性が考えられる。また、今回報告する調査地で確認されている石槌のほとんど（6点中5点）が、南地区から出土している。磨製石斧を敲石に転用したものがやや目立つ点も、南地区の特徴である。

第31表 南地区の石器

種類	器種	61次	65次	69次	合計
打製石器	石剣	26	29	36	91
	中形尖頭器	16	11	16	43
	石鏃	61(1)	112	135	308(1)
	石錐	43	82	100	225
	石小刀	8	18	10	36
	石匙	0	0	0	0
	スクレイパー	12	18	15(2)	45(2)
	楔形石器	0	3	5	8
	火打石	0	1	0	1
	石鏃	0	0	0(2)	0(2)
	石核	4	4(1)	1	9(1)
	合計	170(1)	278(1)	318(4)	766(6)
磨製石器	石庖丁	73	67	141	281
	石庖丁未成品	9	8	11	28
	大型蛤刃石斧	9	5	12	26
	柱状片刃石斧	4	5	6	15
	扁平片刃石斧	4	10	7	21
	磨製石鏃	1	0	1	2
	磨製石剣	3	3	7	13
	磨製石戈	0	0	0	0
	環状石斧	0	0	1	1
		合計	103	98	186
石製品	石製紡錘車	2	4	1	7
	石製紡錘車未成品	1	0	0	1
	石製円板	0	0	0	0
	垂飾品	0	0	0	0
	ミニチュア石製品	1	0	1	2
	用途不明石製品	7	10	7	24
	石鋸	3	8	4	15
	石鋸素材	5	2	6	13
	砥石	111	44	123	278
	合計	130	68	142	340
礫石器	敲石	19	9	43	71
	石槌	1	1	4	6
	磨石	34	4	8	46
	台石	0	0	0	0
	石皿	1	6	13	20
	投弾	0	0	6	6
	合計	55	20	74	149

註) 打製石器の数値はサヌカイト製の点数
() 内の数値はサヌカイト製以外のものの点数を示す

(1) 打製石器

唐古・鍵遺跡から出土している打製石器は、サヌカイトを主要な素材としている。出土しているサヌカイト製遺物の重量は、今回報告する調査区に限っても275.5988kgに達する。肉眼観察による限り、香川県金山産と思われるものは見当たらず、ほぼすべてが二上山北麓のサヌカイトと推定される。自然面の観察によると、ほとんどすべての自然面が丸みを帯びており、転磨の痕跡がうかがえない鋭利な凹凸をもつものは、S3057などごく一部にすぎない。自然面上に転磨の過程で生じたと思われる衝撃痕が認められるものが多く、本遺跡のサヌカイトの多くが、噴出源付近から二次的に運搬された地点に起源をもつことは明らかである。一方、数量的にはわずかだが、水磨・ローリングが著しく進行したサヌカイト原石や同様の自然面をもつもの（S2007・4034など）があり、水流によって運搬されたサヌカイトも、打製石器の素材として利用されているようである。また本遺跡から出土している打製石器の剝離面のほとんどは風化の進行が弱く、黒色を呈するが、明らかに風化度の異なる剝離面をもつ資料も数点出土している（S3052など）。こうした風化の進んだ剝離面は、切り合い関係の上でも、弥生時代の痕跡と考えられる黒色の剝離面に先行しており、両者の間に長期的な前後関係を想定できる。こうした風化の進行した剝離痕は断片的にしか残されていないため、素材の性状を推定するには至らないが、弥生時代以前の剝離物が石器素材として利用されていることがわかる。こうした資料は数量的にはごくわずかで、あくまで客体的な位置にとどまるものではあるが、本遺跡にサヌカイトがもたらされるまでの脈絡は、非常に複雑な様相を呈しているようである。

今回報告する打製石器は、石剣、中形尖頭器、石鏃、石錐、石小刀、石匙、スクレイパー、楔形石器、火打石、石鏃、剝片、石核に分類できる。まずそれぞれの器種の定義及び概要を述べておく。

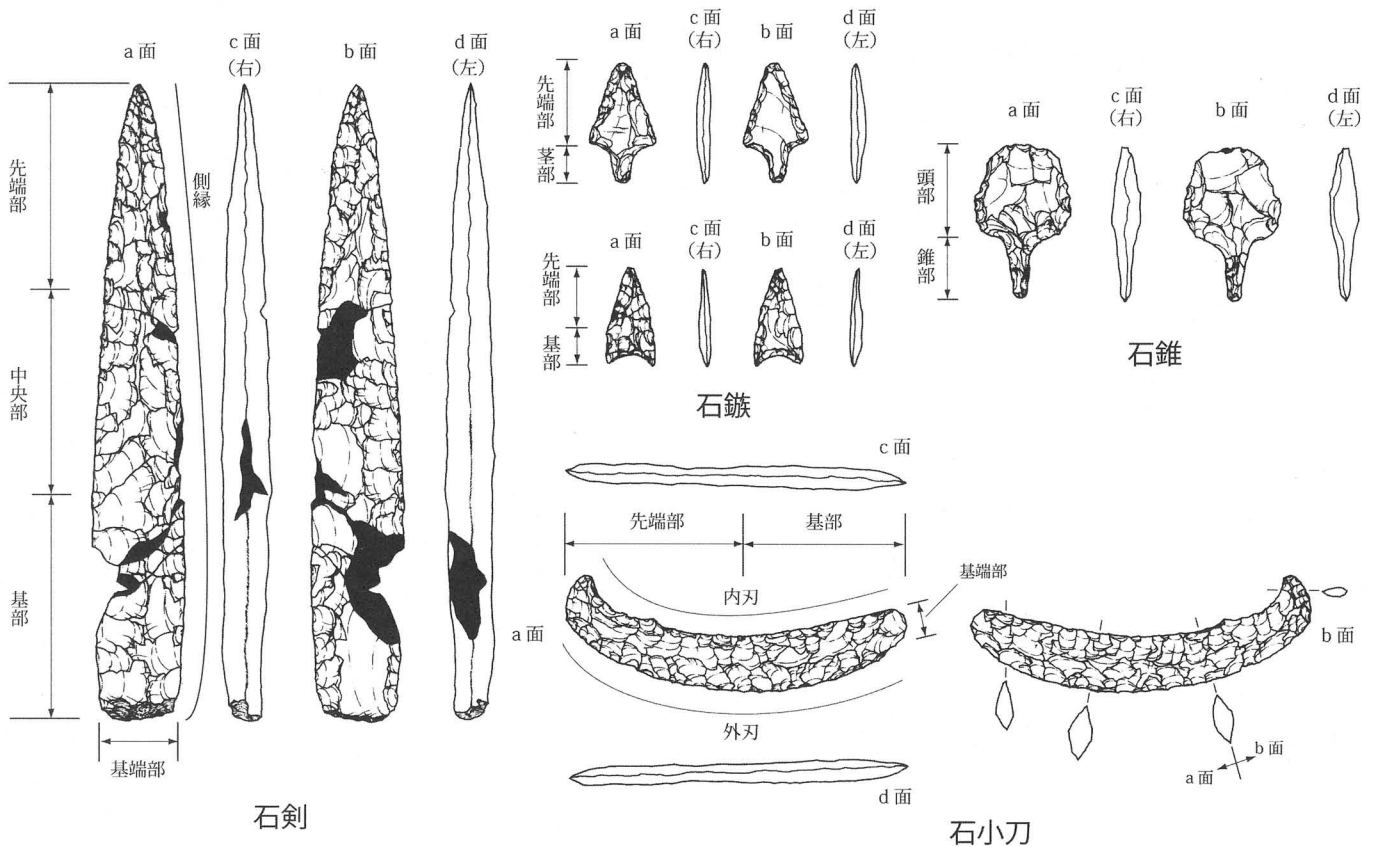
石剣 大形の両面加工尖頭器で「打製石剣」や「石槍」と呼ばれている一群である。中形尖頭器や石鏃に比べて著しく長大で、最大長が10cmを超えるものが多い。各部位の名称を第193図のように定める。今回報告する調査区から出土した遺物には、全体の形状をうかがえるほど残存状態が良好なものは少なく、ほとんどが破片である。そこで破片を石剣の部位ごとに分類し、その数量を明記しておく。先端部を取り込むものを先端部片、基部を取り込むものを基部片とし、先端部・基部のどちらも取り込んでいないものを中央部片と呼ぶことにする。石剣は全部で212点確認しており、すべてサヌカイト製である。そのうち先端部片が59点、中央部片が75点、基部片が64点を占める。

中形尖頭器 両面加工尖頭器のうち、石剣・石鏃にあてはまらないものである。今回報告する調査区から出土したものは、最大長が5～10cm程度のものである。各部位の名称は石剣（第193図）に準ずる。平面形態によって細分が可能であり、細長のをⅠ類、幅広で木葉形を呈するものをⅡ類、基部が円基～平基で、下半に最大幅をもつ涙滴形のをⅢ類、有茎式のをⅣ類とする。中形尖頭器は全部で93点確認しており、すべてサヌカイト製である。

各類型の内訳は、Ⅰ類が31点（41%）、Ⅱ類が27点（36%）、Ⅲ類が13点（17%）、Ⅳ類が4点（5%）、18点が分類不可となる。いずれの類型においても、著しく整形が粗雑なものが60%程度を占めており、中形尖頭器として認定したもののなかに、他の両面加工石器の未完成品が含まれている可能性は否定できない。

石鏃 小形の両面加工尖頭器で、今回報告する調査区から出土したものは、2.5～5 cm程度のものが多い。各部位の名称は第193図にしたがう。基部形態を基準に分類でき、有茎式のをⅠ類、尖基式のをⅡ類、平基式のをⅢ類、凹基式のをⅣ類とする。石鏃は全部で629点確認しており、628点がサヌカイト製、1点のみ流紋岩製のものがある。各類型の内訳は、Ⅰ類が208点（43%）、Ⅱ類が179点（37%）、Ⅲ類が33点（7%）、Ⅳ類が64点（13%）、残る145点が分類不可となる。石鏃のなかには、側縁や茎部側縁に磨耗痕が認められるものがあり、研磨による整形や石錐への転用が推定される。

石錐 両面調整によって、少なくとも一端に細長く尖らせた部分をもつ石器である。また回転によると思われる磨耗痕をとどめるものも、一部石錐に含めている。各部位の名称は第193図にしたがう。錐部の相対的な長さ、頭部調整、形状、使用痕などに基づいて分類できる。錐部が最大長の1/4を上回るものをⅠ類とし、頭部調整の明確なものをⅠa類、頭部調整の明確でないものをⅠb類とした。また錐部が最大長の1/4を下回るものはⅡ類とし、同じく頭部調整の明確なものをⅡa類、頭部調整の明確でないものをⅡb類とした。一方、頭部と錐部の境が不明瞭な、涙滴形を呈するものをⅢ類、棒状に整形されたものをⅣ類とした。Ⅴ類は複数の



第193図 打製石器の部位名称

錐部をもつものである。また、製作技術や形態とは関係なく、錐としての使用を想定させる使用痕が肉眼で確認できたものについても石錐に含めてあり、これをⅣ類とした。石錐は全部で424点確認しており、すべてサヌカイト製である。各類型の内訳は、Ⅰa類が83点(25%)。Ⅰb類が24点(7%)、Ⅱa類が48点(14%)、Ⅱb類が21点(6%)、Ⅲ類が50点(15%)、Ⅳ類が61点(18%)、Ⅴ類が37点(11%)、Ⅵ類が10点(3%)、残る90点が分類不可となる。

石小刀 「両面調整尖頭削器のうち外湾する外側の刃部と、内湾もしくは直線形の内側の刃部を対辺にもつ細長い石器である」⁽³⁾。各部位の名称を第193図のように定める。78点確認している。すべてサヌカイト製である。

石匙 スクレイパー(後述)のうち、明確につまみ部が作り出されているものである。2点のみ確認しており、すべてサヌカイト製である。

スクレイパー 主に剥片を素材とし、少なくとも1辺に連続的な二次加工が施され、鋭い刃縁が作出されている石器である。146点確認している。うち138点がサヌカイト製、5点が硬質砂岩製、安山岩、粘板岩、砂岩製のものそれぞれ1点となっている。

楔形石器 両極打法の痕跡をとどめる石器を一括して、楔形石器とした。両極打法とは、「比較的大きく扁平な礫を地表上に台石として置き、その上に素材となる剥片や礫核を置き、それを敲石で垂直に打撃する」方法であり⁽⁴⁾、被加工物には、密集する階段状の剥離痕や敲打痕が認められる。49点確認している。本報告書では図示していない。

火打石 「角張った硬質の石材を用いた不定形な石器で、器面に擦痕や細かな階段状の剥離痕が認められ」、「機能部の剥離痕は切り合い関係が比較的明瞭であり、打面側から観察すると剥離の単位が読み取ることができるもの」である⁽⁵⁾。チャート製のは3点、サヌカイト製のは、6点認定した。ただしサヌカイト製火打石の認定は困難で、実数はこの6点よりも少なくなる可能性がある。出土状況から考えると、弥生時代の石器群を構成するものとは考えがたく、現状では歴史時代の遺物と考えざるをえない。本報告書では図示していない。

石鋏 剥片などの素材のほぼ全周から二次加工が施され、厚手の刃部が作り出されている石器である。5点確認しており、うち4点が安山岩製、1点が緑色片岩製である。

剥片 石器素材として生産された石片及び石器製作の過程で生じた残滓である。石核から剥離された後、二次加工がまったく施されていないものを指す。本報告書では図示していない。

石核 石器素材剥片が剥離された後の残核である。117点確認している。本報告書では図示していない。

以上のほか、中～小形の両面加工石器で、上記のいずれにも該当しないか、いずれに属するのか判断しがたいものが多数ある。これらの多くは加工が粗雑で、いずれかの石器の未完成品である可能性が考えられるが、本遺跡の石器のほとんどが両面加工で仕上げられていることも相まって、それらの性状を確定するには至らなかった。またいわゆる二次加工のある剥片についても、いずれの石器が志向されているのか判然としないものがほとんどであった。そこで本報告書では、これらを分類不可として扱い、総重量に含めるのみにとどめた。

石剣（S1001～1010・SP1001～1022） 91点確認しているが、残存状態の良好なものは2点のみで、そのほかは先端部片が25点、中央部片が36点、基部片が28点ある。

S1001は今回報告するなかで最も精巧な作りの石剣である⁽⁶⁾。素材の性状は不明である。基端部にはまったく手が加えられず自然面がそのまま残されており、石理走向が読み取れる。極めて薄い調整剥片を剥ぎ取りつつ丁寧に整形されており、最終段階に施された小さな剥離痕のいくつかを除き、ネガティブバルブがほとんど発達しない。先端の整形も入念であり、非常に鋭く仕上げられている。下半部では両側縁ともに磨耗痕が観察される。

S1002はa面に自然面が残されているほか、b面にはポジティブな剥離面が観察され、自然面を背面にもつ剥片が横方向に利用されていることがわかる。自然面の観察によると、素材剥片は石理に沿って剥離されたようである。残されている剥離痕はどれも大きく、ネガティブバルブの発達も著しい。調整は素材剥片の腹面側であるb面側に多く施されており、側面観が湾曲している。先端部も明確には作出されておらず、製作の途中段階で作業が終えられたものと判断される⁽⁷⁾。精巧なものが多い唐古・鍵遺跡の石剣の中では珍しく、著しく不整形で、SP1022・3006とともにその評価が注目される。

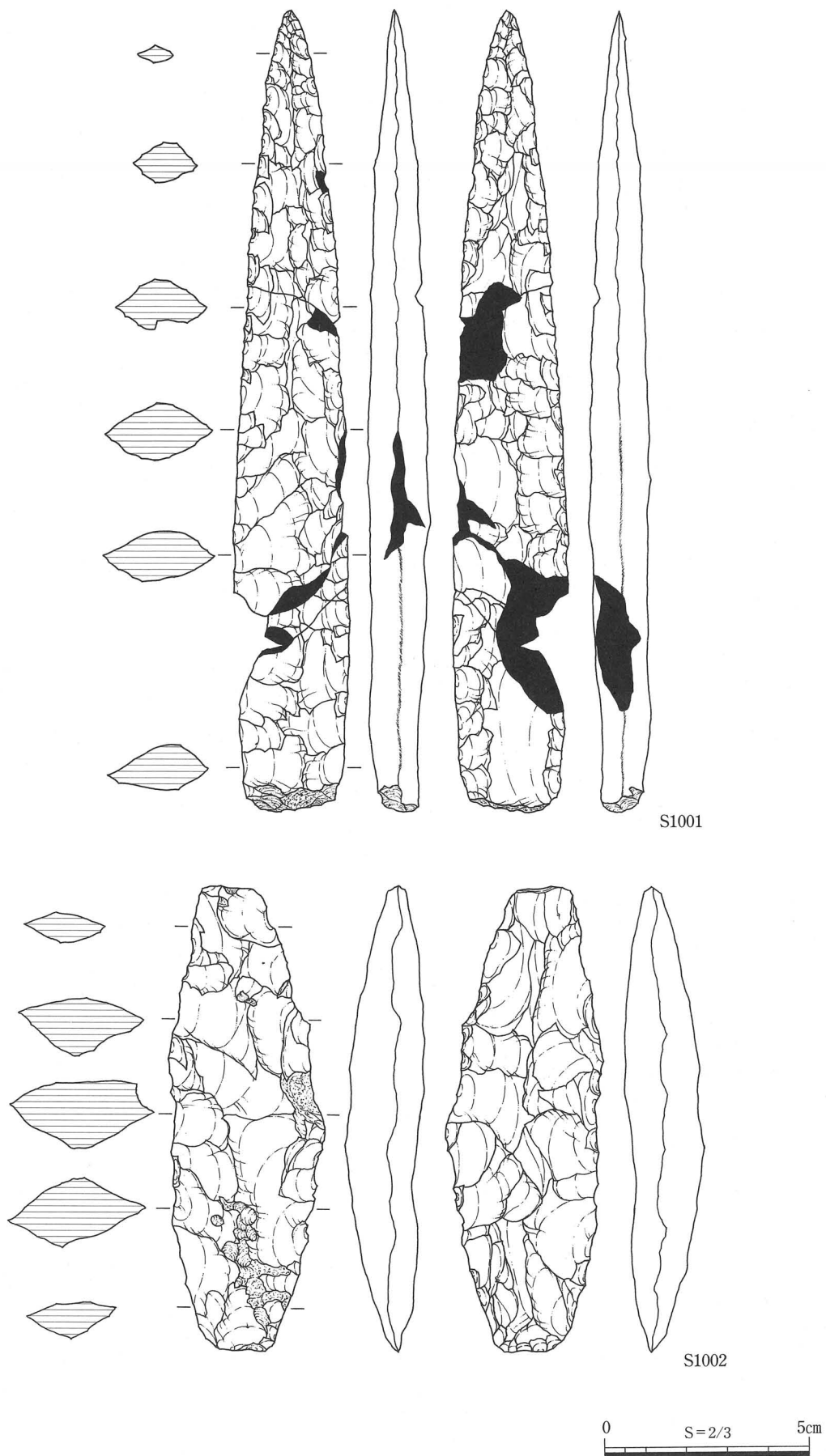
S1003は黒色の縞の入るサヌカイトが利用されている。先端部を欠いており、基部片に分類される。折損面には不純物が認められる。素材の性状は不明である。基端部には自然面が残されており、石理走向が判読できる。全体がネガティブバルブのほとんど発達しない平坦な調整剥離痕に覆われており、かなり薄い調整剥片が剥がされたと思われる。下半部では両側縁に磨耗痕が認められる。並行する両側縁は、先端部に収束する兆候をみせず、本来はかなり長大な石剣であったと思われる。

S1004はb面先端部付近にポジティブな剥離面をとどめており、剥片が横方向に利用されたことがわかる。他の石剣と比べて、非常に厚手の資料である。本来は先端部片であったと思われるが、折損面を打面とした剥離や、折損面に対する剥離がみられ、破片の再利用が目指されたようである。

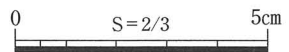
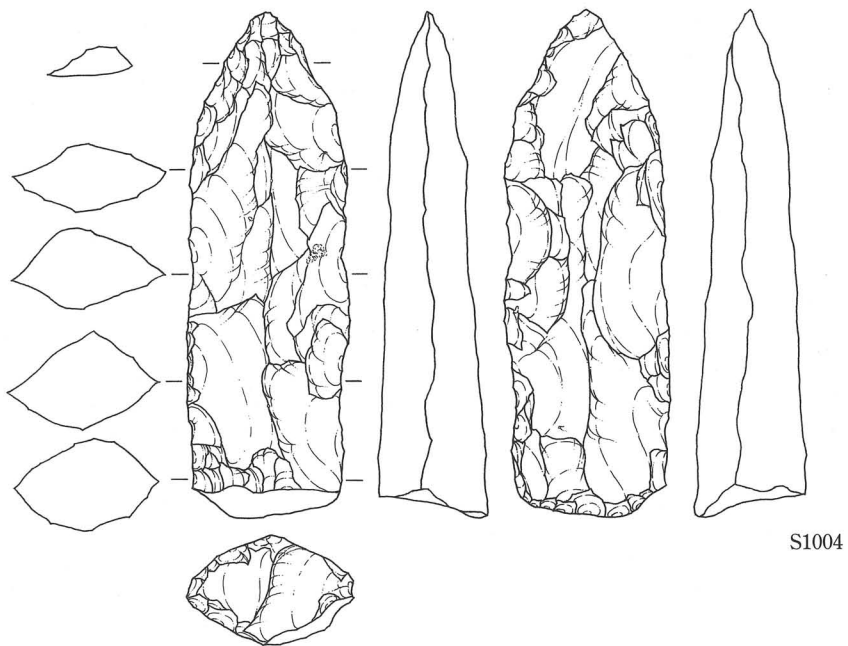
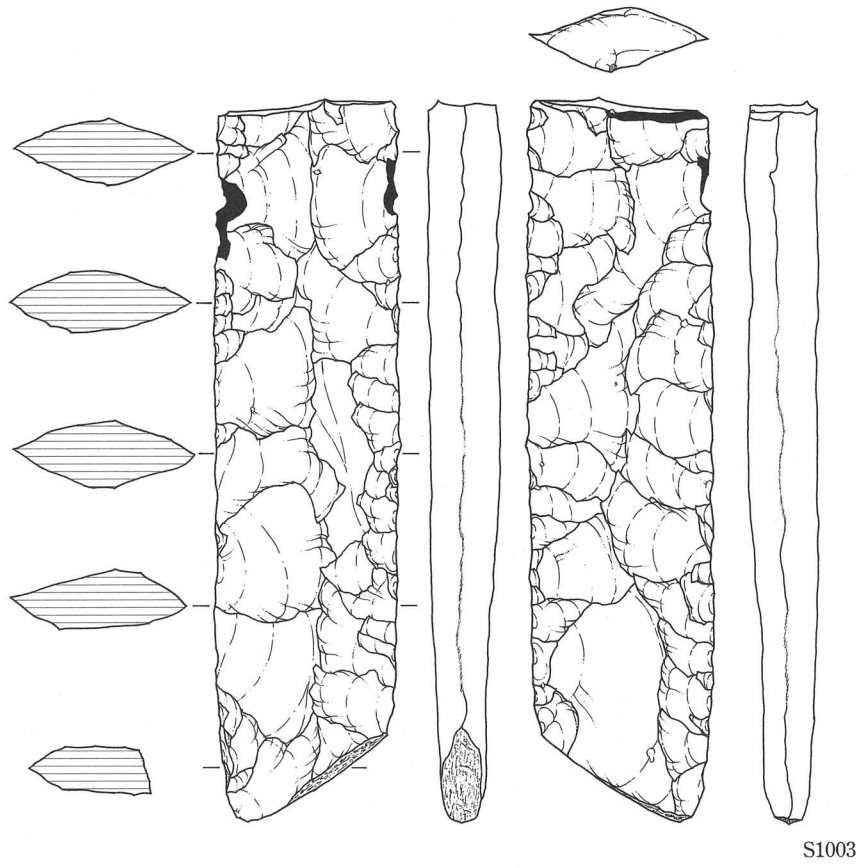
S1005はすべての剥離痕がわずかに光沢をもっている。a面先端部付近に自然面が残されており、原石か背面に自然面をもつ剥片を素材としていたと思われる。b面下部には左下方向からの大きな剥離痕が認められ、本資料はこの面で剥がれ落ちた先端部片であったと思われる。a・b両面とも、全体的に薄手の調整剥離によって丁寧に整形されているものの、最終段階に残された剥離痕は階段状・蝶番状の末端部の発達が著しく、先行する剥離痕と様相を異にする。先端部片の再利用に伴うものであろうか。

S1006は先端部片であり、折損面には不純物が観察される。先端部は先鋭さを欠くが、そのほかは丁寧に仕上げられている。

S1007は先端部片であり、折損面に不純物が認められる。下部においては両側縁が並行しているが先端付近で急激に屈曲し、先端を形成している。下部が薄手の平坦な剥片を剥ぎ取りつつ丁寧に調整されているのに対し、切り合い関係で後続する先端部の剥離痕は、ネガティブ



第194図 南地区出土打製石器（1）



第195図 南地区出土打製石器（2）

バルブが発達する粗雑なものであり、両者の間には何らかの作業意図の転換を認めることもできる。

S1008は先端部片である。すべての剥離痕がわずかに光沢をみせている。薄手の平坦な剥片を剥ぎ取りつつ丁寧に調整されており、先端は鋭く仕上げられている。先端部付近で側縁がわずかに突出する形状のようである。下部では両側縁が磨耗しており、基軸に直交する方向の擦痕が明確に観察できる。

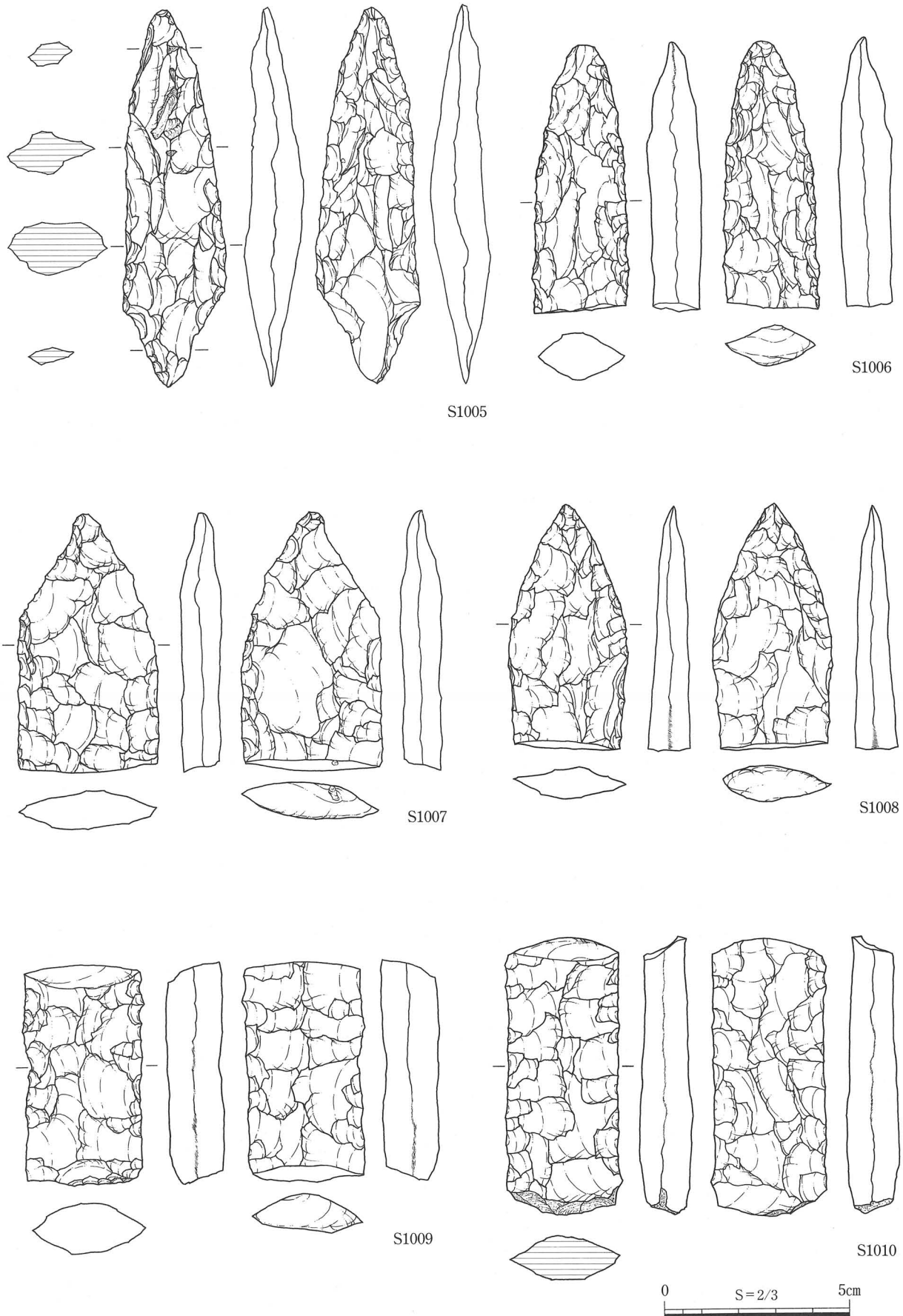
S1009は中央部片である。薄手の平坦な剥片を剥ぎ取りながら丁寧に調整されており、両側縁が並行する形態に整えられている。下部の両側縁には磨耗痕が観察される。

S1010は基部片である。b面下部にポジティブな剥離面をとどめており、基端部の自然面と考え合わせると、少なくとも側面に自然面をもつ剥片が素材として利用されていることがわかる。基端部の自然面によると、素材剥片は石理に沿って剥離されているようである。剥離痕からは極めて薄い調整剥片が連続的に剥がされたことがうかがえ、両側縁が並行する形態に整えられている。両側縁ともに磨耗痕が観察される。基端部は調整されていない。

中形尖頭器 (S1011・1012) 43点確認している。

S1011は極めて粗雑な作りであり、分類が困難であるが、I類に含めた。他器種の未完成品である可能性も否定できない。全体がネガティブバルブの発達する剥離痕で構成されてお

遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S1001	石剣	65次		黒褐色土Ⅱ	19.6	(2.8)	1.3	(51.4)	両側縁に磨耗痕	弥生中・後期
S1002	石剣	69次	SD-1104	第2(下)層	11.4	3.8	1.7	68.9		Ⅵ-2・3
S1003	石剣	65次		黒色粘砂	(14.3)	3.7	1.3	(95.1)	両側縁に磨耗痕	弥生
S1004	石剣	61次	SD-105B	第4層	10.3	3.2	2.4	74.4		Ⅲ-3
S1005	石剣	65次		灰黒色粘土	10.2	2.8	1.4	34.6		弥生中・後期
S1006	石剣	65次	SB-101	第1-b(下)層	(7.3)	2.5	1.3	(26.4)		Ⅲ
S1007	石剣	65次	SR-151N	第2層	(6.9)	3.9	1.0	(33.5)		Ⅲ-2
S1008	石剣	61次	SD-102B	第5(下)層	(6.5)	3.2	1.1	(23.6)	両側縁に磨耗痕	Ⅳ・Ⅴ
S1009	石剣	61次	Pit-1198	黒褐色砂質土	(6.0)	3.4	1.4	(38.5)	両側縁に磨耗痕	弥生
S1010	石剣	61次	SD-106B	第2-b層	(7.6)	3.2	1.4	(41.8)	両側縁に磨耗痕	Ⅲ-4
SP1001	石剣	69次	SD-1109	第5層	(4.4)	2.9	(0.9)	(9.0)		Ⅵ-3・4
SP1002	石剣	69次		黒褐色土	(5.5)	2.4	(1.4)	(18.9)		弥生・古墳
SP1003	石剣	61次		暗灰褐色粘質土	(4.1)	3.3	(1.1)	(13.5)		弥生中期
SP1004	石剣	69次	SD-1109	第3(下)層	(3.9)	2.2	(0.8)	(5.8)		布留0
SP1005	石剣	69次		黒褐色土	(3.4)	2.5	(0.7)	(5.8)		弥生・古墳
SP1006	石剣	69次	SK-1137	第6(下)層	(4.7)	2.4	(1.0)	(10.1)		Ⅲ-3
SP1007	石剣	61次		黒褐色土	(4.0)	3.0	1.4	(20.9)		弥生・古墳
SP1008	石剣	61次		暗灰褐色粘質土	(4.6)	3.0	1.4	(24.0)	両側縁に磨耗痕	弥生中期
SP1009	石剣	65次		灰色粘土	(5.5)	3.1	1.7	(40.7)		Ⅱ-3
SP1010	石剣	65次		黒褐色土	(5.5)	3.0	1.6	(31.1)		弥生
SP1011	石剣	69次	SD-1109	第4(下)層	(4.6)	3.3	1.5	(28.2)	両側縁に磨耗痕	布留0
SP1012	石剣	69次		黒褐色土	(5.5)	4.4	1.7	(40.3)	両側縁に磨耗痕	弥生・古墳
SP1013	石剣	69次	SK-1126	第3層	(3.5)	(3.5)	(1.0)	(11.7)		Ⅳ-1
SP1014	石剣	69次		黒褐色土	(4.4)	3.0	1.5	(20.6)		弥生・古墳
SP1015	石剣	69次	SD-1102	第2-γ層	(5.3)	2.6	1.3	(26.4)		Ⅵ-3
SP1016	石剣	69次	SD-1111	第1層	(5.2)	3.0	1.6	(35.8)		Ⅵ-3
SP1017	石剣	69次	SK-1115	第2層	(2.8)	(3.2)	1.0	(12.8)	両側縁に磨耗痕	Ⅵ-4
SP1018	石剣	69次	SD-1104	第1層	(6.2)	3.0	1.5	(32.1)		Ⅵ-2・3
SP1019	石剣	69次	SD-1104	第3-1層	(7.0)	3.2	1.4	(37.7)	両側縁に磨耗痕	Ⅵ-2・3
SP1020	石剣	65次	SR-151S	第1層	(7.0)	2.9	1.5	(41.0)	両側縁に磨耗痕	Ⅲ-2
SP1021	石剣	65次		黒褐色土Ⅱ	(7.6)	3.1	1.5	(45.7)	両側縁に磨耗痕	弥生中・後期
SP1022	石剣	61次	SK-115	第4層	(11.1)	2.9	1.3	(36.1)		Ⅲ-4



第196図 南地区出土打製石器（3）

り、a面先端部左側及びb面先端部左側には剥離痕の末端部により大きな段が形成されている。

S1012はⅢ類に分類できる。すべての剥離面にわずかに光沢が認められる。a・b両面に素材面が認められ、剥片を縦に用いていることがわかる。素材面の剥離方向は対向しており、素材剥片剥離時に180度の打面転位がおこなわれたものとみられる。調整は階段状の末端部が発達する浅い剥離からなるが、先端部は先鋭に整えられている。

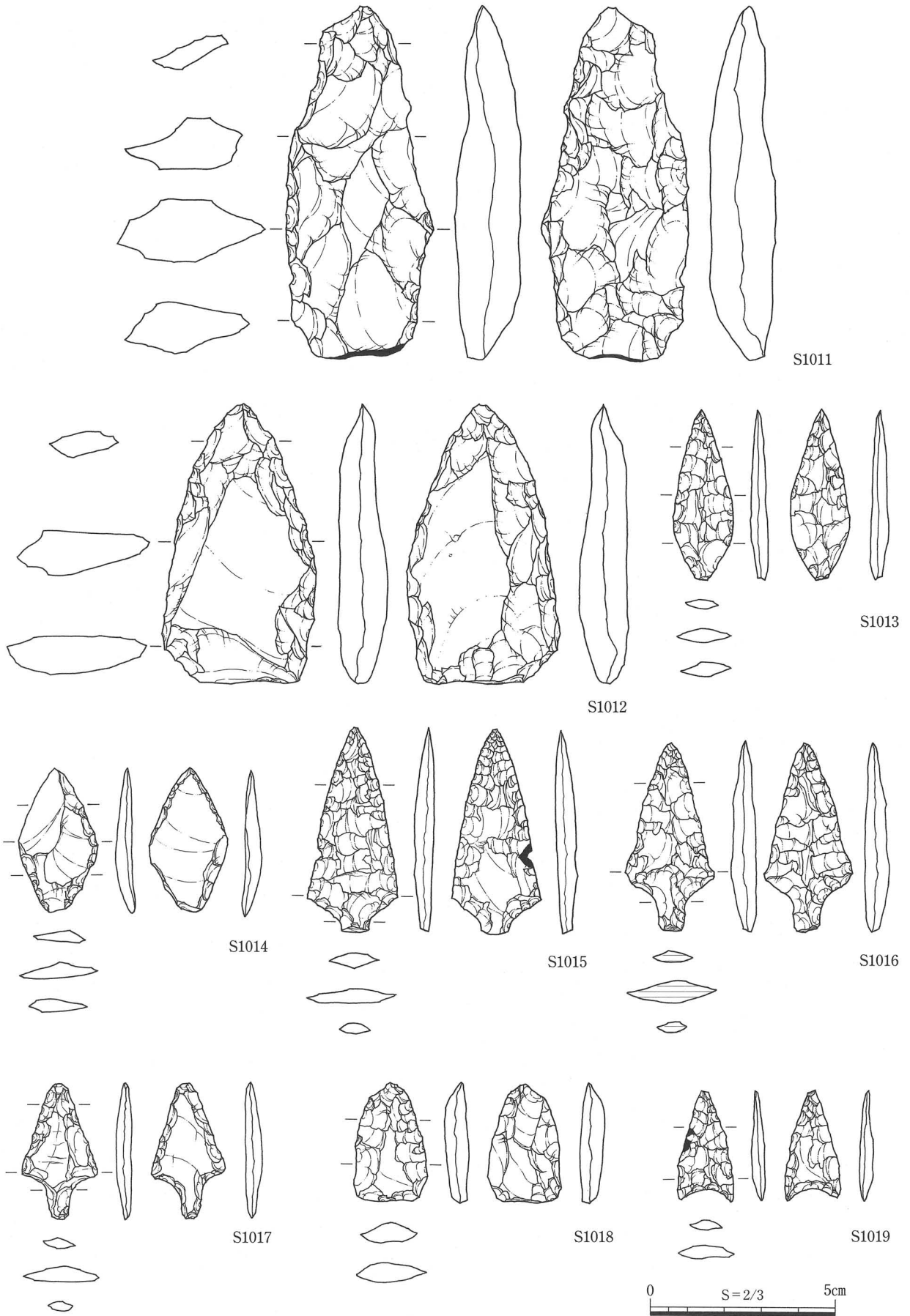
石鏃 (S1013~1019・SP1023~1043) 309点確認している。各類型の割合は、Ⅰ類が55%、Ⅱ類が36%、Ⅲ類が4%、Ⅳ類が5%となり、他の地区に比べてⅠ類の割合が高い(Ⅰ類は西地区では33%、中央区では29%)。S1015~1017がⅠ類、S1013・1014がⅡ類、S1018がⅢ類、S1019がⅣ類に分類できる。S1018は先端部が鈍いうえに作りも粗く、未完成品の可能性が高い。

石錐 (S1020~1028・SP1044~1064) 225点確認している。各類型の割合は、Ⅰa類が27%、Ⅰb類が7%、Ⅱa類が12%、Ⅱb類が4%、Ⅲ類が15%、Ⅳ類が18%、Ⅴ類が12%、Ⅵ類が4%である。S1020~1022はⅠa類、S1023はⅠb類、S1024・1025はⅡb類、S1026はⅢ類、S1027はⅤ類、S1028はⅣ類に分類できる。

S1022はかなり小形の石錐であるが、錐部先端が著しく磨耗しており、白色の磨耗痕が発達している。

S1023は折損面をもつ剥片の一端に、長い錐部が作り出されている。

遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S1011	中形尖頭器	69次	SD-1109	第1(下)層	(9.5)	3.9	1.8	(67.2)		布留0
S1012	中形尖頭器	65次	SD-203E	第2層	7.5	4.1	1.4	45.1		Ⅱ-3
S1013	石鏃	65次	SD-103	第2層	(4.6)	1.7	0.5	(3.2)		Ⅵ-3
S1014	石鏃	65次	SD-105	第2-c層	3.9	2.2	0.5	3.2		Ⅲ-2
S1015	石鏃	69次	SD-1101B	第5-f層	(5.5)	2.4	0.6	(6.3)		Ⅴ-1
S1016	石鏃	69次	SD-1109	第3(下)層	5.1	2.4	0.7	5.6		布留0
S1017	石鏃	65次		黒褐色土Ⅱ	3.6	2.0	0.4	2.3		弥生中・後期
S1018	石鏃	65次		黒褐色土	3.2	2.1	0.6	4.3		弥生
S1019	石鏃	65次	SD-104	第1層	3.0	1.5	0.4	1.3		Ⅳ・Ⅴ
SP1023	石鏃	65次		黒褐色粘砂	(6.3)	3.0	1.1	(17.6)		弥生中期
SP1024	石鏃	61次	SD-101B	第5(下)層	(4.0)	2.2	0.4	(3.7)		Ⅴ
SP1025	石鏃	69次	SD-1109	第5層	4.1	1.9	0.5	3.5		Ⅵ-3・4
SP1026	石鏃	61次	SD-101B	第5層	3.6	1.8	0.5	3.0		Ⅴ
SP1027	石鏃	69次	SD-1107	第1層	4.4	1.9	0.6	3.4		Ⅲ・Ⅳ
SP1028	石鏃	61次	SD-102B	第5層	3.9	1.9	0.6	3.4		Ⅴ
SP1029	石鏃	61次	SD-151BN	中央Sec	(4.8)	1.8	0.5	(3.0)		Ⅱ-2・3
SP1030	石鏃	65次	SK-106	第1層	4.5	1.1	0.6	2.6		Ⅴ-1
SP1031	石鏃	61次	SD-106	第1層	4.2	1.2	0.5	2.2		Ⅳ-4
SP1032	石鏃	61次		黒褐色土	(3.3)	2.1	0.6	(2.4)	風化がやや進む	弥生・古墳
SP1033	石鏃	65次		黒褐色土Ⅱ	3.5	1.2	0.3	1.2	風化がやや進む	弥生中・後期
SP1034	石鏃	65次	SD-101N	第1層	4.2	(1.3)	0.6	(2.9)	風化がやや進む	Ⅵ-3・4
SP1035	石鏃	61次	Pit-139	黒褐色粘質土	4.7	1.4	0.8	4.0		弥生
SP1036	石鏃	61次		暗褐色砂質土	3.1	1.1	0.5	1.2	表面に磨耗痕	弥生
SP1037	石鏃	61次		黒褐色土Ⅱ	(6.1)	2.2	0.6	(8.2)		弥生・古墳
SP1038	石鏃	61次	SD-101B	第4-b層	(3.3)	1.4	0.5	(1.9)	基部片側縁に磨耗痕	Ⅴ
SP1039	石鏃	65次		黒褐色土Ⅱ	3.6	1.9	0.6	3.5		弥生中・後期
SP1040	石鏃	69次	SK-1130	第5層	2.8	1.3	0.5	1.4		Ⅲ-3
SP1041	石鏃	65次	SK-105	第2-b層	1.6	1.6	0.2	0.5		Ⅴ-1
SP1042	石鏃	61次	SD-102B	第5層	2.9	2.3	0.4	1.7		Ⅴ
SP1043	石鏃	61次		黒色粘質土(炭灰混)	3.5	1.9	0.4	1.9		弥生



第197図 南地区出土打製石器（4）

S 1024は石理に沿って剥離された剥片の打面部が、錐部に使用されている。a面側には素材剥片の背面が残っており、素材剥片は180度の打面転位の後に剥離されたと思われる。

S 1025は自然面を打面とし、石理に沿って剥離された剥片を素材としている。a面側には素材剥片の背面が認められ、S 1024同様、180度の打面転位が推定できる。錐部は磨耗しており、白色を呈する発達した磨耗痕に覆われており、磨耗痕には基軸と直交する方向の線状痕がみられる。錐部先端には磨耗痕に先行して折損状の剥離痕が観察でき、錐部折損後も継続して使用されたことがわかる。

S 1026は先端が磨耗しており、基軸に直交する方向の線状痕とともに光沢が観察できる。

S 1028は両端とも磨耗痕の発達が著しい。とりわけ上端の磨耗痕の発達は顕著で、側縁だけでなくa・b両面の稜上にも磨耗痕が及んでいる。

石小刀 (S 1029・1030) 36点確認している。

S 1029は外刃全体が磨耗している。また基端部には内刃側から、ファシット状の剥離痕が生じている。

S 1030は今回報告する資料のなかで最も大形で、整った形状のものである。外刃の基部側が一部磨耗している。基端部は、粗雑ながら整形されているようである。また内刃には突起が作り出されている。こうした突起は、他の調査区も含め、今回報告する資料の約10%に認められる。

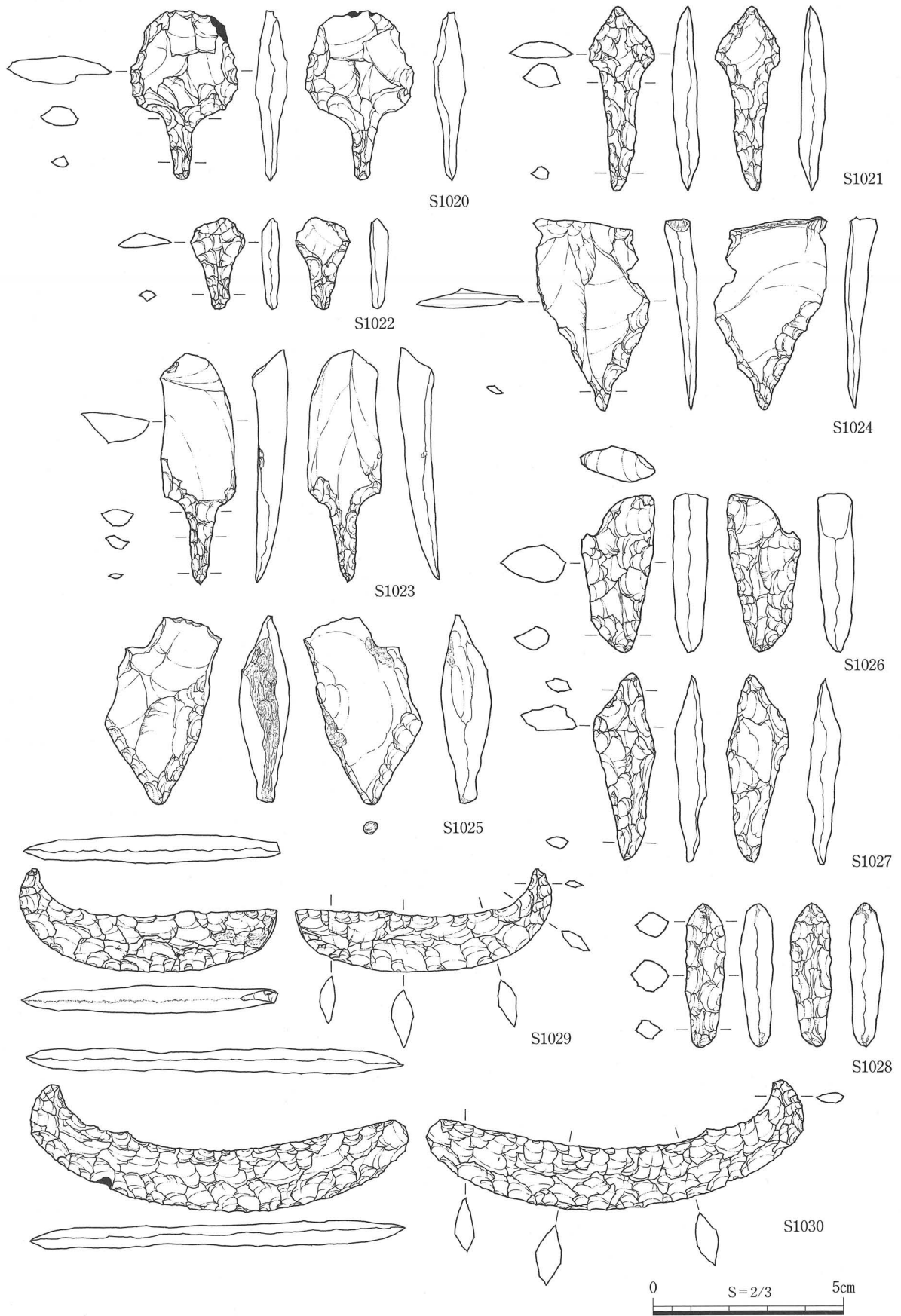
スクレイパー (S 1031～1038) 47点確認している。

S 1031は自然面打面の剥片を素材としている。素材剥片の打点と目される部分には、自然面が部分的に潰れて白色化している箇所が0.25×0.3cmの範囲に認められ、「(打撃)潰痕」⁽⁸⁾と呼ばれたことのある打撃痕にあたると思われる。素材剥片は、石理に沿って剥離されている。素材剥片の剥離にあたっては、石核のコーナーが打点に選ばれているようで、自然面を導線として力が左右に広がり、幅広の剥片が剥離されている。そうして確保された長大な末端部が刃部に利用されており、両面加工によって調整され、刃部角は70度程度となっている。刃縁は磨耗しており、使用痕の可能性もある。また、素材剥片の打面から腹面に対して二次加工が施されているが、これらは刃部作出とは明らかに異なると思われる。明確な刃部と対向する位置にあたることから、背部整形の可能性が考えられる。

S 1032はすべての剥離痕がわずかに光沢をもっている。剥離面を打面とし、半順目で剥離された剥片を素材としている。刃部は、主に素材剥片の腹面からの加工によって調整されており、55度前後の刃部角をはかる。

S 1033は3辺が折損面から構成されており、素材剥片の性状は不明である。刃部は素材剥片の打面側に設けられており、両面加工が施されている。刃部角は60度前後である。

S 1034はすべての剥離面にわずかに光沢が観察される。素材剥片は自然面を打面とし、石理に沿って剥離されている。素材剥片の背面に相当するa面側にも、ポジティブな剥離面が認められ、素材剥片は剥片素材の石核から剥離されたことがわかる。刃部は素材剥片の末端側、



第198図 南地区出土打製石器（5）

左側縁に作出されており、両者とも両面加工、刃部角はそれぞれ60度前後、70度前後である。素材剥片の打面には、腹面側に二次加工が施されているが、明らかに刃部としては機能せず、S1031同様、背部整形が意図された可能性が考えられる。

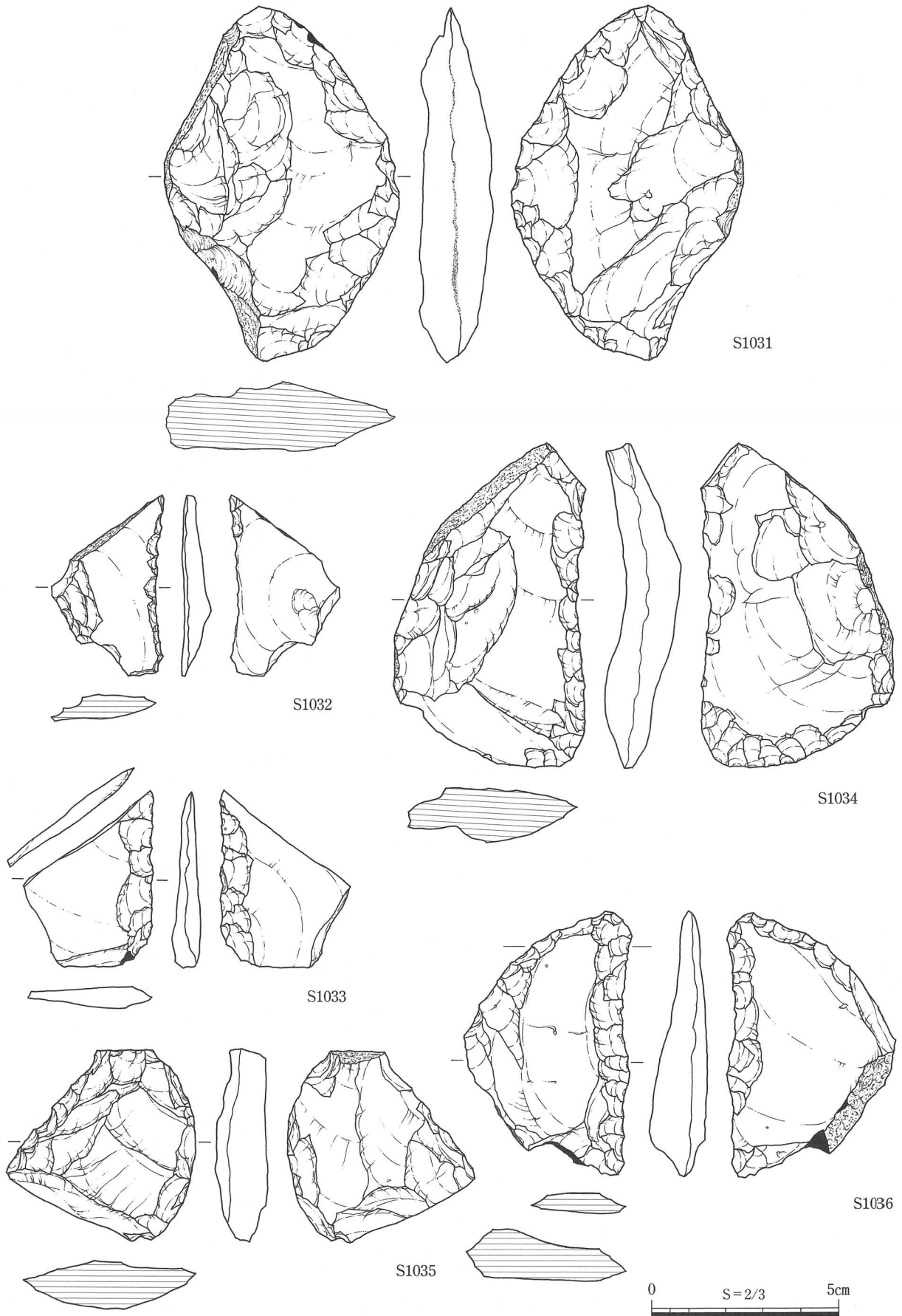
S1035は自然面を打面とし、石理に沿って剥離された剥片を素材としている。刃部は素材剥片の右側縁、左側縁に設けられており、両者とも両面加工で整形されている。刃部角はそれぞれ80度前後、75度前後である。

S1036は素材剥片の打面は失われていて不明であるが、自然面を側面に取り込みながら石理に沿って剥離された剥片が素材となっている。刃部は素材剥片の右側縁、打面側に設けられている。両面加工で調整されており、刃部角はそれぞれ60度前後、75度前後である。

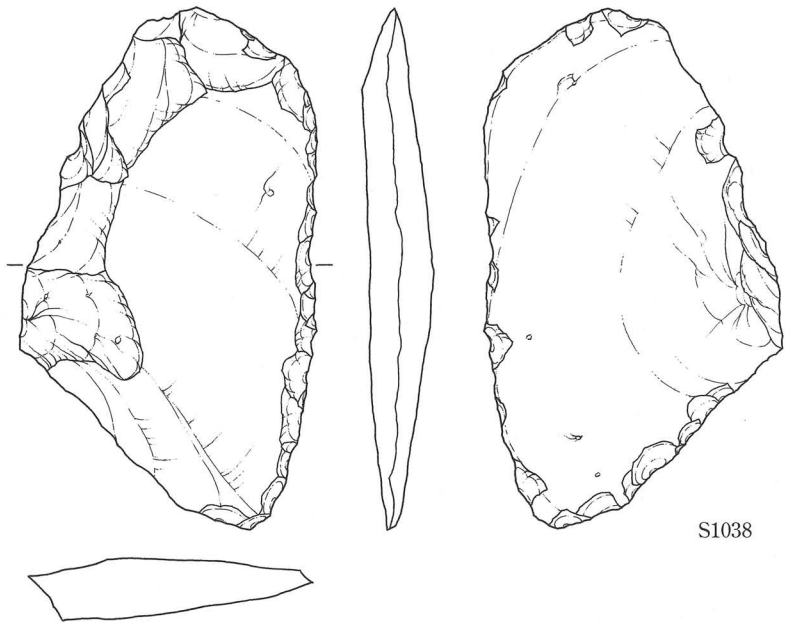
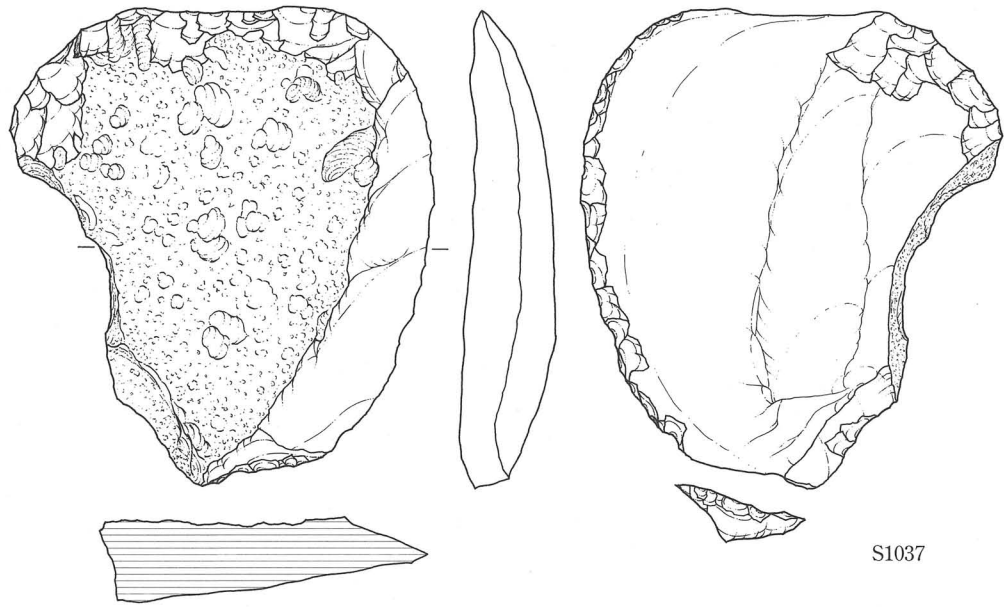
S1037は剥離面を打面とし、自然面を大きく取り込みながら剥離された剥片が素材となっている。石理と剥離は半順目である。素材剥片の右側縁～末端にかけて長大な刃部が丁寧に作り出されている。

S1038はわずかに黒い縞の入るサヌカイトが用いられている。素材剥片は剥離面を打面とし、素材剥片の背面側に相当するa面にも、ポジティブな剥離面が認められることから、剥片素材の石核から剥離されたことが推定できる。刃部は剥片の末端、左側縁に設けられている。前者は主に腹面側からの剥離によって整形されており、後者は背面側からの剥離が施されている。刃部角はそれぞれ65度前後、60度前後である。

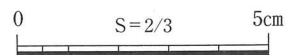
遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S1020	石錐	61次	SD-105B	第4層	4.6	3.0	0.9	8.9		Ⅲ-2
S1021	石錐	69次	SD-1101B	第3-7層	5.1	1.8	0.7	4.3		Ⅵ-3
S1022	石錐	65次	Pit-3101	暗褐色砂質土	2.5	1.5	0.5	1.4	錐部に磨耗痕	弥生
S1023	石錐	69次	SK-1110	第2層	6.4	2.1	1.1	12.0		Ⅲ-3
S1024	石錐	65次	SD-105	第1層	5.4	3.1	0.7	9.0		Ⅲ-2?
S1025	石錐	69次	SD-1101B	第6(下)層	5.2	2.6	1.2	16.8	錐部に磨耗痕	V-1
S1026	石錐	69次	SD-1101B	Sec第4層	4.4	2.0	1.0	9.4	錐部に磨耗痕	V-1
S1027	石錐	61次	SD-101B	第4層	5.1	1.7	0.9	5.8		V
S1028	石錐	69次	SD-1102	Sec第1(下)層	3.9	1.1	0.9	4.2	両端に磨耗痕	Ⅵ-3
SP1044	石錐	69次		黒褐色粘質土	8.1	2.7	0.8	13.9		弥生
SP1045	石錐	69次	SD-1104	第2(下)層	6.5	3.7	1.1	14.3		Ⅵ-3
SP1046	石錐	69次	SK-1126	第1層	5.6	2.9	1.3	12.3		Ⅳ-1
SP1047	石錐	69次	SD-1102B	第1層	3.8	1.0	0.6	1.7		Ⅵ-3
SP1048	石錐	69次	SK-1101	第1層	4.3	1.9	0.6	3.3		Ⅵ-4
SP1049	石錐	69次	SD-1101B	第6(下)層	4.2	1.4	0.6	1.9		V-1
SP1050	石錐	69次	SD-1102	第2層	2.9	2.1	0.5	2.2		Ⅵ-3
SP1051	石錐	65次	SD-101E	第2層	(3.4)	1.8	0.8	(3.7)		Ⅵ-3
SP1052	石錐	65次	SD-105	第1層	(3.4)	2.1	0.9	(6.1)		Ⅲ-2
SP1053	石錐	65次	SB-101	第2層	5.5	2.9	1.5	13.9		Ⅲ
SP1054	石錐	65次	SD-101E	第1層	6.7	3.5	0.8	18.5		Ⅵ-3
SP1055	石錐	65次		黒褐色土	5.5	1.7	1.1	9.5		弥生
SP1056	石錐	69次	SD-1104	第2(下)-I層	4.7	1.6	1.2	8.6		Ⅵ-3
SP1057	石錐	69次	SD-1104B	第3-b層	5.9	2.2	1.2	14.3		V
SP1058	石錐	69次		黒褐色土Ⅱ	6.6	1.4	0.9	10.2		弥生中・後期
SP1059	石錐	65次	SD-103	第1層	(4.1)	1.3	0.8	(4.1)		Ⅵ-3
SP1060	石錐	65次		黒褐色土Ⅱ	3.2	0.7	0.6	1.3	風化がやや進む	弥生中・後期
SP1061	石錐	69次		黒褐色土	3.1	0.9	0.7	2.0	風化がやや進む	弥生・古墳
SP1062	石錐	69次	SD-1101B	第5(下)層	(3.5)	1.1	0.7	(3.4)		V-1
SP1063	石錐	65次	SK-118	第1層	3.0	0.9	0.6	1.6		弥生中・後期
SP1064	石錐	65次		黒褐色土	(3.8)	1.5	0.9	(4.3)		弥生
S1029	石小刀	69次	排土		7.1	3.0	0.8	9.9	外刃に磨耗痕	-
S1030	石小刀	65次	SB-101	第1-b(下)層	10.4	3.1	0.7	15.8	外刃の一部に磨耗痕	Ⅲ



第199図 南地区出土打製石器（6）

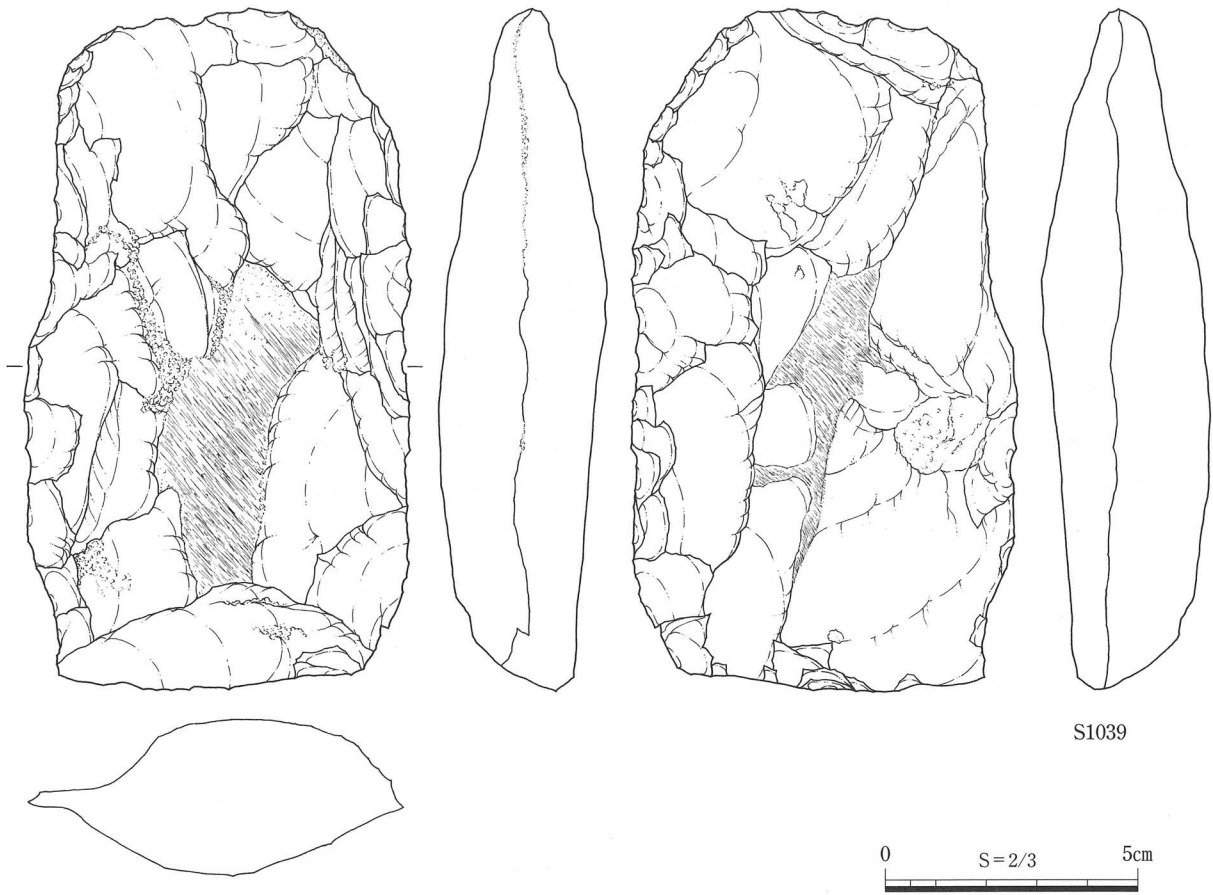


第200図 南地区出土打製石器（7）



石鏃（S1039） 2点確認している。

S1039は安山岩製である。b面右側にポジティブな剥離面が、a面中央に自然面がみられることから、背面に自然面をもつ剥片を素材としていることがわかる。b面のポジティブな剥離面には約2cm四方に及ぶ大きな不純物を取り込まれており、素材剥片の剥離に影響したこと



第201図 南地区出土打製石器（8）

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S1031	スクレイパー	61次	SD-151	第5層	6.3	9.7	2.0	112.2	刃縁に磨耗痕	Ⅲ-2
S1032	スクレイパー	65次	SD-152	第1層	4.0	4.2	0.7	8.8		Ⅲ-2
S1033	スクレイパー	65次	SB-101	第1-b(下)層	3.7	5.3	0.8	11.9		Ⅲ
S1034	スクレイパー	61次	SD-151BS	第8層	5.8	8.7	1.6	75.4		Ⅱ-3・Ⅲ-1
S1035	スクレイパー	65次	SK-01	第1層	5.2	5.1	1.3	35.2		中世
S1036	スクレイパー	61次	SD-151CS	第8(下)層	5.4	6.8	1.5	(43.7)		Ⅱ-1
S1037	スクレイパー	61次	SD-201B	第2層	8.7	9.5	1.6	135.4		Ⅱ-1
S1038	スクレイパー	61次	SD-105B	第6層	6.2	9.6	1.5	86.2		Ⅲ-2
S1039	石鏃	69次	SD-1110	第3層	13.9	8.0	3.4	414.9	安山岩製	Ⅱ-2・3

が想像される。素材剥片のほぼ全周にわたって両面加工が施され、撥形に整形されている。右側縁は部分的に潰れて丸くなっている箇所がある。また a 面中央の自然面及び b 面中央の剥離痕や稜上に著しい研磨痕が、a 面中央には研磨痕を切るかたちで敲打痕が認められる。こうした敲打痕は、調整剥離の階段状の末端部によってできた段の除去を試みたものと判断される。研磨痕についても、側面観で最も膨らみをもつ部分に観察されることや敲打痕との切り合い関係から考えて、研磨による厚みの除去を目指したと思われる。こうした一連の作業は、着柄を意識したものと考えられる。下端は折損しており、折損面上にも敲打痕がみられる。

(2) 磨製石器

唐古・鍵遺跡から出土している磨製石器は、主に結晶片岩と流紋岩から製作されている。しかし器種ごとにその石材は変えられており、それぞれの器種に適した石材が用いられていると考えられる。結晶片岩は三波川変成帯に産地を求めることができ、紀ノ川流域で産出したものが本遺跡に搬入されていると思われる。流紋岩については、耳成山付近に由来するものと考えられている。

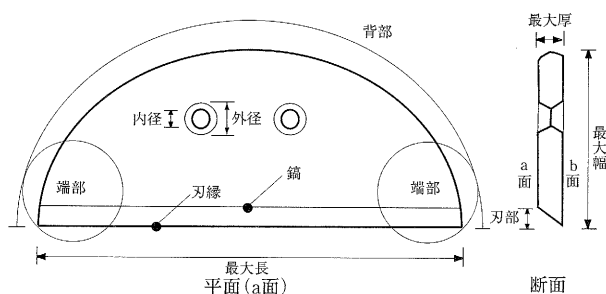
本遺跡の磨製石器は、石庖丁、太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、磨製石鏃、磨製石剣、磨製石戈、環状石斧に分類できる。以下それぞれの定義及び概要について述べる。

石庖丁 大陸系磨製石器の一種で、稲の穂摘みに用いられていたと考えられている石器である。大きさの点では比較的斉一的な器種であるが、まれに大形のものが認められる。また、他の器種に転用されることも多く、扁平片刃石斧や磨製石剣、石製紡錘車への転用を確認している。石庖丁の形態は、半月形、長方形、杏仁形を呈している。各部の名称は第202図に示した。

今回報告する調査区から出土した石庖丁には、主に結晶片岩⁽⁹⁾と流紋岩が用いられている。いずれも製作途上品（未成品）と思われる粗形のものが出土しており（S1050・3079など）、結晶片岩製、流紋岩製ともに本遺跡内で石庖丁の製作がおこなわれたことが推定される。結晶片岩製の石庖丁関連資料を観察する限り、池上曾根遺跡で復元された、Ⅰ・素材獲得、Ⅱ・粗割、Ⅲ・剥離整形、Ⅳ・研磨、Ⅴ・穿孔のプロセス^(10・11)で製作されているようである。また、S1053のように器面に敲打痕をとどめる製品・未成品が数点出土していることから、敲打の工程⁽¹²⁾も介在していた可能性が考えられるが、客体的なものであったと思われる。

結晶片岩については、現在のところ原石や大形のブランクが遺跡内では確認できず、ある程度加工が進んだ状態で本遺跡に搬入された可能性が高い。一方、流紋岩製の石庖丁については、塚田良道が本遺跡において製作工程の復元を試みており⁽¹³⁾、今回報告する資料も、塚田の想定から外れるものではない。結晶片岩と明確に異なる点として、本遺跡から原石が出土していることがあげられ、遺跡内で原石からの石器製作がおこなわれていたことが確実視できる。

太型蛤刃石斧 大陸系磨製石器の一種で、直柄に装着して伐採斧として用いられたと考えられる石器である。今回報告した太型蛤刃石斧はほとんどが破損しており、本来の形状をとどめ



第202図 石庖丁の部位名称

ているものはわずかである。長軸と垂直に折損したものが多く、敲石への転用も確認できる。この太型蛤刃石斧の未成品は本遺跡では確実なものを確認していない。

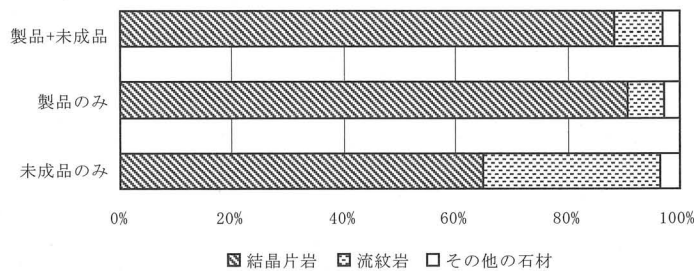
柱状片刃石斧 大陸系磨製石器の一種で、膝柄に装着して加工斧として用いられたと考えられる石器である。抉りをもった形状の柱状片刃石斧も知られているが、今回報告するものには抉りをもたないものが多い。またS3088など小形のものには、他の器種から転用されたものが含まれている。主に結晶片岩が用いられており、節理の方向が前主面の長軸方向に統一されている。各部位の名称は佐原眞によって整理されており⁽¹⁴⁾、今回の報告ではそれにしたがう。

扁平片刃石斧 大陸系磨製石器の一種で、膝柄に装着して加工斧として用いられたと考えられる石器である。主に結晶片岩が用いられており、節理は前主面の長軸と平行する方向に走っている。他器種からの転用が多く、S1078・3095のように石庖丁や石剣、柱状片刃石斧からの転用例も認められる。

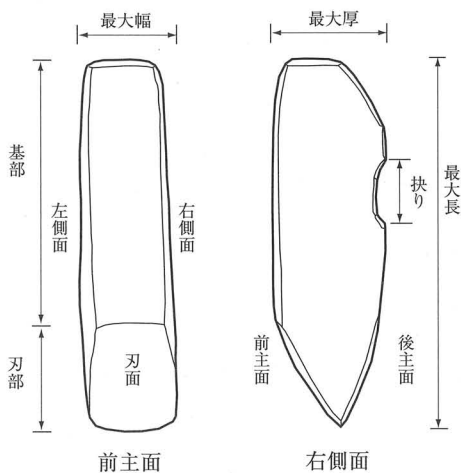
磨製石鏃 全面に研磨が施されている、鏃の形状をした石器である。中央が穿孔されているものもある。

磨製石剣 金属器を模倣したと考えられる石器で、形状は有樋式、有柄式、鉄剣形に分類される。今回報告するものはすべて破損しており、本来の形状を良好にとどめているものは少ないが、鉄剣形に分類できるものが大部分を占めている。

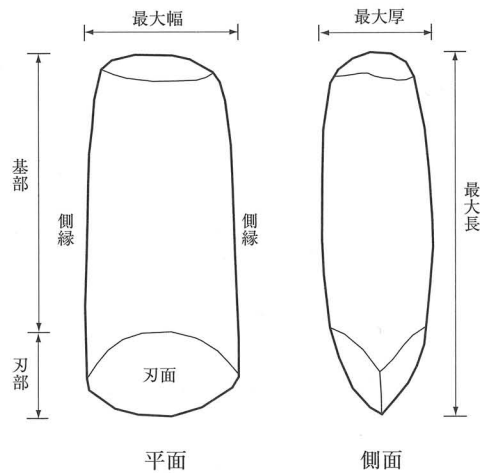
環状石斧 円板状を呈しており、中央が穿孔された石器で、周縁部には刃部が作られている。



第203図 石庖丁の石材組成 (点数比)



第204図 柱状片刃石斧の部位名称



第205図 太型蛤刃石斧の部位名称

結晶片岩製石庖丁 (S1040~1050・SP1065・1066) 結晶片岩製の石庖丁は10点図化した。そのうち2点は大形石庖丁である。完形のもの少なく、図化したものの中ではS1045・1046・1047の3点のみである。S1040~1042は直線刃半月形、S1043・1044は長方形、S1045・1046は内湾刃半月形、S1047は杏仁形を呈している。節理方向から判断して、結晶片岩製の石庖丁は、結晶片岩の節理に沿って薄く剥離したものが利用されたようである。穿孔はすべて両面からおこなわれており、回転による穿孔である。また、S1040・1041・1043・1045は刃縁に連続した細かい剥離が認められ、使用に伴う刃こぼれと推定できる。

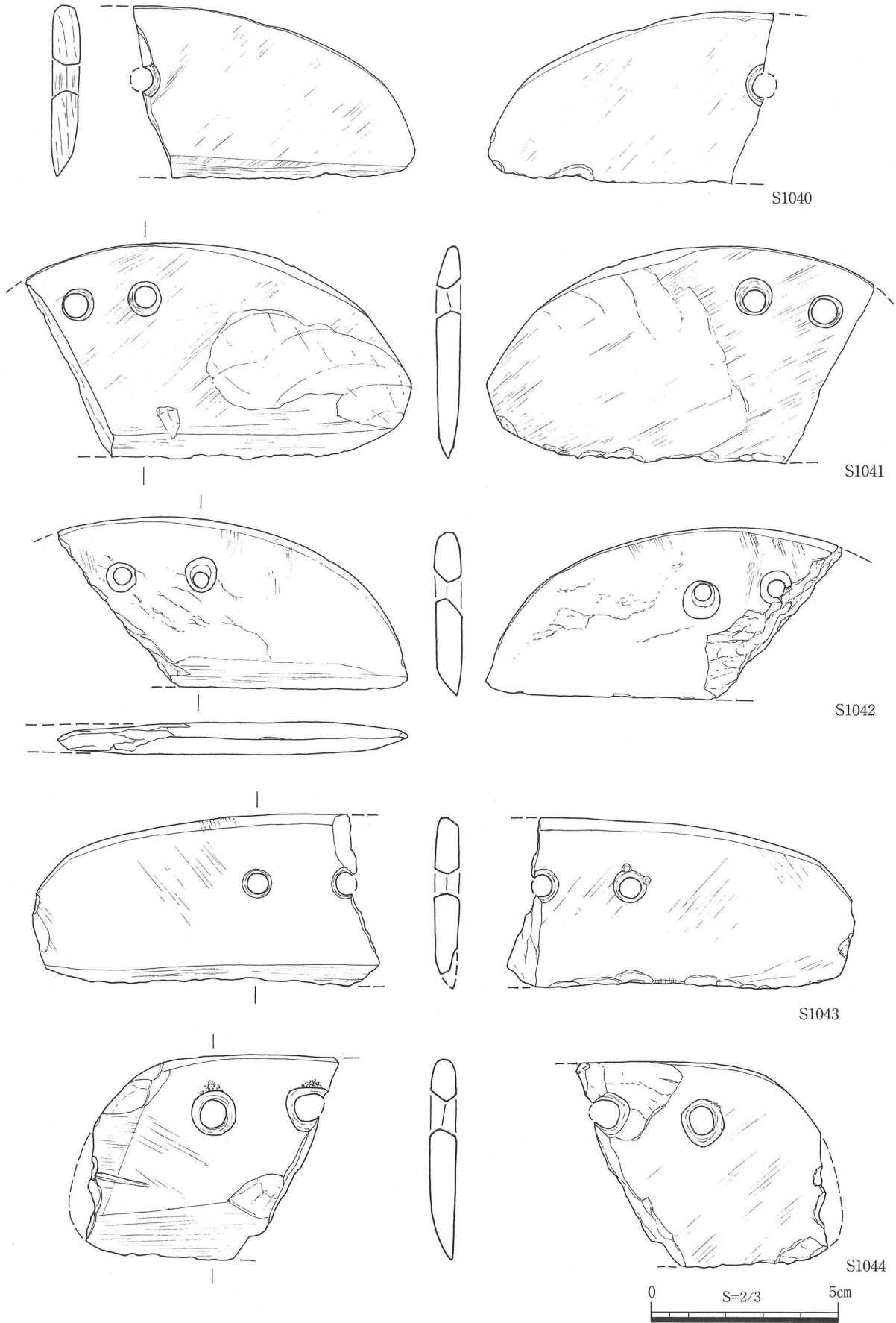
S1040は、背部の一部に長軸と直交する条痕が認められる。位置から判断して、滑り止めとして機能していた可能性がある。S1042には孔の一部に紐ずれの痕跡が認められる。S1043はS1040と同様に背部と刃部の一部に長軸と直交する条痕をとどめている。またb面に穿孔失敗痕を2ヶ所確認できる。表面には細かなくぼみが数ヶ所みられ、全面を敲打後に研磨を施した痕跡である。S1044は穿孔部の周辺に敲打痕が認められ、敲打穿孔後に回転穿孔が施されたと考えられる。S1045・1046はともに背部の一部に長軸と直交する条痕が認められる。これらはS1040と同様に滑り止めの機能を果たしていたと考えられる。刃部はわずかに内湾しているが、使用に伴う研ぎ減りと考えられる。S1046には未貫通の穿孔失敗痕があり、a面に1ヶ所、b面に3ヶ所確認できる。S1047の刃部は両刃であり、孔の上縁部には紐ずれの痕跡が認められる。

S1048~1050は大形石庖丁である。S1048・1049の穿孔は1ヶ所認められ、その位置から1孔の可能性が高い。S1050の形態は、三角形状を呈すると思われる。

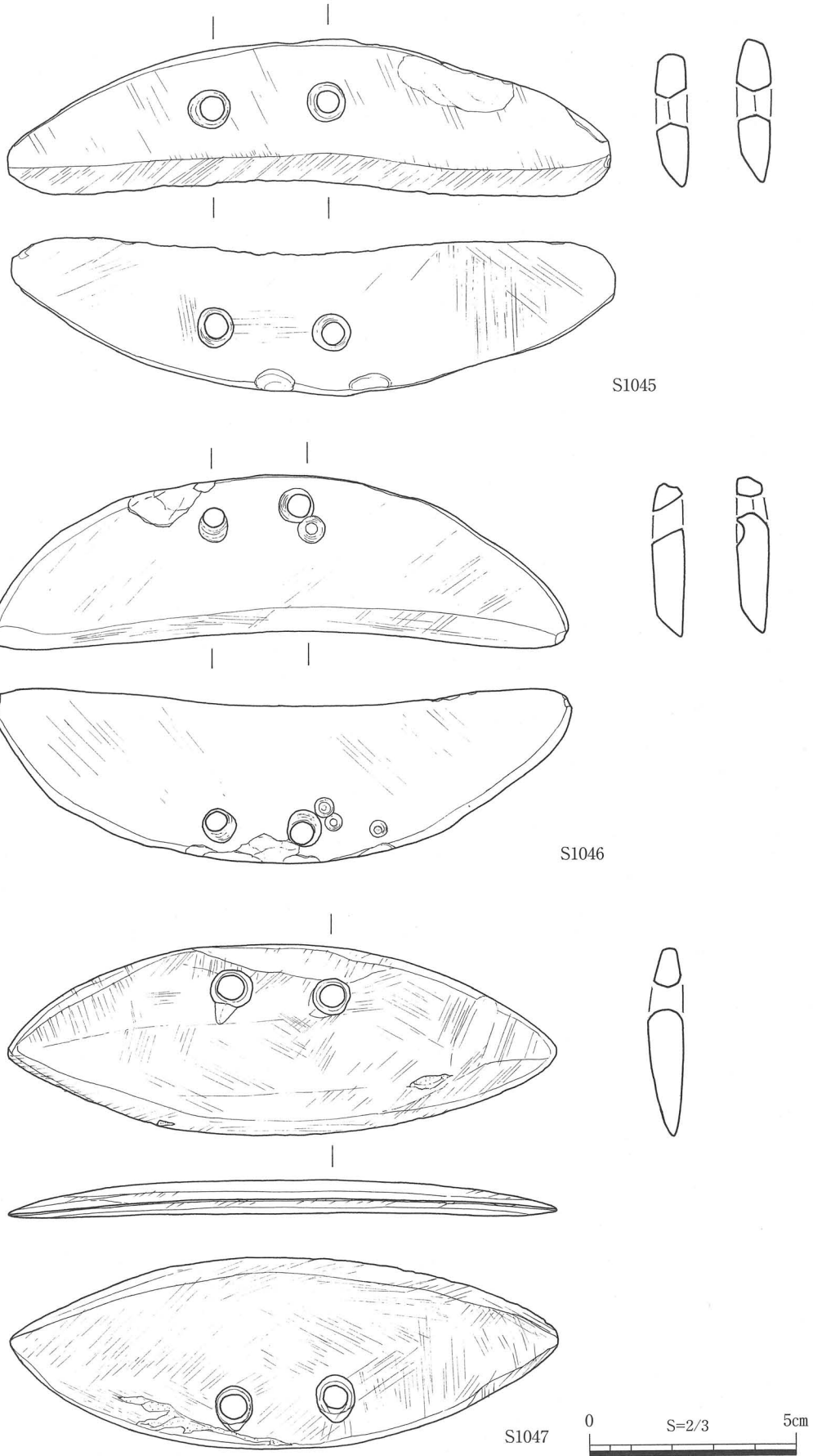
結晶片岩製石庖丁未成品 (S1051~1054・SP1067~1070) S1051~1054は石庖丁未成品である。S1051・1052は調整剥離段階、S1053は敲打段階、S1054は研磨段階に位置づけられる。いずれも穿孔されていない。製品と同様、用いられた結晶片岩の節理の発達度はさまざまであるが、節理に沿って薄く剥離され、石庖丁に利用されている。

S1051は粗割後の剥離整形の際に欠損し、廃棄されたものと考えられる。上端部に一部自然面を残している。研磨は施されていない。S1052は背部に細かな剥離を施しており、半月形に整形しようとする意図がうかがえる。表面は部分的に研磨されている。S1053は敲打段階の未成品であり、両面ともに敲打の痕跡が残っている。厚みがあり、敲打途中に欠損し廃棄

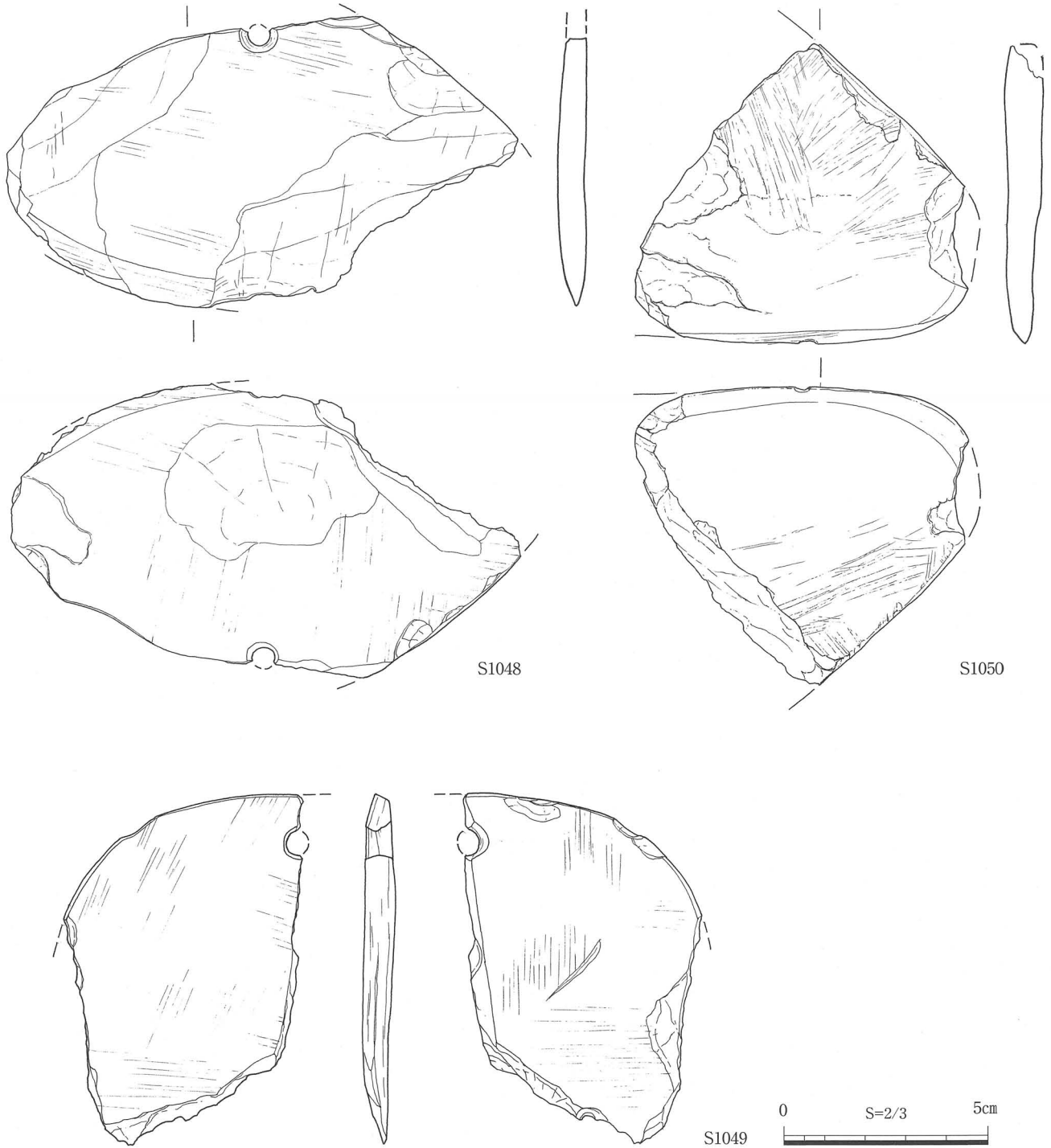
遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1040	石庖丁	69次	SD-1109	第6層	(7.5)	4.6	0.7	(36.7)	玄武岩質凝灰岩質片岩A		V・VI-1・2
S1041	石庖丁	61次	SK-108	第6層	(10.4)	(5.8)	0.6	(48.6)	玄武岩質凝灰岩質片岩A		Ⅲ-1
S1042	石庖丁	65次		黒褐色土Ⅱ	(9.4)	4.5	0.7	(43.5)	玄武岩質凝灰岩質片岩B		弥生中・後期
S1043	石庖丁	61次	SD-151CS	第8(下)層	(9.3)	(4.5)	0.7	(56.3)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅱ-2・3
SP1065	石庖丁	61次		暗灰褐色粘質土	(11.7)	4.9	0.9	(80.7)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩B		弥生中期
S1044	石庖丁	69次		暗褐色土	(6.5)	5.5	0.7	(41.4)	玄武岩質凝灰岩質片岩A		弥生
S1045	石庖丁	61次	SD-151	第2層	14.7	3.9	0.7	59.8	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩B		Ⅲ-2
S1046	石庖丁	61次	SK-117	第1層	14.1	4.2	0.7	73.1	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩F		Ⅲ-4
S1047	石庖丁	61次	Pit-119	第1層	13.3	4.6	0.8	74.6	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C		弥生



第206図 南地区出土磨製石器（1）

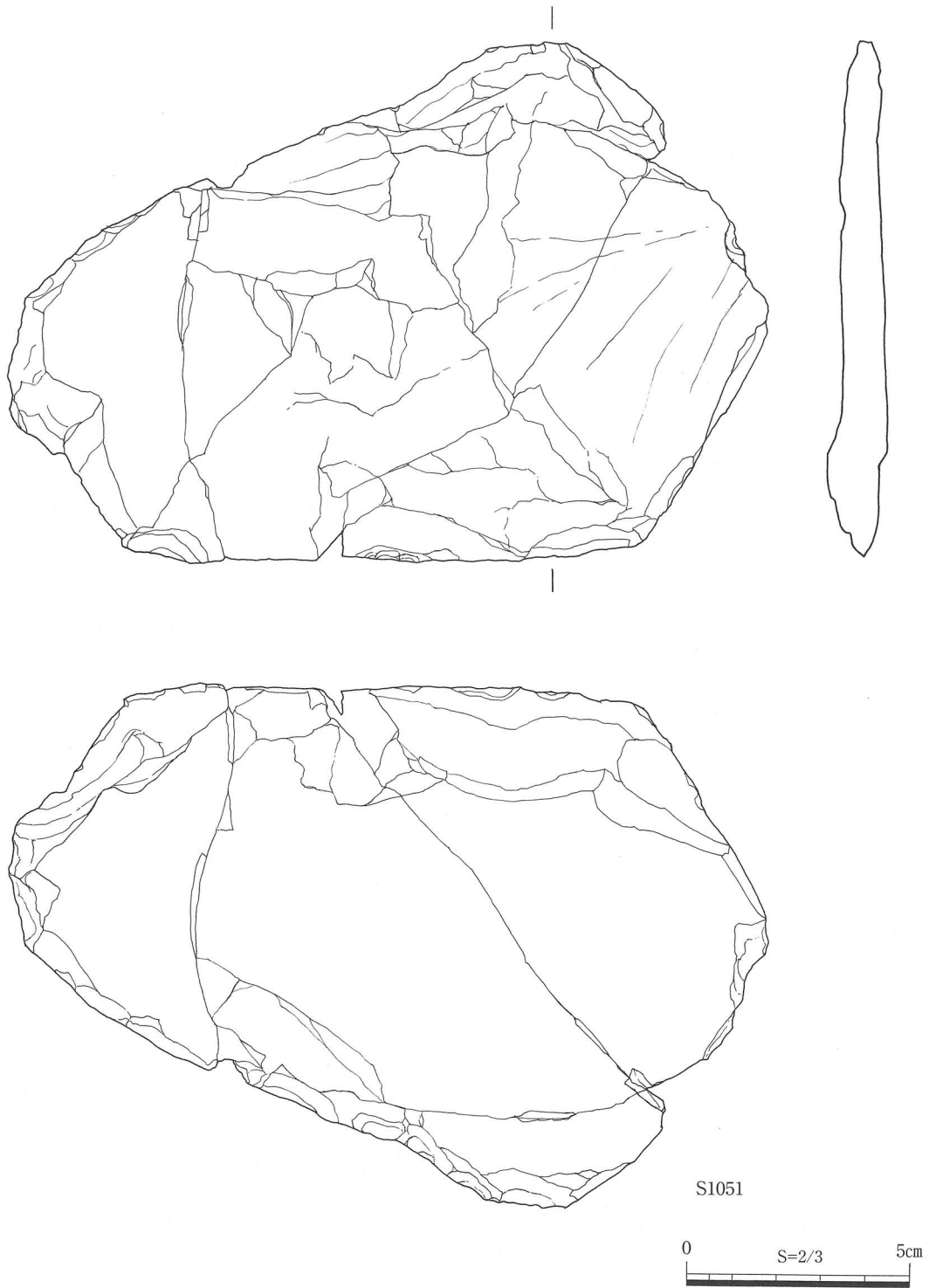


第207図 南地区出土磨製石器(2)



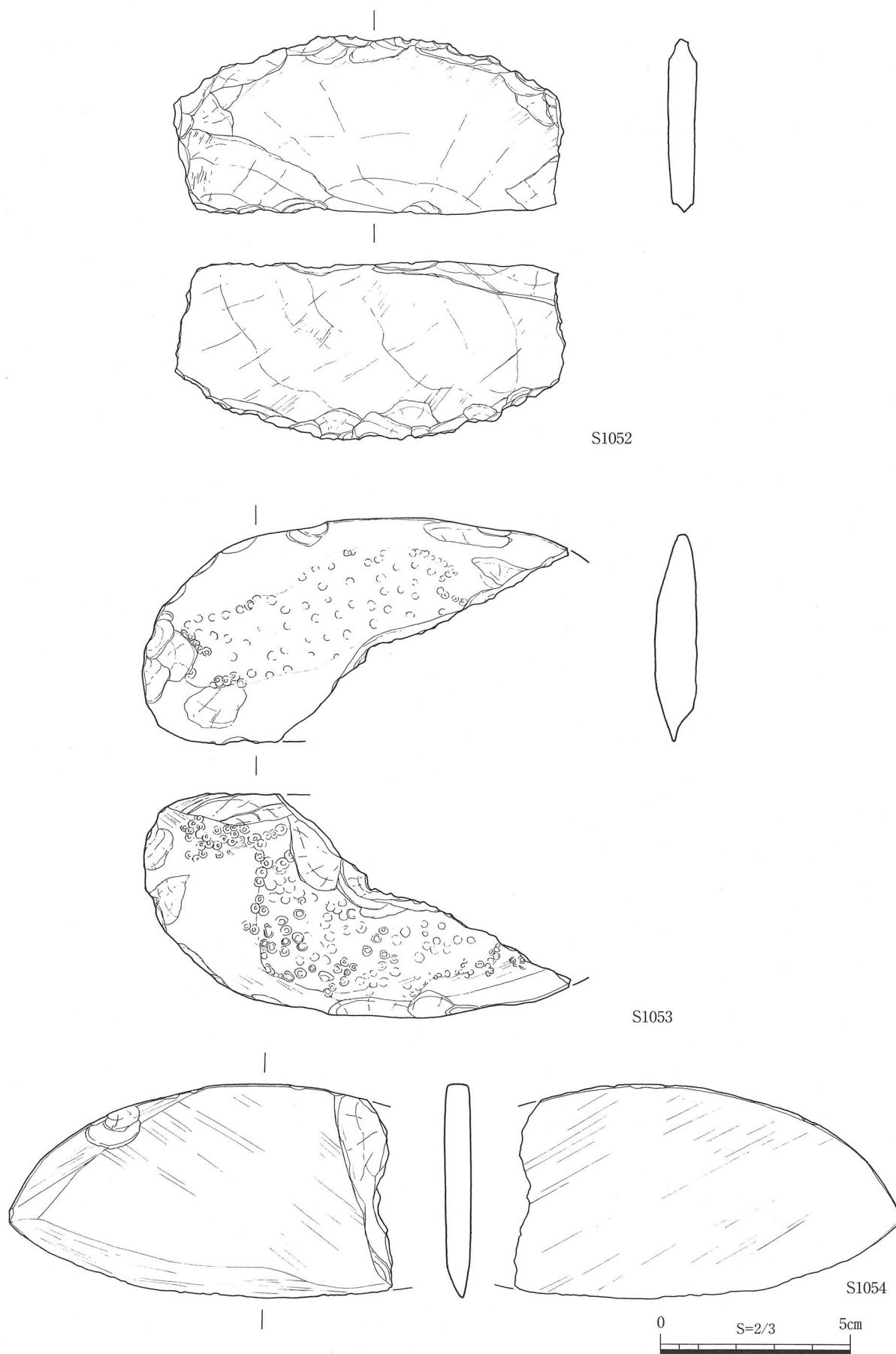
第208図 南地区出土磨製石器（3）

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
SP1066	石庖丁	61次	SD-103	第3層	(13.7)	4.4	0.7	(65.9)	玄武岩質凝灰岩質片岩A		Ⅵ-4
S1048	大形石庖丁	61次	SD-152	上面	(12.5)	(6.8)	0.8	(86.6)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩C		Ⅱ-3
S1049	大形石庖丁	69次		黒褐色粘質土	(6.1)	(8.0)	0.8	(60.6)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩A		弥生
S1050	大形石庖丁	61次	SD-106B	第2層	(8.1)	7.3	0.9	(71.1)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩B		Ⅲ-2
SP1067	大形石庖丁	61次	SD-102	第1(下)層	(8.1)	7.6	(0.9)	(59.2)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩A		Ⅵ-4



第209図 南地区出土磨製石器（4）

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1051	石庖丁未成品	69次	SK-1143	第1層 灰黄色粘質土	17.2	11.9	1.7	147.8	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩C		Ⅱ-3 弥生中期



第210図 南地区出土磨製石器（5）

したものと考えられる。また部分的に研磨痕がみられ、敲打と研磨が交互に施されたことがわかる。S1054は研磨段階の未成品である。杏仁形を呈しており、研磨により刃部を作り出している。全体に研磨されており、厚みも均一に整えられているが、欠損のために製作途中で廃棄されたものと考えられる。

流紋岩製石庖丁 (S1055・1056) S1055・1056はともに白色の流紋岩が用いられている。ともにほぼ完形を保っており、両面穿孔が施されている。S1055は半月形を呈するが、刃部はわずかに外湾している。刃部は両刃にちかいが、その半分は刃縁が平坦に研磨されており、刃部としての機能を果たさない。a面に未貫通の穿孔失敗痕が1ヶ所みられる。S1056は半月形を呈し、刃部は外湾している。両刃に整えられた刃部には、使用に伴うと考えられる剥離が部分的に残されている。

流紋岩製石庖丁未成品 (S1057~1059) 流紋岩製石庖丁の未成品は3点を図化し、そのうち2点は素材である。石材は流紋岩であり、白色、もしくは灰白色を呈している。S1057・1058は石理に沿って分割されているが、ともに必要以上の厚みをもっている。

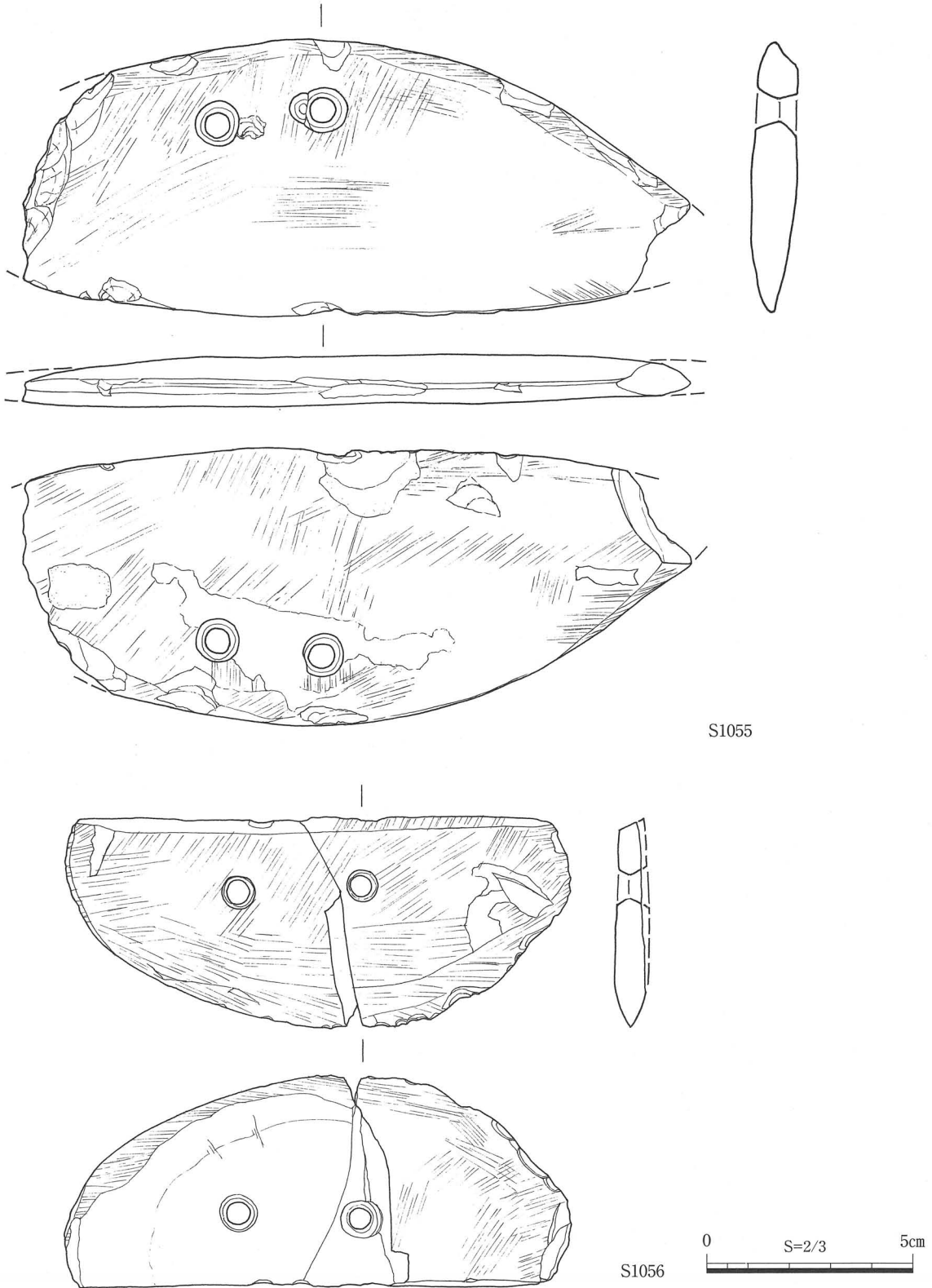
S1057は縁辺に細かな剥離を施すものの、厚みは減じられていない。両者とも器形調整のための剥離はなく、必要以上の厚みを有していることから、素材にちかい段階と考えられる。また平面形態から、製作途中で失敗し廃棄されたものと考えられる。

一方でS1059はS1057・1058とは異なる点として、厚みを製品にちかい段階まで減じていることが指摘できる。縁辺から加工が施されている点からも、器形調整段階の未成品と考えられる。しかし石庖丁の製品としては小さく、製作途中で破損し失敗したものと考えられる。

大型蛤刃石斧 (S1060~1063・SP1071~1074) S1060~1063は大型蛤刃石斧であり、S1060とS1062は完形である。全体に小形のものが多いが、刃部には刃こぼれや欠損がみられ、使用、再研磨を繰り返し小形化したものと考えられる。以下個別に詳細を述べる。

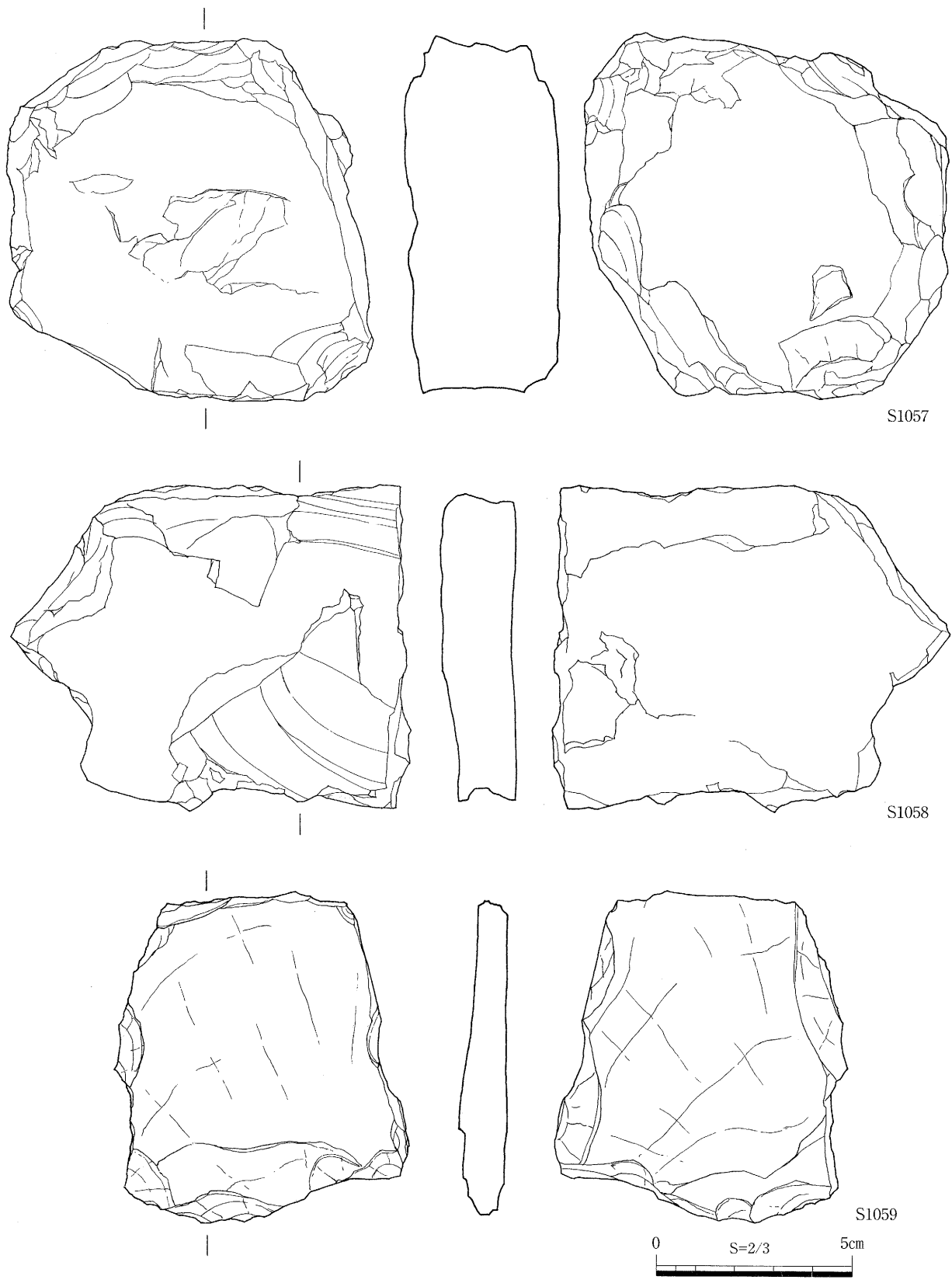
S1060は基部と片側側面にわずかなくぼみがあり、打撃の痕跡が残っている。刃部先端は刃こぼれしており、使用に伴うものと考えられる。S1061は基部を折損しており、刃部も一部欠損している。前面に研磨が施されている。刃部先端は半分欠損しているが、残存している部分はほとんど刃こぼれがみられない。また裏面にススが付着しており、熱を受けた可能性がある。S1062は比較的小形である。刃部先端は丸みを帯びており、使用に伴い磨耗したのものと考えられる。S1063は稜が明瞭でなく、全面が磨耗しているように見える。上端部や基部中央に敲打の痕跡が残っており、敲石に転用された可能性を示唆している。また刃部端は丸み

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
SP1068	石庖丁未成品	61次	SD-105B	第4層	(10.2)	5.6	1.4	(103.6)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩B		Ⅲ-3
S1052	石庖丁未成品	61次	SD-102B	第4-b層	(10.3)	(4.7)	(0.9)	(71.2)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩A		V
S1053	石庖丁未成品	61次	SD-115	第2層	(11.6)	(5.9)	1.1	(84.5)	玄武岩質凝灰岩質片岩A	敲打痕多数	Ⅲ-2
SP1069	石庖丁未成品	61次		灰黒色粘土	(11.3)	(5.9)	0.9	(97.8)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C	大形石庖丁転用	弥生
SP1070	石庖丁未成品	61次	SD-151	第2(上)層	(12.0)	5.5	1.1	(112.5)	泥質点紋片岩A		Ⅲ-2
S1054	石庖丁未成品	65次	SK-150	第2(下)層	(10.3)	5.6	0.7	(71.2)	凝灰岩質点紋片岩		V-1



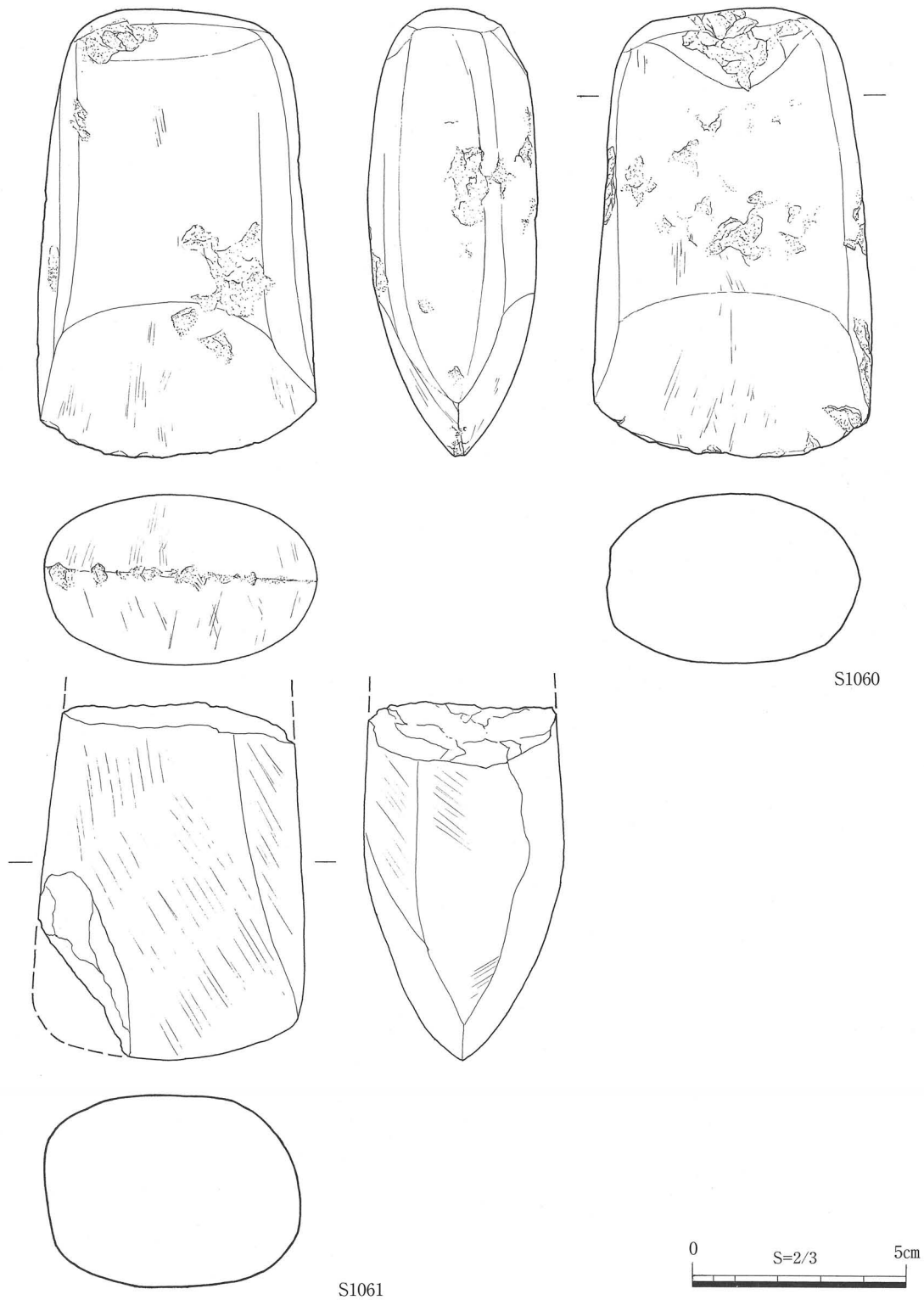
第211図 南地区出土磨製石器（6）

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1055	石庖丁	61次	SK-117	第1層	(16.2)	6.7	1.1	(140.7)	流紋岩E		Ⅲ-4
S1056	石庖丁	69次	SD-1101B	第5-1層	(7.3)	4.9	0.7	(30.2)	流紋岩E		V-1
			SD-1101B	Sec第5層	(6.6)	5.0	0.9	(31.4)			V-1



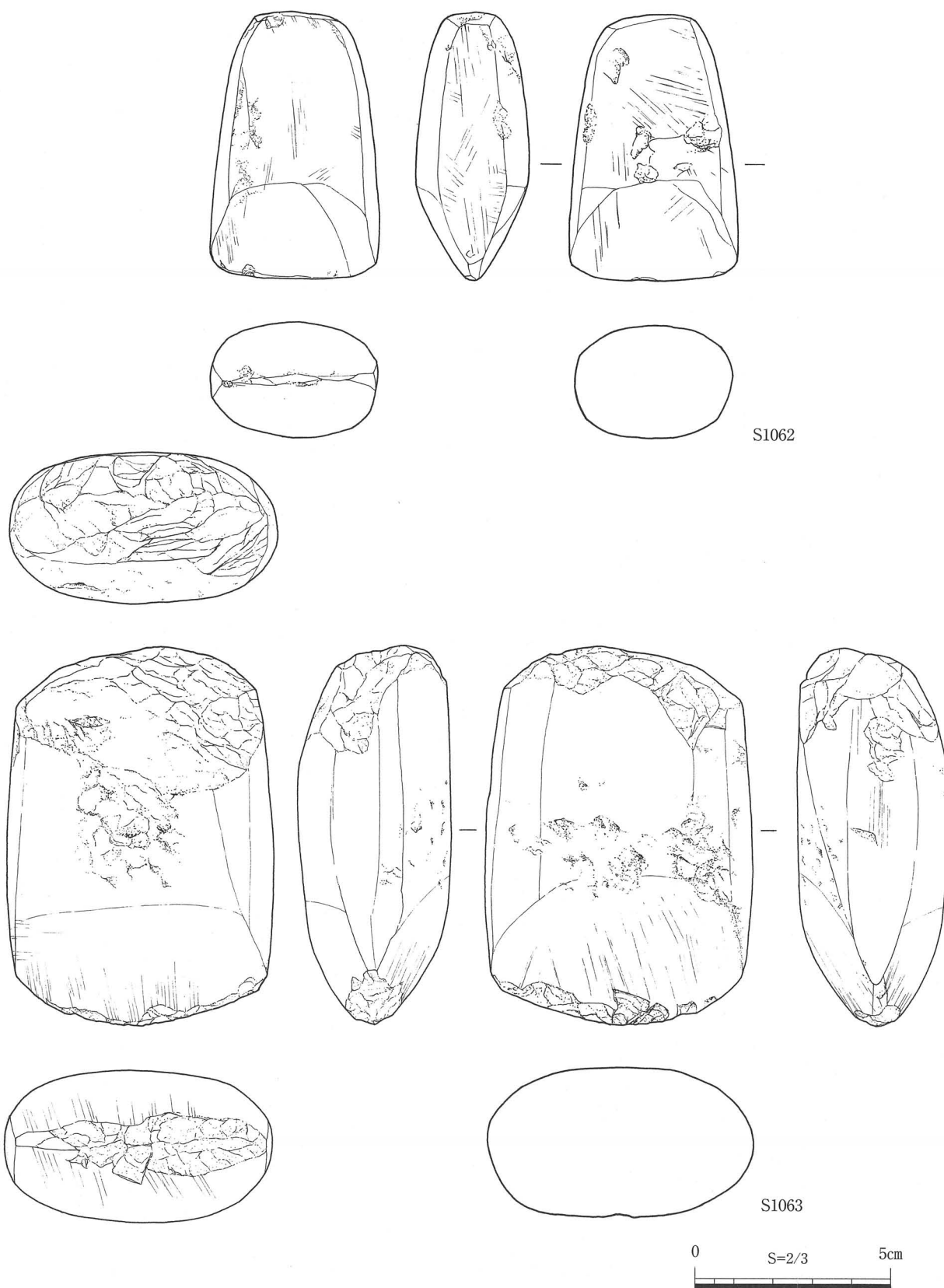
第212図 南地区出土磨製石器 (7)

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1057	石庖丁素材	61次	SD-106B	第2層	9.4	9.4	4.0	508.9	柘榴石流紋岩B		Ⅲ-2
S1058	石庖丁素材	69次	落ち込み I	黒褐色土 (炭灰混)	(10.2)	8.3	2.0	(256.9)	柘榴石流紋岩A		弥生
S1059	石庖丁未成品	65次		黒褐色土	(7.4)	(8.2)	1.3	(93.4)	流紋岩D		弥生



第213図 南地区出土磨製石器（8）

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1060	大型蛤刃石斧	65次	SK-146	第1層	10.5	6.5	3.9	(470.9)	玄武岩E		Ⅵ-3
S1061	大型蛤刃石斧	69次	SK-1130	第5(下)層	(8.4)	6.1	4.6	(373.0)	安山岩B	折損後被熱	Ⅲ-3
SP1071	大型蛤刃石斧	61次	SD-106B	第2層	(9.0)	(6.8)	(4.1)	(270.6)	玄武岩A		Ⅲ-2
SP1072	大型蛤刃石斧	61次	SD-106B	第2層	(10.1)	5.9	3.7	(363.4)	ひん岩		Ⅲ-2
SP1073	大型蛤刃石斧	69次	表探		(9.5)	6.1	(3.4)	(332.5)	玄武岩質溶岩A		-
SP1074	大型蛤刃石斧	69次		灰黒色粘質土	(8.2)	(5.6)	3.1	(197.4)	蛇紋岩		弥生・古墳



第214図 南地区出土磨製石器 (9)

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1062	大型蛤刃石斧	65次	SB-101	第1-b(下)層	6.8	4.3	2.8	130.4	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩C		Ⅲ
S1063	大型蛤刃石斧	69次	SD-1108	第3層	(9.7)	6.8	4.0	(485.1)	玄武岩B	敲石に転用	Ⅲ-4

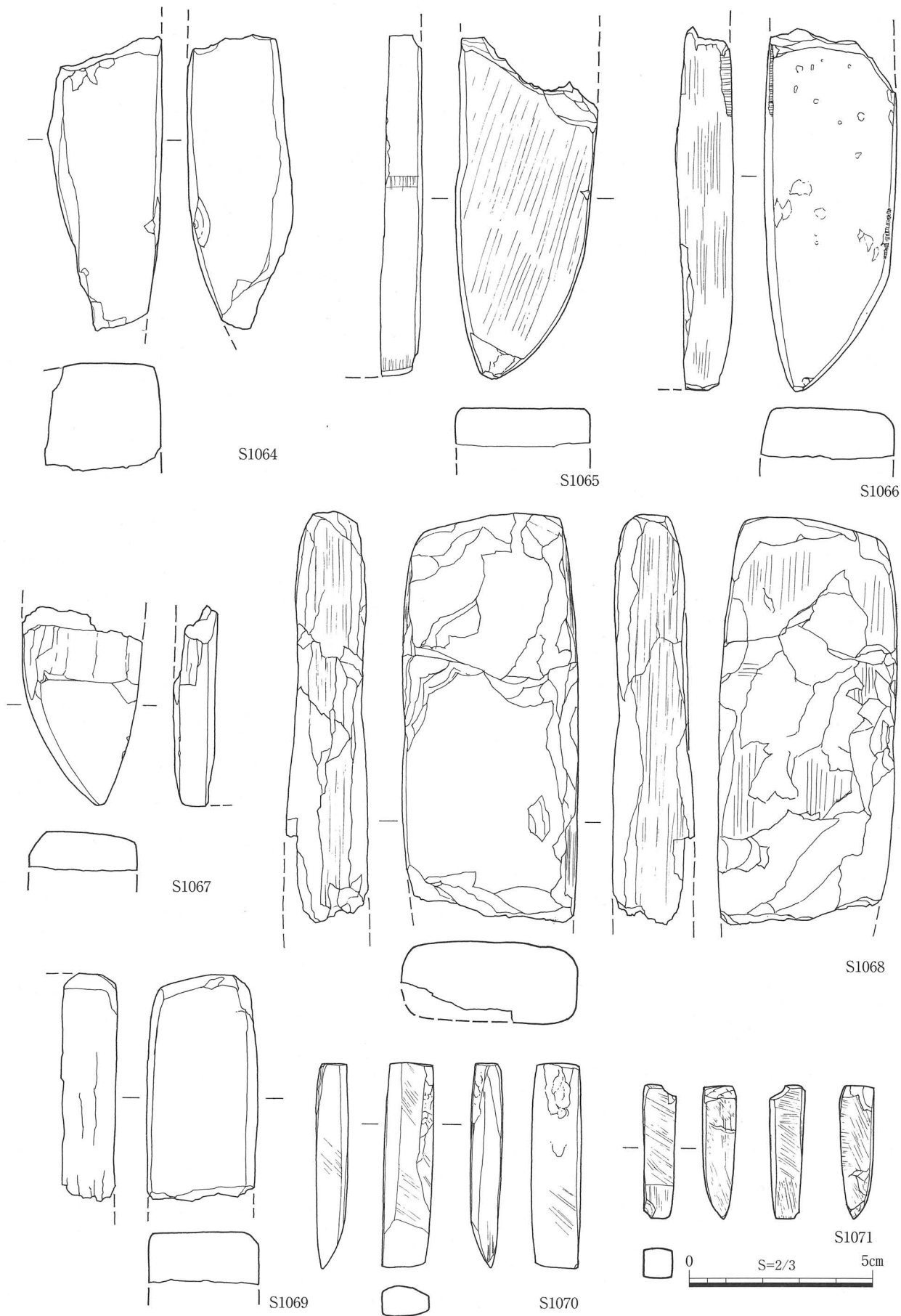
を帯びており潰れが目立つ。使用に伴うものと考えられる。

柱状片刃石斧 (S 1064~1071) S 1064~1071は柱状片刃石斧である。そのうちS 1065は挟入柱状片刃石斧、S 1070・1071は小形の柱状片刃石斧となっている。完形のものはS 1070のみである。特に刃部は欠損が著しい場合が多く、残存しているものも丸みを帯びていることから、使用頻度の高さがうかがえる。石材はS 1071を除き、結晶片岩が用いられている。節理の取り込み方は石庖丁と異なっており、前主面の長軸に節理が平行している。これは幅と厚みのある素材を得るためと考えられ、製作の利便性と密接に関係していると推測される。また節理の方向は、後述する扁平片刃石斧を含め、加工斧全体で同様の傾向を示す。

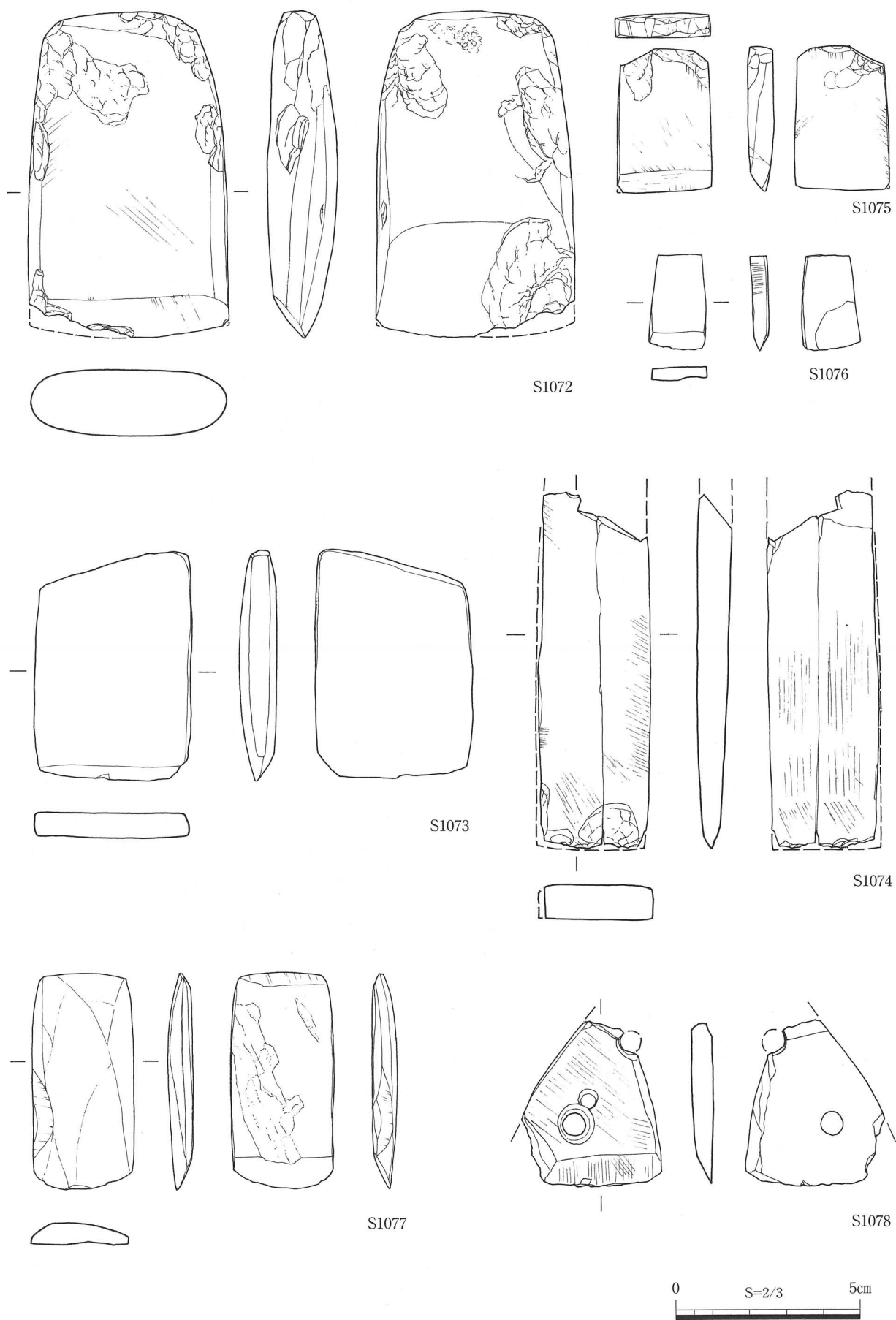
S 1064は基部、刃部、後主面、左側面を欠損している。残存している面にはいずれも研磨が施されている。S 1065は後主面にわずかな段を有しており、抉りと同様の機能を果たしたと推測できる。基部、右側面は欠損している。刃部先端は丸みを帯びており、使用に伴って磨耗したものと考えられる。S 1066は基部及び右側面を欠損している。左側面は一部くぼみがみられ、製作時の敲打痕により研磨が及ばなかったものと考えられる。後主面の端部に一部長軸と直交する条痕が残っている。一般に抉りが設けられる位置とちかく、同様に着柄の際の滑り止めの機能を果たすものと想定される。欠損面の観察から、刃部の稜付近と後主面に打点が認められ、意図的に器幅を調整しようとした痕跡であると推測される。S 1067は刃部のみが残存している。S 1068は表面が風化しており、剥落が顕著である。しかし各面にそれぞれ研磨痕が残っている箇所があり、横断面は本来の形状をとどめている。扁平片刃石斧の可能性も考えられるが、形状や節理の方向から柱状片刃石斧と判断した。S 1069には抉りが施されていない。刃部と片側側面が欠損しており欠損が著しい。S 1070は完形の小形柱状片刃石斧であり、全面研磨が施されている。S 1071は小形柱状片刃石斧である。基部は欠損しており、側面は欠損後研磨が施されている。小形の扁平片刃石斧を再加工したものと考えられる。

扁平片刃石斧 (S 1072~1078・S P 1075・1076) S 1072~1078は扁平片刃石斧である。S 1074を除き、ほぼ完形を保っている。石材はS 1075を除き結晶片岩が用いられている。節理の方向は柱状片刃石斧同様、前主面の長軸と平行にとられている。

S 1072は刃部端を一部欠損しているものの、ほぼ完形である。刃部端の欠損は使用に伴うものと考えられる。断面は横長の楕円形であり、側面に平坦面が作り出されておらず、やや厚みをもっている。S 1073は完形であるが、表面は風化が進んでおり、研磨痕は明瞭ではない。断面は隅円の長方形であり、研磨によって側面を平坦に整えている。S 1074は基部を欠損している。刃部には細かな剥離痕が認められ、使用に伴う刃こぼれと考えられる。断面形状は横長の長方形であり、側面に平坦面が作出されている。また中央部では節理に沿って割れが生じている。S 1075・1076は小形の扁平片刃石斧であり、全面に研磨が施されている。S 1075の刃部端には使用に伴う擦痕が、刃部に直交する方向に残されている。S 1076は非常に薄く、刃部端には使用に伴う細かな剥離が認められ、後主面は使用に伴って端部を剥離している。S 1077は柱状片刃石斧の転用品である。左側面に抉りの一部とみられるくぼみが確認でき、柱



第215図 南地区出土磨製石器 (10)



第216図 南地区出土磨製石器 (11)

状片刃石斧の基部付近の左側面が加工され、転用されたものと考えられる。また上端部にも刃をつけた痕跡があるが、後に先端を平坦に研磨している。転用品のため、節理の方向は他と異なり、側面の長軸と平行している。S1078は石庖丁からの転用品である。背部付近が利用されており、中央に石庖丁の孔をとどめている。裏面には剝離痕が認められる。

磨製石鏃 (S1079・1080) S1079は有孔の磨製石鏃である。基部は、茎をもたない平基式である。両面とも大部分が剝離し、基部のみが残存する。両面の残存部から断面形状が菱形であったことが復元できる。刃部に直交する研磨がみられ、また、研磨角度から中央に鑄をもち鋭利な刃部を形成する磨製石鏃に復元できる。身部の中央に径0.45cmの孔を有する。S1080はほぼ完形の磨製石鏃である。茎を有しており、全面に研磨が施されている。鑄は先端のみで、身部の中央は平坦である。刃部の研磨方向は不明瞭であるが、刃部に並行するようで、石材や形態から石庖丁端部を転用した可能性がある。

磨製石剣 (S1081~1091・SP1077) S1081~1091は磨製石剣で完形のものはない。すべて欠損品で小片のものが多く、身部の幅からするとこれらは鉄剣形石剣と思われる。石材は泥質ホルンフェルスや石庖丁に使われる玄武岩質凝灰岩質片岩が用いられている。

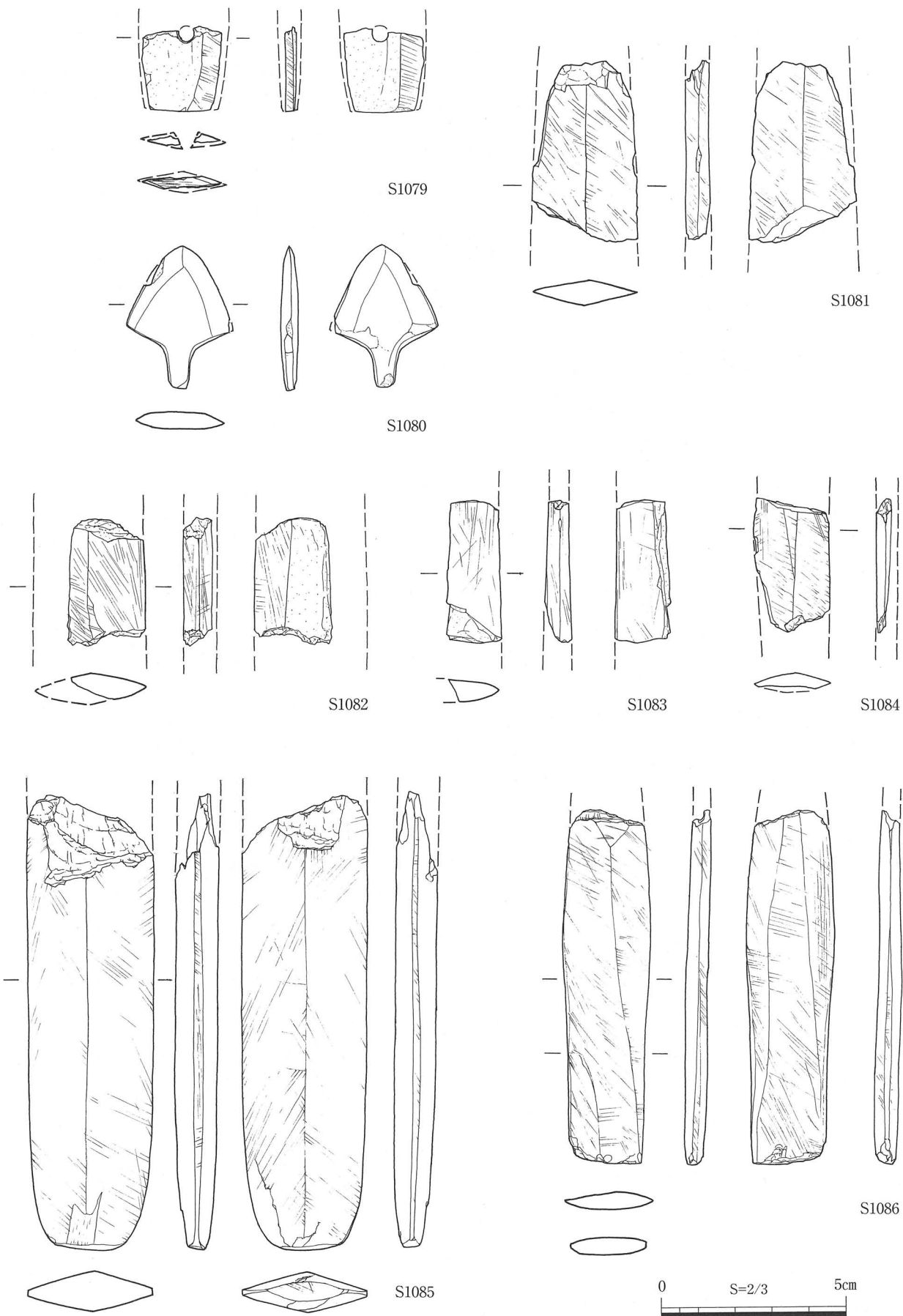
S1081は先端と基部を折損している。身部中央に鑄をもち、側縁は研磨によって鋭利な刃

遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1064	柱状片刃石斧	65次		黒褐色土	(8.1)	(3.2)	(2.8)	(116.7)	柘榴石片岩A		弥生
S1065	柱状片刃石斧	61次	SD-102B	第4層	(9.1)	3.7	1.2	(78.4)	柘榴石片岩A	S1102と同一個体?	V
S1066	柱状片刃石斧	61次	SK-138	第1層	(9.9)	3.5	(1.4)	(96.4)	柘榴石片岩A		弥生中期
S1067	柱状片刃石斧	69次		黒褐色土	(5.4)	3.3	(1.0)	(25.6)	柘榴石片岩A		弥生・古墳
S1068	柱状片刃石斧	65次	SD-106	第1層	(11.1)	4.8	2.3	(209.8)	玄武岩質凝灰岩質片岩A	扁平片刃石斧か	Ⅲ-3・Ⅳ-1 弥生中・後期
				黒褐色土Ⅱ	(4.9)	4.7	1.8	(62.8)			
S1069	柱状片刃石斧	65次	SK-165	第1層	(6.1)	3.0	(1.5)	(64.9)	柘榴石片岩A		Ⅲ-3
S1070	小形方柱状片刃石斧	65次	SK-171	第1層	5.6	1.3	1.8	(12.6)	玄武岩質溶岩B	扁平片刃石斧転用	Ⅵ-3
S1071	小形方柱状片刃石斧	69次	SD-1109	第5層	(3.7)	0.9	0.9	(5.0)	流紋岩質凝灰岩A	扁平片刃石斧転用?	Ⅵ-3・4
S1072	扁平片刃石斧	65次		黒褐色土Ⅱ	(8.8)	5.4	1.8	(148.4)	玄武岩質溶岩B		弥生中・後期
S1073	扁平片刃石斧	69次		黒褐色土	4.3	6.2	1.0	48.6	流紋岩質溶結凝灰岩G		弥生・古墳
S1074	扁平片刃石斧	61次		暗黄褐色土	(9.6)	(2.9)	0.9	(54.7)	流紋岩質凝灰岩B	一部被熱	弥生後期
S1075	扁平片刃石斧	65次	SR-151N	第2層	(3.9)	2.5	0.7	(13.5)	石英安山岩質溶結凝灰岩B		Ⅲ-2
S1076	扁平片刃石斧	61次	Pit-1151	黒褐色粘質土	(2.6)	1.6	0.4	(3.1)	凝灰岩質片岩		弥生中期
SP1075	扁平片刃石斧	69次	SD-1104	第2(下)-7層	4.1	2.6	1.2	(20.3)	玄武岩A	柱状片刃石斧転用	Ⅵ-2・3
S1077	扁平片刃石斧	65次	SK-108	第1層	5.8	2.8	0.7	21.6	泥質点紋片岩B	柱状片刃石斧転用	Ⅳ-2
S1078	扁平片刃石斧	69次	SD-1104	第3層	(4.5)	(3.7)	(0.6)	(14.4)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A	石庖丁転用	Ⅵ-2・3
SP1076	扁平片刃石斧	65次	SR-151S	第1層(下位)	3.7	2.0	0.7	9.6	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A	石庖丁転用	Ⅲ-2
S1079	磨製石鏃	61次	SK-108	第1層	(2.3)	2.1	(0.3)	(1.5)	泥質点紋片岩A		Ⅳ-2
S1080	磨製石鏃	69次	表採		3.9	2.8	0.5	(5.1)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C	石庖丁転用?	-
S1081	磨製石剣	69次		黒褐色土	(4.8)	3.0	0.7	(11.8)	泥質ホルンフェルスA	鉄剣形	弥生・古墳
S1082	磨製石剣	69次	SD-1104	第3層	(3.4)	(2.1)	(0.7)	(7.3)	泥質ホルンフェルスB	鉄剣形	Ⅵ-3
S1083	磨製石剣	69次	SD-1101	第1(下)-7層	(3.8)	(1.5)	0.6	(5.1)	泥質ホルンフェルスA	鉄剣形	Ⅵ-3
SP1077	磨製石剣	69次	排土		(2.3)	(2.2)	0.7	(1.6)	安山岩A(サヌカイト)	鉄剣形	-
S1084	磨製石剣	65次		黒褐色土	(3.6)	2.1	(0.4)	(3.9)	泥質ホルンフェルスA	鉄剣形	弥生
S1085	磨製石剣	61次	SD-102B	第5-c層	(12.3)	3.4	1.1	(64.9)	泥質ホルンフェルスC	鉄剣形	V
S1086	磨製石剣	65次		黒褐色土Ⅱ	(9.6)	2.3	0.5	(23.2)	玄武岩質凝灰岩質片岩A	鉄剣形 石庖丁転用	弥生中・後期

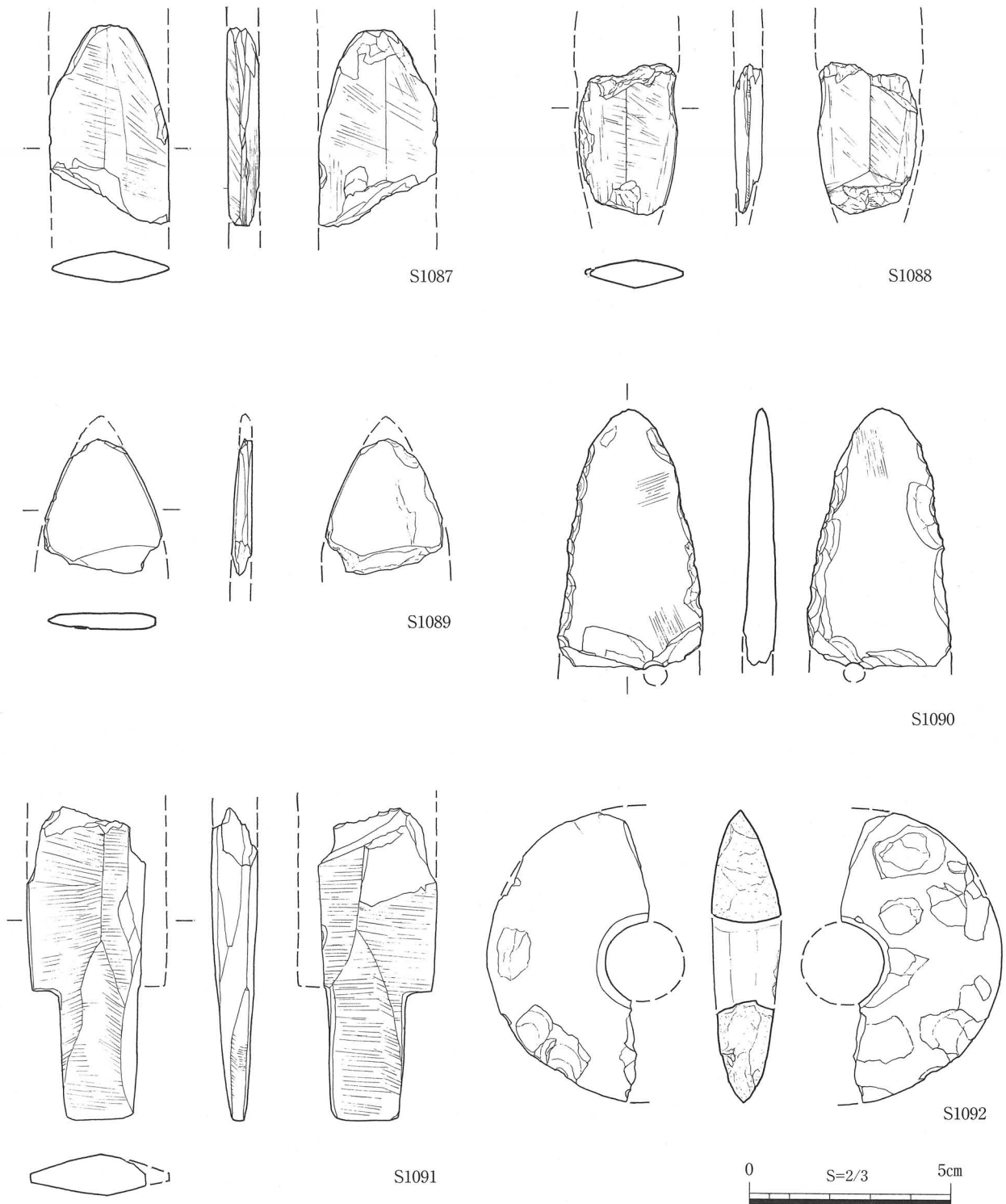
部を作出する。断面形状は菱形を呈する。この形状から先端にちかい破片と考えられる。S1082は中央部の破片で片側側面のみ残存する。鏑と刃部が認められるが、あまり鋭くはなく、断面形状はやや丸みのある菱形を呈することになる。S1083もS1082と同様の破片で、刃部の研ぎ出しや断面形状も類似する。S1084は裏面の大部分が剥離しているが、残存部から刃部幅が確認でき、細身あるいは先端ちかくの剣であることがわかる。断面形状は菱形であるが、鏑は刃部に並行せず中軸線になっていないことから、石剣の一部が欠損した後、再研磨した可能性がある。S1085は先端を欠損しているが、ほぼ形態のわかるものである。断面形状は菱形を呈すが、両側縁の刃部は幅0.2cmほどの平坦面を有するように研磨されており、柄部を作る。基部は、両側縁よりすほまり幅1.8cmの平坦面になる。S1086は先端を欠損している。柄部は両側縁を研磨刃潰し、身部中央から先端は刃部を作出する。ただし、鏑は直線的でなく、また、石材も石庖丁に使われる玄武岩質凝灰岩質片岩であり、細身であることから石庖丁等の転用品の可能性がある。S1087は中央に鏑をわずかに有するが、鏑を消すような研磨痕もみられ緩やかな湾曲面になる。側縁は研磨によって平坦面をもつ。このようなことから、柄部ちかくの破片と推定される。S1088は先端と基部を欠損する。側縁に抉りを有するが、本来のものかあるいは欠損後の再加工か判断できない。断面形状は菱形を呈している。S1089は石剣の先端とするが、石庖丁の端部の可能性もある。先端部はわずかに欠損している。全体的に平坦に研磨している。S1090は石庖丁の端部を利用したもので、中央に紐孔が残る。石剣の先端部とするが、石剣以外の製品の可能性もある。表面は平坦に研磨されており、鏑を有しない。側縁は刃部を有さず、器種調整のための細かい剥離が認められる。S1091は有茎の磨製石剣と思われるもので、前面に丁寧な研磨が施されている。身部は中央に鏑をもつ。断面形状は菱形を呈するが、側縁部は平坦面を有する。茎部は横位方向の研磨により平坦に整えられ、基部方向に向かって厚みは薄くなっている。

環状石斧（S1092） S1092は約半分が欠損するが、ほぼ円形を呈する環状石斧である。断面形状は凸レンズ状を呈し、その中央に孔をもつ。孔は両面から穿孔され、a面では孔周辺にわずかな平坦面をもつ。周縁部は鋭く研磨され刃部を有する。表面は被熱のためか剥落とひび割れがみられ、石質がもろくなっている。

遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1087	磨製石剣	69次		黒褐色土	(4.8)	2.9	0.8	(14.0)	泥質ホルンフェルスC	鉄剣形	弥生・古墳
S1088	磨製石剣	65次		黒褐色土Ⅱ	(3.8)	2.4	0.7	(7.8)	泥質ホルンフェルスC	鉄剣形	弥生中・後期
S1089	磨製石剣	61次		黒褐色土	(3.4)	(2.9)	0.5	(6.0)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A	鉄剣形 石庖丁転用	弥生・古墳
S1090	磨製石剣	61次	SK-114	第1層	(6.4)	(3.5)	0.8	(25.6)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C	鉄剣形 石庖丁転用	Ⅵ-4
S1091	磨製石剣	69次	SK-1115	第1層	(7.7)	2.9	1.1	(27.8)	泥質ホルンフェルスC	鉄剣形	Ⅵ-4
S1092	環状石斧	69次	SD-1101	第1(下)-7層	—	最大径 7.1	1.5	(45.9)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩F	被熱	Ⅵ-3



第217図 南地区出土磨製石器 (12)



第218図 南地区出土磨製石器 (13)

(3) 石製品

石製品は、広義には非実用あるいは用途不明の石器をさすが、本報告では、石製紡錘車、ミニチュア石製品、砥石を便宜上の分類として石製品と総称する。また、いずれの器種に分類すべきか判然としないものもわずかに存在し、それらは用途不明石製品として報告する。

石製紡錘車 平面形状は円形で、その中心が穿孔されている石器であり、紡織具の一種と考えられる。他器種から転用されたものも認められ、S1093のように石庖丁から転用されたものも数点出土している。

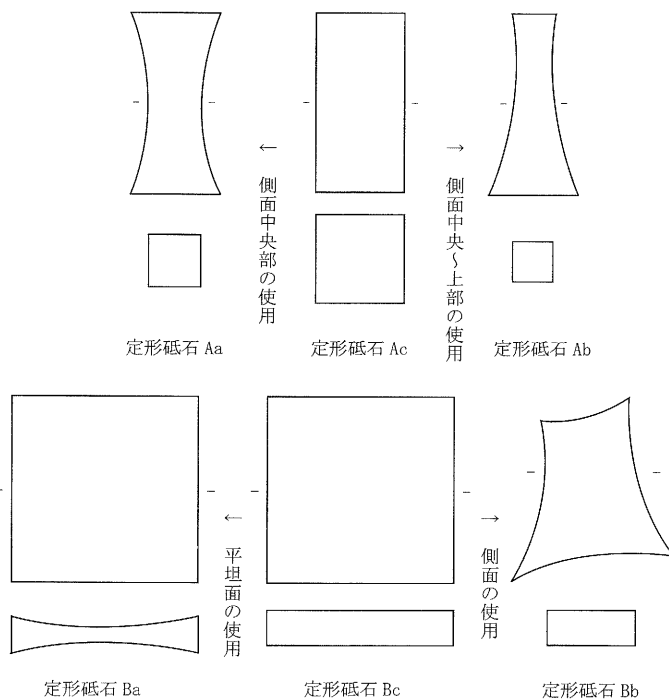
垂飾品 刃部をもたず、形態から紡織具としての用途も考慮しえないもので、装飾品の一種と考えられる石器である。

ミニチュア石製品 小形の磨製石器である。今回報告するミニチュア石製品の多くは、小形の石庖丁である。大きさの点から実用品とは考えがたく、祭祀用具と思われる。

砥石 骨角・石・木・金属・玉などに研磨加工を施すために使用された石製品である。認定にあたっては、①形状、②使用痕、③研ぎ減りなどから総合的に判断した。記述にあたっては、以下の分類・表現を用いることにする。

まず大きさについては、被対象物に対して、砥石を動かして研磨する動作が予想できる小形のいわゆる手持ち砥石をⅠ類、砥石を手に持ち、被対象物を動かして研磨する動作が予想できる、小形のいわゆる手持ち砥石をⅡ類、砥石を台や床に設置し、両手または片手で被対象物を動かして研磨する動作が予想できる、大形のいわゆる置き砥石をⅢ類とした。数量的にはⅠ・Ⅱ類が大多数を占めている。これらの重量は、Ⅰ類が100g未満程度、Ⅱ類が1000g未満程度、Ⅲ類が1000g以上となるが、唐古・鍵遺跡では1000~2000gの砥石は未確認のため、実質は2000g以上のものがⅢ類となる。

形状については、石材に加工が施されて形状が整えられたものを定形砥石、自然礫が無加工で砥石に利用されているものを不定形砥石とし、最大幅：最大厚が1~2cm未満で、角柱状の形状を呈するものを定形砥石A、最大幅：最大厚が2cm以上で、板状を呈するものを定形砥石Bとする。また砥石の使用部位（凹面）にも多様性がみられ、定形砥石Aでは、中央部を多用して凹面を形成したも



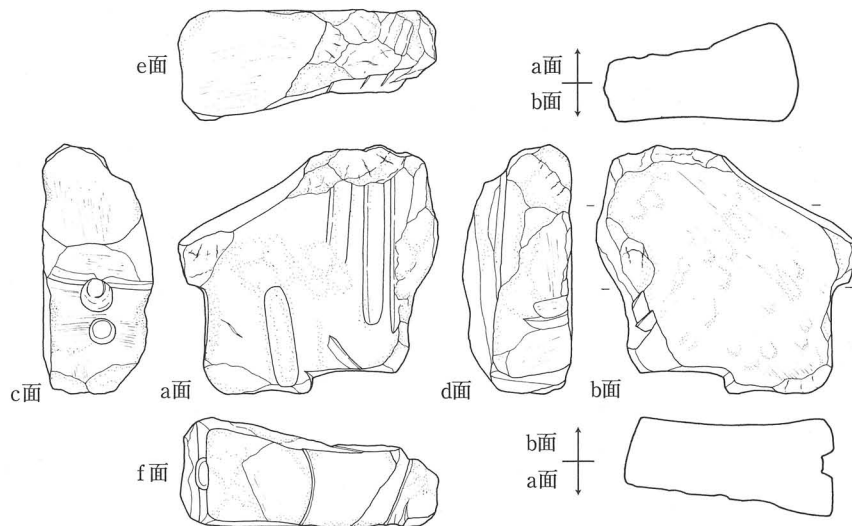
第219図 定形砥石の使用による形態変化の模式図

の (Aa)、中央～上部を多用して撥形となったもの (Ab)、全面を万遍なく使用し柱状の形をとどめているもの (Ac)、定形砥石Bでは、横断面・縦断面が凹レンズ状となったもの (Ba)、4側面を多用し平面形が星型となったもの (Bb)、全面を万遍なく使用し板状の形をとどめているもの (Bc) に細分できる (第219図)。

次に使用痕については、村田裕一⁽¹⁵⁾ の分類にしたがい、以下のように記述する。なお砥石各面の名称については、最も頻繁に砥面として用いたとみられる面 (写真掲載の面) を a 面とし、その裏面を b 面、左を c 面、右を d 面、上を e 面、下を f 面とする (第220図)。

- A：砥面を薄く削り取ったような傷痕で、断面がレ字状となる。溝断面の開口角度が90度未満 (A1)、90度以上 (A2)、あるいは縁辺部に形成されるもの (A3) に細分される。
- B：断面形がv字 (Bv)、u字 (Bu)、コ字 (Bコ) 状になる溝状の傷痕が2～5本程度並行するもの。
- C：断面形がv字、u字、コ字状になる溝状の傷痕。幅0.1cm未満か以上かで、各々C1v、C1u、C1コ、C2v、C2u、C2コと細分される。
- D：使用痕Cの断面形がv字状のうち、深くて明瞭な傷痕。
- E：断面形がv字、u字、コ字状になる溝状、L字状になる段状の傷痕。手の反復運動によって形成された、いわゆる「有溝砥石」の使用痕。幅0.4cm未満か以上かで、各々E1v、E1u、E1コ、E2v、E2u、E2コと細分される。
- F：砥面の縁辺部に形成される、断面形が階段状になる傷痕。
- G：ブラシで擦ったような一定方向に平行する擦痕。
- H：砥面に光沢面が形成されるもの。

なお、使用痕G、Hは砥石に一般的であるため、砥石認定の基準のひとつとして採用している。そのため、今回報告するすべての砥石に使用痕GまたはHが認められることになる。また観察表には、石材と合わせて重要な属性となる砥石目を記載している。砥石目はJIS規格のサンドペーパーとの照合により、60- (#60より粗いもの)、#60、80、100、120、180、240、320、400、600、800、1000、1200、1500、2000、2000+ (#2000より細かいもの) の16段階に分類した。



第220図 砥石の部位名称

石製紡錘車（S 1093～1097） S 1093～1097は石製紡錘車である。S 1093は石庖丁からの転用品である。側面に潰れ痕が発達しており、円形に整えようと加工されたことが推定できる。また側面には孔の縁が残存しており、孔が2つあったことがわかる。両面とも孔の周囲に敲打痕があり、敲打穿孔後に両面から回転穿孔されている。S 1094は縁辺からの剥離が残っており、表面も研磨が不徹底であり、側面は研磨されていない。一部にくぼみがあり、製作工程に敲打が含まれていることがうかがえる。また穿孔は両面からおこなわれている。S 1095・1096は完形である。表面、側面とも丁寧に研磨が施されている。S 1097は一部欠損しているが、表面、側面ともに研磨が施されている。穿孔は片面から施されている

ミニチュア石製品（S 1098・1099） S 1098・1099は石庖丁の小形品と考えられる。S 1098は穿孔が試みられているが、2孔とも未貫通である。S 1098・1099ともに研磨により刃部が作出されている。

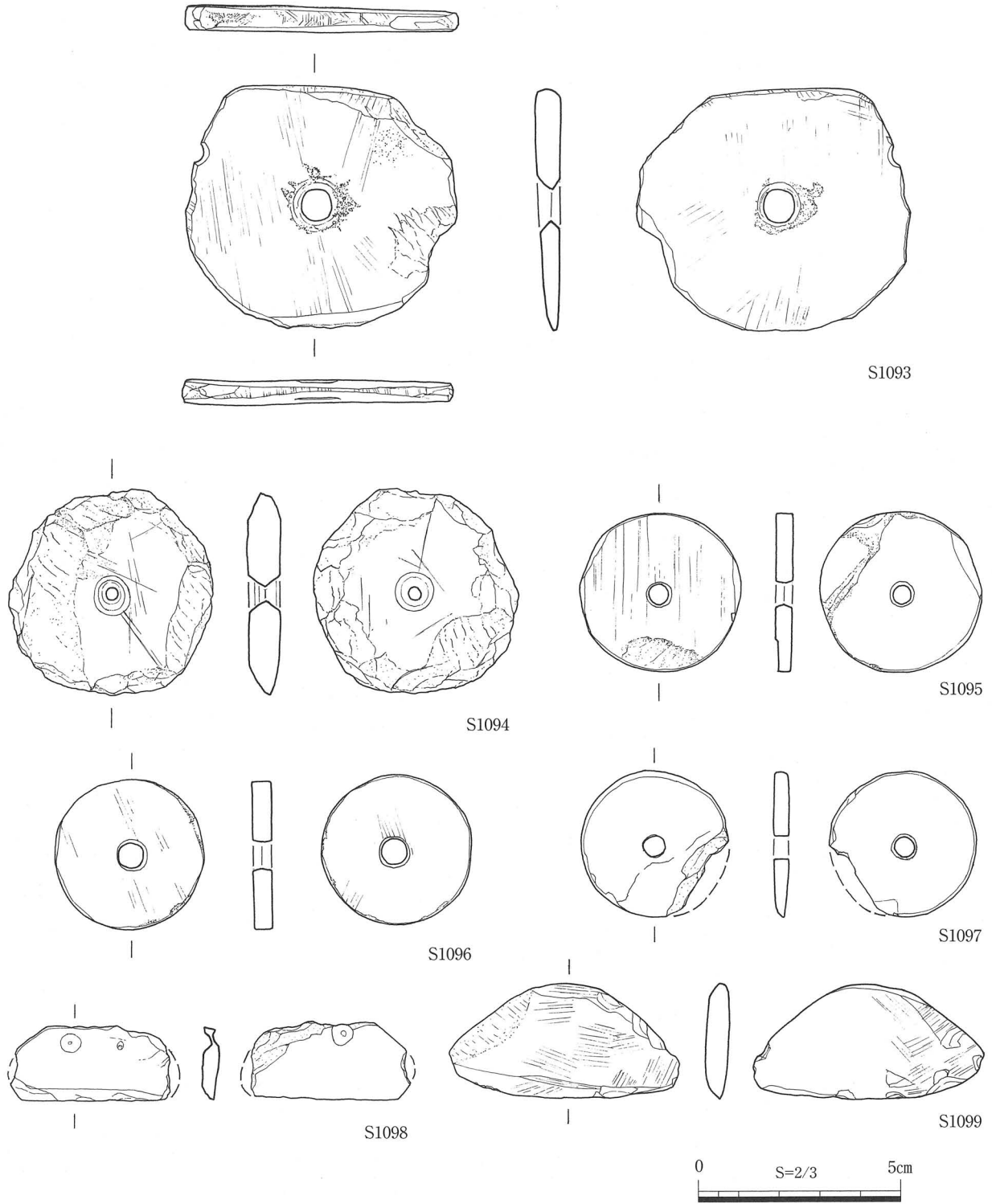
用途不明石製品（S 1100～1104・S P 1078～1083） S 1100～1104は器種の判別が困難なものである。S 1100は先端を欠損している。また、側面端部は平坦に研磨されている。S 1101は全面に研磨が施されており、上端は欠損後に研磨されている。S 1102は用途不明石製品に分類したが、後の観察の結果S 1065と同一個体であることが判明し、柱状片刃石斧の基部側面の破片であることが確認された。S 1103は扁平な川原石と考えられ、その一部に敲打痕が残っており、工具の一種とも考えられる。表面に一部ススが付着しており熱を受けた可能性がある。S 1104は棒柱状を呈しており、側面の一部に敲打痕が残る。S 1103と同様に工具の可能性はある。

石鋸（S 1105～1109・S P 1084～1089） いずれも横長に薄く割れた紅簾片岩等の剥片をそのまま利用したもので、形態を整えるための調整はおこなっていない。本来、横長の形態を呈していたと思われることから、両端を欠失しているものが多い。S 1107・1108・S P 1089は上下の長辺を刃部として使用しており、磨耗が激しい。特にS P 1089では、端部の使用により尖るような形態になっている。S 1105・1107は、刃部の厚みが0.1～0.2cmほどで薄い。

石鋸素材（S P 1090～1093） いずれも横長に薄く割れた紅簾片岩の剥片である。石鋸としての使用は認められないもので、素材あるいは石鋸として使用できない剥片の可能性はある。

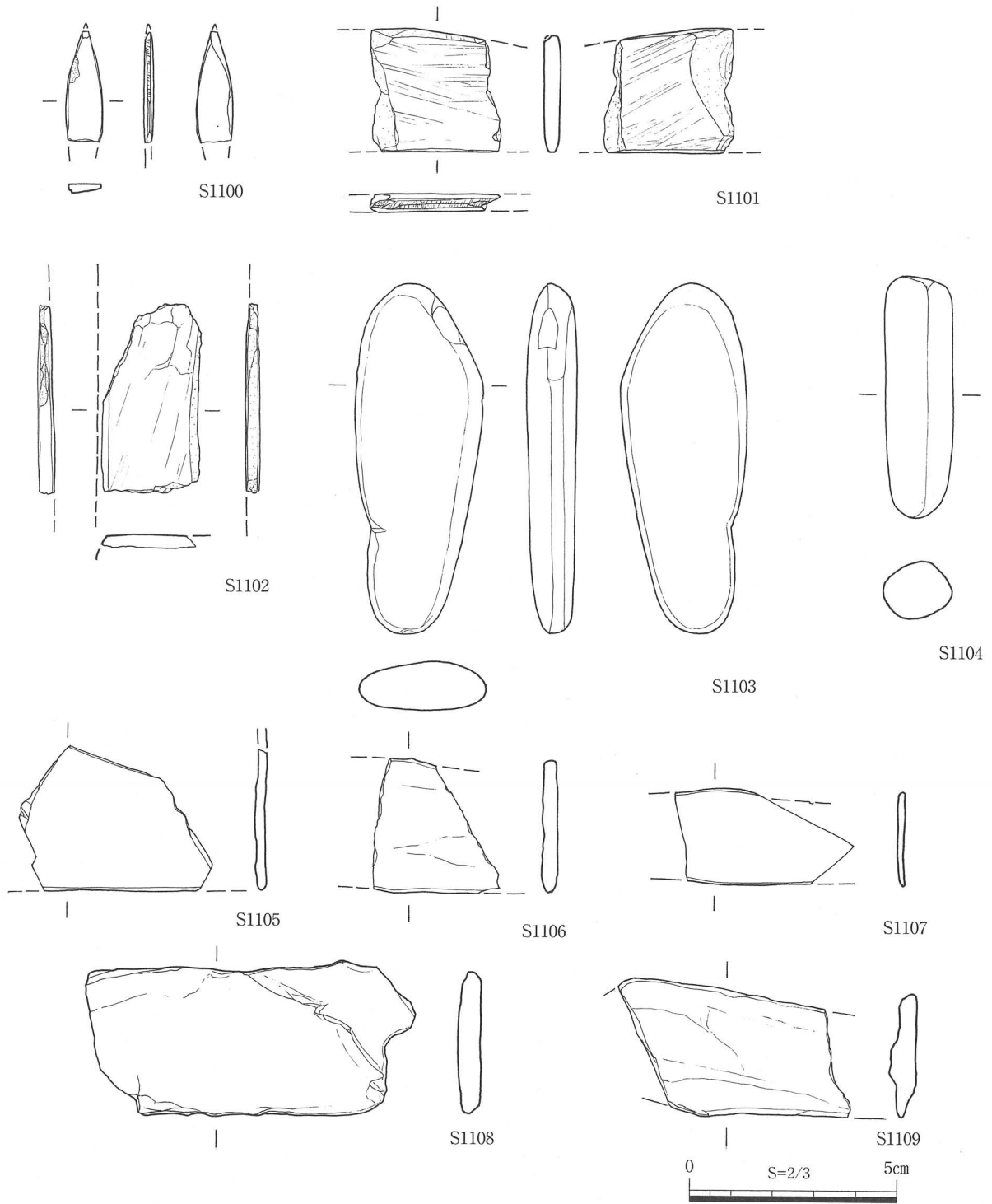
砥石（S 1110～1157・S P 1094～1111） S 1111・1115・1118～1121・1123～1126・1128～1131・1141～1143・1147、1149はⅠ類、S 1112・1113・1116・1117・1132～1140・1144～1146・1148・1150～1155はⅡ類、S 1156・1157はⅢ類に分類される。Ⅰ・Ⅱ類のうち、S 1128・1137・1141・1144・1152はAa、S 1112・1132・1139・1145はAbに、S 1117・1135・1143・1151はAc、S 1111・1116・1118・1129・1133・1138・1142はBa、S 1123～1125・1130・1131・1134・1136はBb、S 1115・1119～1121・1126・1140・1154・1155はBcに分類される。S 1113・1146～1150・1153は不定形砥石である。また、S 1110・1114・1122・1127は部分片であるため、分類不能とした。以下、各資料についてみていく。

S 1110は使用痕Gのほか、c面に使用痕E2uもある。



第221図 南地区出土石製品 (1)

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1093	石製紡錘車	61次	SD-151CN	第8層	6.8	6.0	0.6	41.5	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩C	石庖丁転用	Ⅱ-3
S1094	石製紡錘車	61次		黒褐色土Ⅱ	5.1	5.0	0.9	36.1	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩C	石庖丁転用	弥生・古墳
S1095	石製紡錘車	69次	SD-1109	第5(下)層	4.0	3.9	0.4	12.8	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩A	石庖丁転用	V・Ⅵ-1・2
S1096	石製紡錘車	61次		暗褐色砂質土	—	径3.7	0.4	12.4	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩E		弥生
S1097	石製紡錘車	65次		黒褐色土	—	径3.5	0.4	(7.9)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩A		弥生
S1098	ミニチュア石製品	61次		黒褐色土	(3.9)	(1.9)	(0.5)	(4.9)	柘榴石片岩B	石庖丁転用?	弥生・古墳
S1099	ミニチュア石製品	69次	SD-1102	第1層	5.6	2.8	0.5	12.3	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩A		Ⅵ-3



第222図 南地区出土石製品 (2)

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1100	用途不明石製品	65次	Pit-177B		(2.7)	0.8	0.2	(0.7)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩A	石庖丁転用?	Ⅲ?
S1101	用途不明石製品	61次	SD-151A	第8(下)層	(3.1)	2.9	0.4	(7.1)	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩C		Ⅱ-3
SP1078	用途不明石製品	69次	排土		(4.0)	(1.7)	(2.6)	(2.2)	泥質点紋片岩B		-
S1102	用途不明石製品	61次	SD-101B	第5層	(4.6)	(2.3)	(0.3)	(6.7)	柘榴石片岩A	S1065と同一個 体?	V
S1103	用途不明石製品	61次	落ち込み I	第2層	8.5	3.1	1.2	46.0	玄武岩質凝灰岩質 点紋片岩C	片面被熱	Ⅵ-4
SP1079	用途不明石製品	69次		暗灰色粘質土	(7.1)	3.2	0.7	(20.5)	泥質点紋片岩C		弥生中・後期
SP1080	用途不明石製品	69次		黒褐色土	(6.4)	(1.8)	2.1	(32.0)	泥質点紋片岩B		弥生・古墳
S1104	用途不明石製品	69次		黒褐色土	5.8	1.6	1.5	19.0	安山岩質砂岩		弥生・古墳

S1111は使用痕Gが明瞭であるc・d面を特に使用したと考えられるが、b面には使用痕E2uも確認される。

S1112は使用痕Gのほか、a・b・d面にはE2uが1条ずつある。a・b面には敲打痕もあり、円形にくぼむ。

S1113はほぼ柱状を呈するが、面と面の境界に稜をもたず、いびつな形状であることから不定形砥石とした。ただしa・b・c・d面を頻繁に使用したとみられ、いずれの面も使用痕E2uがある。

S1114はa面に使用痕GとBvが2条ある。

S1115はa面には使用痕E2uとE1uがある。下半分は割れ面を残しつつも研磨痕がみられ、砥石成形時の調整と考えられる。b面は使用痕E2u・E1uがみられる。c面には石包丁の「背潰し」のような線状敲打痕もある。

S1116はa面に使用痕E2uが2条みられる。b・c・d面には所々に面の傾斜変換がある。

S1117はa・b・c・dの4面はほぼ平坦な面に調整されて部分的に光沢を帯びるが、a面は中央に突出部があり、その左脇は緩やかな傾斜、右脇は使用痕E2uを形成している。

S1118は全面に使用痕Gがみられる。

S1119はa面に2条、b面に5条の使用痕A2がある。

S1120はa・b面の使用痕Gのみである。

S1121はa・b面に不定方向の使用痕Gがあり、b面はやや深めの傷痕もみられる。

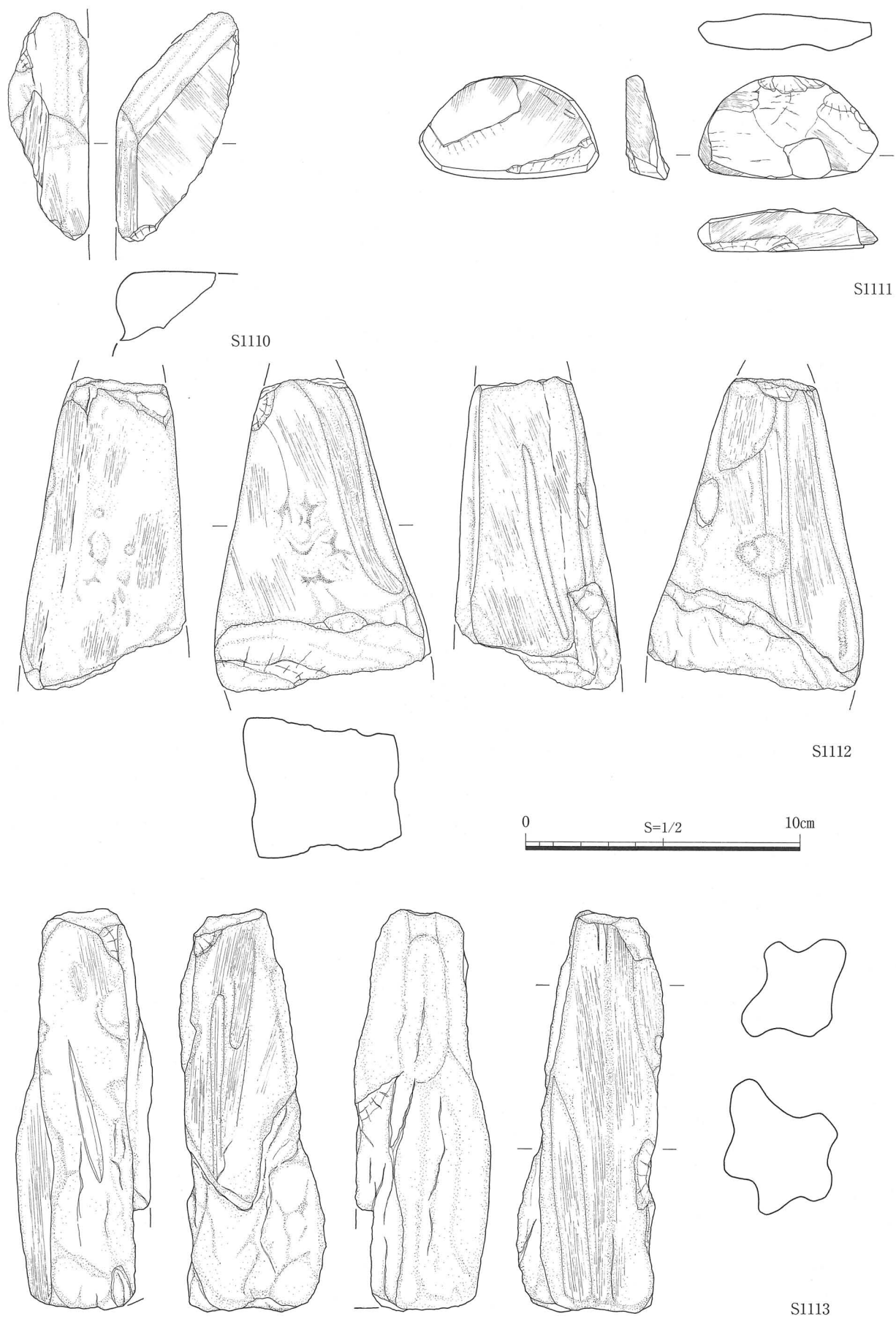
S1122はa面に使用痕GとC1vがみられる。

S1123はa面右端に使用痕C2uが2条ある。c・d面も砥石として使用したのか、定形砥石Bcに特徴的な曲線を描く。

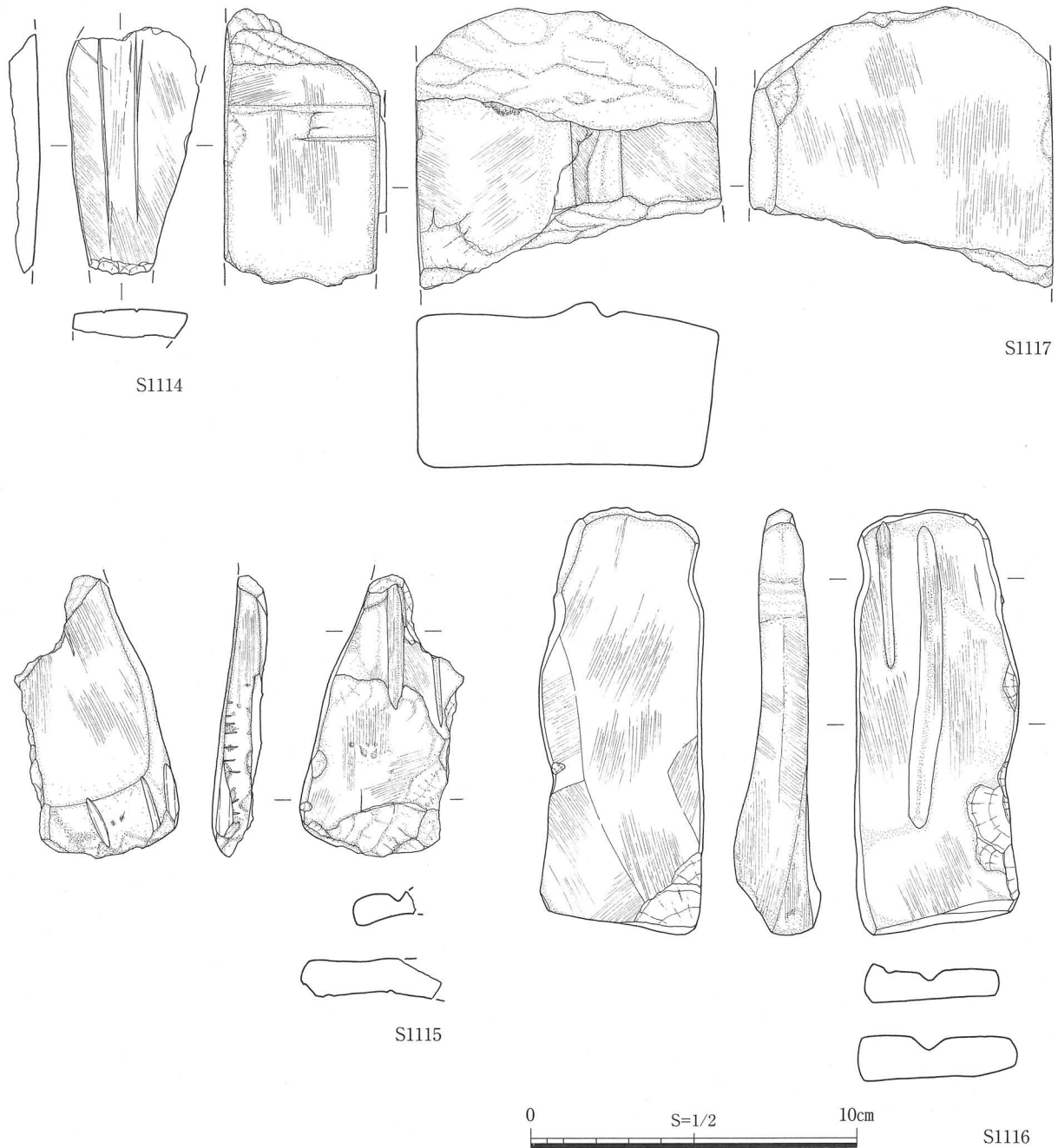
S1124はa面中央部を頻繁に使用したとみられ、くぼんでいる。下部にはごく浅く短い溝状の傷もある。b面はほぼ平坦な面となっている。c・d・f面も砥ぎ減りが確認される。

S1125はa面に使用痕Gのほか、微細ではあるが断面がv字状、u字状、レ字状と確認さ

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	相伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
SP1081	用途不明石製品	69次		暗灰色粘土	(11.0)	2.8	2.4	(94.7)	泥質点紋片岩A		弥生中・後期
SP1082	用途不明石製品	65次	SK-109	第1層	(12.8)	3.6	2.7	(123.9)	流紋岩質凝灰岩C		IV-2
SP1083	用途不明石製品	65次	SK-109	第1層	(7.1)	(2.8)	2.7	(63.8)			
S1105	石鋸	65次	排土		22.1	4.9	2.0	348.9	泥質点紋片岩B		IV-2
S1106	石鋸	69次		黒褐色粘質土	(4.6)	(3.4)	0.3	(6.5)	紅簾石片岩D		-
S1107	石鋸	65次	SD-105	第4層	(3.0)	3.2	0.4	(5.7)	石英質片岩		弥生
S1108	石鋸	65次	SK-140	黒褐色粘質土	4.2	2.3	0.2	(2.4)	紅簾石片岩A		III-2
S1109	石鋸	65次	SD-1102	第1層	7.9	3.5	0.6	26.5	紅簾石片岩B		III-3
SP1084	石鋸	69次		暗褐色土	(6.0)	3.1	0.7	(14.8)	紅簾石片岩C		VI-3
SP1085	石鋸	65次		黒褐色土	(4.3)	2.9	0.6	(9.8)	紅簾石片岩A		弥生
SP1086	石鋸	65次	SD-117	第2層	(3.8)	3.2	0.5	(8.0)	紅簾石片岩A		弥生
SP1087	石鋸	61次	SK-108	第2層	(2.9)	(3.5)	0.5	(6.3)	紅簾石片岩A		III-2
SP1088	石鋸	69次		黒褐色土	(7.8)	(5.4)	0.9	(24.5)	紅簾石片岩A		IV-2
SP1089	石鋸	65次	SD-117	第1層	6.5	(2.3)	0.9	(14.8)	紅簾石片岩A		弥生・古墳
SP1090	石鋸素材	69次	SK-1114	第6層	9.8	3.0	0.7	28.9	紅簾石片岩B		III-2
SP1091	石鋸素材	69次	SD-1109	第5-c層	7.4	3.2	0.6	14.8	紅簾石片岩B		VI-3
SP1092	石鋸素材	61次		暗褐色土	5.2	3.9	1.3	38.0	紅簾石片岩A		VI-3・4
SP1093	石鋸素材	69次		暗灰色粘土	(9.2)	6.5	0.7	(48.7)	紅簾石片岩A		弥生中・後期
					13.9	4.2	0.9	71.5	紅簾石片岩B		弥生中・後期

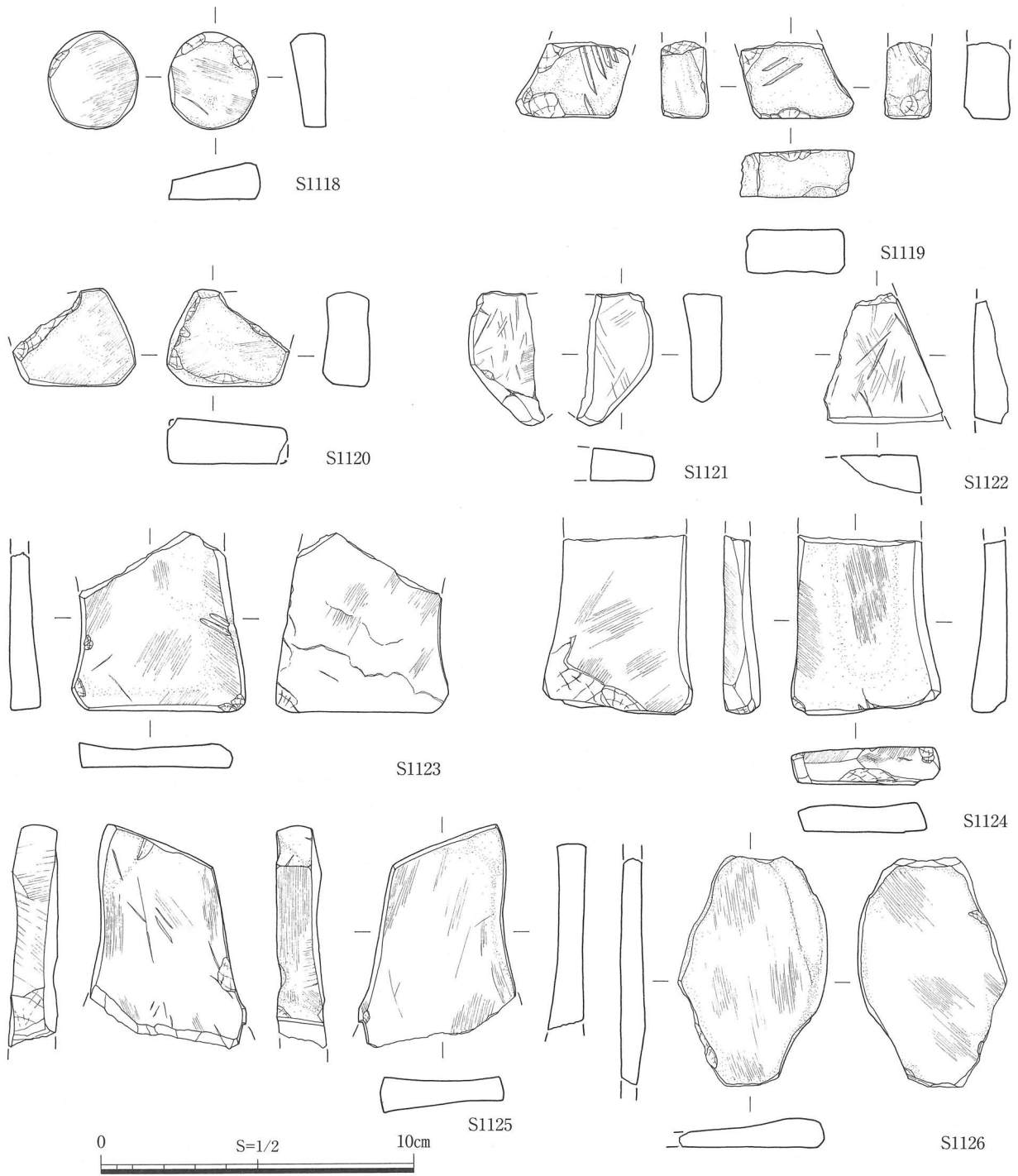


第223図 南地区出土石製品(3)



第224図 南地区出土石製品（4）

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	砥石目	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚					
S1110	砥石	69次	SD-1101B	第5層	(8.3)	(4.5)	(2.9)	(78.0)	片麻状細粒花崗岩A	400		V-1
S1111	砥石	69次	SD-1101B	第6(下)層	3.8	6.6	1.6	(38.0)	流紋岩G	800		V-1
S1112	砥石	69次	SD-1109	第5(下)層	(11.4)	7.9	6.1	(606.0)	片麻状細粒花崗岩A	80		V・VI-1・2
S1113	砥石	69次	SD-1110	第5層	14.7	5.3	5.0	403.0	片麻状細粒花崗岩B	80		II-2
S1114	砥石	69次	SD-1109	第5(下)-d層	(7.6)	4.0	(0.9)	(26.1)	流紋岩B	320		V・VI-1・2
S1115	砥石	69次	SD-1109	第6層	(8.7)	(5.1)	1.7	(47.6)	細粒砂岩A	800		V・VI-1・2
S1116	砥石	69次		暗灰色粘質土	13.2	5.1	2.7	177.0	細粒砂岩B	800		弥生中・後期
S1117	砥石	69次		黒色粘質土	(8.7)	9.4	5.0	(491.0)	細粒砂岩A	1000		弥生中・後期
S1118	砥石	65次	SD-203E	第3層	3.2	2.9	1.2	12.6	細粒砂岩F	600		II-3
S1119	砥石	65次		黒褐色土II	(2.4)	(3.6)	1.5	(16.7)	細粒砂岩F	120		弥生中・後期
S1120	砥石	69次	SD-1101B	第5層	3.1	(3.9)	1.5	(20.0)	流紋岩質溶結凝灰岩B	800		V-1



第225図 南地区出土石製品 (5)

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	砥石目	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚					
S1121	砥石	61次	SD-101B	第5-b層	4.3	(2.5)	1.2	(13.2)	泥質ホルンフェルスB	1500		V
SP1094	砥石	61次	SD-152	上面	(5.0)	(4.4)	0.8	(16.0)	柘榴石片岩A	120		Ⅲ-1
SP1095	砥石	69次		黒色粘質土	(4.9)	(3.0)	(1.3)	(18.0)	細粒砂岩F	1500		弥生中・後期
S1122	砥石	69次		黒褐色土	(4.2)	(3.9)	(1.2)	(21.0)	泥質ホルンフェルスA	2000		弥生・古墳
SP1096	砥石	69次	SD-1102	第2層	(5.4)	(4.1)	1.5	(41.0)	細粒砂岩E	1000		Ⅵ-3
S1123	砥石	69次	SD-1122	第1層	(5.1)	5.5	1.0	(35.0)	細粒砂岩F	1000		V-1
SP1097	砥石	69次		炭灰層	(6.0)	(3.9)	2.3	(43.0)	石英安山岩質溶結凝灰岩A	600		Ⅲ-2・Ⅵ-3
S1124	砥石	69次	SK-1137	第5(下)層	(5.7)	4.8	1.2	(40.2)	細粒砂岩E	1000		Ⅲ-3

れる使用痕が入り交ざる。b・d面は使用痕Gのみであるが、d面下部には砥石製作時の施溝痕ともみられる鉤状の突出部がある。c面には断面レ字状の鋭い痕跡が数条みられ、それに平行する向きに使用痕Gが広がる。

S 1126は石質から自然面にちかいが、a・b面は使用痕GとHがみられる。

S 1127・1128は各面に使用痕Gがみられる。

S 1129はa面には使用痕Gがみられ、部分的に深めの傷もある。

S 1130はa・b面に使用痕G、Hがみられ、中央がわずかにくぼむ。

S 1131はa面に数方向の使用痕GとA2が連なる。b面は使用痕Gに加え、明瞭な使用痕Cも多数みられる。その他の面も磨り減りが認められる。

S 1132はa面に使用痕Gがあり、中央には使用痕E2Lがある。b面の使用痕はほぼ一定方向のGのみである。c・d面は数方向の使用痕Gのほか、A3が1条ある。f面にも数方向の使用痕GとA1があり、この面も砥面として使用されていたとみられる。

S 1133はa面が全体的に光沢を帯び、下方に使用痕A2が連続的につけられて、断面が連続的な凹凸面となっている。b面には、使用痕A2、C1v、C2uがある。

S 1134はa面に使用痕GとE1vがある。c面には、数方向の使用痕Gがあり、これと重なるように、使用痕C1u、C1v、A2がみられる。d面は使用痕GとA1（1条）とで形成されているが、その力の入れ具合によって、断面が波打ったような形状を呈している。

S 1135は全体的に丸みをもち、磨製石斧の欠損品ともみられる。使用痕はすべてGであり、a面はその切り合い関係によって3つの面を形成している。c・d面にも使用痕Gがみられるが、基本的には未使用のようである。

S 1136は、a面に放射状に広がる使用痕Gがみられる。使用痕C2uも数条みられる。b面は縦方向の使用痕Gのみで、特に右半分に偏る。c・d・f面には、いずれも平面形が緩やかな曲線あるいは部分的に階段状の磨り減りが認められる。

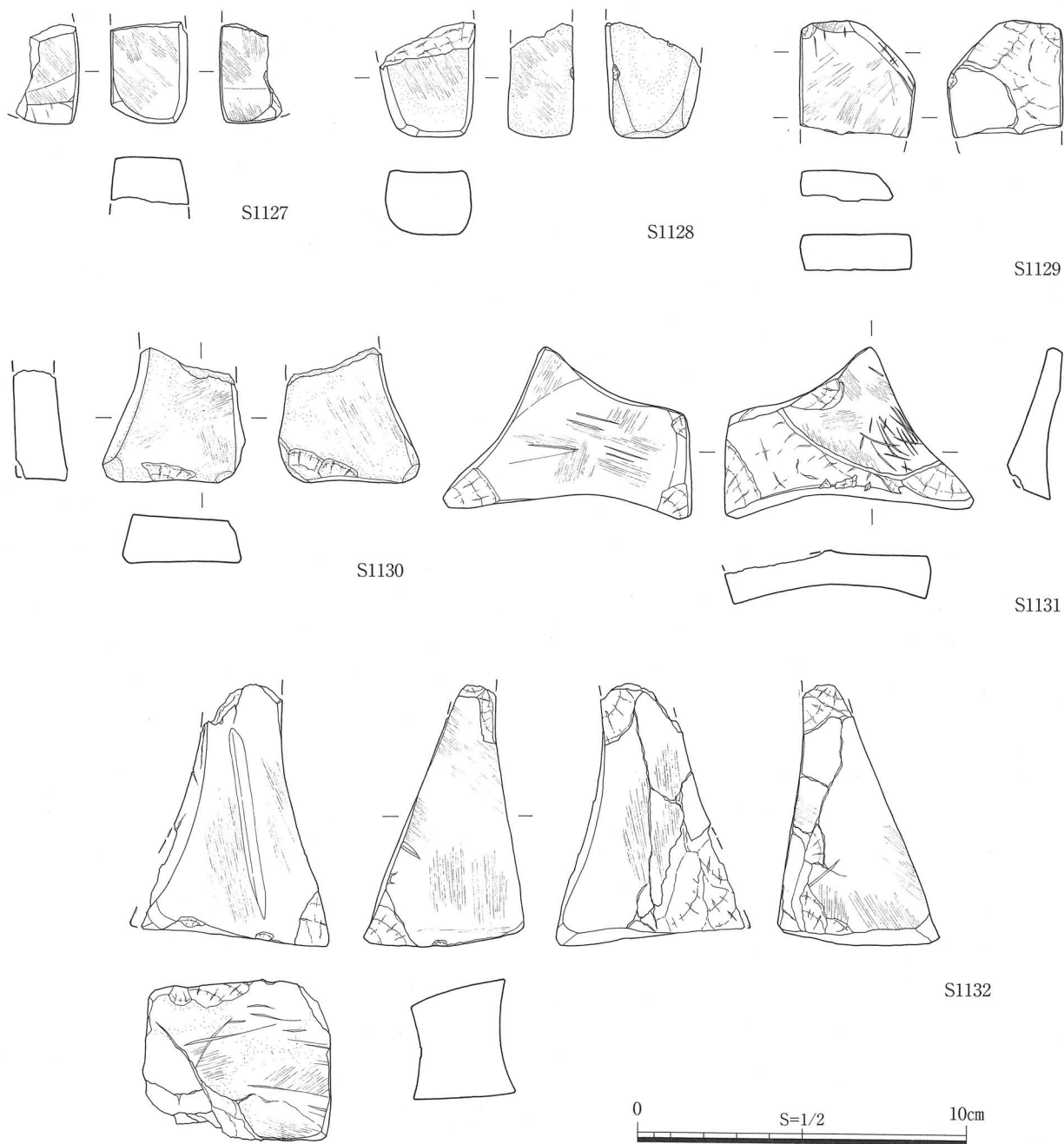
S 1137は特に右半分の頻繁な使用によって、横断面が三角形にちかい形状となっている。a面には使用痕GとA2がある。b面は使用痕Gのみである。d面は使用痕Gと、A3、C1vがある。f面は若干の凹凸のある曲面であるが、使用痕G、Dがあり、この面も砥面と考えられる。

S 1138は石材の風化により、面と面の境界はやや曖昧である。断面にみられるように、各面の凹凸も目立つ。ただし、a面に若干の使用痕GとHがあり砥石としての使用が想定される。

S 1139はa・b面に数方向の使用痕G、Hがみられる。a面には孔状の陥没もあるが、孔壁面には回転擦痕はみられない。

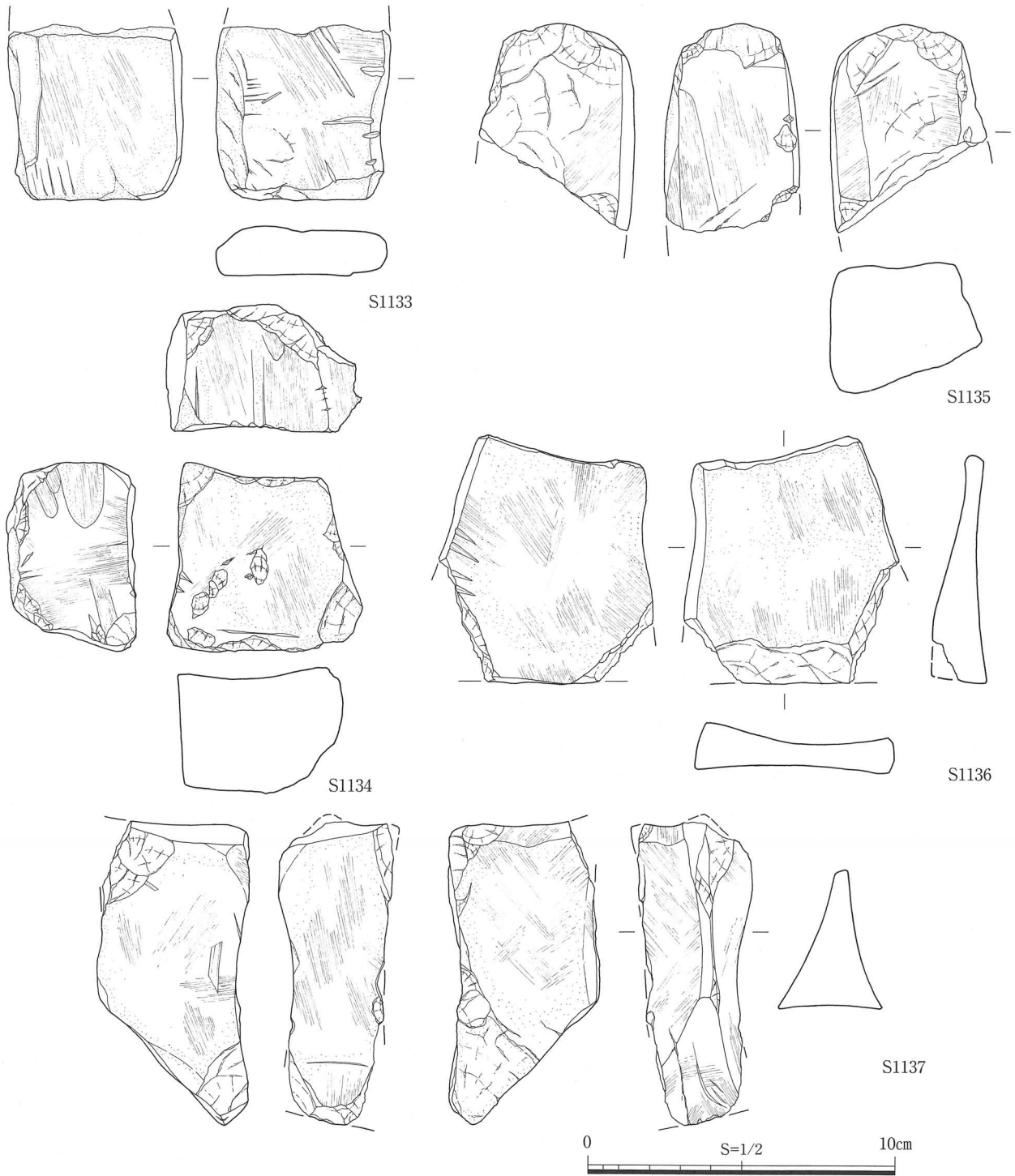
S 1140は、a面は全体に使用痕Gが広がるが、b面は若干の使用痕Gが部分的に広がるほかは破面である。c・d面は砥ぎ減りが認められる。

S 1141はa面には使用痕A2、A3がみられる。b面には使用痕A2、C1vが数条ずつみられる。c・d面はほぼ平坦面であり、砥面であるかは不明である。



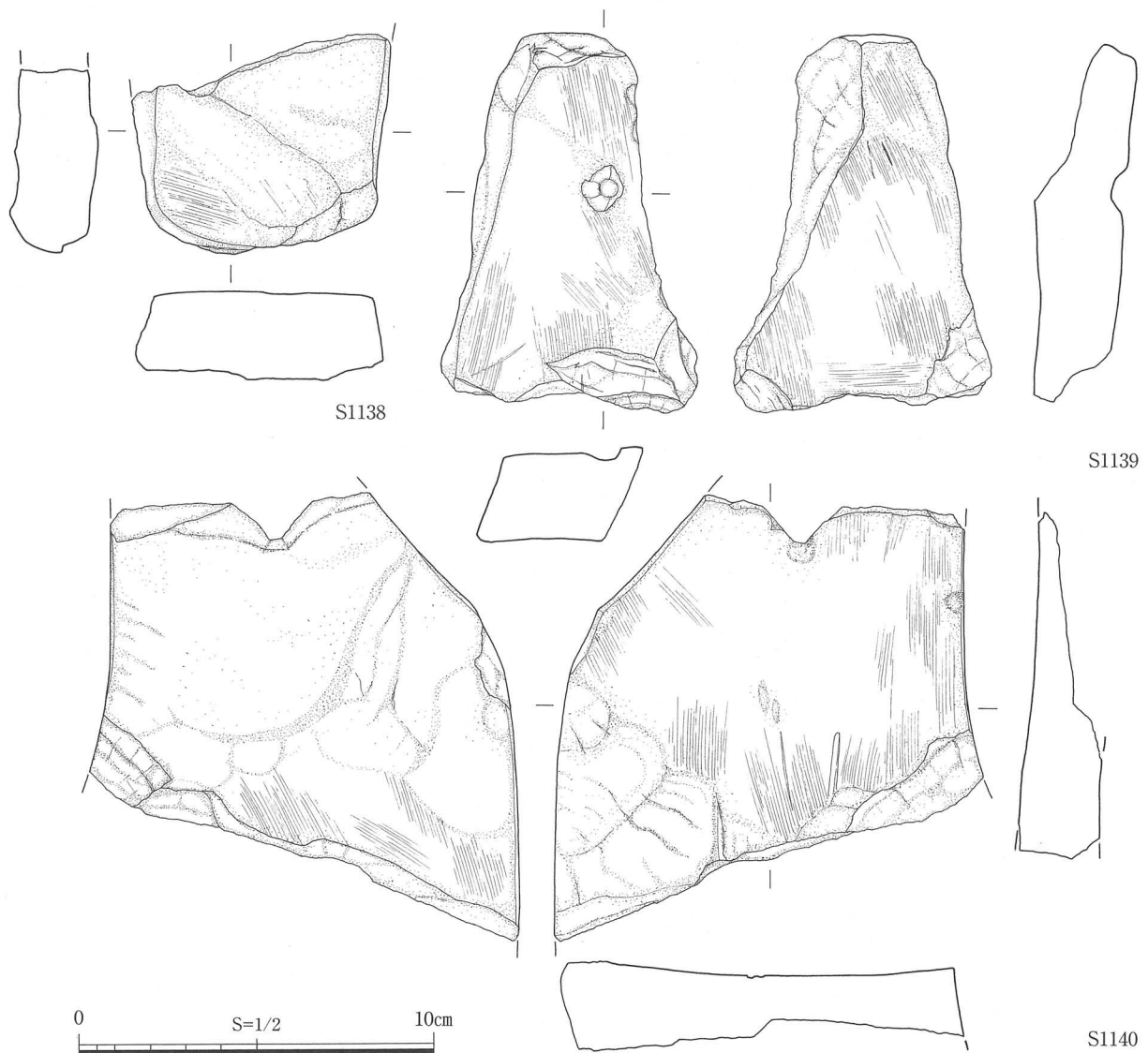
第226図 南地区出土石製品 (6)

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	砥石目	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚					
S1125	砥石	69次	SD-1104	第2(下)-7層	(7.1)	(5.0)	1.6	(52.0)	石英安山岩質溶結凝灰岩A	1200		VI-2・3
S1126	砥石	61次	SD-101B	第4層	(7.4)	(4.8)	1.0	(42.1)	片麻状細粒花崗岩B	600		V-1
S1127	砥石	61次	落ち込みI	第2層	(3.1)	2.3	(1.9)	(17.3)	流紋岩A	1000		VI-4
S1128	砥石	69次	SD-1109	第5層	(3.5)	2.9	2.0	(26.0)	細粒砂岩E	800		VI-3・4
S1129	砥石	69次	SD-1101	Sec第1(下)層	(3.6)	3.5	1.1	(20.0)	泥質ホルンフェルスA	2000+		VI-3
S1130	砥石	65次	SB-101	第2-b層	(4.1)	4.3	1.6	(30.5)	細粒砂岩E	120		III
SP1098	砥石	61次	SD-102B	第2層	(3.7)	(3.4)	(4.4)	(102.4)	斑状変輝緑岩	1200		VI-3・4
SP1099	砥石	69次	SD-1101B	第5層	(3.6)	(4.7)	1.8	(23.0)	細粒砂岩F	800		V-1
SP1100	砥石	69次	SD-1109	第3-b層	3.9	5.1	4.0	101.0	細粒砂岩B	800		布留0
S1131	砥石	69次		暗灰色粘質土	5.2	7.6	1.7	(41.0)	細粒砂岩E	2000+		弥生中・後期
S1132	砥石	61次	SD-102B	第4層	(8.0)	5.7	4.9	(188.5)	中粒砂岩B	1500		V-1



第227図 南地区出土石製品 (7)

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	砥石目	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚					
S1133	砥石	69次	SD-1109	第5(下)層	(5.8)	5.7	1.8	(101.6)	泥質ホルンフェルスE	1200		V・VI-1・2
SP1101	砥石	69次		灰黒色粘土	(6.1)	7.1	2.5	(124.0)	細粒砂岩B	1200		弥生中期
S1134	砥石	61次	SK-152	第3層	6.2	6.4	4.2	(180.0)	細粒砂岩C	800		II-3
S1135	砥石	61次	SD-101B	第3層	(6.9)	5.1	4.4	(148.4)	安山岩質溶岩A	1500	磨製石斧欠損品か	VI-4
S1136	砥石	69次	SD-1104	第3層	8.1	(7.1)	1.8	(94.0)	細粒砂岩B	1000		VI-2・3
SP1102	砥石	61次	SD-102B	第3層	9.0	5.3	2.3	90.4	泥質ホルンフェルスE	1500		VI-4
S1137	砥石	69次		黒灰色粘質土	9.9	4.9	3.7	(131.0)	細粒砂岩C	2000		弥生中・後期
SP1103	砥石	61次		黒色粘質土	9.2	(6.3)	(3.3)	(272.1)	柘榴石流紋岩D	2000+		弥生中期



第228図 南地区出土石製品（8）

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	砥石目	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚					
SP1104	砥石	69次	SD-1109	第3(下)層	(7.2)	7.4	1.9	(88.0)	中粒砂岩B	400		布留0
S1138	砥石	69次		黒褐色土	(6.3)	7.3	2.5	(176.0)	片麻状細粒花崗岩A	240		弥生・古墳
SP1105	砥石	65次		黒褐色土	7.1	8.5	3.6	261.0	柘榴石流紋岩D	400		弥生
SP1106	砥石	69次	SK-1130	第5(下)層	9.3	(5.1)	1.9	(103.0)	中粒砂岩B	320		Ⅲ-3
S1139	砥石	69次	SD-1109	第5層	10.7	7.3	3.0	247.0	柘榴石流紋岩C	1500		Ⅵ-3・4
S1140	砥石	65次		黒褐色土	(12.7)	12.1	2.5	(350.0)	中粒砂岩B	600		弥生
S1141	砥石	69次		黒灰色粘質土	(5.0)	1.8	1.0	(13.0)	泥質ホルンフェルスA	2000+		弥生中・後期
S1142	砥石	61次	SD-101B	第5層	(5.5)	(2.6)	0.9	(11.3)	中粒砂岩B	600		V-1
SP1107	砥石	65次		黒褐色土	(5.0)	3.0	2.4	(45.2)	流紋岩H	1200	鑄造砥石 M5316	弥生
SP1108	砥石	69次		灰黒色粘質土	(5.1)	3.1	2.6	(44.0)	流紋岩I	1000		弥生中・後期
S1143	砥石	69次	SK-1134	第3層	7.7	3.5	2.0	57.1	泥質ホルンフェルスE	800		Ⅲ-1
SP1109	砥石	65次		黒褐色土	(6.0)	(2.4)	1.3	(22.9)	泥質ホルンフェルスA	1000		弥生
S1144	砥石	69次	SD-1102	第2層	13.9	3.1	2.8	(148.0)	泥質ホルンフェルスA	2000+		Ⅵ-3
S1145	砥石	61次		灰黒色粘質土	(9.9)	4.2	3.3	(173.8)	泥質ホルンフェルスA	2000+		弥生中・後期
S1146	砥石	61次		黒褐色土Ⅱ	(10.4)	4.1	2.3	(152.0)	変輝緑岩A	400		弥生・古墳
S1147	砥石	61次		黒褐色土	12.4	2.5	1.5	70.8	泥質ホルンフェルスE	2000+		弥生・古墳
S1148	砥石	69次	SD-1109	第5層	14.9	(4.3)	3.9	(385.0)	斑輝岩B	400		Ⅵ-3・4

S 1142は a 面左端には、使用あるいは意図的な施溝による断面 u 字状の溝があり、これを境に左半分が欠損した状態である。施溝痕であれば、砥石の製作を示す興味深い資料といえる。

S 1143は a 面に使用痕 G がある。b 面は滑らかに整えられているが、明らかな使用痕と認められるものはない。d 面には使用痕 C1 \square 、E2L と、これに切り合う使用痕 C1u がみられる。

S 1144は各面とも使用痕 G がみられ、a・b・d 面には使用痕 C1v もみられる。

S 1145は a・b・c・d 面に使用痕 G がみられる。c 面は切り合う擦痕によって鈍い稜が形成され、面が 4 つに分かれている。左下には使用痕 A2 が 2 条、右下には使用痕 C2u が 3 条みられる。d 面は、研ぎ減りが認められる。

S 1146は横断面が隅円三角形状を呈する。a 面には使用痕 G が面的に広がり、互いに切り合ったりくぼんだりしている。他の面には目立った使用痕はなく、光沢を帯びる。

S 1147は a・b・c・d 面の使用痕は使用痕 G のみである。b・c 面は曲面的で自然面にちかい形状をしているが、a・d 面は断面が直線あるいは凹レンズ状となり、頻繁に使用されたものと考えられる。

S 1148は、使用痕は a・b・c 面にみられる G のみで、e・f 面は使用が確認されない。全体的に風化が進んでいる。

S 1149は横断面が隅円三角形状となる。a 面は使用痕 G と A2 がみられる。c・d 面は砥面として積極的に評価できず、凹凸が目立つ。

S 1150は、a 面は緩やかな曲面、b 面は石の流理に沿った凹凸のある面となるが、いずれも光沢を帯びる。また a 面に使用痕 E2L もある。

S 1151は a 面に使用痕 G、C1 \square がある。他の面は使用痕 G のみである。

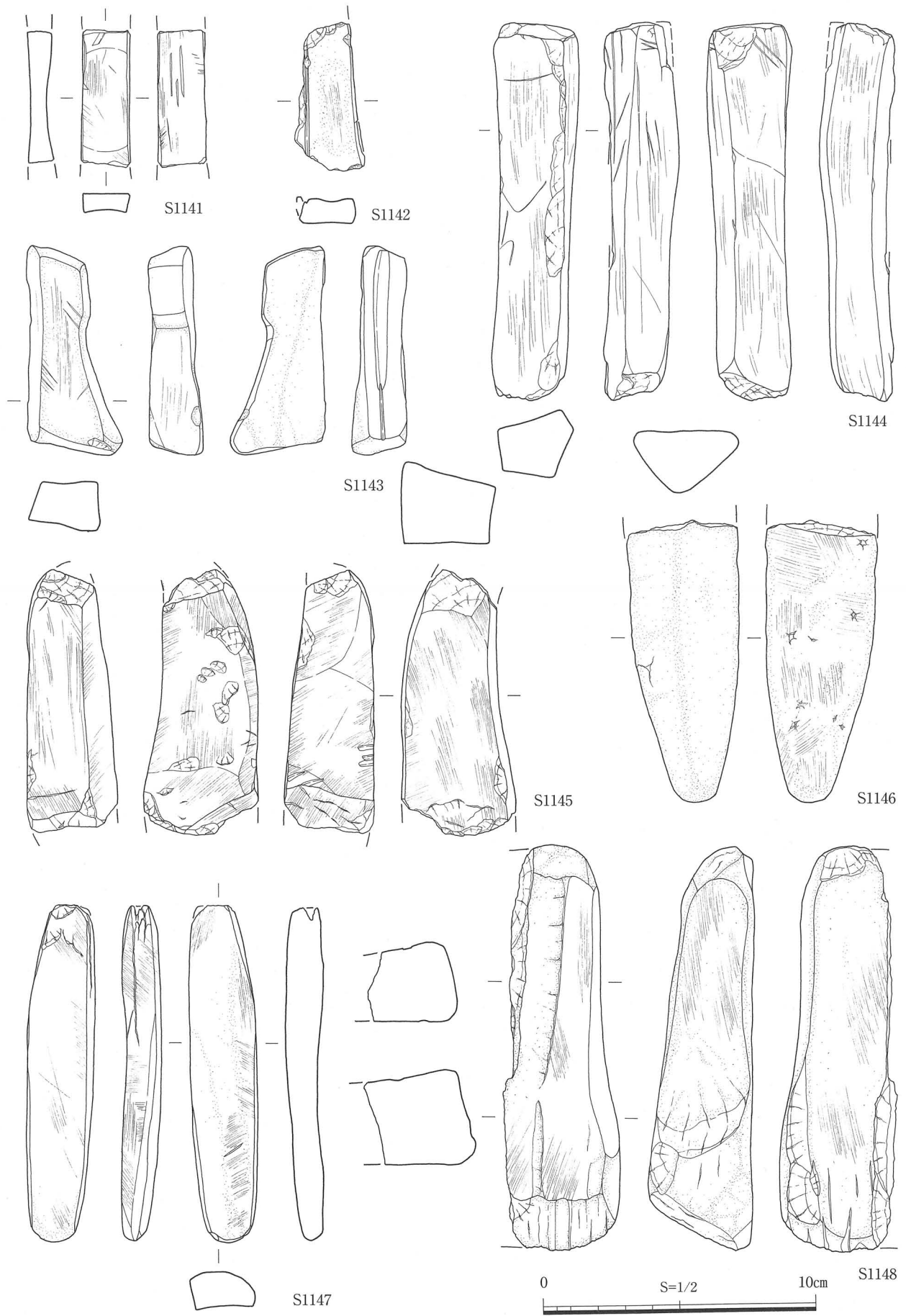
S 1152は各面に使用痕 G が広がる。また、それぞれの面と面との境界部に、縁辺を利用したような使用痕もみられる。b・c・d 面の約半分は黒化しており、被熱した可能性もある。

S 1153は a・d 面は使用痕 G と砥ぎ減りが認められる。b 面は、稜の鈍い使用痕 E2L がみられるのみである。この面は凹凸もあり、自然面にちかい状態といえる。

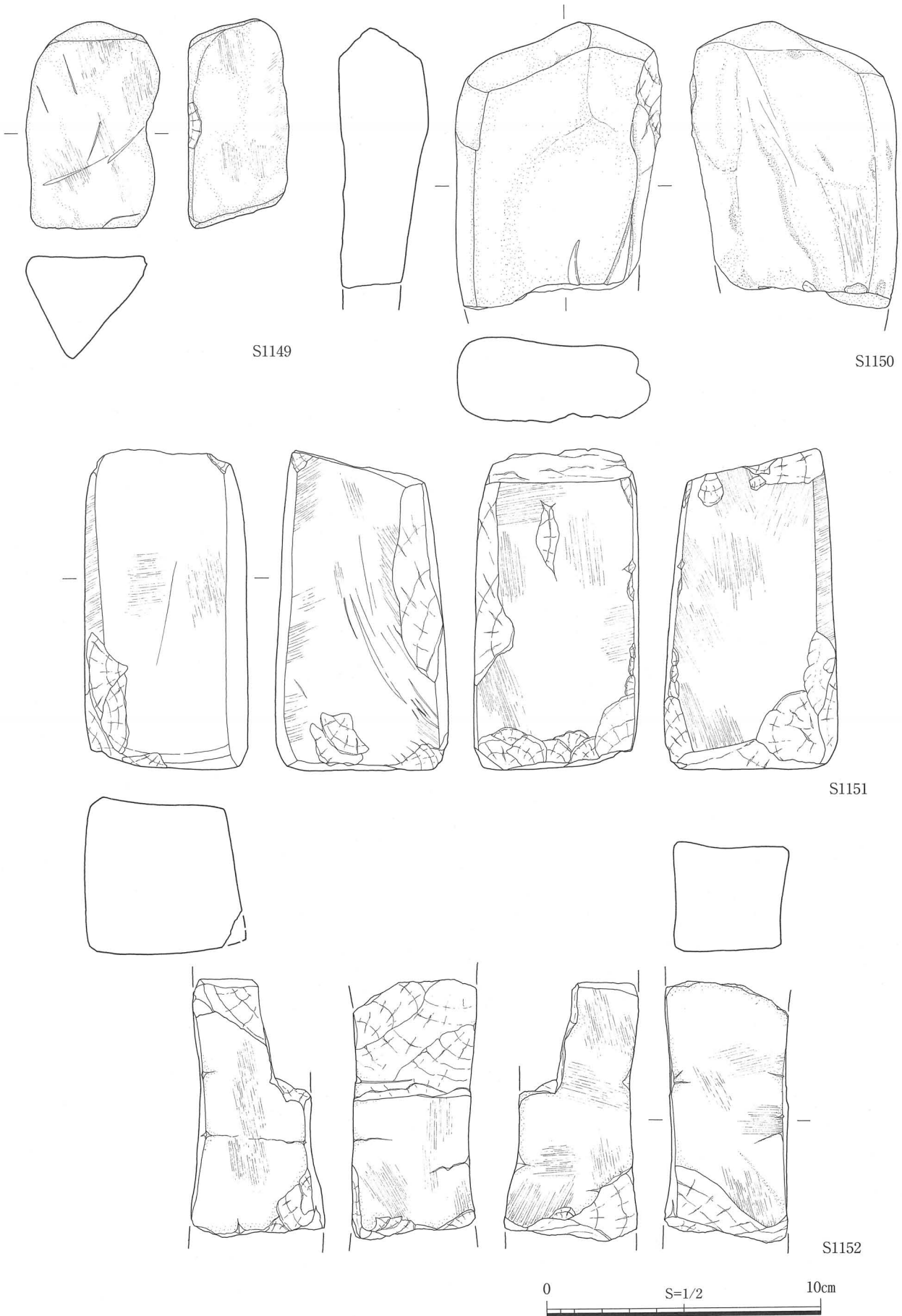
S 1154は a・b 面とも顕著な研ぎ減りが認められる。a 面には使用痕 G と A2 がある。b 面は使用痕 G のほか、右縁辺部には使用痕 F が数条連なり、断面が連続的な階段状となっている。また f 面に続く部分には断面 L 字状の溝状痕もあり、この面も砥面としたのかも知れない。

S 1155は a・b 面とも使用痕 G と H がみられる。特に a 面は、中央やや左寄りあたりにわずかな高まりを残しながら、全体が幅の広い 2 条の溝のような湾曲を描いている。b 面は中央部が若干くぼみ、左右両端が高まりを残している。また部分的に黒化し、被熱の可能性もある。

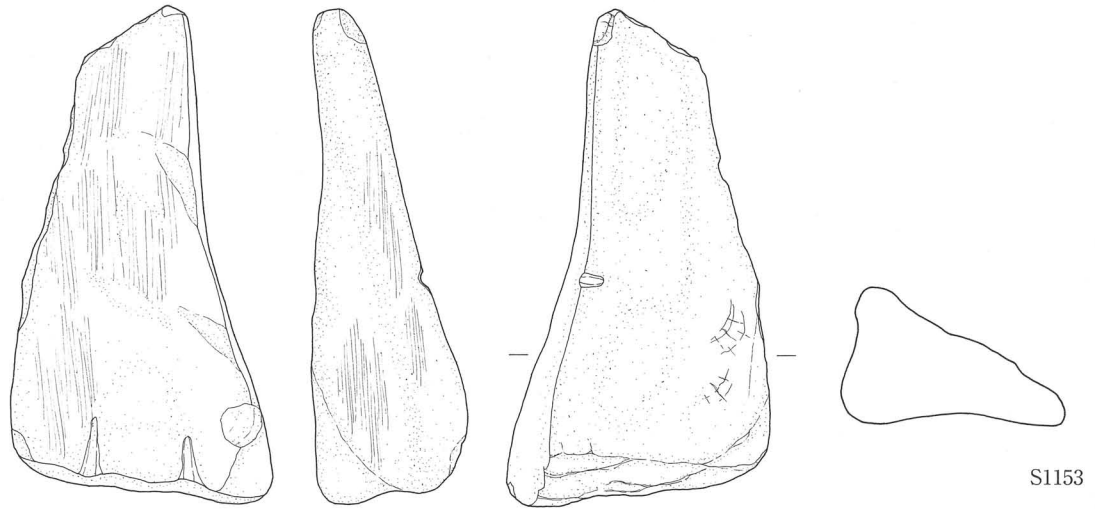
S 1156は a 面に使用痕 G と E2u がみられる。このほか、断面レ字状の傷、平面形が直角二等辺三角形の傷がみられるが、いずれも新しい傷であろう。同様の傷は e 面にもみられる。a 面と e 面の境界部には、縁辺に対して斜め方向に使用痕 A3 がいくつかある。またこの一帯 0.5～1 cm くらいの幅で横方向の擦痕、縁辺に沿ってわずかな突出が確認されることから、この辺を境に施溝分割がおこなわれた可能性がある。砥石製作のため、あるいはこの石材自体が他の石



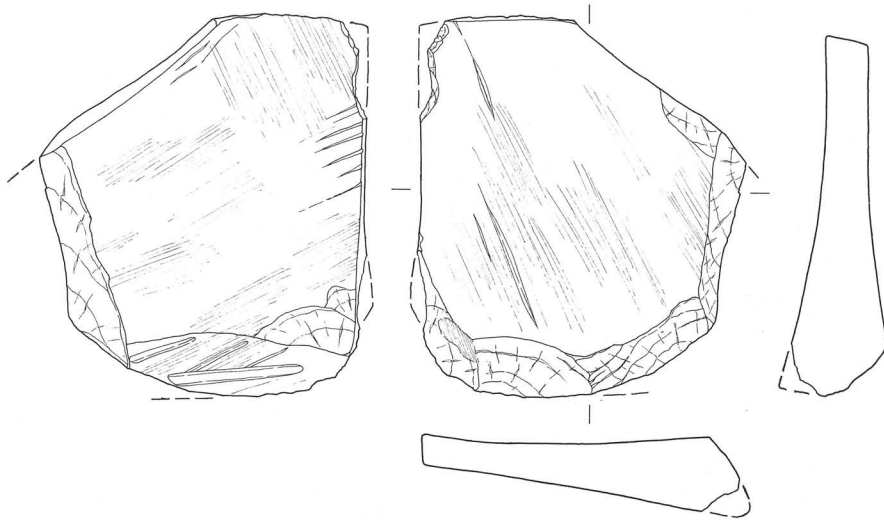
第229図 南地区出土石製品 (9)



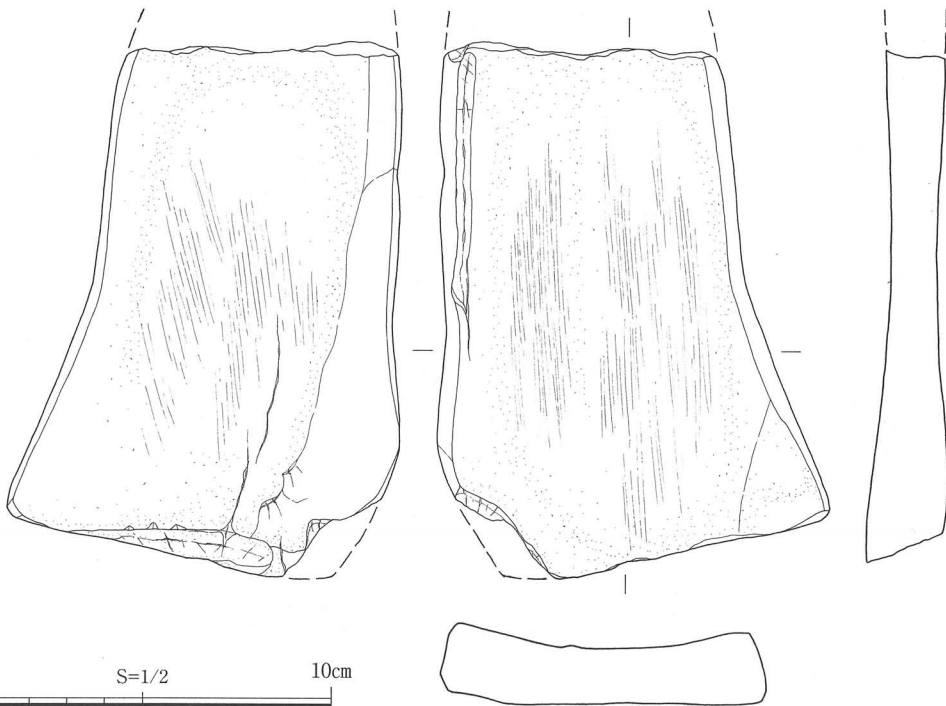
第230図 南地区出土石製品 (10)



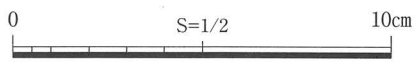
S1153



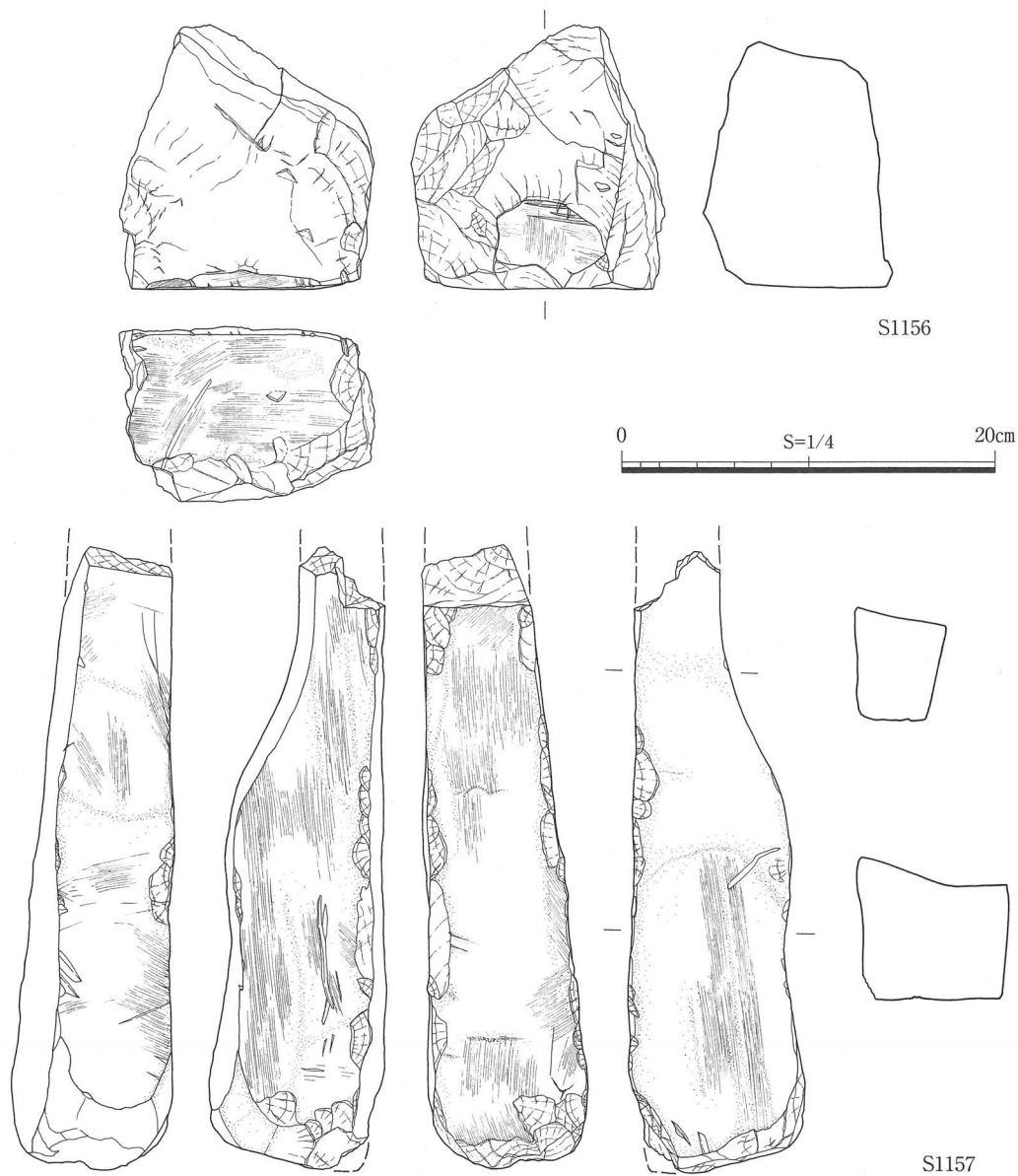
S1154



S1155



第231図 南地区出土石製品 (11)



第232図 南地区出土石製品 (12)

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	砥石目	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚					
S1149	砥石	69次		灰黒色粘質土	7.7	4.9	3.7	185.0	斑禰岩A	600		弥生中・後期
SP1110	砥石	69次		黄灰色粘質土	8.3	(6.4)	3.7	(205.0)	細粒砂岩B	120		弥生中期
S1150	砥石	65次		灰色粘土	(10.6)	(7.6)	3.5	(411.0)	片麻状細粒花崗岩C	80		II?
S1151	砥石	69次	SD-1102		11.7	6.4	6.0	720.0	礫質砂岩A	1200		VI-2・3
S1152	砥石	65次	SK-113	第1層	(9.5)	4.9	4.5	(276.7)	細粒砂岩B	1000	一部被熱か	IV-2
SP1111	砥石	65次		黒色粘土(炭灰)	(8.4)	(6.6)	5.4	(356.0)	細粒花崗岩A	60-		弥生中期
S1153	砥石	65次		灰黒色粘土	(13.2)	7.0	4.2	(261.0)	片麻状細粒花崗岩B	120		弥生中・後期
S1154	砥石	69次	SD-1102B	第2-7層	10.1	(8.6)	2.6	(182.0)	細粒砂岩B	1500		VI-3
S1155	砥石	61次	SK-108	第3層	(14.1)	10.4	2.3	(437.0)	片麻状細粒花崗岩C	2000	一部被熱か	III-2
S1156	砥石	69次		黒色粘質土	9.4	13.7	(14.2)	(2,048.0)	中粒砂岩B	600	石器製作作用の石核か	弥生中・後期
S1157	砥石	69次	SD-1110	第1層	(33.4)	9.6	8.8	(3,002.0)	礫質砂岩A	1200		II-3

器製作のために用いられた可能性を想起させる。f面は石材の打ち割り痕が多く残ったままであるが、下部中央の一带5cm四方に砥面らしい使用面が認められる。使用痕Gに混ざって、互いに切り合う使用痕C2u、C2vも認められる。なお、a面とb面は平行面ではなく、a面を砥面として多用するには、設置に不安定さを感じられる。置砥として半分を地中に埋めて使用することも想定できるが、この点を考慮しても、砥石以外の用途（石器素材等）も考えられよう。

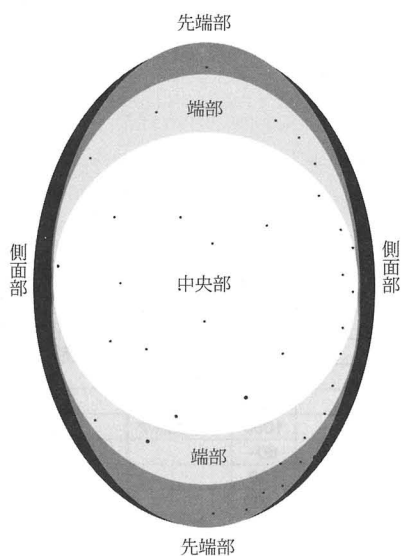
S1157は定形砥石Abの大形版ともみられる。a面は最も砥ぎ減りが顕著である。特に中央付近を境界に、下半分は縦方向の使用痕Gも明瞭であり、上部とを分かつように鈍い稜が形成される。下縁辺部には使用痕A2もある。b面は縦方向の使用痕Gのほかに、C1v、C2uが数条ずつある。c面は使用痕Gのみである。d面は、横方向の使用痕Gが目立つ。左下の縁辺部には、使用痕A3もみられる。

(4) 礫石器

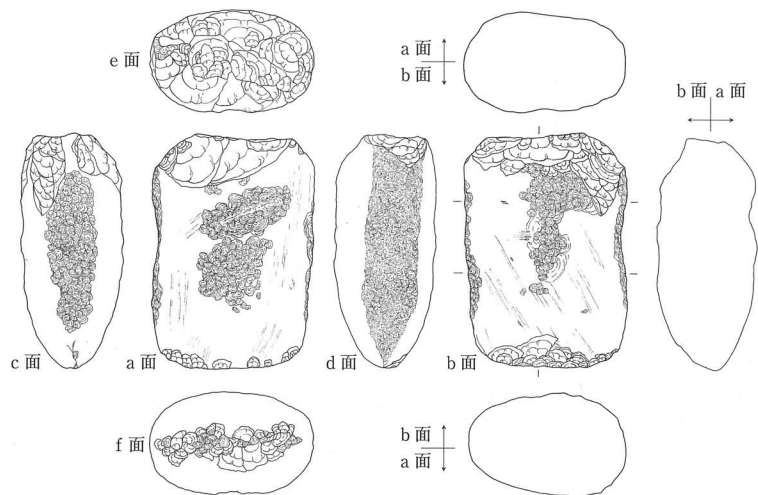
本報告では、川原石などの自然石を利用した、敲石、磨石、台石、石皿、石槌、投弾を礫石器と総称する。以下、各器種の定義と観察項目についてまとめ、各資料の説明のための便宜をはかることにする。

敲石 敲打痕を有する礫石器を、敲石とした。用途としては、石器製作具や植物質食料加工具などが考えられる。敲石の諸属性に関する用語については、石器石材原産地遺跡（二上山北麓）と縄文時代の集落遺跡の敲石を比較検討したことがある⁽¹⁶⁾。以下、その概略を示しておく。

まず石材選択の要因の1つと考えられる石材の質感について、硬質、軟質と記述する。これらは相対的な判断によるもので、必ずしも石材種と対応するわけではないが、チャートのような



第233図 敲石の部位名称概念図



第234図 礫石器の部位名称

な石材や硬くしまった砂岩は硬質、ボロボロとした砂岩は軟質と記述したものが多い。敲石の部位名称については、先端部、端部、中央部、側面部の4つに分けて呼称する（第233図）。敲石には円礫などが利用されることが多く、上下や表裏の判別が困難なものが多いため、使用部位の上下や表裏という名称は用いない。

次に使用痕については、肉眼で判別可能な限り細分し、次の7種類に分類した（第32表）。








使用痕Ⅰ類 敲打痕である。桐山秀穂のいう⁽¹⁷⁾「敲打痕A」に相当し、大阪府東山遺跡の敲石にも、類似した痕跡がある。そのうち、直径1～4mm程度の円形の痕跡で構成されるものをⅠa類、長軸1.5～4mm、短軸0.5～2mmの楕円形の痕跡からなるものをⅠb類とする。これらは従来、「アバタ状痕」として一括されていたものである。両者は形状が明確に異なり、使用痕Ⅰa類に比べて使用痕Ⅰb類は明らかに不整形である。本遺跡では、S1168（図版389）b面中央部の使用痕やS1167（図版389）a面中央部、S3152（図版410）c面端部の使用痕が使用痕Ⅰa類に、S1164（図版388）d面の中央部の稜線上にある使用痕やS1158（図版387）e面中央部の使用痕が使用痕Ⅰb類にあたる。

使用痕Ⅱ類 ツブレ痕である。微視的にみれば、階段状の剝離痕が密集することで現象する使用痕である。楔形石器の縁辺に特徴的な階段状の剝離痕や、二上山北麓遺跡群でしばしば認められる、サヌカイト製の敲石や台石に確認できる使用痕とよく似ている。拙稿⁽¹⁶⁾の分析から、特に敲石の先端部に形成される使用痕Ⅱ類は石器製作に伴う使用痕である可能性が高い。本遺跡では、S1165（図版388）f面中央部の使用痕、S3154（図版411）c～f面の使用痕、S3155（図版411）e・f面の使用痕が使用痕Ⅱ類にあたる。

使用痕Ⅲ類 剝離痕である。衝撃によって生じた打裂・破碎の痕跡であり、強い加撃による打裂、剝離である。本遺跡では、S1160（図版387）e・f面とその周辺にみられる使用痕やS1161（図版387）e・f面から生じた使用痕が使用痕Ⅲ類にあたる。

使用痕Ⅳ類 ザラつきである。視覚での判別は難しい場合が多いが、敲石を触った際に感触が他の部分と

第32表 敲石の使用痕の分類

分類	種類	平面形状	断面	スケッチ
Ⅰa類	敲打痕	円形	—	
Ⅰb類		楕円形	—	
Ⅱ類	ツブレ痕	—	—	
Ⅲ類	剝離痕	—	—	
Ⅳ類	ザラつき	—	—	
Va類	線状痕	直線状	浅い。形状不定。	
Vb類		口唇状	深い。V字状。	

異なることから、認定が可能となる。本遺跡では、S3150（図版410）f面中央部の使用痕が使用痕Ⅳ類にあたる。

使用痕Ⅴ類 線状痕である。中でも、長軸が2～6mmの直線的な溝状の痕跡からなるものを使用痕Ⅴa類とする。使用痕Ⅴa類は、短軸の計測が困難なほど狭く、引っ掻き傷のように、使用痕の深さが浅いのが特徴である。桐山⁽¹⁷⁾の「敲打痕B」の一部が相当する。また使用痕Ⅴ類の中でも、長軸と直交する断面の形態がV字状を呈する、溝状の使用痕を使用痕Ⅴb類とする。小林博昭⁽¹⁸⁾が両極打法の痕跡として示した使用痕や、桐山⁽¹⁷⁾の「敲打痕B」のような、やや大きめの深いV字状の痕跡がこれにあたる。本遺跡では、S3151（図版410）c面の使用痕がⅤa類に、S3153（図版410）のa面中央部の使用痕がⅤb類にあたる。また台石の例ではあるが、S4080（図版423）a面中央部はⅤb類の典型例である。

石槌 俵型の石の中央部から横方向に溝がめぐる礫石器を、石槌として認定した。これまで他の遺跡で敲石や石錘と呼ばれて報告されているもののなかにも、同様の石器が含まれている。石材の質感や石槌の部位名称は、敲石の用語法（第233図）を踏襲する。石槌という名称は、他の器種と同様に便宜的なもので、本来の用途は不明である。この点について、今回報告するすべての石槌の先端部に敲打痕が認められることは、石槌がその名の示すとおり、何らかの作業の際に加撃具として用いられた可能性を示唆している。石槌を特徴づける溝は、敲打によって作出・調整されたものと、研磨によって作出・調整されたものがある。

磨石 顕著な磨痕が認められる礫石器を磨石とした。用途としては、主に植物質食料加工具と考えている。石材の質感や磨石の部位名称は敲石の用語法（第233図）を踏襲する。器面の一部が著しく磨耗して磨面を形成する場合と、広い範囲が磨耗し、明確な磨面を認めにくい場合がある。

台石 地面などの平らな面にすえて使用する大形の礫石器で、敲打痕を有するものを台石とした。重量が1kgを超え、地面にすえた時に安定し、かつその際に使用痕のある平坦な面が上を向くことを条件として認定している。石材の質感や台石の部位名称は敲石の用語法（第233図）を可能な限り踏襲する。用途としては、石器製作具や植物質食料加工具の可能性が考えられる。

石皿 地面などの平らな面にすえて使用する大形の礫石器で、磨痕を有するものを石皿とした。台石と同様、重量が1kgを超え、地面にすえた時に安定し、かつその際に使用痕のある平坦な面が上を向くことを条件とし、磨石との差別化をはかった。石材の質感や石皿の部位名称は、敲石の用語法（第233図）を可能な限り踏襲する。主に植物質食料の加工作業との関連が考えられる石器である。

投弾 約50g前後で、ほぼ球状を呈する石器を投弾として分類した。これらには一切の製作の痕跡や使用痕が認められず、表面的には球状の自然石に他ならない。研究史を鑑み、投弾として取り上げたものである。

敲石 (S1158~1172) S1158にはやや硬質の石材が用いられている。各部位がそれぞれ面を形成している。e・f面とも、使用痕Ⅰa類とⅠb類が残されている。e・f面とも中央部はⅠa類が多いが、端部の方に向かってⅠb類が割合を増す。より微視的にみれば、敲打痕を構成する円形ないしは楕円形の痕跡は、e・f面では直径0.2~0.3cm程度のものが主だが、e・f面でも中心にちかい部分では、やや大きい傾向がある。a・b面の中央部には使用痕Ⅰa類とⅠb類があり、b面の端部にちかい部分には使用痕Ⅰb類が多い。微視的にみれば、使用痕を構成している痕跡の単位が先端部より大きく、先端部ほど使用痕が密集していない。a・b面の中央部とc・d面の側面部の境界をなす稜に沿って、磨痕が観察でき、右下がりの線状痕が認められる。一連の敲打痕とは切り合い関係をもたず、前後関係は不明である。f面の欠損は一連の敲打痕・磨痕に後続するものである。

S1159には硬質の石材が用いられている。f面の中央部には使用痕Ⅰa類が密集している。e面の中央部にも使用痕Ⅰa類が残されているが、f面に比べ、使用痕を構成する円形の痕跡がやや小さい。d面の端部には使用痕Ⅰa類がみられ、d面端部の使用痕Ⅰa類がf面同様に明確である一方、c面端部の使用痕Ⅰa類は明確ではなく、形状や大きさのそろった痕跡の集合によって使用痕が構成されている。

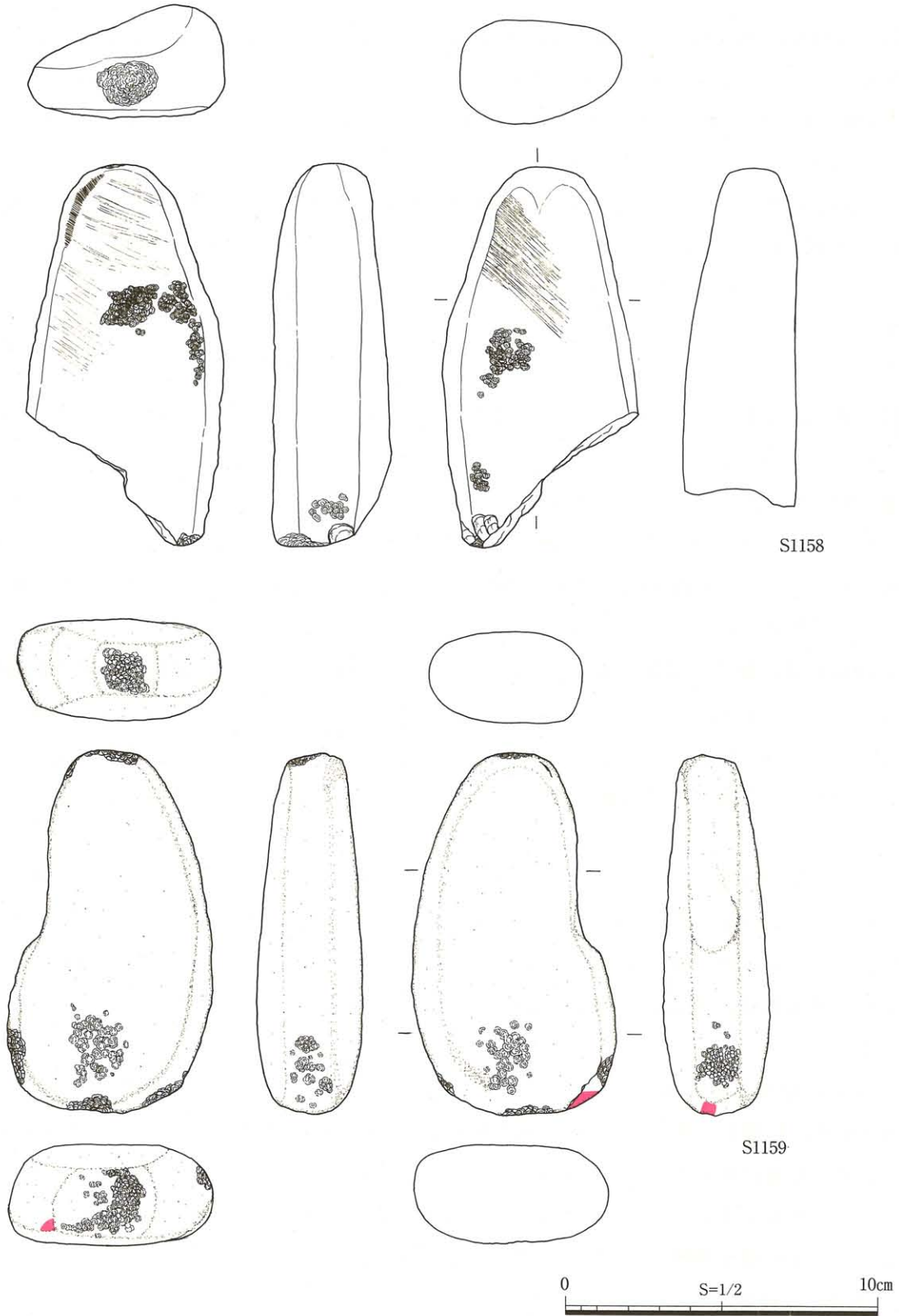
S1160には、極めて硬質で比重の大きい石材が用いられている。大型蛤刃石斧の転用品とみられる。e・f面には、使用痕Ⅱ類、Ⅲ類がある。使用痕Ⅲ類は、さまざまな方向からの衝撃によって形成されている。a面の端部には、使用痕Ⅰb類、Ⅱ類、Ⅲ類がみられる。a・b面とも中央部や端部には使用痕Ⅰb類、Ⅱ類、Ⅲ類があり、特にb面の端部にはさらにⅤa類も認められる。

S1161にはやや硬質の石材が用いられている。大型蛤刃石斧の転用品である。石斧の基部にあたるe面は剥離痕からなっており、e面からさらに複数の剥離痕が生じている。石斧の刃部にあたるf面には、使用痕Ⅲ類が認められる。またa面の中央部には使用痕Ⅰb類が密集しており、平面形態に凹部をみせている。こうした平面形態は、S3153などにも共通する要素である。

S1162にはやや硬質の石材が用いられている。敲打痕に先行して磨痕が全面に認められ、磨石を転用した敲石と考えられる。e面の磨痕は、a面に向かってより顕著になる傾向がある。またa面の磨痕は緩やかにくぼみをみせており、かなり使い込まれた磨石が敲石に転用されているような印象を受ける。e・f面には使用痕Ⅲ類がみられ、わずかに使用痕Ⅰa類が伴っている。c面中央部は使用痕Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅲ類がみられる。

S1163には硬質の石材が用いられている。敲石としての使用痕に先行して磨痕が面をなしており、砥石を転用した敲石と考えられる。磨痕は欠損部以外の全面に認められ、非常に発達しており、線状の擦痕をみせている。a面中央部には使用痕Ⅰa類、Ⅰb類が円状に密集している。

S1164には硬質の石材が用いられている。三角形の横断面を示し、稜上に使用痕Ⅰb類がみ



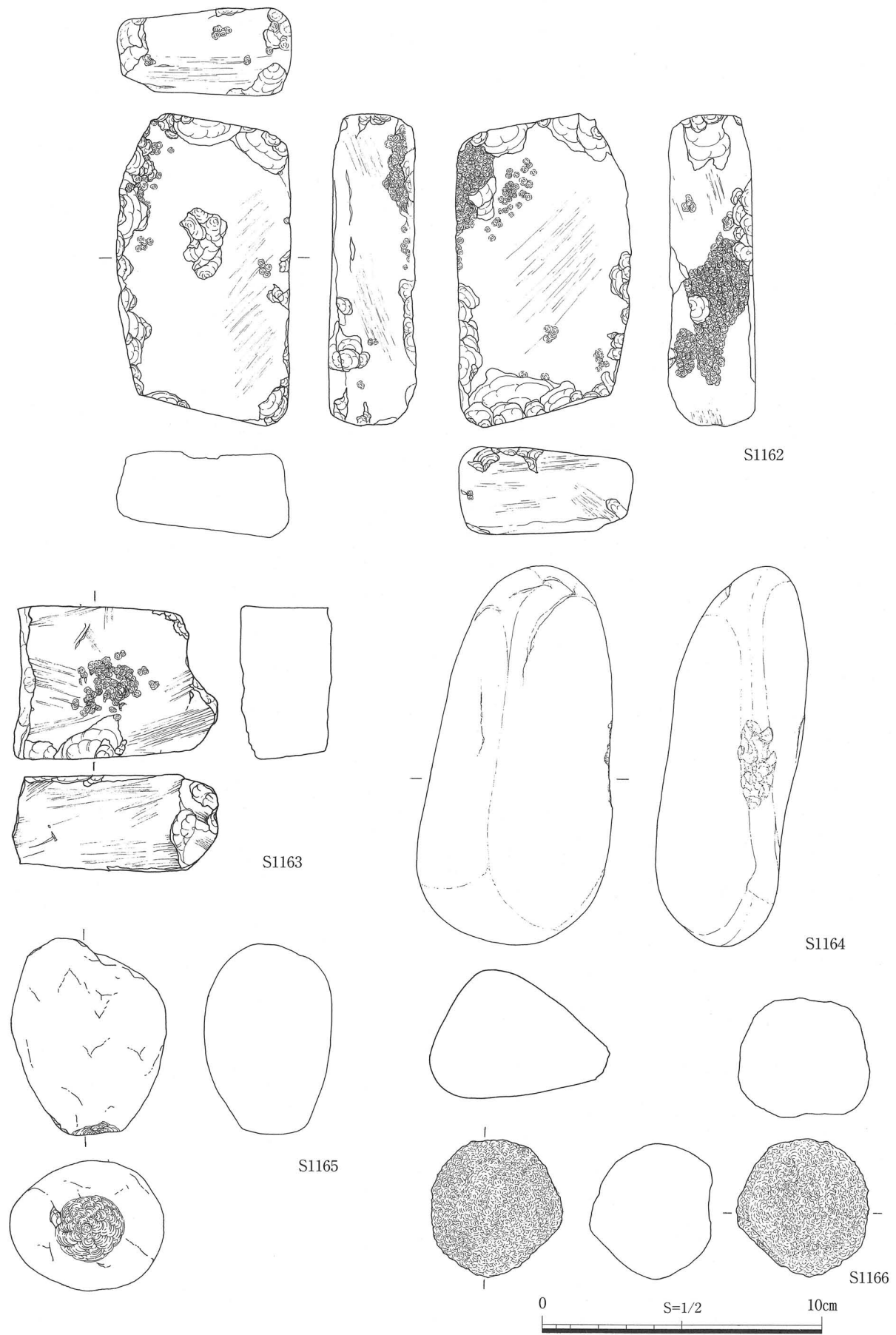
第235図 南地区出土礫石器 (1)

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1158	敲石	69次	SK-1112	第5層	(11.2)	6.1	3.5	(358.2)	中粒砂岩A		Ⅵ-3
S1159	敲石	69次	SD-1101	第1層	11.5	6.0	3.3	351.2	流紋岩質溶結凝灰岩E	西野觀察(資料13) 朱付着	Ⅵ-3



第236図 南地区出土礫石器 (2)

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1160	敲石	61次	SD-151A	第8層	11.5	7.1	4.2	612.1	安山岩E	大型蛤刃石斧転用	Ⅱ-3
S1161	敲石	65次		黒褐色土	(10.2)	7.4	5.0	(566.4)	斑礫岩C	大型蛤刃石斧転用	弥生



第237図 南地区出土礫石器 (3)

られる。

S 1165には硬質の石材が用いられている。f面に使用痕Ⅱ類とⅢ類がみられる。使用痕の密集によってf面は面をなしており、かなり使い込まれた印象を受ける。

S 1166には硬質の石材が用いられている。全面が使用痕Ⅰa類やⅡ類で覆われており、円形を呈している。いわゆる「多面体を呈する敲石」⁽¹⁹⁾に類似し、その機能が注目される。

S 1167には硬質の石材が用いられている。敲石としての使用痕に先行して磨痕が観察され、磨石を転用した敲石と考えられる。磨痕はすべての部位に認められるが、a・b面は面を形成している。敲石としての使用痕は、a面の中央部とc面の側面部より、f面にⅠa類がみられ、直径0.3cm程度の、明瞭な円形の痕跡によって構成されている。

S 1168には硬質の石材が用いられている。a・b面の中央部に使用痕Ⅰa類がみられ、0.1～0.2cm程度の円形の痕跡から構成されている。またe・f面には磨痕がみられ、e面では平坦面を形成している。

S 1169にはやや硬質の石材が用いられている。使用痕はe・f面に観察でき、Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅱ類、Ⅲ類に分類できる。e・f面の中心には使用痕Ⅰa類やⅡ類が認められ、使用痕Ⅲ類はこれらを起点に発生していることから、一連の動作の蓄積によって、こうした使用痕が残されたと推定できる。またe・f面の使用痕密集部は面をなし、平行する位置関係をみせており、いわゆる「大型楔形石器」⁽²⁰⁾と類似した要素を認めることができる。

S 1170にはやや軟質の石材が用いられている。円盤状を呈し、c～f面が使用痕Ⅰb類とⅡ類に覆われている。またa・b面には、使用痕Ⅴb類やⅠa類、Ⅱb類がみられる。

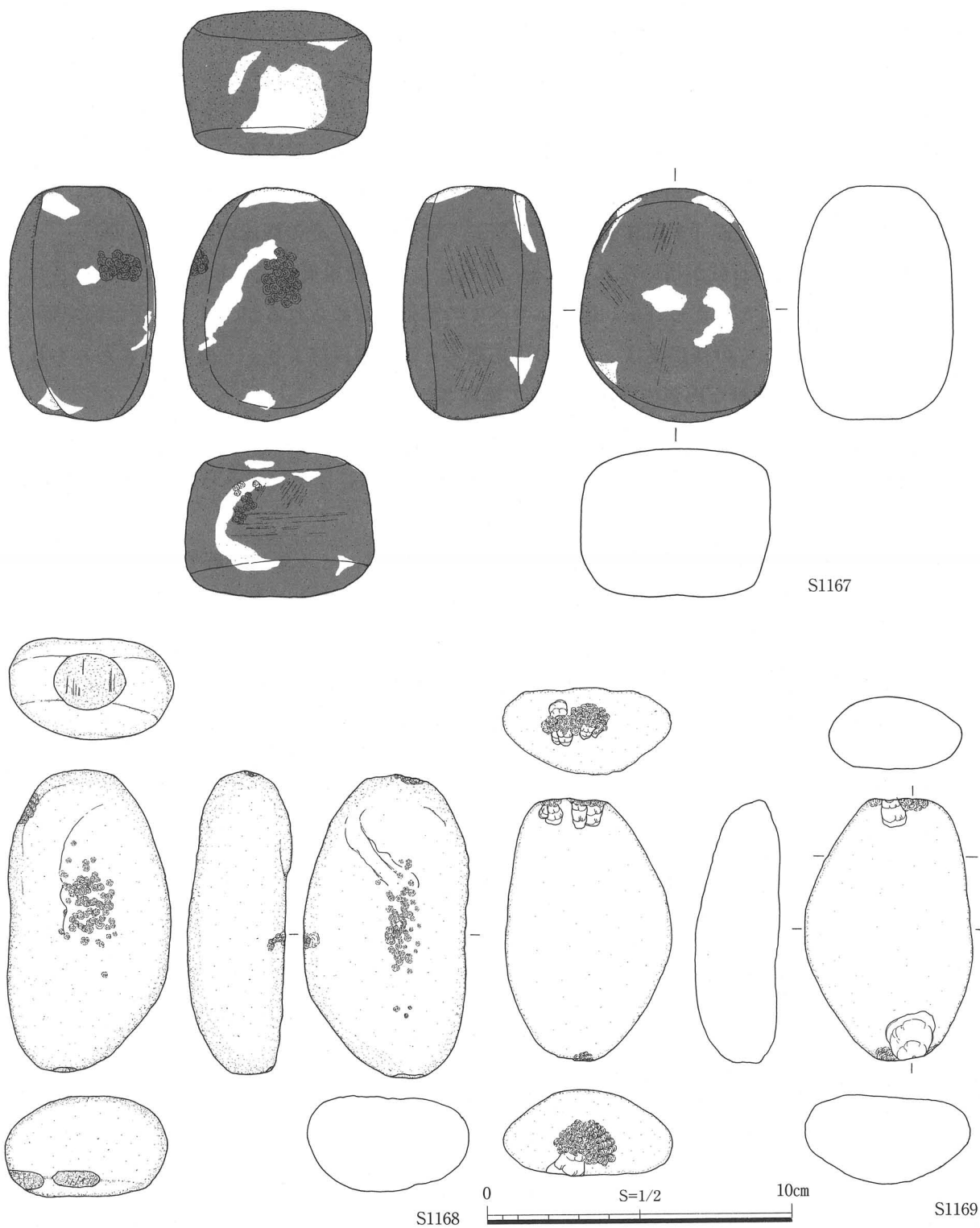
S 1171にはやや硬質の石材が用いられている。欠損している部分が多いが、敲石としての使用痕に先行する磨痕が確認でき、磨石を転用した敲石と考えられる。f面の磨痕は特に発達しており、平坦面を形成している。敲石としての使用痕はa・b面の側面部、d面の中央部に認められ、使用痕Ⅰa類に分類できる。なかでもa面の側面部の使用痕は円形の集中部をみせており、くぼみとなっている。各部位に認められる欠損は、こうした一連の使用痕に後続しており、敲石としての使用中か、それ以降のものとして推定される。

S 1172には硬質の石材が用いられている。c～f面に使用痕Ⅰa類、Ⅰb類が、a・b面には使用痕Ⅰa類Ⅰb類、Ⅴa類がみられる。c～f面を覆う使用痕Ⅰa類は0.4～1.2cm程度の幅で面を形成している。

石槌 (S 1173～1177) S 1173にはやや硬質の石材が用いられている。a～d面中央部の溝は使用痕Ⅰb類と磨痕から構成されており、切り合い関係の上では磨痕が後続する。e面の中央部には、わずかに使用痕Ⅰb類の集中部が認められる。

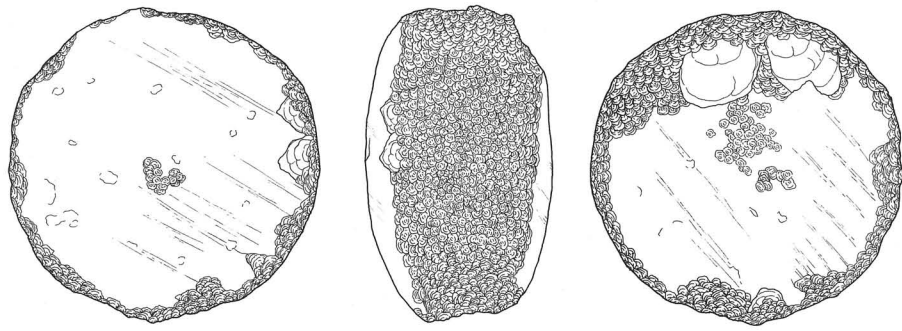
S 1174にはやや硬質の石材が用いられている。ほぼ全面が使用痕Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅲ類に覆われており、a～d面中央部の溝も、使用痕Ⅰa類、Ⅰb類からなる。

S 1175にはやや硬質な石材が用いられている。a・c・d面にある中央部の溝は使用痕Ⅰa類、Ⅰb類で構成されている。溝の幅は一定ではなく、部分によって違いをみせている。f面

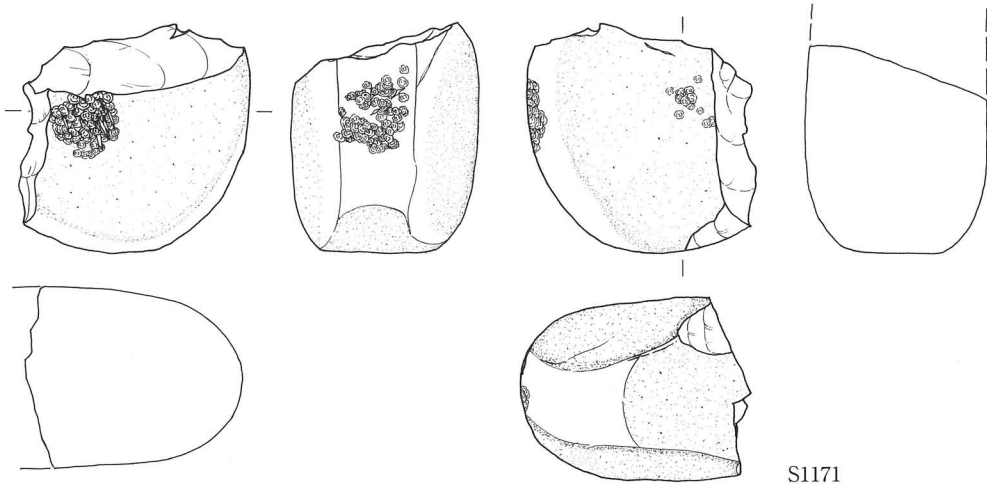
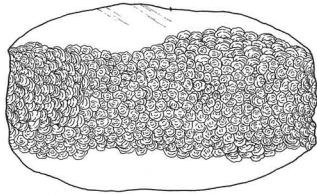


第238図 南地区出土礫石器（4）

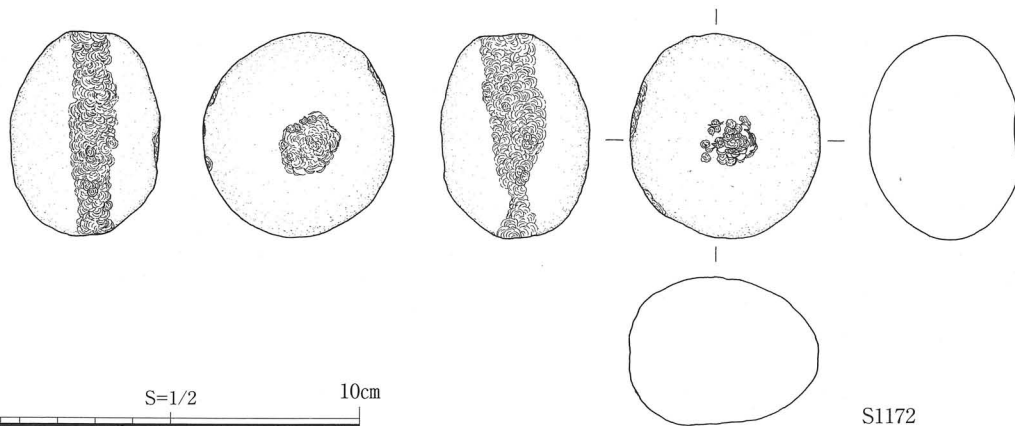
遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1162	敲石	69次	SD-1106	第3層	13.5	6.1	3.0	326.6	流紋岩質凝灰岩E	磨石転用	布留0
S1163	敲石	65次	SD-125	第1層	5.4	(7.3)	3.5	(232.6)	泥質ホルンフェルスA	砥石転用か	Ⅲ
S1164	敲石	61次	SD-105B	第6層	13.2	6.6	4.0	616.0	流紋岩質溶結凝灰岩E		Ⅲ-3
S1165	敲石	69次	SD-1109	第5(下)層	6.7	5.5	4.7	252.1	流紋岩B		V・Ⅵ-1・2
S1166	敲石	61次		黒褐色土Ⅱ	4.9	4.7	4.1	149.3	斑瀾岩C		弥生・古墳
S1167	敲石	61次	SK-151・152	第1層	8.0	6.0	4.8	383.0	中粒砂岩A	西野観察(資料12) 朱付着。磨石転用	Ⅱ-3
S1168	敲石	61次		黒褐色土	9.9	5.3	3.2	273.4	細粒砂岩B	磨痕あり	弥生・古墳
S1169	敲石	61次	SD-102B	第5層	8.5	5.4	2.7	181.2	中粒砂岩B		V-1



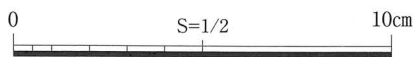
S1170



S1171

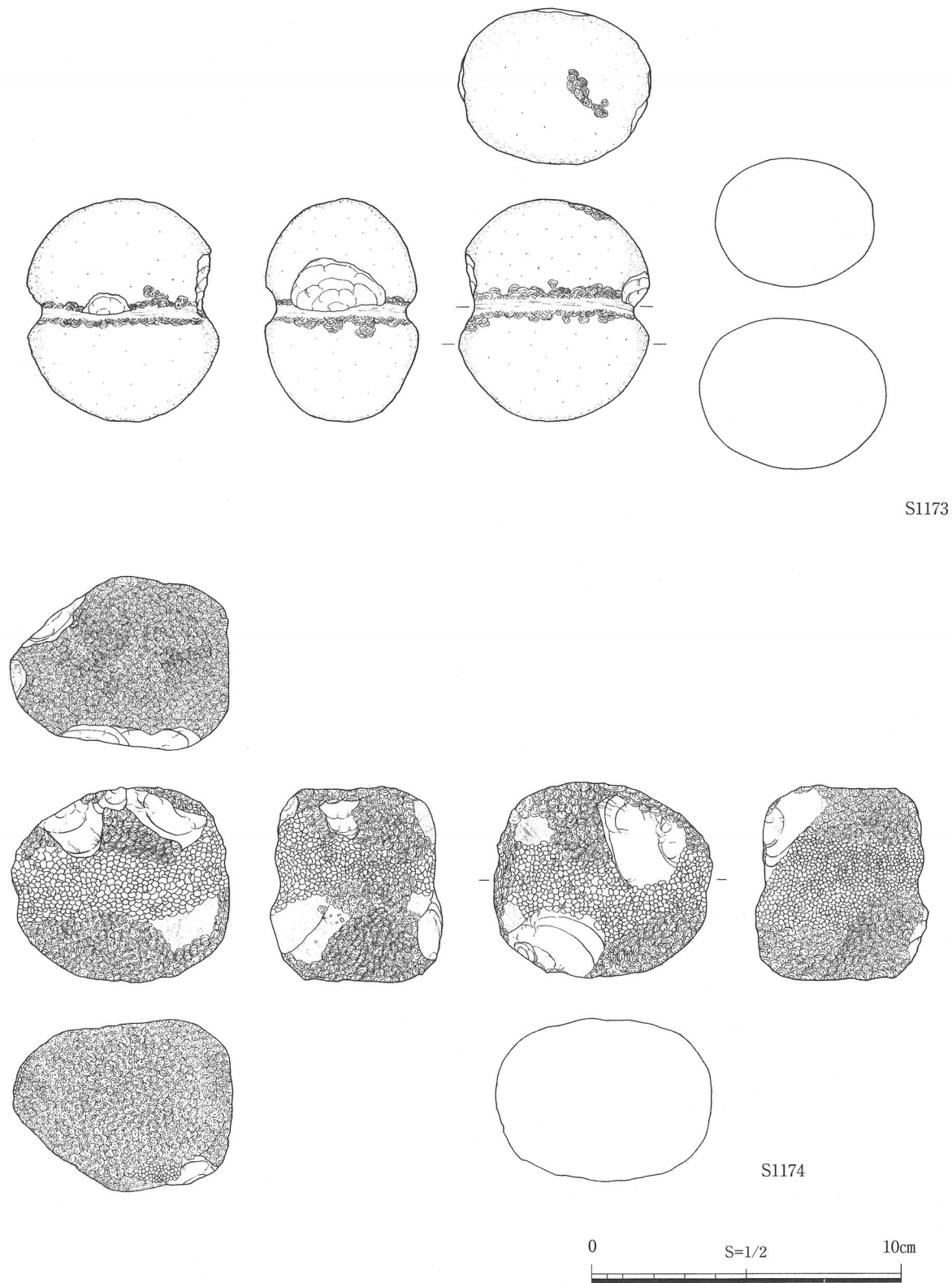


S1172



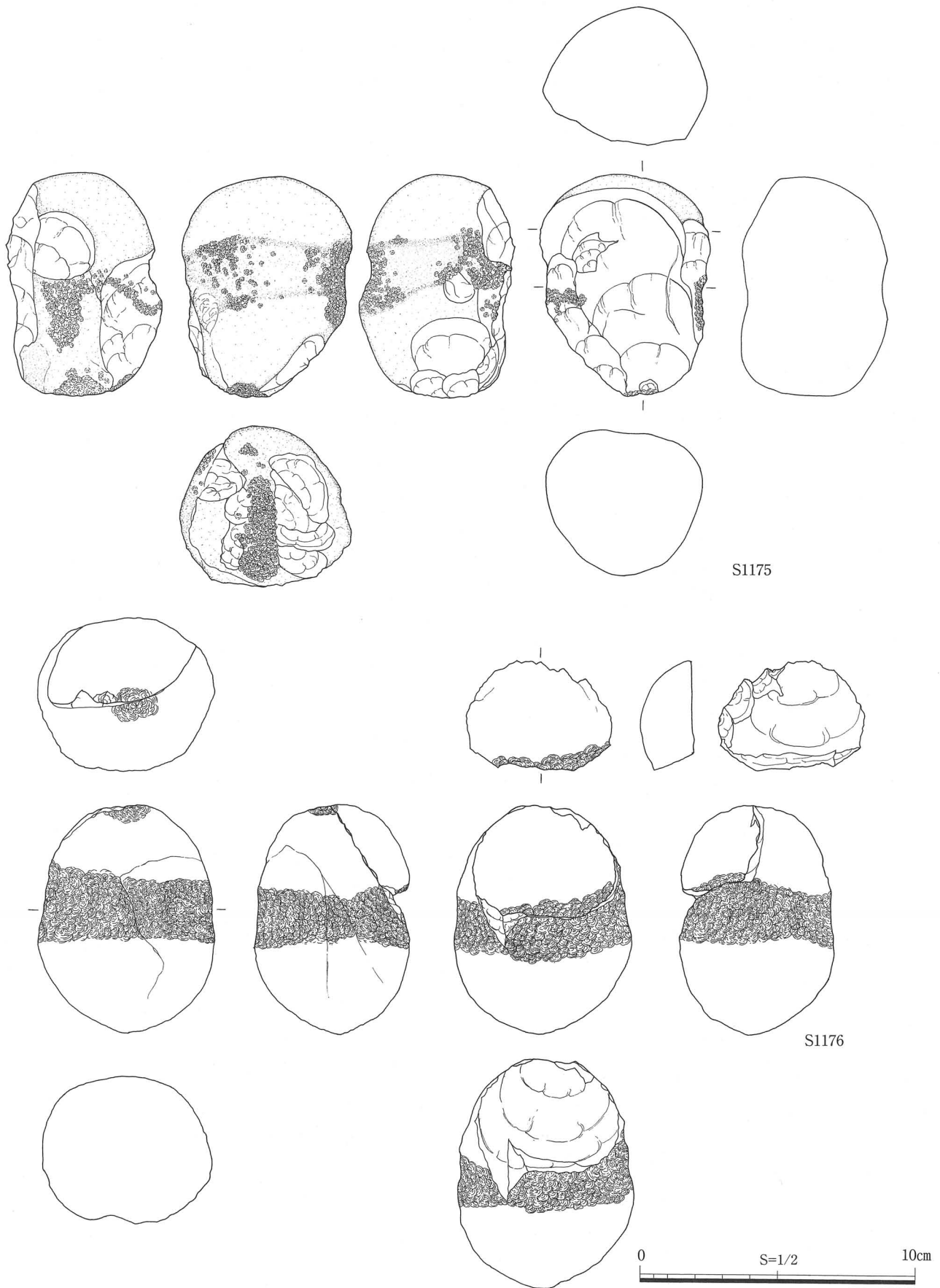
第239図 南地区出土礫石器 (5)

遺物番号	器種	調査 回数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1170	敲石	69次	SD-1109	第4層	8.0	8.1	4.9	498.8	安山岩F	磨石転用	布留0
S1171	敲石	61次	SD-103	第1層	(5.8)	(5.8)	4.8	(254.5)	流紋岩質溶結凝灰岩E	磨石転用	VI-4
S1172	敲石	69次	SD-1109	第4層	5.4	5.0	4.0	151.7	流紋岩B		布留0



第240図 南地区出土礫石器（6）

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	法量 (cm)			重量 (g)	石種	備考	共伴時期 (大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1173	石槌	69次	SD-1109	第5(下)層	7.2	6.1	4.8	(299.6)	中粒砂岩C		V・VI-1・2
S1174	石槌	69次	SD-1109	灰黒色粘土	6.3	6.9	5.4	(345.8)	中粒砂岩C		VI-3・4



第241図 南地区出土礫石器 (7)

には使用痕Ⅰa類がみられ、そこからⅢ類が発生している。こうしたf面からの使用痕は、溝を構成している痕跡に後続している。

S1176には硬質の石材が用いられている。a～d面にある中央部の溝は使用痕Ⅱ類に覆われているが、石質のせいか、他の石槌に比べて溝は浅い。e面には使用痕Ⅱ類、Ⅲ類が認められ、剥落した剥片が接合している。

S1177には硬質の石材が用いられている。a～e面が使用痕Ⅱ類で覆われており、特異な形態に整形されているように見える。f面には磨痕が発達しており、平滑な面を形成している。他の石槌のように中央部に溝状の痕跡をとどめるわけではなく、石槌としての認定に疑問が残る資料である。

磨石 (S1178～1180) S1178にはやや硬質の石材が用いられている。磨痕に先行して敲石の使用痕(Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅱ類、Ⅲ類)がみられ、敲石を転用した磨石と考えられる。またd面には一部、他の磨痕よりも発達した磨痕がみられ、帯状の凹部を形成している。こうした特徴から、本資料が本来は石槌であった可能性も否定できない。a面は1枚の大きな剥離面からなる。

S1179には硬質の石材が用いられている。磨痕に先行してa面の側面部に敲石の使用痕(Ⅰa類)がみられ、敲石を転用した磨石と考えられる。磨痕はa面の中央部に認められ、半球状を呈する石の形状に沿って発達している。b面は1枚の大きな剥離面からなる。

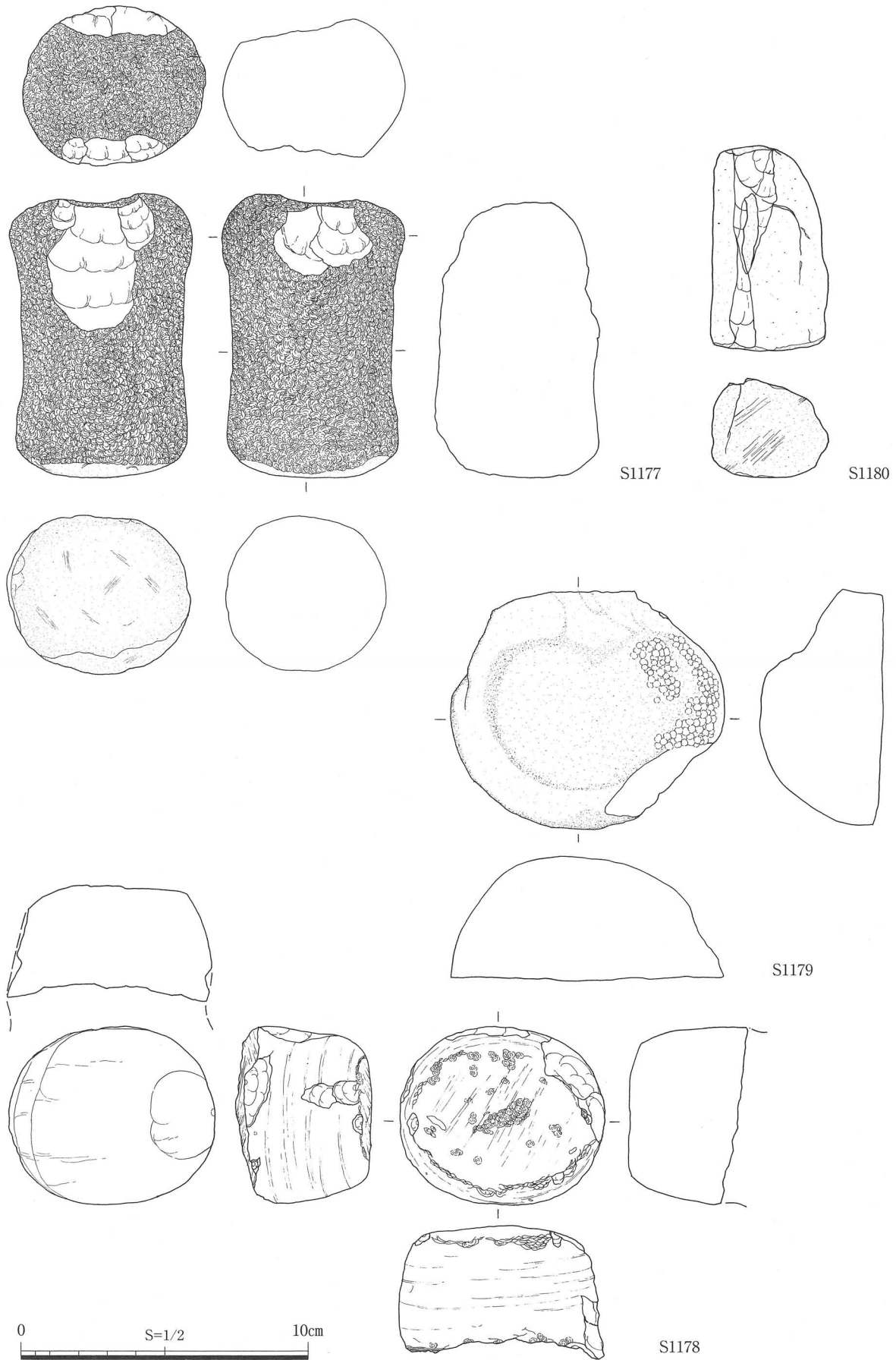
S1180には軟質の石材が用いられている。使用はf面のみで全体が磨痕に覆われ、平坦な面を形成している。磨痕のなかには同一方向の擦痕が複数認められ、連続した同一方向への運動過程のなかで、使用痕が形成されたと思われる。

石皿 (S1181・1182) S1181には硬質な石材が用いられている。磨痕はa・c・e面に残されており、a面はややくぼんでいる。d・f面は著しく欠損している。

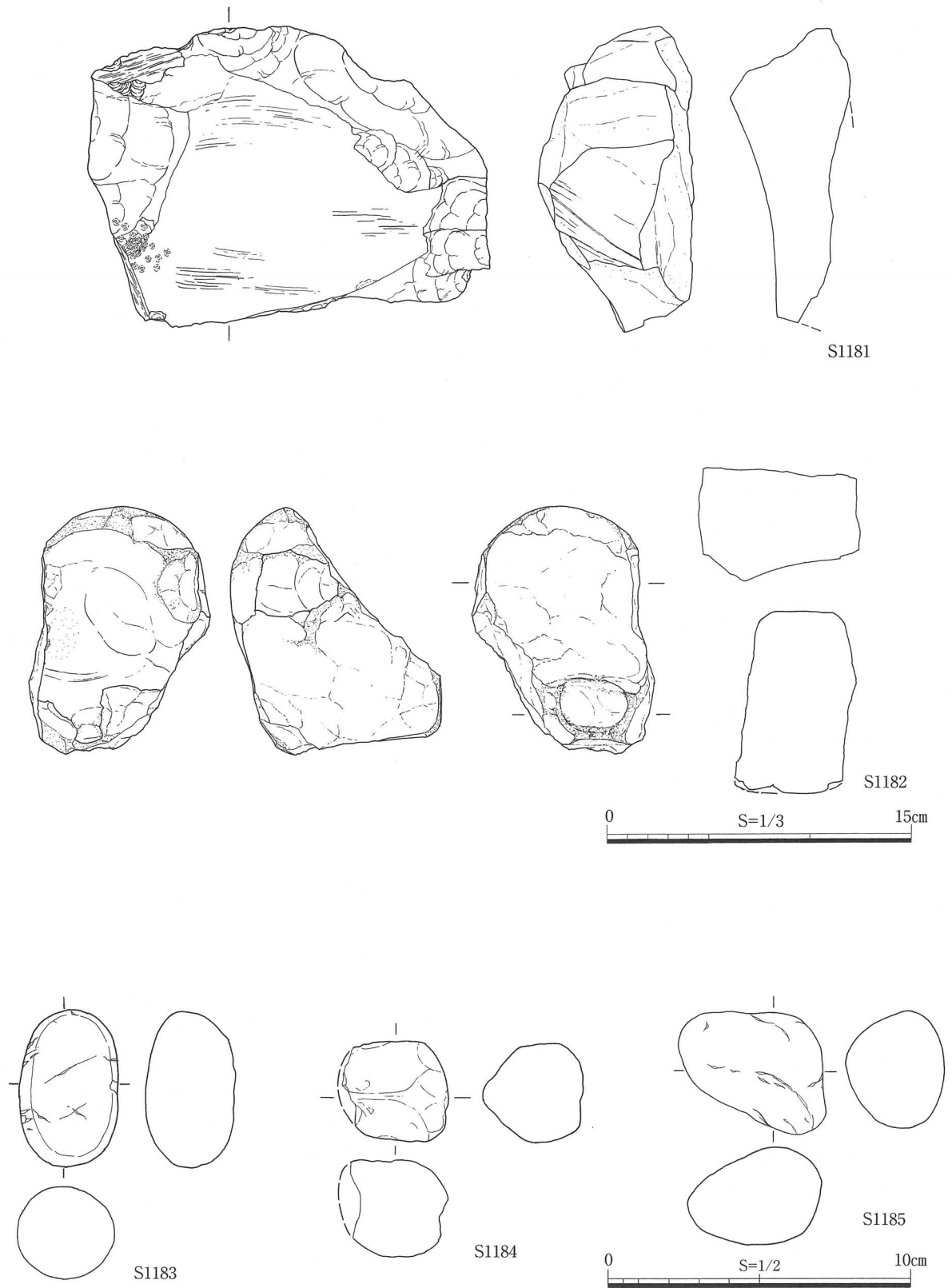
S1182には硬質の石材が用いられている。a・d面に磨痕が認められ、かなり平滑になっている。

投弾 (S1083～1085) すべて硬質の石材が用いられている。使用痕などは一切認められない。

遺物番号	器種	調査回数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S1175	石槌	69次	SD-1122	第2層	7.8	5.7	5.0	(370.5)	流紋岩質溶結凝灰岩C		V-1
S1176	石槌	65次		黒褐色土 黒褐色土Ⅱ	8.2	6.3	5.5	(362.6)	ガラス質溶結凝灰岩	接合	弥生 弥生中・後期
S1177	石槌	69次	SD-1102	第1層	9.9	6.4	5.4	(654.6)	玄武岩C	磨痕あり	Ⅵ-3
S1178	磨石	69次	SD-1109	第6層	(4.5)	7.0	(5.2)	(306.6)	斑礫岩A	敲石転用・石鍬か	V・Ⅵ-1・2
S1179	磨石	65次	SK-106	第2層	(8.3)	9.5	(4.5)	(430.7)	細粒砂岩G	敲石転用	V-1
S1180	磨石	61次	SD-105	第1層	7.2	4.0	3.5	(198.9)	変輝緑岩B		Ⅵ-4
S1181	石皿	69次	SD-1122	第2層	(19.7)	(13.6)	(7.1)	(1,829.4)	細粒砂岩E		V-1
S1182	石皿	65次	SD-202E	第6層	(12.6)	(8.9)	(8.3)	(1,097.0)	斑礫岩B		Ⅱ-3
S1183	投弾	69次	SD-1101B	第6-Ⅰ層	5.1	3.2	3.0	73.0	泥質ホルンフェルスA		V-1
S1184	投弾	69次	SD-1109	第5(下)-b層	3.5	3.3	3.3	(46.7)	玄武岩質片岩B		V・Ⅵ-1・2
S1185	投弾	69次	SK-1102	第5層	3.4	3.3	3.3	79.0	流紋岩質溶結凝灰岩D		Ⅳ



第242図 南地区出土礫石器（8）



第243図 南地区出土礫石器 (9)

註

- (1) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊、1993年。
- (2) 阿刀弘史「滋賀県出土の木製品―農具1・泥除け―」『滋賀考古』第20号 滋賀県考古学研究会、1998年。
- (3) 森本晋「石小刀」『道具と技術 I』弥生文化の研究5 雄山閣出版 pp.59-62、1985年。
- (4) 岡村道雄「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会 pp.106-116、1976年。
- (5) 上峯篤史「火打石研究の視点―石器技術論を応用した器種認定と分析方法の提示―」『第2回 関西学生考古学研究会大会発表資料集』関西学生考古学研究会 pp.112-129、2004年。
- (6) 惜しまれることに、本資料は本来完形を保っていたものが発掘の際に著しく破損する事態に見舞われた。回収できなかった破片もあったようで、完全には修復できなかった。とりわけ基部側の大きな欠損部は接着さえも困難で、整理作業に際して重大な障害となった。そこで基部側の大きな新欠部を石膏で充填し、作業の便宜をはかった。実測図は石膏充填前の状態を図化してあるが、巻頭図版及び写真図版においては、石膏が充填された状態で撮影されているので、留意されたい。
- (7) 大きさを重視して石剣に含めたが、他の石器の未成品である可能性も否定できない。ただし平面形状や剥離の様相から考えて、細身の尖頭器様の石器が志向されたと考えている。
- (8) 松藤和人「再び“瀬戸内技法”について―瀬戸内技法第1工程を中心に―」『二上山・桜ヶ丘遺跡―第1地点の発掘調査報告―』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十八冊 奈良県立橿原考古学研究所 pp.118-152、1979年。
- (9) 石材名については、一般的に使われている「結晶片岩」として名称を使用するが、奥田尚氏による石種では「玄武岩質凝灰岩質片岩」等の名称であることを断っておく。
- (10) 秋山浩三・仲原知之「近畿における石庖丁生産・流通の再検討(I)―池上曾根遺跡の石庖丁製作工程―(上)」『大阪文化財研究』第15号 pp.1-13、1998年。
- (11) 秋山浩三・仲原知之「近畿における石庖丁生産・流通の再検討(I)―池上曾根遺跡の石庖丁製作工程―(下)」『大阪文化財研究』第17号 pp.38-62、1999年。
- (12) 村田幸子「畿内における石庖丁未成品の研究」『大阪文化財研究』第3号 (財)大阪文化財センター pp.11-19、1992年。
- (13) 塚田良道「耳成山産流紋岩製石庖丁について」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ pp.119-133、1987年。
- (14) 佐原眞「石斧論―縦斧から横斧へ―」『考古論集(慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集)』松崎寿和先生退官記念事業会 pp.45-86、1977年。
- (15) 村田裕一「工具一砥石」『考古資料大観』第9巻 小学館 pp.197-200、2002年。
- (16) 渡邊貴代「敲石研究の新視点―石器製作用敲石の認定基準について―」『旧石器考古学』69 旧石器文化談話会 pp.13-25、2007年。
- (17) 桐山秀穂「縄文・弥生時代における石製製粉具の研究―中国・四国・近畿地方を中心として―」平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(若手研究B)研究成果報告書、2004年。
- (18) 小林博昭「バイポーラーテクニクについて―実験的方法からの研究―」『月刊考古学ジャーナル』No.78 ニュー・サイエンス社 pp.8-13、1973年。

- (19) 阿部朝衛「多面体を呈する敲石 再論」『帝京史学』第5号 帝京大学文学部史学科 pp.111-126、1990年。
- (20) 大下明・久保勝正「石器群の評価と問題点」『鴻ノ木遺跡（下層編）』一般国道42号松坂・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告 三重県埋蔵文化財センター pp.238-256、1998年。

第6節 まとめ

1. 地形

唐古・鍵遺跡では、高橋学氏による微地形復原から、南地区と中央区の間には谷地形の横たわることが想定されてきた。南地区でおこなった第61・65次調査では、灰白色粗砂で埋没した幅40mに及ぶ谷地形を確認し、微地形復原を検証した結果となった。

谷地形は弥生時代以前のもと考えられるが、弥生時代中期初頭以降に人の手が加わるようになり、弥生時代中期前葉には大溝群として整えられる。しかし、この大溝群は弥生時代中期中葉前半には埋没し、全体が落ち込みとなって残存する。ここに、洪水に起因すると考えられる灰白色粗砂が流れ込み、落ち込みを完全に埋没させている。この灰白色粗砂は、東環濠の第91次調査区から流れ込み、中央区の第50次調査区にまで及び、第50次S D-101Bの上面を埋没させている。また、洪水は落ち込みからオーバーフローし、南地区の低い部分に砂質土を形成する。これによって、南地区における弥生時代中期中葉前半以降の遺構面が形成されている。特に、第61・65次調査の谷地形は、灰白色粗砂の埋没後には良好な居住域となったようで、竪穴住居に伴うと考えられる弥生時代中期中葉～中期後葉の炭灰土坑や小溝、柱穴を多数検出している。

一方、第61次調査区の中央や、第33・69次調査区は、比較的安定した微高地であったと考えられる。第33次調査区の南端で凸帯文土器・前期弥生土器が出土した砂層は、第69次調査区でその本体とでもいふべき前期弥生土器を含む河跡のS R-1201を確認し、これより供給されたことが明らかとなった。S R-1201は、第69次調査区の南端を南西から北東へ向かって流れている。第33・69次調査区は、この弥生時代前期に埋没するS R-1201の左岸に形成された自然堤防上にあたる。

同様な凸帯文土器や前期弥生土器を含む砂層は、同じ南地区の第44次調査区でも検出している。唐古・鍵遺跡周辺における地形の傾斜は、南東から北西に向かうものであり、第61・65次調査区で検出した谷地形はこれに沿ったものといえる。しかし、一方では弥生時代前期頃に、南から北への河の流れもあったことが、第33・44・69次調査区の砂層から判明した。

2. 遺構変遷

(1) 弥生時代前期～中期前葉 (第244図)

南地区では、弥生時代前期の遺構・遺物は極めて少ない。これは、第61・65次調査区に横たわる谷地形や第69次調査区の南端を南南西から北北東に流れる弥生時代前期の河跡が示すように、本地区がその時期には居住域として安定していなかったためである。このことから、

第33表 南地区 範囲(内容)確認調査の遺構・遺物変遷表(1)

時期	土器様式	調査 回数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物
前期	I	61次	SK	155	155〔用途不明未成品(W1068)〕		
			SD				
		65次	SK				
			SD				
		69次	SK				
			SD				
			SR	1201			
中期中頭	II-1	61次	SK	151CS・201A・201B	151CS〔平鍬(狭)(W1008・1009)、組合せ鋤身(W1022)、高杯(一木式)(W1037)、高杯(組合せ式か)(W1039)、用途不明品(W1058)〕	151CS〔スクレイパー(S1036)、石庖丁(S1043)〕 201B〔スクレイパー(S1037)〕	151CS〔搬入土器(P5537(伊勢湾岸)・5546(伊勢湾岸))、加工痕のある角(BP5017)〕 201A〔搬入土器(P5551(伊勢湾岸))〕
			SD				
		65次	SK				
			SD				
		69次	SK				
			SD	1110	1110〔竪杵(W1026)〕	1110〔石鍬(S1039)、砥石(S1113・1157)〕	1110〔搬入土器(P5436(紀伊))〕
中期前葉	II-2・3	61次	SK	151・152・153	151〔用途不明未成品(W1068)〕 152〔平鍬(狭)(W1011)、高杯(一木式)(W1038)〕 153〔一木鋤(W1018)、合子蓋(W1041)、合子(W1042)〕	152〔砥石(S1134)〕 151・152〔敲石(S1167)〕	151〔管玉未成品(A5024)〕
			SD	151A・151BN・151BS・151CN	151A〔槽(W1043)〕 151B〔平鍬(狭)(W1012)、高杯(組合せ式)(W1040)〕 151BS〔部材(W1046)〕 151BN〔平鍬(狭)(W1010)、鍬の柄(W1019)、盾(W1033)、匙(W1036)、用途不明品(W1052)、有頭棒(W1053~1056)、用途不明品(W1059)、用途不明品(W1064)〕 151CN〔平鍬(狭)(W1007)、火鑽臼(W1044)〕	151A〔用途不明石製品(S1101)、敲石(S1160)〕 151BN〔石鍬(SP1029)〕 151BS〔スクレイパー(S1034)〕 151CN〔石製紡錘車(S1093)〕	151A〔土器片円板(D5159)、卜骨(B5032)〕 151B〔搬入土器(P5489(伊賀・尾張))、土器片円板(D5144)〕 151BN〔搬入土器(P5521(伊勢湾岸)・5548(伊勢湾岸))〕 151BN・BS〔搬入土器(P5482(伊賀・尾張)・5491(伊賀・尾張)・5523(伊勢湾岸))〕 151BS〔骨針(B5011)〕 151CN〔土器片円板(D5147)〕
		65次	SK	201・202・203	202〔用途不明未成品(W1067)〕		
			SD	201・202(E・W)・203(E・W)	203E〔アカ取り(W1035)、用途不明品(W1061)〕	202E〔石皿(S1182)〕 203E〔中形尖頭器(S1012)、砥石(S1118)〕	202E〔卜骨(B5021)〕
		69次	SK	1118・1131			
			SD				1118〔人形土製品(D5010)〕

南地区は北地区や西地区に対し、居住域としての成立が一段階遅れるものと考えられる。

しかし、弥生時代中期中頭ともなれば、遺構・遺物の数は飛躍する。特に、第61・65次調査区の谷地形には、弥生時代中期中頭から弥生時代中期前葉にかけて幾条もの大溝が掘り込まれている。おそらくこの大溝群は、第69次調査区北端と第50次調査区南端を經由して、西地区の第58次や第96次調査区の大溝へと繋がるのが想定される。また、南地区の南端においても、環濠と考えられる第33次SD-110・第69次SD-1110が掘り込まれている。これら周囲の大溝群が整備されることによって、南地区は居住域として安定していったのであろう。

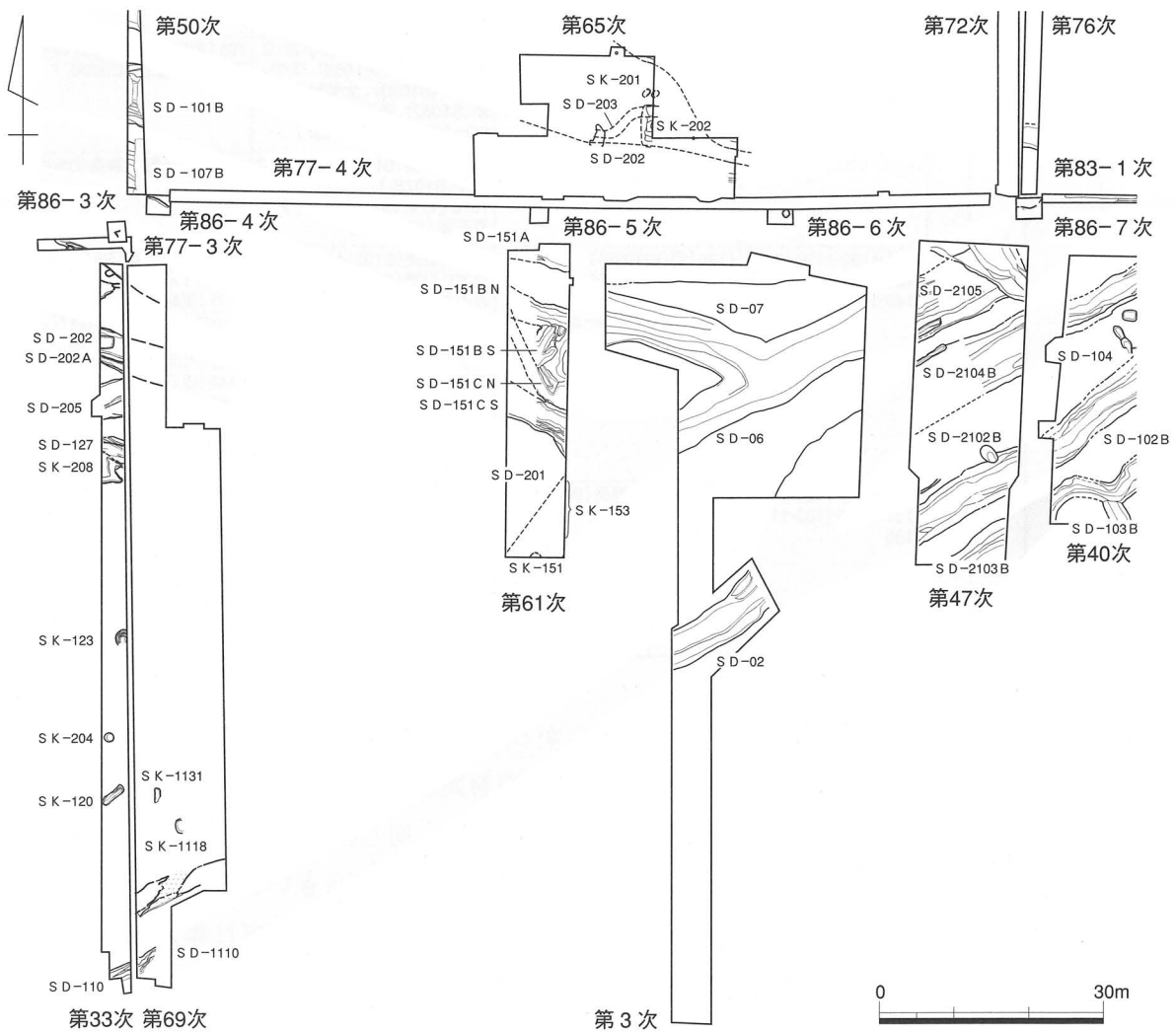
第33次調査区のSK-208は、大和第II-1-b様式の基準資料となる土器が出土しているが、長柄鋤2点、広鍬1点の未成品があり木器貯蔵穴と考えられる。北に隣接するSD-205からも平鍬の未成品3点が出土しており、本調査区では弥生時代中期中頭に木製品生産がおこなわれていたことがわかる。

この段階で特筆しておかなければならないのは、第33次調査区のSD-120から出土した細形銅矛を転用した鏝である。時期は、共伴土器から大和第Ⅱ-2様式と考えられる。細形銅矛として北部九州以東の出土例は希有といえる。また、近畿地方において、時期の限定できる青銅製品としては、最古のものとなる。

(2) 弥生時代中期中葉 (第245図)

南地区では第61・65次調査区周辺において、弥生時代中期中葉前半とその後半で大きな画期がある。それは、洪水によってもたらされた灰白色粗砂が、それまで低地であった部分を覆い、新たな居住域を形成する。これによって第61・65次調査区には、弥生時代中期中葉後半から弥生時代中期後葉にかけて多くの竪穴住居が集中することになる。

一方、第33次調査区では、その中央で弥生時代中期中葉の木器貯蔵穴を3基 (SK-124・134・138) 検出している。唐古・鍵遺跡において、この時期の木器貯蔵穴は類例が少なく、本地区での集中を想定することも可能であろう。また、第33次調査区から西へ20mの第63次調査区では大和第Ⅴ様式の溝であるSD-103Aから鋤・鍬の未成品が、隣接する第69次調査



第244図 南地区 範囲 (内容) 確認調査の弥生時代前期～中期前葉遺構分布図 (S = 1/1,000)

第34表 南地区 範囲(内容)確認調査の遺構・遺物変遷表(2)

時期	土器様式	調査 次数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物	
中期中葉	Ⅲ	61次	SK	108・115・118・123・124・ 129・140・142	118〔膝柄斧柄未成品(W1001)、横鋏(W1013・1014)、火鑽臼(W1045)〕	108〔石庖丁(S1041)、磨製石鋏(S1079)、石鋸(SP1087)、砥石(S1155)〕 115〔石剣(SP1022)〕	115〔用途不明土製品(D5064)〕	
			SD	105B・106B・107・108・ 109・111・113・115・151・ 152・153	151〔用途不明品(W1065)〕 152〔用途不明品(W1062)〕	105B〔石剣(S1004)、石錐(S1020)、スクレイパー(S1038)、石庖丁未成品(SP1068)〕 106B〔石剣(S1010)、石庖丁素材(S1057)、大型蛤刃石斧(S1071・1072)〕／115〔石庖丁未成品(S1053)〕／151〔スクレイパー(S1031)、石庖丁(S1045)、石庖丁未成品(SP1070)〕／152〔スクレイパー(S1032)、大形石庖丁(S1048)、砥石(SP1094)〕	106B〔杓子形土製品(D5020)〕 151〔土器片紡錘車(D5110)、用途不明品(BP5013)〕 153〔勾玉形土製品(D5015)〕	
			SB	101(SK-116・117・ 141・SD-114)		SK-117〔石庖丁(S1046・1055)〕		
			SX	102				
		65次	SK	104・110・112・122・127・ 130・135・137・140・141・ 142・143・153・160・161・ 165・176・177			140〔石鋸(S1108)〕 165〔柱状片刃石斧(S1069)〕	160〔搬入土器(P5481(伊賀・尾張))〕
			SD	105・105B・112・113・ 114・116・117・118・120・ 121			105〔石鋏(S1014)、石錐(S1024・SP1052)、石鋸(S1107)〕 105B〔スクレイパー(S1038)、砥石(S1164)〕 117〔石鋸(SP1086・1089)〕	
			SB	101(SK-136・SD- 124・125・126)			101〔石剣(S1006)、石小刀(S1030)、石錐(SP1053)、スクレイパー(S1033)、大型蛤刃石斧(S1062)、砥石(S1130)〕 SD-125〔砥石(S1163)〕	101〔底部双台形土器(鉢?)(P5226)、土錘(D5030)〕
			SR	151S・151N	151S〔弓(W1032)〕		151N〔石剣(S1007)、扁平片刃石斧(S1075)〕 151S〔石剣(SP1020)、扁平片刃石斧(SP1076)〕	151S〔杓子形土製品(D5017)〕
		69次	SK	1110・1122・1130・1134・ 1137・1141・1144・1146・ 1149・1150	1130〔臼(W1025)〕 1137〔平鋏(W1002・1003)、組合せ鋤身(W1023)、横槌(W1028)、盾(W1034-a・b)〕	1110〔石錐(S1023)〕 1130〔石鋏(SP1040)、大型蛤刃石斧(S1061)、砥石(SP1106)〕 1134〔砥石(S1143)〕 1137〔石剣(SP1006)、砥石(S1124)〕	1110〔搬入土器(P5496(伊賀・尾張))〕／1130〔土器文様(P5131(鋸歯文・斜格文))、用途不明品(へら状)(B5017)、刺突具(BP5007)〕／1137〔絵画土器(P5078)、搬入土器(P5442(近江))、土器片紡錘車(D5084・5111)、管玉(A5028)、加工痕のある骨(BP5024)〕／1144〔土器片円板(D5156)〕	
			SD	1108・1116・1124・1130・ 1131・1132・1133・1134・ 1135	1108〔用途不明品(W1063)〕	1108〔大型蛤刃石斧(S1063)〕	1108〔多孔土器(鉢)(P5209)、搬入土器(P5451(近江))・5497(伊賀・尾張))、加工痕のある骨(B5020)〕／1124〔搬入土器(P5579(?))、土器文様(P5134(鋸歯文))〕／1130〔骨針(BP5002)〕／1132〔土器片紡錘車(D5119)〕	

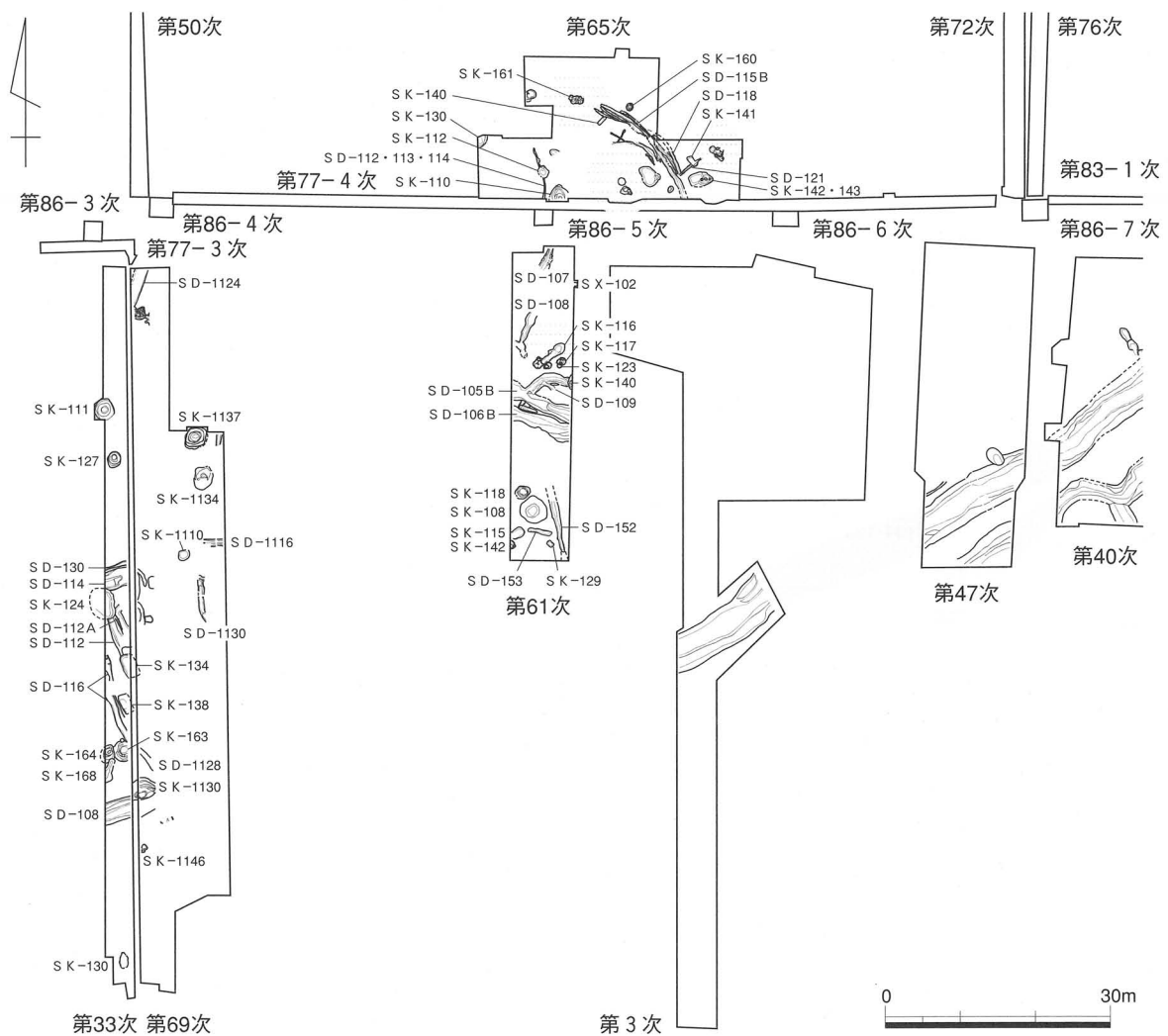
区でも大和第Ⅴ様式の環濠であるSD-1119Cから多数の農具未成品が出土しており、第33・69次調査区周辺では木製品の生産が弥生時代中期初頭から弥生時代後期初頭まで継続的におこなわれている。しかし、第69次調査区の石器組成は、同じ南地区の第61・65次調査区と比較しても加工斧が著しく多いということはない。砥石の出土量は多いようにみえるが、これは調査面積が広い為であり、1㎡比率の出土量に換算すればより多い地区は他にもある。つまり、石器組成の比率と木器貯蔵遺構分布は、相関性をもたないということになる。

なお、第69次調査区のSK-1137は大和第Ⅲ-3様式で、長軸3.46m、短軸2.90m、深さ3.00

mを測り、平面規模では類例もあるが、その深さは著しく深い。井戸としての機能が停止した後には、厚さ0.80mの粉層が中層として形成されている。粉層の形成を単なる廃棄とする考えもあろう。しかし、本坑より西10mで検出した大和第三 - 4 様式の第33次 S K - 111は、長軸3.00m、短軸2.70m、深さ2.25mと平面規模が S K - 1137に類似し、中層では同様に粉層が形成され上面に木製戈が置かれていた。さらに、丹塗盾の断片も出土している。近接するこれら大型の井戸は、中層に厚い粉層をもつという点で類似し、その上面に木製戈を置いた S K - 111の例から、機能停止後は農耕儀礼に用いられた可能性も想定されよう。

(3) 弥生時代中期後葉～後期初頭 (第246図)

南地区では、弥生時代中期後葉～後期初頭という段階も大きな画期である。すなわち、環濠である第69次 S D - 1109と区画溝である第69次 S D - 1101 B・1104 B、同じく区画溝である第61次 S D - 101 B・102 Bが掘削される。この地割りの変化とともに、第65次調査区において青銅器鑄造工房が確立する。第65次調査区では、それ以前は灰穴炉と考えられる炭灰土坑と排水溝と考えられる小溝が集中していたが、これらがなくなり井戸が集中して掘り込まれ

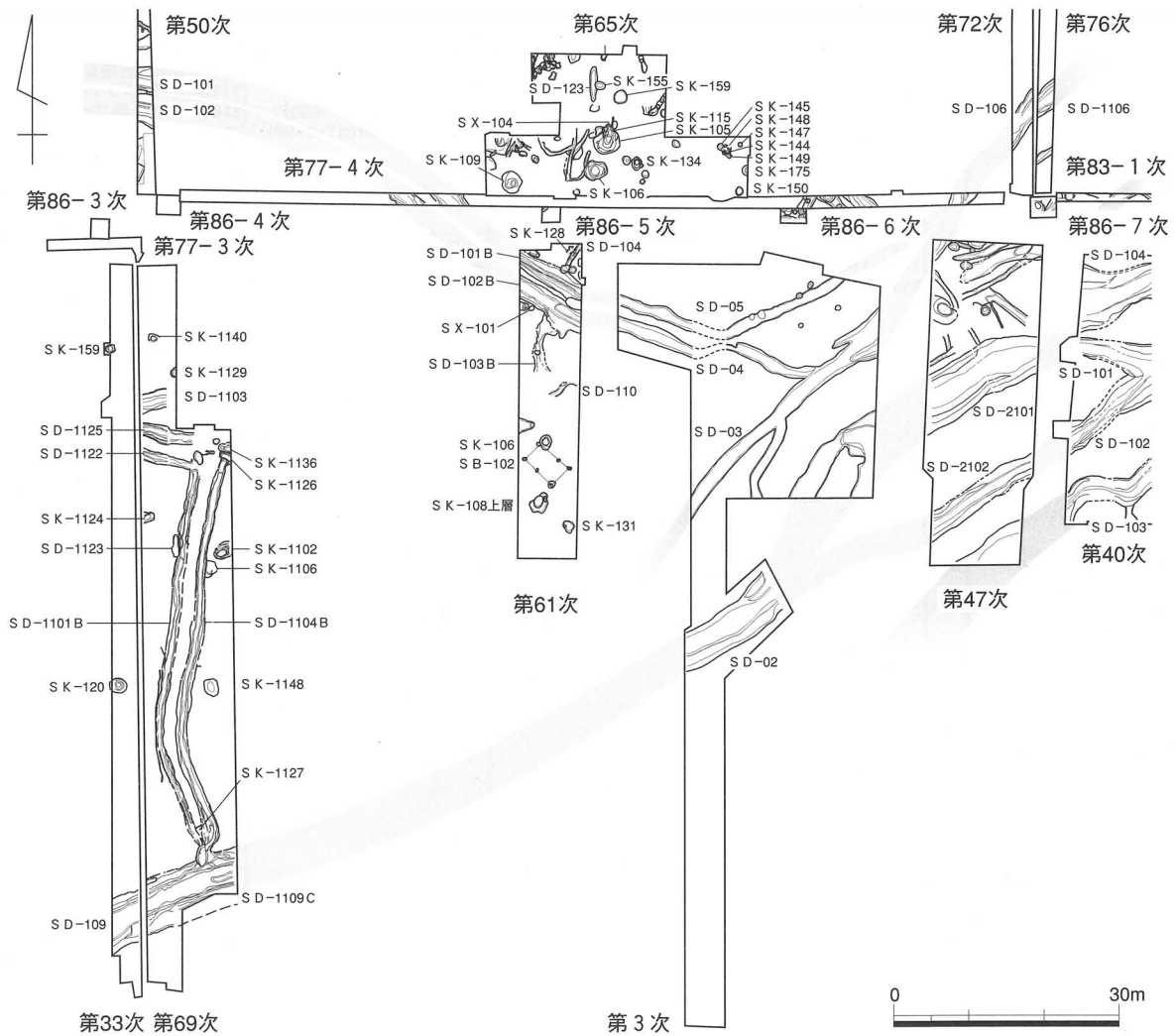


第245図 南地区 範囲 (内容) 確認調査の弥生時代中期中葉遺構分布図 (S = 1/1,000)

第35表 南地区 範囲 (内容) 確認調査の遺構・遺物変遷表 (3)

時期	土器様式	調査 次数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物
中期後葉	IV	61次	SK	102・111・112・122・126・ 127・131・137・138・139		138〔柱状片刃石斧 (S1066)〕	131〔絵画土器 (P5025)〕
			SD	110			
			SB	102			
			SX	101			
		65次	SK	107・108・109・113・114・ 116・117・118・121・123・ 124・126・128・129・131・ 132・133・144・147・148・ 149・152・154・159・162・ 163・164・166・167・168・ 170・173・174		108〔扁平片刃石斧 (S1077)〕 109〔用途不明石製品 (SP 1082・1083)〕 113〔砥石 (S1152)〕 118〔石錐 (SP1063)〕	109〔絵画土器 (P5038)、渦文 タタキ (P5142)、双頭渦文タタ キ (P5143)、土器片紡錘車 (D 5094)〕/126〔土器片紡錘車 (D5113)〕/131〔頭 (B5001)〕 148〔土器片円板 (D5158)〕 162〔丸玉 (A5023)〕
			SD	106・107・108・109・110・ 111・115・119・122・127		106〔柱状片刃石斧 (S1068)〕	
			SX	103			
		69次	SK	1102・1124・1126・1140・ 1148	1102〔弓 (W1031)、用途不明 品 (W1060)〕	1102〔投弾 (S1185)〕 1126〔石剣 (SP1013)、石錐 (S P1046)〕	1102〔注口土器 (台付鉢?) (P 5216)〕/1140〔双頭渦文タタ キ? (P5144)〕/1148〔土器片 紡錘車未成品 (D5142)〕
			SD	1103B・1128・1136			1103B〔絵画土器 (P5021・ 5051)、搬入土器 (P5581 (?))〕
		後期初頭	IV・V	61次	SK	106・136	
SD	101B・102B・103B・104					101B〔石鏃 (SP1024・1026・ 1038)、石錐 (S1027)、砥石 (S 1126・1135・1142)〕 102B〔石剣 (S1008)、石鏃 (SP 1028・1042)、石庖丁未成品 (S 1052)、柱状片刃石斧 (S 1065)、磨製石剣 (S1085)、砥 石 (S1121・1132・SP1098・ 1102)、敲石 (S1169)〕	101B〔絵画土器 (P5007・5019・ 5022・5061・5062)、土器文様 (P5133〔鏽歯文〕・5136〔鏽歯 文・刺突文〕)、双頭渦文タタキ (P5149)、広片口鉢 (P5204)、 搬入土器 (P5412〔瀬戸内系〕・ 5571(?))、有孔土玉 (D 5036)、土器片紡錘車 (D 5091)、極小玉 (A5009)〕/102 B〔絵画土器 (P5001・5011・ 5023・5027・5031・5035・5036・ 5048・5059)、土器文様 (P5130 〔鏽歯文〕)、双頭渦文タタキ (P 5150)、底部多角形土器 (P 5228)、搬入土器 (P5404〔吉 備〕・5429〔河内〕・5449〔近江〕・ 5547〔伊勢湾岸〕・5572(?))、 杓子形土製品 (D5022)、有孔 土玉 (D5042)、土器片紡錘車 (D5099)、土製紡錘車未成品 (D5128・5137・5143)、管玉 (A 5032・5037)、玉 (A5038)〕 103B〔絵画土器 (P5011)〕 104〔広片口鉢 (P5202)、土器 片円板 (D5164)〕
65次	SK			106・155		106〔石鏃 (SP1030)、磨石 (S 1179)〕	106〔渦文タタキ (P5142)、搬入 土器 (P5529〔伊勢湾岸〕)〕
	SD			104・123		104〔石鏃 (S1019)〕	123〔広片口鉢 (P5201)、搬入 土器 (P5401〔吉備〕・5465〔近 江〕)〕
	SX			104			
69次	SK			1133・1136			
	SD			1101B・1104B・1109C・ 1122・1123・1125・1126・ 1129	1109C〔平鍬未成品 (W1005・ 1006)、一木鋤 (W1017)、鋤の 柄 (W1020・1021)、泥除未成 品 (W1016)、用途不明品 (W 1024)、部材 (W1047)、梯子 (W1050・1051)、用途不明品 (W1066)〕	1101B〔石鏃 (S1015)、石錐 (S 1021・1025・1026・SP1049・ 1062)、石庖丁 (S1056)、用途 不明石製品 (S1102)、砥石 (S 1110・1111・1120・SP1099)、 投弾 (S1183)〕 1104B〔石錐 (SP1057)〕 1109C〔石庖丁 (S1040)、磨石 (S1178)〕 1122〔砥石 (S1123)、石錐 (S 1175)、石皿 (S1181)〕	1101B〔絵画土器 (P5041)、搬 入土器 (P5402〔吉備〕・5453 〔近江〕・5513〔伊勢湾岸〕・5557 〔伊勢湾岸〕)、用途不明土製品 (D5062)〕/1104B〔絵画土器 (P5058)、搬入土器 (P5427〔河 内〕)、用途不明品 (ヘラ状) (B P5009・5011)〕/1109C〔鈎状文 タタキ (P5152)、底部楕円形土 器 (壺?) (P5230)、塗布土器 (漆) (P5304)、搬入土器 (P 5403〔吉備〕・5414〔瀬戸内系〕・ 5433〔紀伊〕・5516〔伊勢湾 岸〕)〕/1122〔絵画土器 (P 5083)、銅釧 (M5413)〕/1123 〔絵画土器 (P5013)〕/1125〔絵 画土器 (P5010・5039・5055)、 土器文様 (P5112〔木葉文〕)、 双頭渦文タタキ (P5147)、搬入 土器 (P5569(?))・5575(?))〕 1126〔絵画土器 (P5034)〕

時期	土器様式	調査 次数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物	
後期初頭	V	61次	SK	128				
			SD					
		65次	SK		105・115・134・145・150・ 156・157・175	105〔木鏝(W1030)〕 115〔用途不明品(W1057)〕 134〔横槌(W1027)〕	105〔石鏝(SP1041)〕 150〔石庖丁未成品(S1054)〕	105〔渦文タタキ(P5145)、多孔 土器(鉢)(P5205)、有孔土玉 (D5039)、土器片紡錘車未成 品(D5131)〕/115〔円窓付土 器(壺)(P5224)、底部楕円形 土器(壺?) (P5231)、卜骨(B 5029・5031)〕/134〔搬入土器 (P5431(河内))、用途不明 土製品(D5065)、玉(再加工品) (A5013・5014・5015)、釣針 (B5008)、刺突具(B5014)、 用途不明品(ヘラ状)(BP5008)、 卜骨(B5027・5028・5030)〕/ 156〔土器片紡錘車未成品 (D5132)〕
			SD					
69次	SK		1106・1127・1129・1135					
	SD			1103			1103〔絵画土器(P5071)、搬入 土器(P5473(近江))、銅鏝形 土製品(D5003)〕	

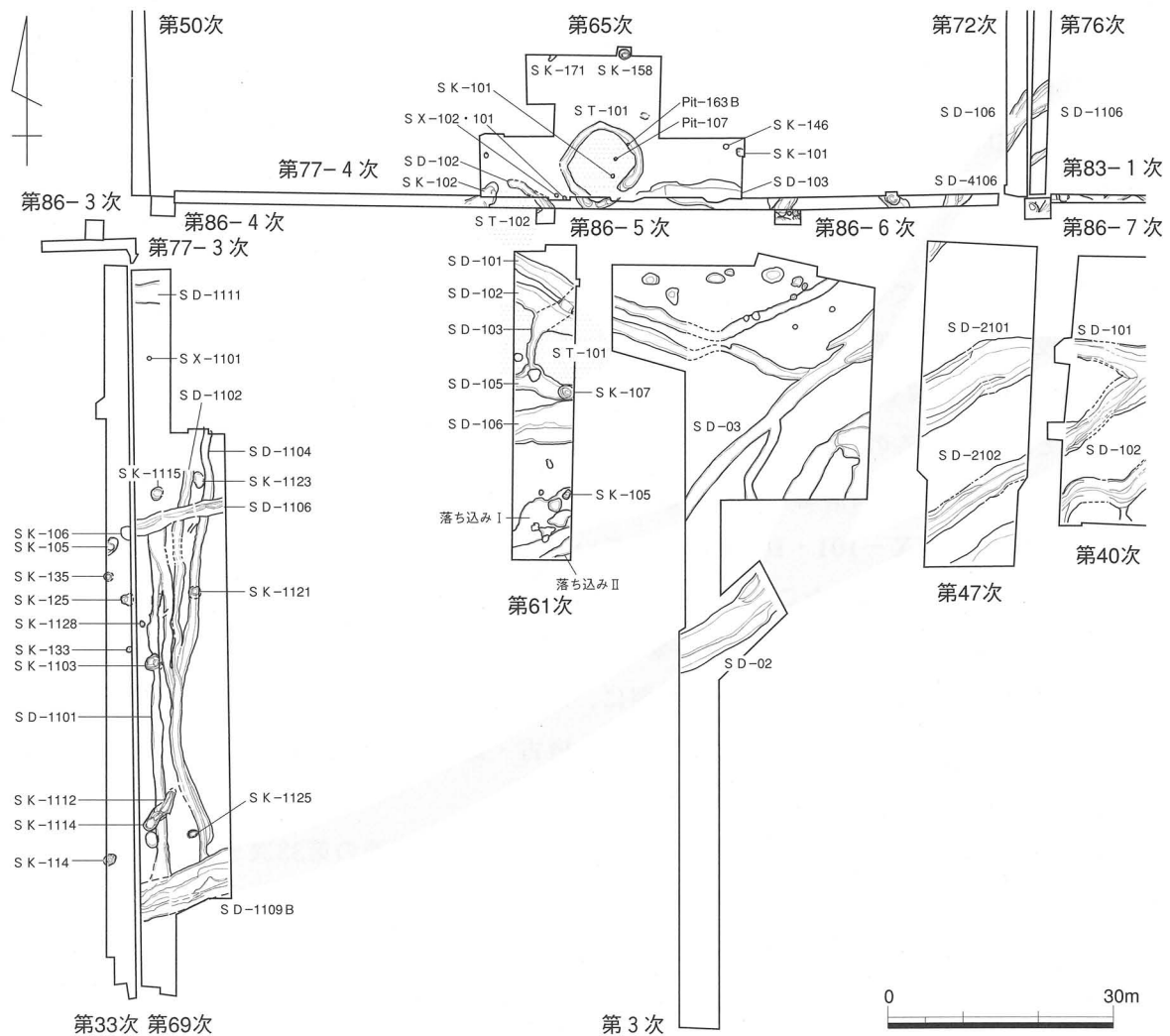


第246図 南地区 範囲(内容)確認調査の弥生時代中期後葉～後期初頭遺構分布図 (S = 1/1,000)

第36表 南地区 範囲 (内容) 確認調査の遺構・遺物変遷表 (4)

時期	土器様式	調査 次数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物	
後期	Ⅵ	61次	SK	103・105・107・109・110・ 113・114・119・121・133		114〔磨製石剣(S1090)〕	107〔土器片紡錘車(D5120)、 土器片紡錘車未成品(D 5139)〕 110〔丸玉(A5002)〕	
			SD	101・102・103・105・106		102〔大形石庖丁(SP1067)〕 103〔石庖丁(SP1066)、敲石 (S1171)〕 105〔磨石(S1180)〕 106〔石鏃(SP1031)〕	101〔絵画土器(P5026)、用途 不明土製品(D5059)〕 102〔土器片紡錘車(D5102)〕 103〔土器文様(P5133(鋸歯 文))、絵画土器(P5069)、器形 不明(P5225)、土器片紡錘車 (D5121)、丸玉(A5003)〕 105〔絵画土器(P5028)、土器 片紡錘車(D5108)、丸玉(A 5004)〕	
				落ち込みⅠ・Ⅱ		Ⅰ〔用途不明石製品(S1103)、 砥石(S1127)〕	Ⅰ〔勾玉(A5022)〕	
		65次	SK		101・125・146・151・171		146〔大型蛤刃石斧(S1060)〕 171〔小形方柱状片刃石斧(S 1070)〕	
			SD		103		103〔石鏃(S1013)、石錐(SP 1059)〕	103〔搬入土器(P5421(撰 津?))〕
			ST		101・102		SD-101N〔石鏃(SP1034)〕 SD-101E〔石錐(SP1051・ 1054)〕	SD-101E〔有孔土玉(D 5041)、無孔土玉(D5053)〕 SD-101W〔搬入土器(P5562 (伊勢湾岸))、無孔土玉(D 5048)〕 SD-102〔渦文タタキ(P5142)〕 SK-103〔渦文タタキ(P5142)〕
			SX		101・102			
		69次	SK		1101・1103・1104・1109・ 1112・1114・1115・1116・ 1121・1128	1112〔穂摘具(W1029)〕	1101〔石錐(SP1048)〕 1112〔敲石(S1158)〕 1114〔石鏃素材(SP1090)〕 1115〔石剣(SP1017・S1091)〕	1101〔土器片紡錘車(D5123)〕 1112〔矢羽状タタキ(P5159・ 5160)、搬入土器(P5410(瀬戸 内)・5506(伊勢湾岸)・5558 (伊勢湾岸))、土器片紡錘車 (D5112)〕 1114〔銅釧(M5414)〕 1121〔土器片紡錘車(D5101)〕
			SD		1101・1102・1102B・ 1104・1105・1109B・ 1111・1139		1101〔磨製石剣(S1083)、環状 石斧(S1092)、砥石(S1129)、 敲石(S1159)〕 1102〔石剣(SP1015)、石錐(S 1028・SP1050)、ミニチュア石 製品(S1099)、石鏃(S1109)、 砥石(SP1096・S1144)、石錐 (S1177)〕 1102B〔石錐(SP1047)、砥石 (S1154)〕 1104〔石剣(S1002・SP1018・ 1019)、石錐(SP1045・1056)、 扁平片刃石斧(S1078・SP 1075)、磨製石剣(S1082)、砥 石(S1125・1136)〕 1109B〔石剣(SP1001・1004・ 1011)、石鏃(SP1025)、小形 方柱状片刃石斧(S1071)、石 製紡錘車(S1095)、石鏃素材 (SP1091)、砥石(S1112・ 1114・1115・1128・1133・1139・ 1148)、敲石(S1165・1170・ 1172)、石槌(S1173・1174)、 投弾(S1184)〕 1111〔石剣(SP1016)〕	1101〔注口土器(台付鉢)(P 5213)〕 1102〔絵画土器(P5079・5080- 1)、鉤状文タタキ(P5151)、矢 羽状タタキ(P5157)、多孔土器 (鉢)(P5208)、搬入土器(P 5568(伊勢湾岸))、土器片紡 錘車(D5096・5126)、極小玉 (A5010・5011)〕 1102B〔絵画土器(P5067)、搬 入土器(P5560(伊勢湾岸))、 銅鏃(M5406・5410)〕 1104〔絵画土器(P5008・5045・ 5076・5080-2)、籠目土器(壺) (P5221)、搬入土器(P5443(近 江)・5456(近江)・5524(伊勢湾 岸)・5580(?))、銅鏃形土製 品(D5008)、有孔土玉(D 5043)、土器片紡錘車(D5100・ 5106・5109)、土器片紡錘車未 成品(D5129)、管玉?(A 5012)、管玉(A5029)〕 1109B〔絵画土器(P5065)、矢 羽状タタキ(P5158)、鳥形土器 (P5217)、塗布土器(漆?) (P 5305)、搬入土器(P5416(瀬戸 内系)・5452(近江)・5504(伊勢 湾岸)・5512(伊勢湾岸)・5561 (伊勢湾岸)・5566(伊勢湾 岸))〕 1111〔土器片紡錘車(D5086)〕
		SX		1101				

時期	土器様式	調査 次数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物	
古墳初頭	庄内・ 布留	61次	SK					
			SD					
		65次	SK	158	158〔平鍬(W1004)、泥除(W1015)〕			
			SD					
69次	SK	1123・1125						
	SD	1106・1109		1106〔敲石(S1162)〕 1109〔中形尖頭器(S1011)、石鍬(S1016)、砥石(SP1100・1104)〕	1106〔搬入土器(P5476(近江)・5555(伊勢湾岸))〕 1109〔絵画土器(P5002・5073)、手焙形土器(P5223)、搬入土器(P5453(近江)・5454(近江)・5455(近江)・5457(近江)・5514(伊勢湾岸)・5563(伊勢湾岸)・5568(伊勢湾岸))、銅鐸形土製品(D5007)、無孔土玉(D5046)、極小玉(A5008)〕			



第247図 南地区 範囲(内容)確認調査の弥生時代後期前葉～古墳時代初頭遺構分布図(S=1/1,000)

る。これを、居住域から工房への変化とみなすことは可能であろう。

青銅器鑄造関連遺物は、第65次調査区を中心として広がるがその範囲は半径50mほどと狭く、第40・47次調査区や第69次調査区からは、わずかな点数しか出土しない。その分布の中心にあるのが、焼土面をもつS X-104であり、炉跡状遺構と推定されている。青銅器鑄造関連遺物については、下層から大和第Ⅳ-2様式の土器が出土するS K-106・109においては上層で、下層から大和第Ⅴ-1様式の土器が出土するS K-134やS K-105・115においてはその下層で出土する。これによって、本地における青銅器生産の期間を想定することが可能である。なお、唐古・鍵遺跡からは、外縁付鈕2式と考えられる石製銅鐸鑄型片や、第61次調査区のS K-131から大和第Ⅲ-4様式の土器とともに送風管片(M5154)が出土しているが、これに対応する時期の青銅器鑄造工房遺構は未検出である。

そして、南地区における弥生時代中期後葉～後期初頭の画期は、青銅器鑄造工房だけではない。第69次調査区で検出したS D-1101B・1104Bはほぼ同規模の並行する区画溝で、環濠のS D-1109の手前で合流して取り付く。この環濠と区画溝は、弥生時代中期後葉の同時期に掘削されており、計画性がうかがえる。区画溝は東側に内湾し、その東側に想定される微高地を画するかのようである。第69次調査区では、銅鐸形土製品が4点(D5001・5003・5007・5008)と集中する。このことから区画溝の東側には、南地区の中核部が想定される。

(4) 弥生時代後期前葉～古墳時代初頭(第247図)

南地区では弥生時代後期前葉の遺構は、第33・69次調査区に偏る傾向がある。特に両調査区の中央付近では、第33次S K-125・133、第69次S K-1103といった多量に完形土器の出土する土坑が集中している。一方、第3・61・65次調査区付近では、第3次のPit-05が確認しうる程度で、密度は低い。

その第61・65次調査区においては、弥生時代後期後葉に方形周溝墓群が形成される。現在、確実と考えられるのは第61次S T-101、第65次S T-101・102の3基であるが、第61次S T-101の西側も方形周溝墓となる可能性はあろう。また、第65次S T-101とS T-102の間には、土器棺墓S X-101・102が作られている。その点から、第69次調査区の北側で土器棺墓のS X-1101を検出したことは、第61・65次調査区からの方形周溝墓群が第69次調査区まで広がる可能性を示しており、検討を要する。このように南地区では、環濠内において弥生時代後期後葉の墓域が形成される。同時期に、環濠である第33次S D-109・第69次S D-1109Bは、多量の土器を含んで埋没している。唐古・鍵遺跡の弥生時代後期後葉における集落構造の変質を示す一連の現象といえよう。

南地区における古墳時代初頭の遺構分布は散漫であるが、環濠の第33次S D-109・第69次S D-1109が再掘削されており、環濠集落としての意識が残っていたものと考えられる。また、古墳時代初頭の遺物を含む包含層が形成されており、浅い遺構が多いため確認できていない可能性もある。第69次S D-1106は、浅いが新たに掘削された溝であり、環濠S D-1109と本溝の間には古墳時代初頭の居住域が想定される。

第Ⅲ章 東環濠の調査

第1節 既往の調査と成果

本章における「東環濠」については、微高地及び遺構集中状況から区分された南・北・西地区とは異なり、今回の範囲（内容）確認調査分を報告するにあたって先の三地区とは区分するために、便宜的に用いた名称である。本報告で環濠部分は隣接する居住域の地区に割り振っているが、遺跡東側については周辺部の調査件数が少なく居住域の実態が不明であるため、「東環濠」として独立した章を設けている。

発掘調査による東環濠の確認は古い。昭和54年度に遺跡東側で第7・9次の2件の調査がおこなわれ、第7次では溝2条、第9次では溝4条を検出している。概要報告においては、このうち第7次調査区の西端で検出したSD-02が、第3次調査区のSD-02を再掘削した溝に連続するものとして捉えている。また、第9次調査で検出した溝4条のうち、南から3条目のSD-04を環濠とみなし、年代的矛盾を示しながらも第3次調査区のSD-05・07との関連を推測している。これら大溝による環濠の推定復原は、後の調査成果によって訂正されることになるが、それを集落の東限として把握したことについては今日の認識と何ら変わりはない。それは、先んじておこなわれていた第3次調査区におけるSD-01・02の南側及び第4次調査区での状況が、集落外の様相を示していたことに基づくところが多い。

昭和52年度におこなわれた第3次調査では、「SD01・02溝以南では砂層やバラス層の堆積が顕著で、また遺物をほとんど含まない自然流路と思われる溝状の落ち込みも数条確認されている」こと及びその走行方向から、SD-01・02を集落の南限を画した環濠とし、これより南側を集落外と想定した。続く昭和53年度におこなわれた第4次調査は、位置的に第3次調査区のSD-01・02よりも外側であり、土層状況・希薄な遺構もそのことを示していた。こうした縁辺部の状況や環濠と考えられる大溝の走行方向から遺跡東側については、昭和52年の調査再開からわずかの間に遺跡範囲を限定することができた。ただ、それ以後の遺跡東側の様相については、早い調査次数段階で範囲が確定したことや、周囲が水田ということもあり、平成6年度におこなわれた通学路改修に伴う第56次を除いて調査はなく、多くの不明な点を残していた。

こうしたなか、範囲（内容）確認として南地区でおこなった第61・65次調査で、弥生時代中期前葉の大溝群を埋没させた砂層を検出し、その供給源が問題となった。この砂層はさらに東側の第40・47次調査区でも環濠内で検出しており、遺跡南東方からの流入がうかがえた。このことから遺跡南東端は、砂層を供給した河と接する可能性が想定された。その場合、河は環濠に取り付くのか、あるいは環濠はなく居住域に常時流入していたのか、という疑問が生じた。

第37表 東環濠の調査一覧表

次数	調査地	原因	調査期間	調査面積	調査担当者	文献
第4次	鍵155他	小学校校舎増築	1978.4.22～5.15	580㎡	久野 邦雄 寺澤 薫	『昭和53年度 唐古・鍵遺跡 第4・5次発掘調査概報』1979年
第7次	鍵181-4	範囲確認	1980.1.23～2.14	100㎡	寺澤	『昭和54年度 唐古・鍵遺跡 第6・7・8・9次発掘調査概報』1980年
第9次	鍵196-2	水路改良	1980.4.5～4.19	200㎡	寺澤	『昭和54年度 唐古・鍵遺跡 第6・7・8・9次発掘調査概報』1980年
第10-a次	鍵2-5	駐在所建設	1980.10.17～10.19	80㎡	寺澤	『昭和55年度 唐古・鍵遺跡 第10・11次発掘調査概報』1981年
第10-b次	鍵193-1	池堤改修	1980.12.25	30㎡	寺澤	『昭和55年度 唐古・鍵遺跡 第10・11次発掘調査概報』1981年
第56次	法貴寺1085-2他	通学路整備	1994.11.17～12.9 1995.1.18～1.25	330㎡	清水 琢哉	『田原本町埋蔵文化財調査年報』5 1996年
第75次	鍵214	範囲(内容)確認	2000.1.6～3.27	320㎡	豆谷 和之	本報告
第78次	鍵202-1	範囲(内容)確認	2000.2.3～3.31	225㎡	豆谷	本報告
第83次	鍵184-2他東側道路、192-1南側道路	道路改良	2001.1.18～3.7	180㎡	豆谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』10 2001年
第91次	鍵155	小学校校舎建替	2002.12.2～2003.3.31	I.1253㎡ II.180㎡	豆谷 奥谷 知日朗	『田原本町埋蔵文化財調査年報』12 2003年

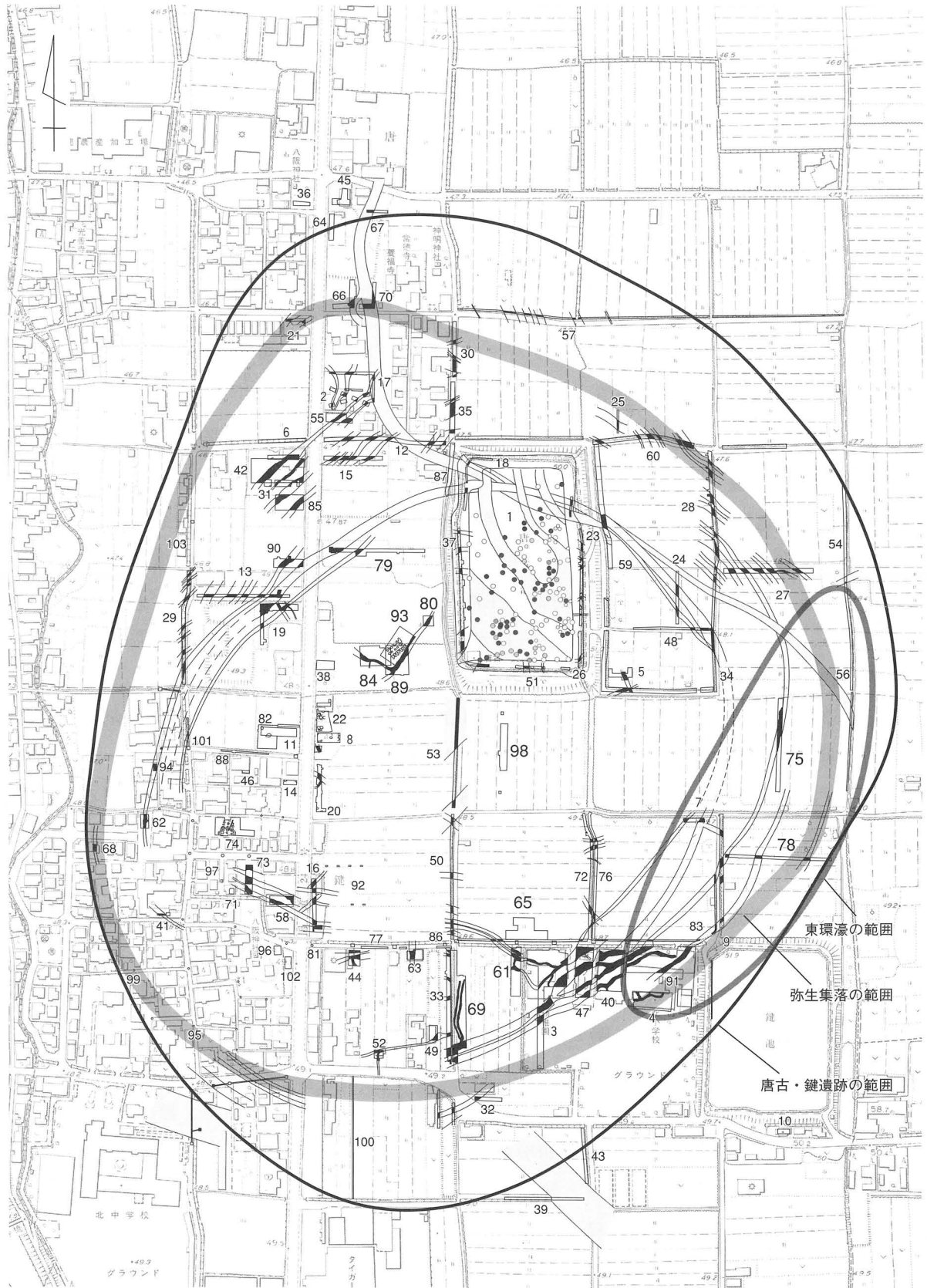
しかし、先述したように、遺跡東側の環濠部分については調査年次も古く、また水路工事等の充分とはいえない調査区幅のため、多くの不明部分を残していた。このため、平成11年度に範囲(内容)確認として第75・78次調査をおこない、東環濠の実態把握を試みた。その結果、少なくとも第9次調査区から北側の第27次調査区へと環濠は途切れることなくめぐり、砂層の供給源と考えられる河跡が環濠に並行していることが明らかとなった。そして、環濠と河跡の連結部が鍵池から北小学校にほぼ限定されたのである。

これより後、平成12年度に第83次として北小学校北側道路、平成14年度に第91次として北小学校を調査し、環濠と河跡の関係が明らかとなった。河跡は、南東側より現鍵池を斜めに横切るように流れて第91次調査区の2条の環濠に突き当たり、西側居住域と内側環濠の東肩に沿って北方へと分流していた。西側居住域への流れ込みは一時的なものであり、内側環濠の東肩に沿った北方への流れが恒常的な流路になると考えられる。一部では、河から環濠への引き込みとなるような掘り込みを確認しており、人の手の加わっていることが考えられる。また、第91次調査区の環濠間からは、弥生時代中期前葉の方形周溝墓を2(3?)基検出した。第91次調査区よりもさらに東側の鍵池については、唐古池と同様に国道敷設のため昭和12(1937)年に土取りがおこなわれ遺物が出土しているが、その詳細は明らかでない。

今回の既往の調査報告にあたっては、環濠帯と東縁辺部のその他として分けた。

1. 環濠帯 : 第7・9・83・91次
2. その他(周辺) : 第4・10・56次

なお、東環濠の範囲(内容)確認調査分として、第75・78次調査がある。第75・78次は環濠帯に関する調査である。第2節以下に詳細を報告している。



第248図 東環濠の位置 (S = 1/5,000)

1. 環濠帯

第7・9・83・91次調査

a. 第7次調査

調査区 第7次調査区は、唐古池と鍵池の間に位置する島畑で、東に第9次調査区が隣接する。遺跡東限の範囲確認を目的として、田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をおこなった。調査区は、東西20m、南北5mの長方形に設定した。

遺構検出面 本調査区では、弥生時代中期～後期の遺構検出面を確認した。弥生時代中期～後期の

遺構検出面は第Ⅶ層：灰黄色砂礫の上面で、標高47.60mである。弥生時代中期の土器片を含む第Ⅶ層：灰黄色砂礫は、厚さが1.10m以上もあり、下層の調査については断念している。

検出遺構 本調査区では、東西両端で弥生時代後期の溝2条を検出した。両溝は、北東－南西に並走する。調査区東端のSD-01が弥生時代後期初頭、西端のSD-02が弥生時代後期中葉である。なお、SD-01の西側で柱穴群が検出されているが、その詳細は不明である。

弥生時代後期：溝2条

備考 本調査区では、2条の溝を検出した。調査区東端のSD-01は、東肩が調査区外のため幅は不明であるが、深さは0.30mと浅い。調査者は、土坑になる可能性も示唆している。多量の大和第Ⅴ様式土器が出土した。調査区西端のSD-02は、幅2.60m、深さ1.00mを測る。堆積土には多量の大和第Ⅵ様式土器を含み、下層から大和第Ⅵ-2様式の完形広口壺が出土した。

b. 第9次調査

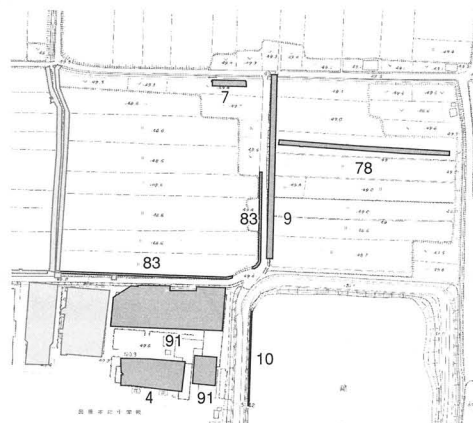
調査区 第9次調査区は、田原本北小学校の北東隅から北に向かって延びる南北道路の東側水路部分であり、その北西には第7次調査区が隣接する。水路改良工事に伴う緊急発掘調査で、田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所が調査をおこなった。調査区は、水路に沿って南北に長く、長さ100m、幅2mで設定されている。

遺構検出面 本調査区では、弥生時代中期～後期の遺構検出面を確認した。弥生時代中期～後期の遺構検出面は、第Ⅷ層：淡黄灰褐色シルトまたは灰色砂礫の上面で、標高47.70mである。鍵池にちかい調査区南部では、第Ⅷ層の上面に黄褐色土が堆積している。

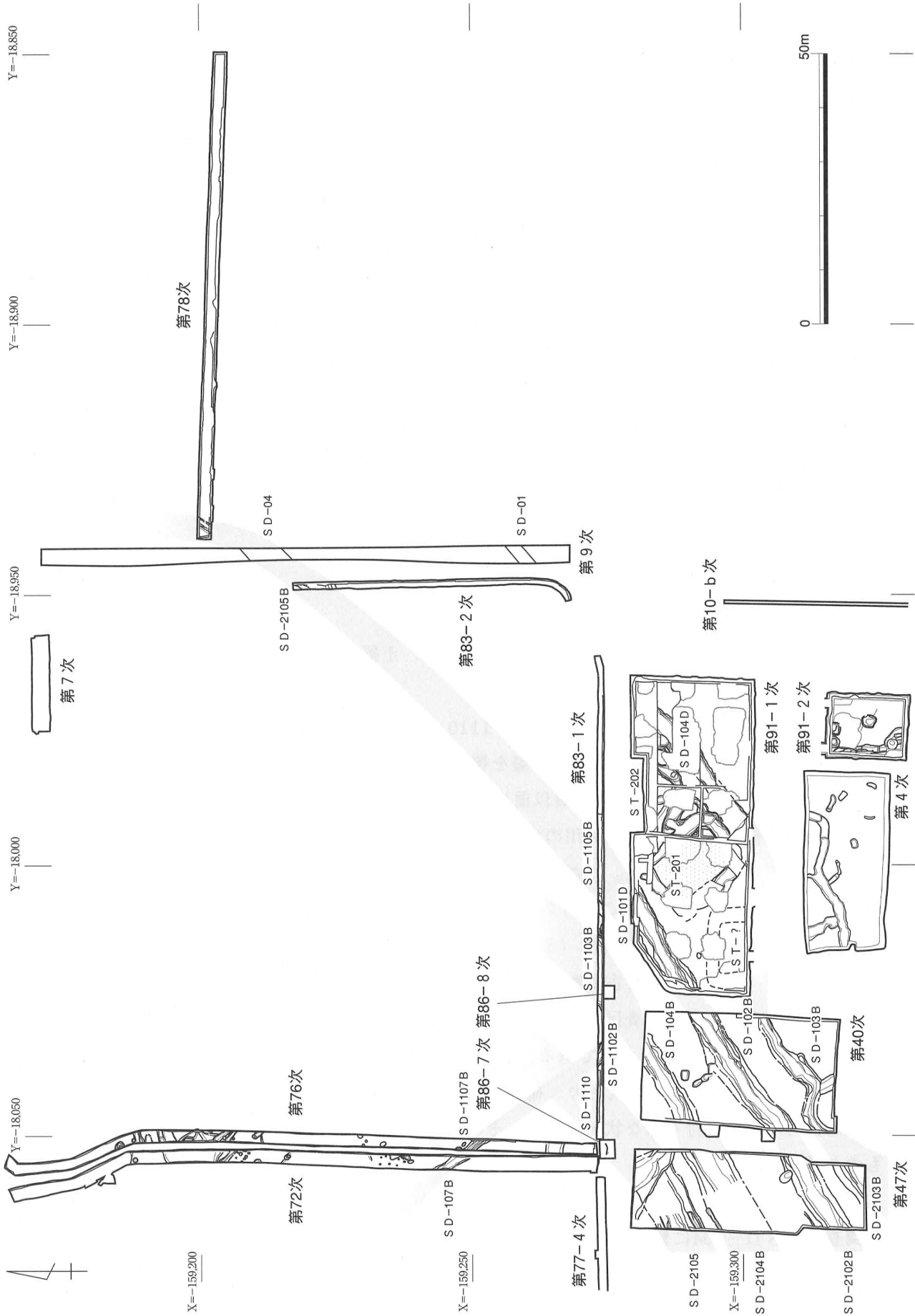
検出遺構 本調査区では、4条の溝と柱穴1基を検出した。

弥生時代後期初頭：大溝3条、溝1条

備考 4条の溝（南から北へ順にSD-01・03・04・02）のうち、調査区北側にあつて北西－南東に走行するSD-02を除いて、SD-01・03・04の3条はいずれも北東－南西に走行する。このうち、規模の大きいSD-04が環濠になると概報では考えられている。



第249図 環濠帯調査区的位置 (S=1/4,000)



第250図 環濠帯① 弥生時代中期遺構配置図 (S = 1/1,000)

c.第83次調査

調査区 第83次調査区は、田原本北小学校の北側にある東西道路（第1調査区）と、その東端から北側に延びる南北道路（第2調査区）であり、南に第40・91次調査区が、東に第9次調査区が隣接する。道路改良工事に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。第1調査区は長さ約89.0m、幅約1.2m、第2調査区は長さ約52.0m、幅約1.4mで設定している。

遺構検出面 本調査区では、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構検出面を確認した。弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構検出面は、第Ⅶ層：褐灰色粘質土の上面で、標高48.00mである。

検出遺構 第1調査区では、弥生時代中期～後期の北東－南西に走行する大溝を4条（西から東へ順にS D－1110・1103 B・1105 B・1109）検出した。そのうち、東側の2条（S D－1105 B・1109）は第2調査区でも検出し（S D－2105 B・2109）、一連のものである。これら大溝は、環濠となる可能性が高い。

第1調査区

弥生時代中期：大溝3条、溝1条

弥生時代後期：大溝3条（再掘削2条）、溝3条（再掘削1条）

古墳時代初頭：溝1条

第2調査区

弥生時代中期：大溝1条、河跡1条

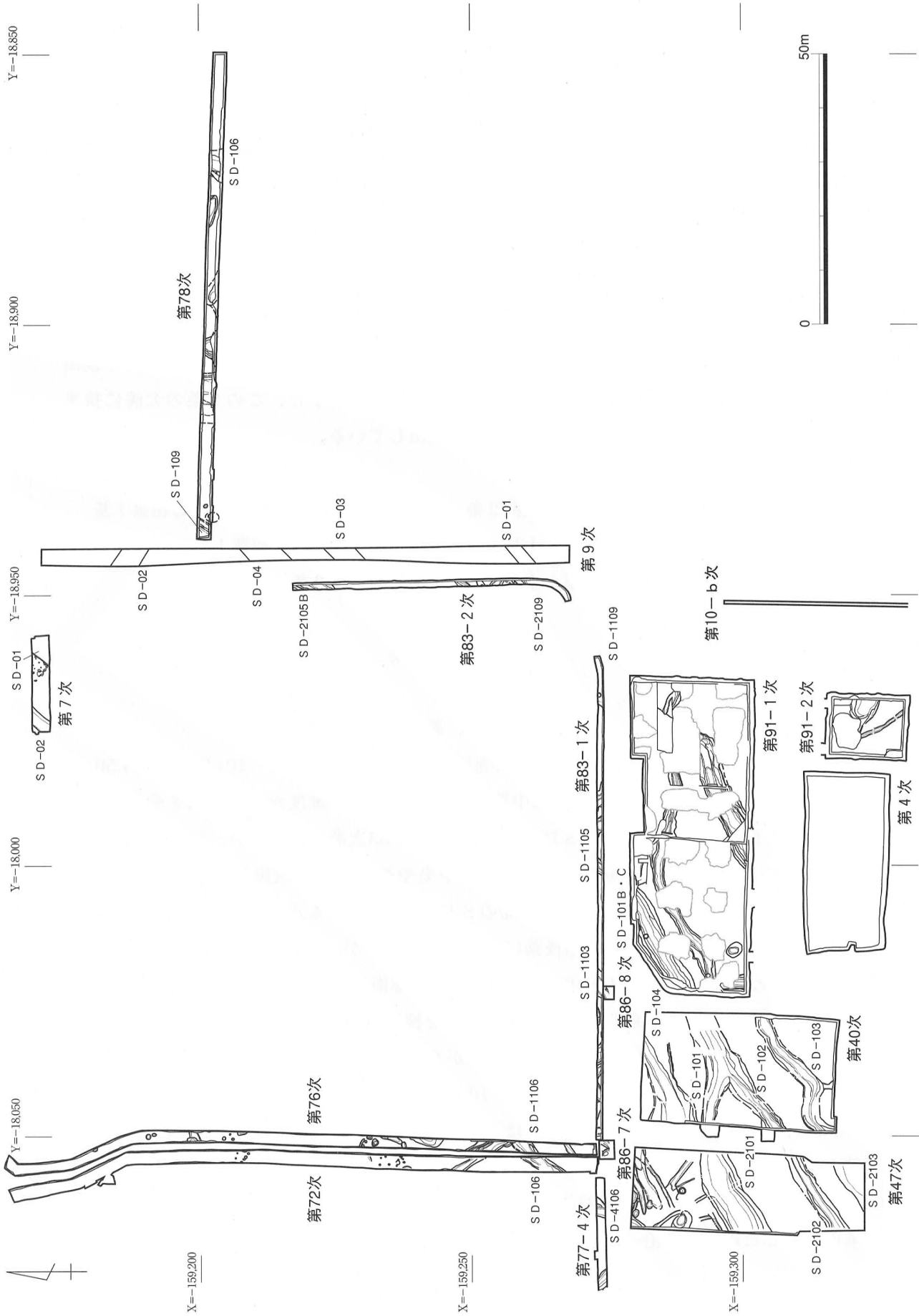
弥生時代後期：大溝2条（再掘削1条）、溝2条、土器棺墓1基

古墳時代初頭：竪穴住居跡？1棟

備考 環濠と考えられる大溝4条（S D－1110・1103 B・1105 B・1109）のうち、S D－1110・1103 B・1105 Bは、下層の植物層を覆った弥生時代中期中葉の粗砂で埋没する。おそらく、その掘削は弥生時代中期中葉以前に遡るものと考えられる。S D－1109については、弥生時代中期後葉に形成された河川の堆積と考えられる灰色シルトを切り込むことから、弥生時代後期初頭の溝と判断した。ただし、下層には植物層があり、弥生時代中期に遡る先行溝の堆積の可能性も考えられる。このうち、S D－1103 B・1105 Bについては、その粗砂層を切って弥生時代後期初頭に再掘削溝（S D－1103・1105）が掘り込まれている。S D－1105については、再々掘削を受けて古墳時代初頭まで開口する。

S D－1105 Bは、第1調査区の検出面における溝幅が約23.0mにも及ぶが、これは東側の淡褐色シルトの堆積も含めたものである。また、同一溝である第2調査区のS D－2105 Bにおいても、南肩は粗砂に切られており、確認することができなかった。おそらくは、弥生時代中期段階は河川が取り付く様な状況であり、その南肩の立ち上がりが不明瞭な状態になっているものと考えられる。

S D－1110は、第47次調査区のS D－2105に繋がると考えられる。S D－1103 Bは、第40次調査区のS D－104に繋がると考えられる。一連のS D－1105 B・2105 Bは、第40次調査区のS D－102 Bに繋がり、環濠になると考えられる。



第251図 環濠帯① 弥生時代後期初頭遺構配置図 (S = 1/1,000)

d.第91次調査

調査区 第91次調査区は、田原本北小学校の敷地内にあたり、南に第4次調査区、西に第40次調査区が隣接する。北小学校の北校舎及び調理室の建て替えに伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、北校舎建設予定地を第1調査区とし東西60m、南北22m、調理室建設予定地を第2調査区とし東西12m、南北15mに設定した。

遺構検出面 本調査区では、弥生時代中期～古墳時代初頭と弥生時代前期～中期初頭の2面の遺構検出面を確認した。弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構検出面は、第Ⅶ層：褐色粘質土（微砂質）の上面で、標高48.00mである。弥生時代前期～弥生時代中期初頭の遺構検出面は、第Ⅶ層：黒褐色粘土の上面で、標高47.80mである。

検出遺構 調査区の西端と中央やや東寄り、東北東－西南西で並走する2条の大溝を検出した。唐古・鍵弥生集落の南東部を囲んだ環濠と考えられる。また、この2条の大溝に挟まれた弥生時代中期前葉の方形周溝墓を2（3?）基検出している。

第1調査区

弥生時代中期前葉 : 大溝2条、方形周溝墓2（3?）基、土器棺墓1基

弥生時代中期中葉～後期初頭 : 土坑1基、大溝2条、溝1条、河跡1条

弥生時代後期後葉～古墳時代初頭 : 土坑6基、大溝2条、溝3条

第2調査区

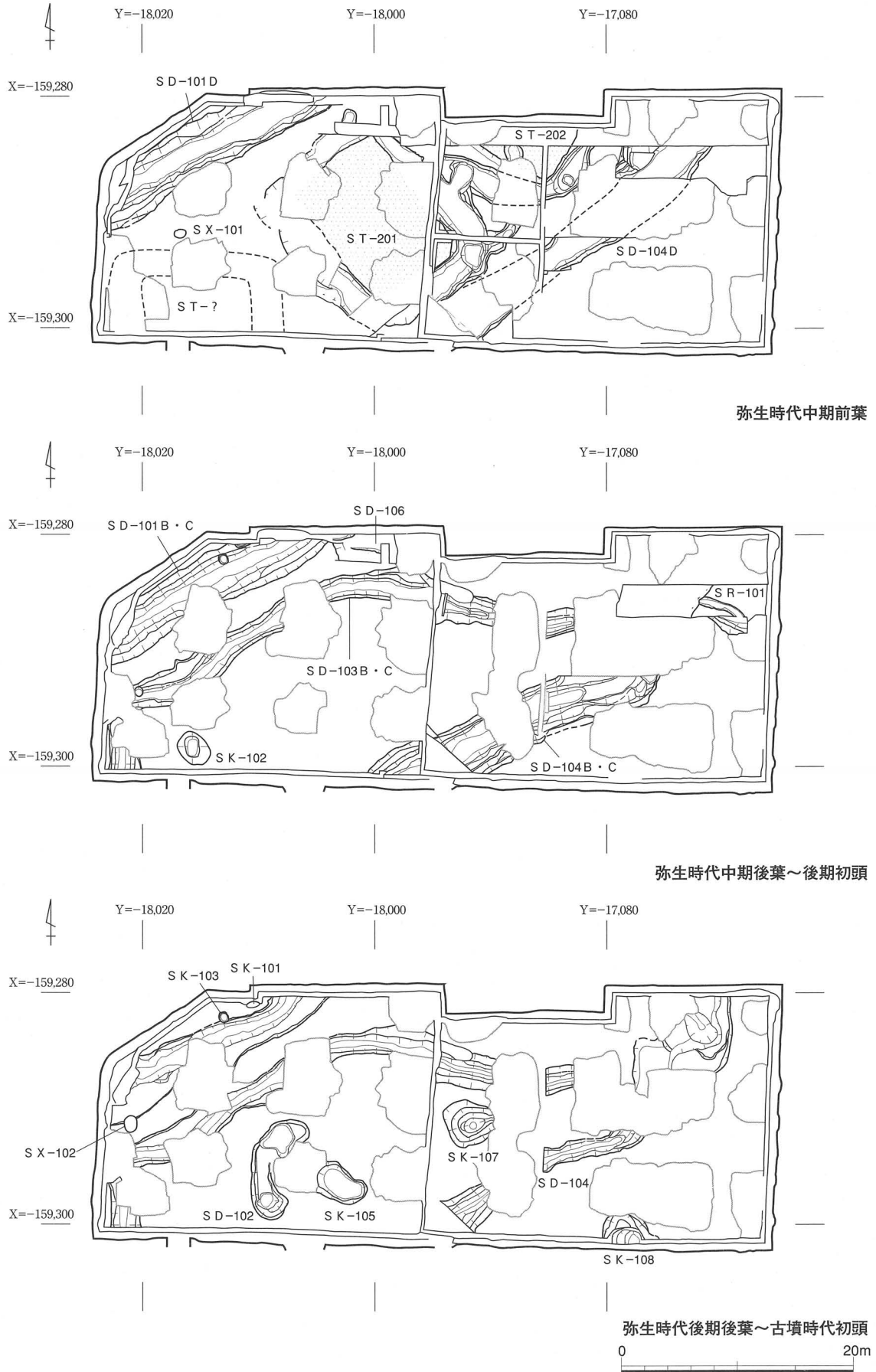
弥生時代前期 : 土坑5基、溝1条

弥生時代中期 : 溝2条

古墳時代初頭 : 土坑3基、溝1条

備考 環濠と考えられる大溝2条のうち、調査区西端で検出したSD-101Dは、幅4.50m、深さは約1.8mを測る。本溝は、弥生時代中期前葉に掘削され、幾度かの再掘削を受け布留期まで継続する。西は第40次調査区のSD-102に、東は第83次調査区のSD-1105B・2105Bに繋がり、その総延長は約300mに及ぶ。調査区中央やや東寄りで検出したSD-104Dは、幅4.00m、深さは約1.4mを測る。本溝は、先のSD-101Dよりも古く弥生時代中期初頭に掘削された可能性がある。弥生時代中期後葉に再掘削を受けるが、その東端は徐々に底面が高くなりSR-101と合流する。SR-101は、唐古・鍵遺跡南地区に多量の砂層を供給したと考えられる河跡である。調査区東側においてその南肩を検出した。北肩は調査区外であり、河幅は不明である。深さは0.90mを測る。粗砂と粘土が互層堆積する。東側底面では、杭が東西一列に打ち込まれていた。SD-106は、SR-101をSD-101Dに連結させたと考えられる溝である。南肩を検出するのに止まり、全形は不明である。

環濠と考えられるSD-101D・104Dに挟まれて、弥生時代中期前葉の方形周溝墓を2（3?）基検出した。付近では、同時期の土器棺墓であるSX-101を検出している。この方形周溝墓の埋没した周溝上に沿って、弥生時代後期初頭のSD-103が掘削され、布留期まで継続する。



第252図 第91次調査 第1調査区遺構配置図 (S = 1/500)

2. その他（周辺）

第56次調査

調査区 第56次調査区は、遺跡範囲の東端にあたり、北に第54次調査区、北西に第27調査区が隣接する。通学路整備工事に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査は南北水路に沿って総延長180mにも及び、工事工程との関係から2区に分け、長さ93m、幅2.5mの北半をⅠ区、長さ84m、幅1.2mの南半をⅡ区としている。

遺構検出面 本調査区では、弥生時代～古墳時代の遺構検出面を確認した。弥生時代～古墳時代の遺構検出面は、第Ⅴ層：茶灰色粘質土（砂質）の上面で標高47.40mである。

検出遺構 本調査区全体が河跡による堆積であった。その中に数ヶ所深く切れ込む所があり、これを河跡として捉えた。

弥生時代前期 : 河跡2条

弥生時代中・後期 : 河跡7条

古墳時代後期 : 河跡1条

備考 本調査区は、環濠帯外側の様相を示しているものと考えられる。遺跡の東側では、河が複雑に流れていたことが明らかとなった。弥生時代前期の河跡は、遺跡中心部に向かって西西北西に延びていた。弥生時代中期後葉の河跡は、ほぼ北に向かって蛇行するとみられる。弥生時代後期の河跡は、南西から北東に延びる。そして、古墳時代後期の河跡は北西に流れ、第27次調査区の河道Ⅰ・Ⅱへと繋がる。

このうち、Ⅰ区南端とⅡ区北端にわたって検出した弥生時代後期初頭のSR-103Eからは、半完形のものも含め21個体の完形小型土器群が出土した。粘砂の上位と下位で2群に分かれて出土しており、多少の時間差が考えられる。このうち、上位から出土した甕・壺・鉢・高坏の4個体は、口縁部を東に向け整然と南北に並んでいた。

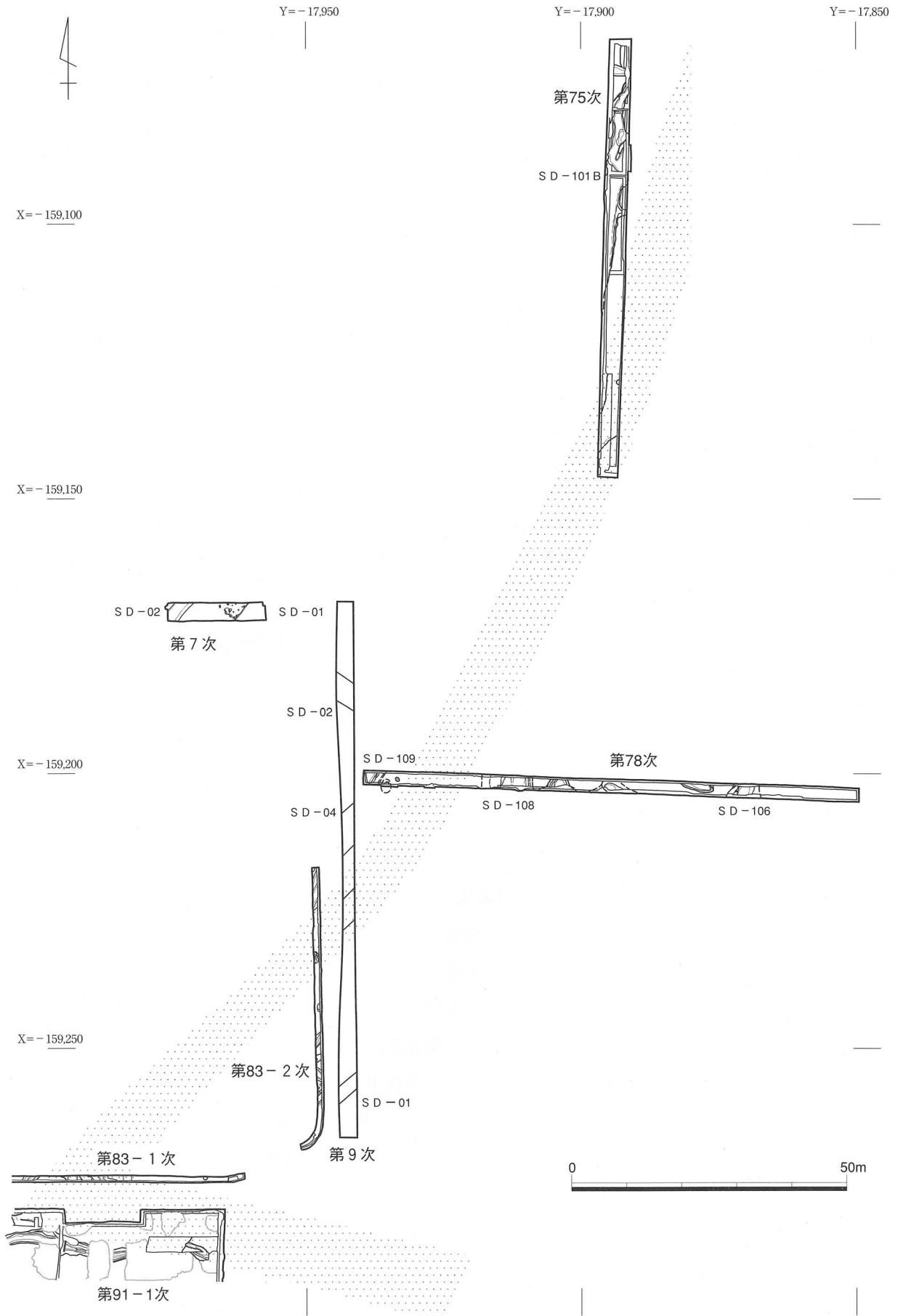
また、Ⅰ区北端のSR-102Aからも弥生時代後期初頭の完形に復原できる壺、高坏片などが出土している。河川あるいは方形周溝墓の供献土器の可能性を想定することができる。

第4次調査

調査区 第4次調査区は、遺跡範囲の南東端にあたり、北に第91次調査区、北西に第40次調査区が隣接する。北小学校校舎の増築に伴い、田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をおこなった。調査区は、東西約34.0m、南北は西辺が14.5m、東辺が約15.5m



第253図 第56次調査区の位置（S=1/4,000）



第254図 環濠帯② 弥生時代中期後葉～後期初頭遺構配置図 (S = 1/1,000)

のややひずんだ長方形で設定している。

遺構検出面 本調査区では、弥生時代前期の土器片を含んだ第Ⅴ層：黒灰色粘質土の直下、標高47.25mにおいて黄灰色土の上面を検出している。黄灰色土は、第Ⅵ層：青灰色シルトの上面で部分的に堆積したもので、弥生時代前期遺構の検出面となる可能性がある。

検出遺構 本調査区では、遺構を黄灰色土の上面、それが無い所では第Ⅵ層：青灰色シルトの上面で検出した。調査区北西で溝状遺構、南東で土坑群を検出している。

弥生時代前期？：土坑7基、溝状遺構1条

弥生時代中期：溝状遺構1条

備考 本調査区は、環濠外側の状況を示すものと考えられる。土坑群は、概要報告において土壙墓の可能性が想定されている。

第10－a次調査

調査区 第10次調査は、昭和55年度に遺跡範囲の南東端にあたる鍵池周辺でおこなわれた2件の調査をまとめたものである。第10－a次調査区は、鍵池南側にあたる。田原本署鍵駐在所建設工事に伴い、田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をおこなった。調査区は、東西20m、南北4mの長方形のトレンチを設定した。

遺構検出面 本調査区では、遺構検出面を確認できず、標高47.10mにおいて第Ⅵ層：青灰色シルトの上面を検出した。

検出遺構 本調査区では、遺構を確認できなかった。第Ⅴ層：黒灰色粘質土は多量の植物遺存体（樹枝・葉・桿など）を含み、中世以前の湿地状態にあったものと考えられる。

備考 本調査区は、集落外側の様相を示すものと考えられる。

第10－b次調査

調査区 第10－b次調査区は、遺跡範囲南東端にあたる鍵池の西岸部分である。西岸の擁壁工事に伴い、奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をおこなった。擁壁基礎部分の長さ60m、幅0.6mについてわずか1日の調査であり、工事立会的なものといえよう。

遺構検出面 本調査区では、標高48.00mにおいて第Ⅵ層：黄灰色粘砂の上面を検出している。概要報告においては、この面を弥生時代中・後期遺構検出面と想定している。この点に関しては、第91次調査の弥生時代中期～古墳時代初頭遺構検出面の標高とも矛盾はない。

検出遺構 本調査区では、遺構を確認できなかった。第Ⅴ層：黒褐色土は、集落内部の遺物包含層に対応するものと概要報告では考えているが、遺物の量は極めて少なく、弥生土器あるいは古式土師器の細片を数点検出したにとどまる。

備考 概要報告では本調査区について、集落外側の様相を示すが、弥生時代中・後期の遺構検出面と考えられる第Ⅵ層：黄灰色粘砂を検出しているため、第10－a次調査区に比べて集落に接したものと考えている。

第2節 第75次調査報告

1. 調査の経緯

平成11年度は、唐古・鍵遺跡における範囲（内容）確認調査の4年目にあたる。これまでの南地区に重点を置いた範囲（内容）確認調査のうち、第61・65次で弥生時代中期中葉に形成された厚い砂層を検出しており、その供給元が一つの問題となっていた。これと同様な砂層は、第3・40・47次調査で遺跡南東側における環濠帯からも検出しており、遺跡東側からの洪水による形成が想定された。しかし、東環濠での調査は少なく、弥生時代中期段階における環濠と洪水を引き起こした河川との関係が不明であった。

これまでの成果を踏まえ、平成11年7月5日に開催された調査検討委員会では、平成11年度以降の調査計画が検討された。委員からは、「遺跡東側における調査が手薄であり、東環濠部分の実態が明らかでない」との指摘があった。これを承けた田原本町教育委員会では平成11年度の範囲（内容）確認調査地について、東環濠及び遺跡周縁部の実態解明を目的として選地をおこなった。その結果、大字鍵214番の南北に長い水田が、休耕地と判明した。本地は、環濠と考えられる大溝を検出した第9次調査区に隣接し、東環濠についての情報が期待された。



第255図 第75次調査区の位置 (S = 1/2,000)

2. 調査の方法

調査は、鍵池の北側で鍵214番の長さ93m、幅20mと南北に長い休耕田でおこなった。調査区は、南北に長い水田の形状にあわせ長さ80m、幅4mの面積320㎡に設定した(第255図)。遺構掘削は、安全確保のため周囲に幅0.5mの犬走りを設けた。環濠の位置・方向の確認を調査の第1目的とし、弥生時代後期初頭～中世遺構検出面以下は部分的な掘削に止めた。

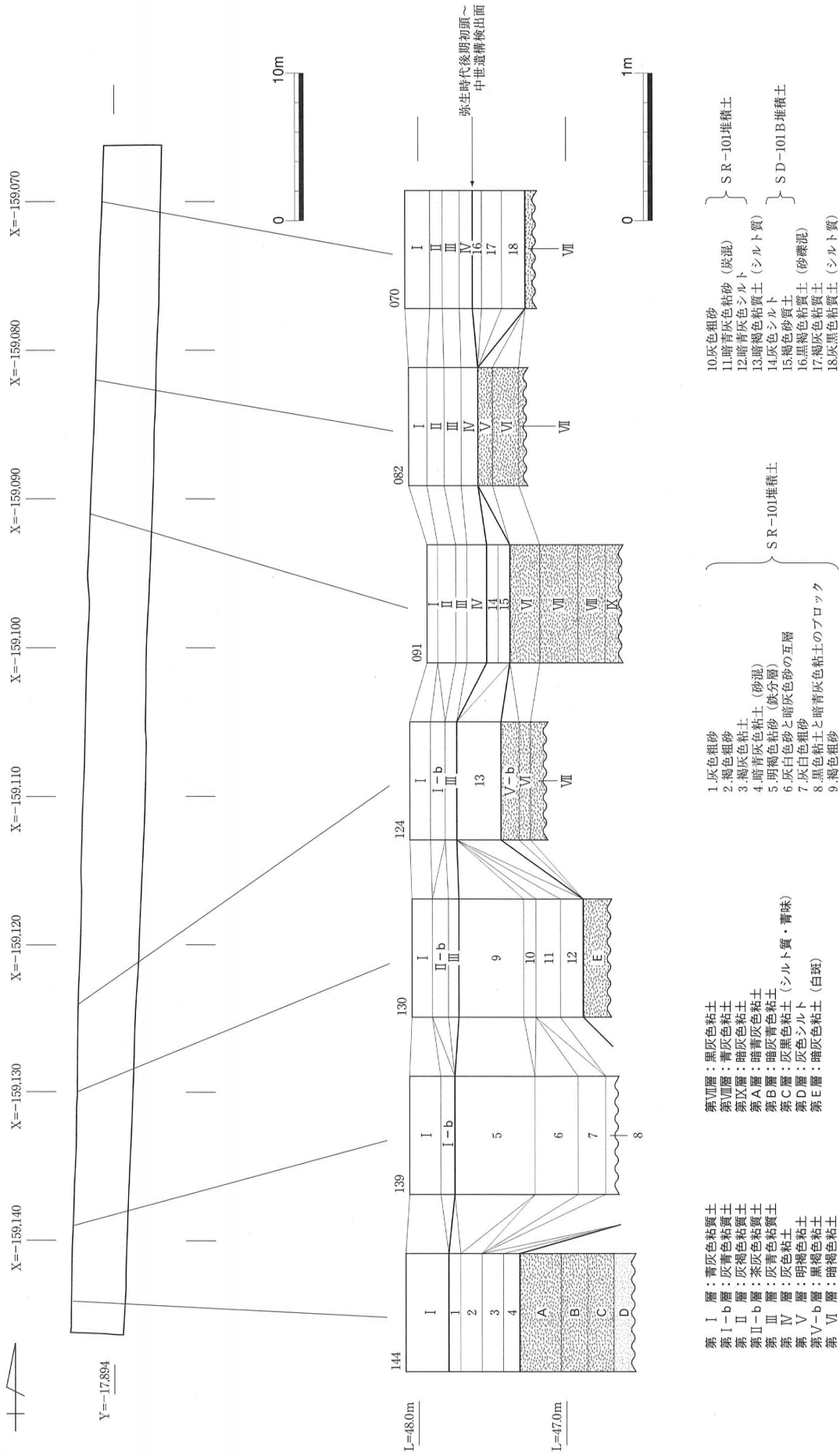
調査期間は、平成12(2000)年1月6日から3月27日までで、実働日数は54日間である。出土遺物総数は、コンテナ36箱である。

3. 層序

第75次調査区は遺跡の東縁辺にあたり、河川による浸食及び堆積作用が激しく、安定した土層堆積がほとんど認められない状態である。ただし、弥生時代中期前葉に環濠SD-101Cが掘削されるラインは、微高地から低地部への落ち際にあたり、その西肩及び周辺が基本層序と呼び得る安定した土層堆積となる。このうち、SD-101C東肩のX=-159.091m付近は、良好な堆積状態を示し最も深くまで土層を確認した。以下の通りである(第256図)。

第Ⅰ層：青灰色粘質土	〔水田耕土、	厚さ約0.1m：標高48.10m〕
第Ⅱ層：灰褐色粘質土	〔水田床土1、	厚さ約0.1m：標高47.90m〕
第Ⅲ層：灰黄色粘質土	〔水田床土2、	厚さ約0.1m：標高47.80m〕
第Ⅳ層：灰色粘質土	〔中世遺物包含層、	厚さ約0.2m：標高47.70m〕
(この間約0.3mは、洪水堆積とでもいふべきシルト層。他地点においては、標高47.50mで第Ⅴ層：明褐色粘土の上面を検出する。)		
第Ⅵ層：暗褐色粘質土	〔ベース？	厚さ約0.1m：標高47.10m〕
第Ⅶ層：黒灰色粘土	〔ベース？	厚さ0.16m：標高47.00m〕
第Ⅷ層：青灰色粘土	〔ベース？	厚さ0.14m：標高46.84m〕
第Ⅸ層：暗青灰色粘土	〔ベース、	厚さ約0.2m：標高46.70m〕
第Ⅹ層：青灰色シルト	〔ベース、	厚さ0.16m：標高46.50m〕
第Ⅺ層：黒色粘土	〔ベース、	厚さ約0.3m：標高46.34m〕
第Ⅻ層：青灰色シルト	〔ベース	：標高46.04m〕

本調査区では、標高47.50m前後を弥生時代後期初頭～中世の遺構検出面としている。しかし、検出面の土層及び標高は一定せず、地点によって様々に変化する。例えば、弥生時代後期初頭の環濠であるSD-101Bは、X=-159.082m付近の西肩が第Ⅴ層：明褐色粘土の上面標高47.50mを検出面とするのに対し、東肩はその標高では検出し得ず、厚さ約0.3mのシルト層を除去した第Ⅵ層：暗褐色粘質土の上面が検出面となっている。なお、第Ⅴ層：明褐色粘土は、基本的には第Ⅵ層：暗褐色粘質土と同じ堆積層であり、鉄分による変色と考えられる。



第256図 第75次調査区配置図と基本土層図 (トレンチ枠: S=1/400、柱状図: S=1/40)

- 第 I 層: 青灰色粘質土
- 第 I-b 層: 灰青色粘質土
- 第 II 層: 灰褐色粘質土
- 第 III 層: 茶灰色粘質土
- 第 IV 層: 灰青色粘土
- 第 V 層: 明褐色粘土
- 第 V-b 層: 黒褐色粘土
- 第 VI 層: 暗褐色粘土

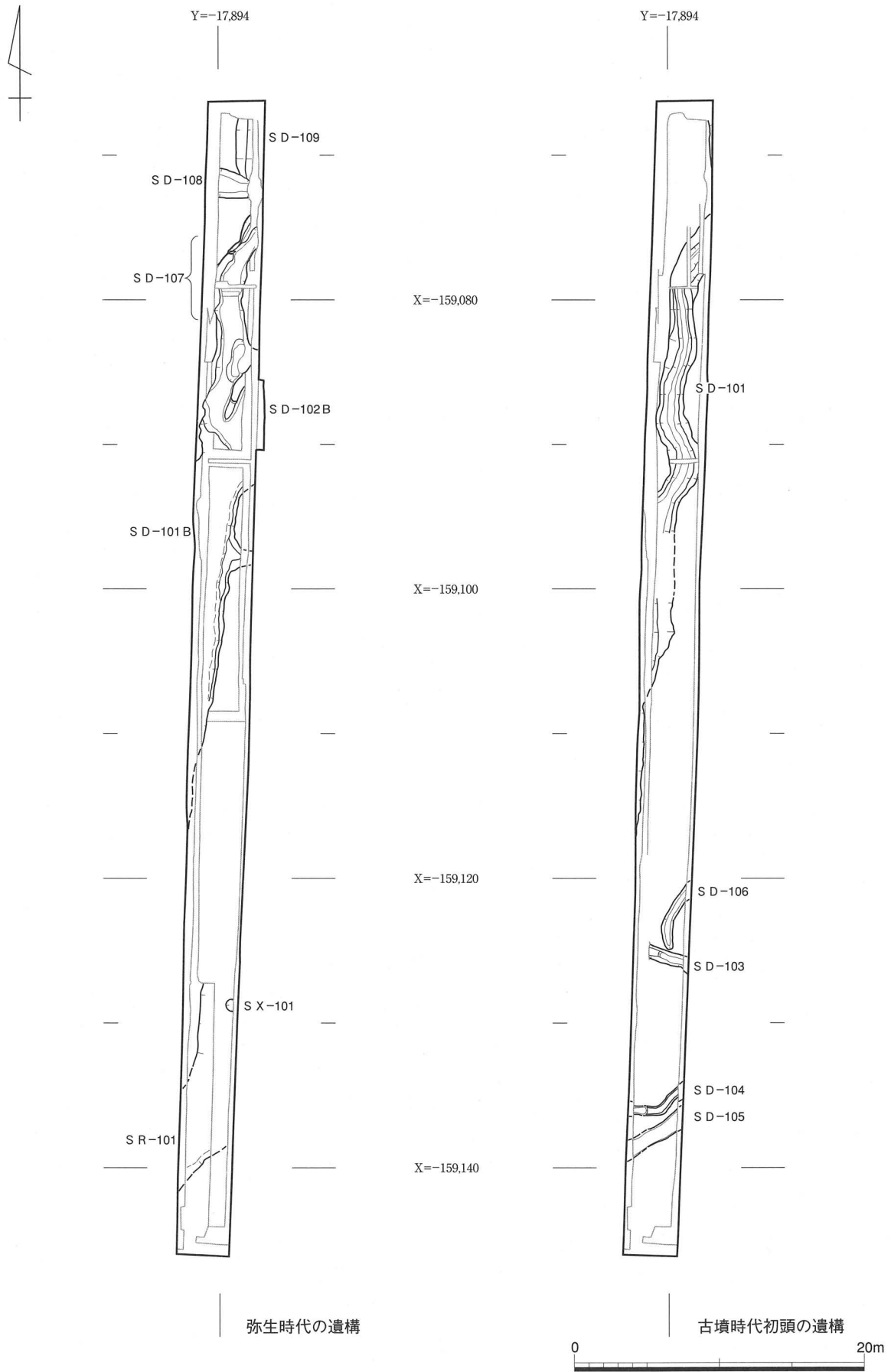
- 第VII層: 黒灰色粘土
- 第VIII層: 青灰色粘土
- 第IX層: 暗灰色粘土
- 第A層: 暗青灰色粘土
- 第B層: 暗青灰色粘土 (シルト質・青味)
- 第C層: 灰青色粘土 (シルト質・青味)
- 第D層: 灰色シルト
- 第E層: 暗灰色粘土 (白斑)

- 1 灰色粗砂
- 2 褐色粗砂
- 3 褐色粘土
- 4 暗青灰色粘土 (砂混)
- 5 明褐色粘土 (鉄分層)
- 6 灰白色砂と暗灰色砂の互層
- 7 灰白色粗砂
- 8 黒色粘土と暗青灰色粘土のアロミック
- 9 褐色粗砂

- 10 灰色粗砂
- 11 暗青灰色粘砂 (鉄混)
- 12 暗青灰色シルト (シルト質)
- 13 暗褐色粘質土 (シルト質)
- 14 灰色シルト
- 15 褐色砂質土 (砂礫混)
- 16 黒褐色粘質土 (砂礫混)
- 17 褐色粘質土 (シルト質)
- 18 灰褐色粘質土 (シルト質)

SR-10I堆積土

SD-10IB堆積土



第257図 調査区遺構配置図 (S = 1/400)

(1) 弥生時代中期前葉の遺構

弥生時代後期初頭の環濠SD-101B・102Bを調査していたところ、その底面において異なる堆積層を確認した。先行環濠の可能性が予想されたので、SD-101Cとして規模・時期確認のため部分的な深掘りをおこなった。弥生時代中期前葉の遺構として確認したのは、このSD-101Cのみである。下層遺構面の調査をおこなっておらず不確定ではあるが、この時期の遺構はSD-101Cから西側の微高地上に分布すると考えられる。

溝

SD-101C (第258図、写真図版157)

本溝は、調査区の北半において検出した南南西-北北東に走行する大溝である。本溝については、再掘削溝であるSD-101B・102Bを底面まで掘り下げたX=-159,082mからX=-159,091mまでの範囲で、その上面を確認した。また、範囲(内容)確認という調査の性格上、底面確認のための掘り下げは長さ約5mの範囲に限った。本溝の規模については、再掘削溝であるSD-101B・102Bあるいは洪水層と考えられるシルトに上面を削平されるため、その掘り込まれた土層を限定することは不可能である。ただし、調査区中央でおこなった東西の断ち割りでは、SD-101Bの検出面となる標高47.50mの暗褐色粘質土(砂混)上面よりも約0.3m下、暗青灰色粘土(砂混)上面を切り込む青灰色シルトの西への堆積を検出した。この青灰色シルトがSD-101Cの東肩堆積とするならば、標高47.20mの暗青灰色粘土(砂混)上面が遺構検出面となる。検出状態で溝は、幅約2.4mである。底面標高は、45.70m(先の標高47.20mを弥生時代中期前葉の遺構検出面と考えるならば深さは1.50mとなる)を測る。中層の灰黒色粘土層中において、大和第Ⅱ-3様式の土器(P2001・2002)が出土した。下層はよく締まった暗灰色粘土で、遺物をほとんど含まない。弥生時代中期前葉の環濠と考えられる。

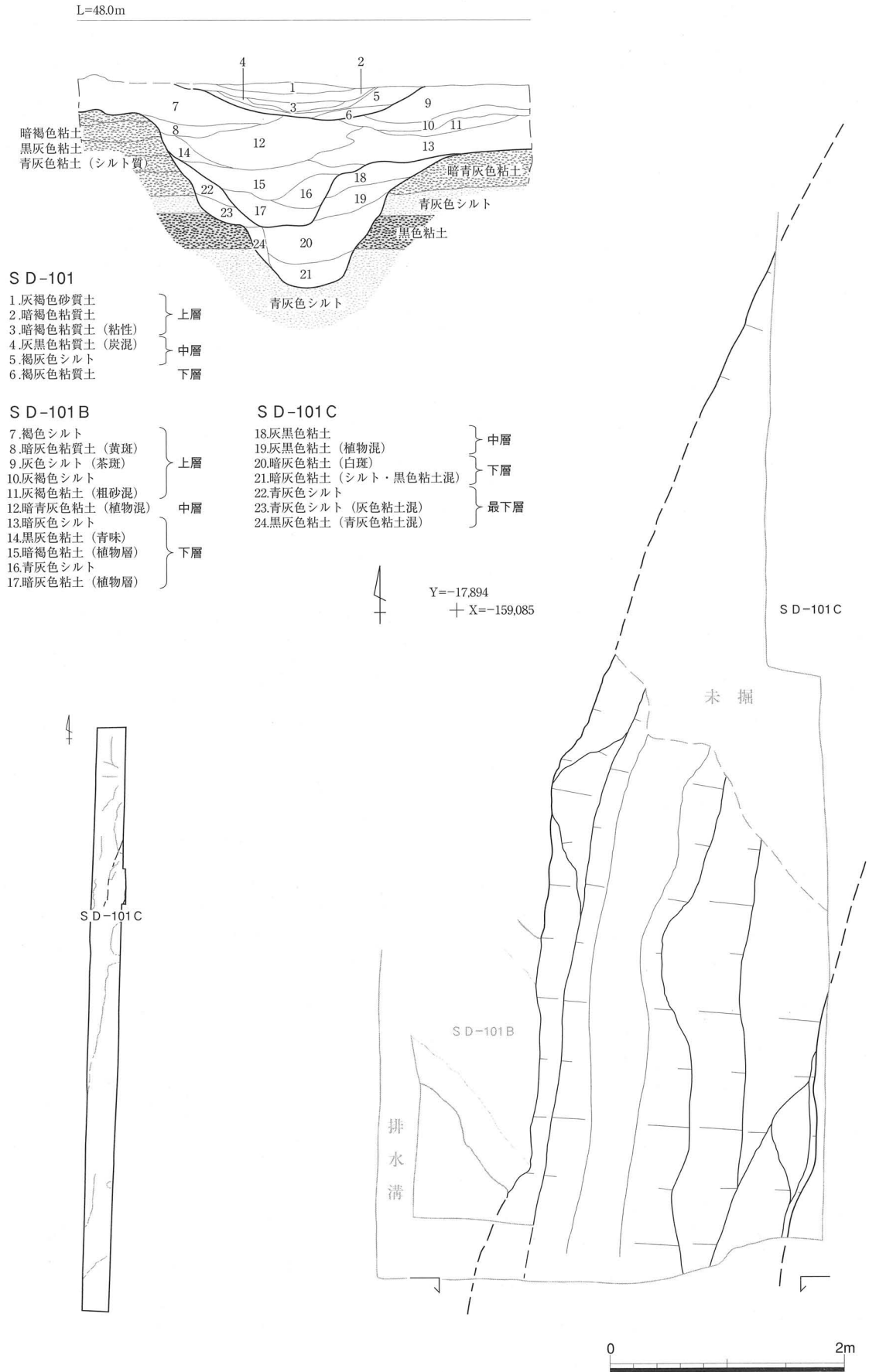
(2) 弥生時代中期中葉の遺構 (第257図、写真図版156)

前述したように、今回の調査では第Ⅴ層(対応層)以下の面的な調査をおこなっておらず、弥生時代中期遺構の詳細については不明である。わずかに、調査区北半の環濠SD-101の西側において、溝状の落ち込みSD-107・108・109を確認し、これを掘り下げたところ弥生時代中期中葉の土器片が出土した。これら落ち込みは、SD-101の西側が微高地末端にあたり洪水層の堆積も薄く、規模の大きい下層遺構がくぼみとなって第Ⅴ層(対応層)上面に現れたものと考えられる。ただし、弥生時代中期の洪水による乱流痕跡の可能性もある。

溝

SD-107 (写真図版158)

本溝は、調査区北端において西壁断面で確認した。底面は確認していない。西壁断面で幅約5.0m、深さ0.50m以上を測る。南肩は第Ⅵ層：明褐色粘土の上面まで立ち上がるが、北肩はSD-108に繋がりその堆積層の浸食により第Ⅷ層：黒灰色粘土までの立ち上がりを確認するのにとどまる。堆積土は大きく2層に分かれ、上層はシルト、下層は砂である。



第258図 弥生時代中期前葉の遺構 (S = 1/50)

S D-108 (第257図、写真図版158)

本溝は、調査区北端で検出した。本溝は東-西に走行する。平面では、最終埋没層を掘削したが、完掘はしていない。西壁断面の観察によれば、幅3.00m、深さ0.30m以上である。下層は、茶灰色粘砂礫が堆積する。

S D-109 (第257図、写真図版158)

本溝は、調査区北端で検出した。本溝は南-北に走行する。S D-101の流路方向と並行しており、S D-101Bの西肩となる可能性もあるが、確認はしていない。溝幅及び深さともに不明である。肩部からは、大和型甕の破片が出土している。

河跡

S R-101 (第259図、写真図版159)

調査区の南半で検出した、河跡である。堆積土の粗砂上面では、弥生時代中期後葉のS X-101、古墳時代初頭のS D-103・104・105・106を検出している。粗砂の拡がり、調査区南半部の約30.0mの範囲に及ぶ。しかし、本流は西排水溝拡張トレンチで検出した、X = -159,127mからX = -159,145mまでの幅6mに及ぶ砂層の落ち込みである。南西-北東へ走行する。深さは、壁崩壊の危険もあり底面を確認していないので不明であるが、検出上面から深さ1.20mまでは掘り下げた。東肩は標高47.30mの暗青灰色粘土の上面まで立ち上がりを確認できるが、西肩は標高47.00mの暗灰色粘土(白斑)の上面までしか立ち上がらず、粗砂がS D-101の手前まで拡がっている。S R-101とS D-101の境に関しては、西壁でX = -159,121mからX = -159,126mまで、東壁でX = -159,111mからX = -159,116mまでのベースの高まりが確認できる。S D-101とS R-101の間であって沿っているようにもみえるが、これが両者を分かち土壘状のものであったかは不明である。そのベースの高まりの上面には、人為的な盛り土層は認められない。むしろ、砂層がオーバーフローしてS D-101に流れ込む状況が観察できる。おそらく、S D-101東肩まで拡がる西側微高地末端地形の一部であり、S R-101の浸食が及ばなかったと考えるべきであろう。

本流部の堆積は、上層が粗砂であるが、下層は植物含みの粘土やシルトである。ベースは本流付近でシルトが砂に変化しており、安定した基盤層ではない。上層の粗砂からは、弥生時代中期中葉の土器が出土した。下層は、土器片が小さく、点数も少ないため時期決定はできないが、中期であろう。おそらく、S R-101は弥生時代以前からの谷地形であり、その堆積状況は弥生時代における埋没過程を示すものといえよう。

(3) 弥生時代中期後葉の遺構 (第257図)

今回の調査区において弥生時代中期後葉の遺構は、S X-101の1基のみである。S X-101自体が、人為的な遺構であるか疑問な点もある。環濠のS D-101からも、弥生時代中期後葉の土器は出土していない。S D-101が再掘削されていることを考慮する必要もあるが、本調査区における弥生時代中期後葉の遺構は希薄といえる。



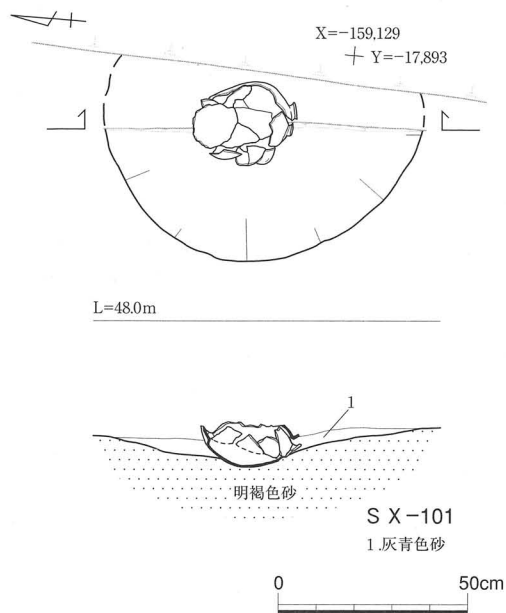
第259図 弥生時代中期中葉の遺構 (S=1/80)

性格不明遺構

S X-101 (第260図、写真図版159)

本遺構は、河跡の上面で検出した弥生時代中期後葉の甕(P P 2001)及びその周囲土層の濁りである。その濁りは、楕円形を呈し、長軸0.85m、短軸0.50m以上である。断面は皿状で、深さは甕破片の上端から底面まで0.12mを測る。

甕は、口縁部よりも底部をやや高く斜位の状態で出土した。底部及び胴部下半1/2を欠くが、後世の削平によるものであろう。時期は、大和第IV-2様式である。性格は、甕が単独で入った土坑なのか、河川堆積において甕という異物を含んだため周囲土層が変色したものかの判断はつかなかった。



第260図 弥生時代中期後葉の遺構 (S = 1/20)

(4) 弥生時代後期初頭の遺構 (第257図、写真図版156)

弥生時代後期初頭の遺構として検出したのは、環濠のS D-101B・102Bである。S D-101BはS D-101Cが埋没した後、流路方向を若干変更して再掘削されている。S D-101Bの再掘削を受けず、くぼ地になって残っていたS D-101C部分をS D-102Bとして捉えた。

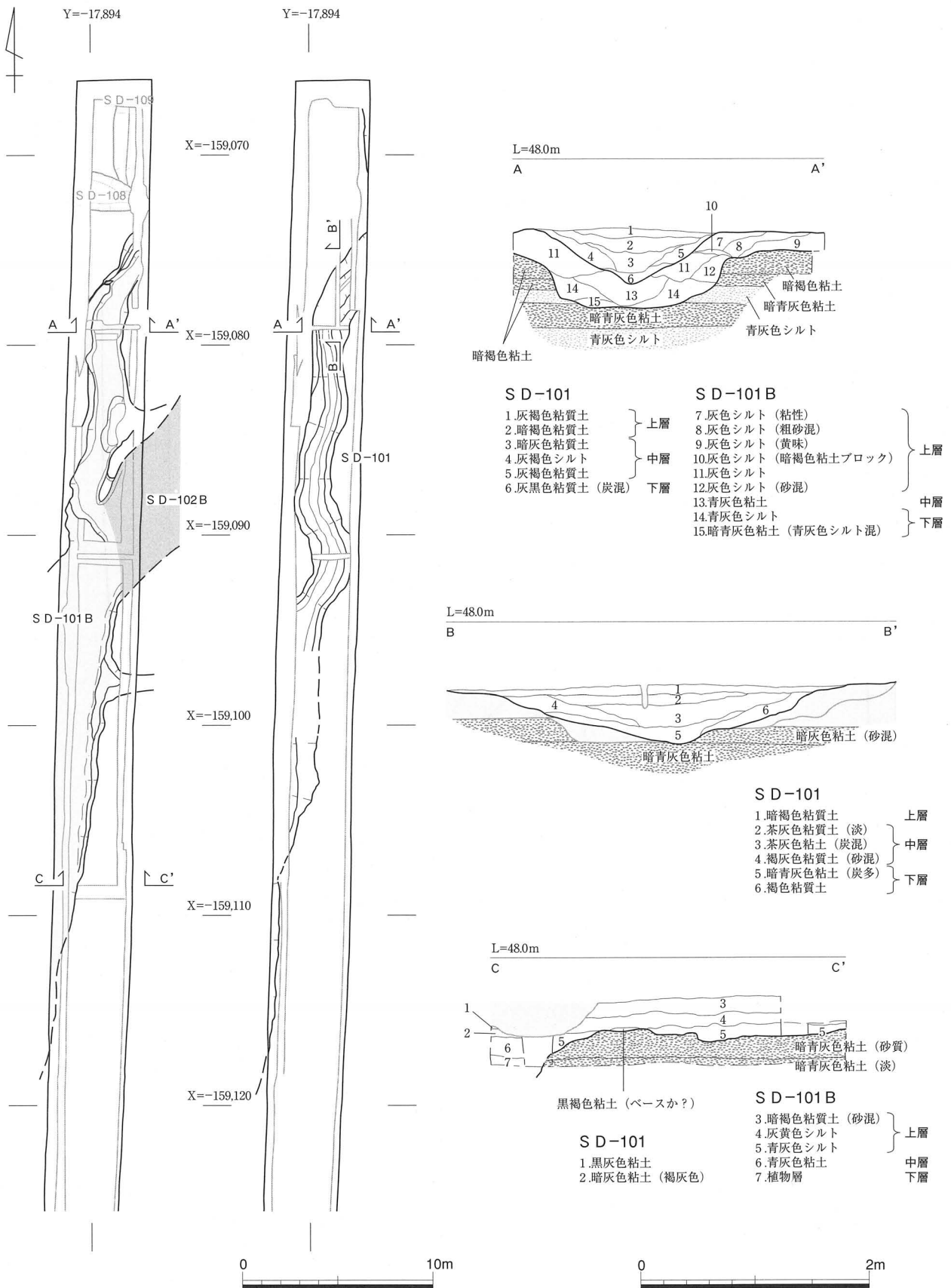
溝

S D-101B (第261~263図、写真図版160・161)

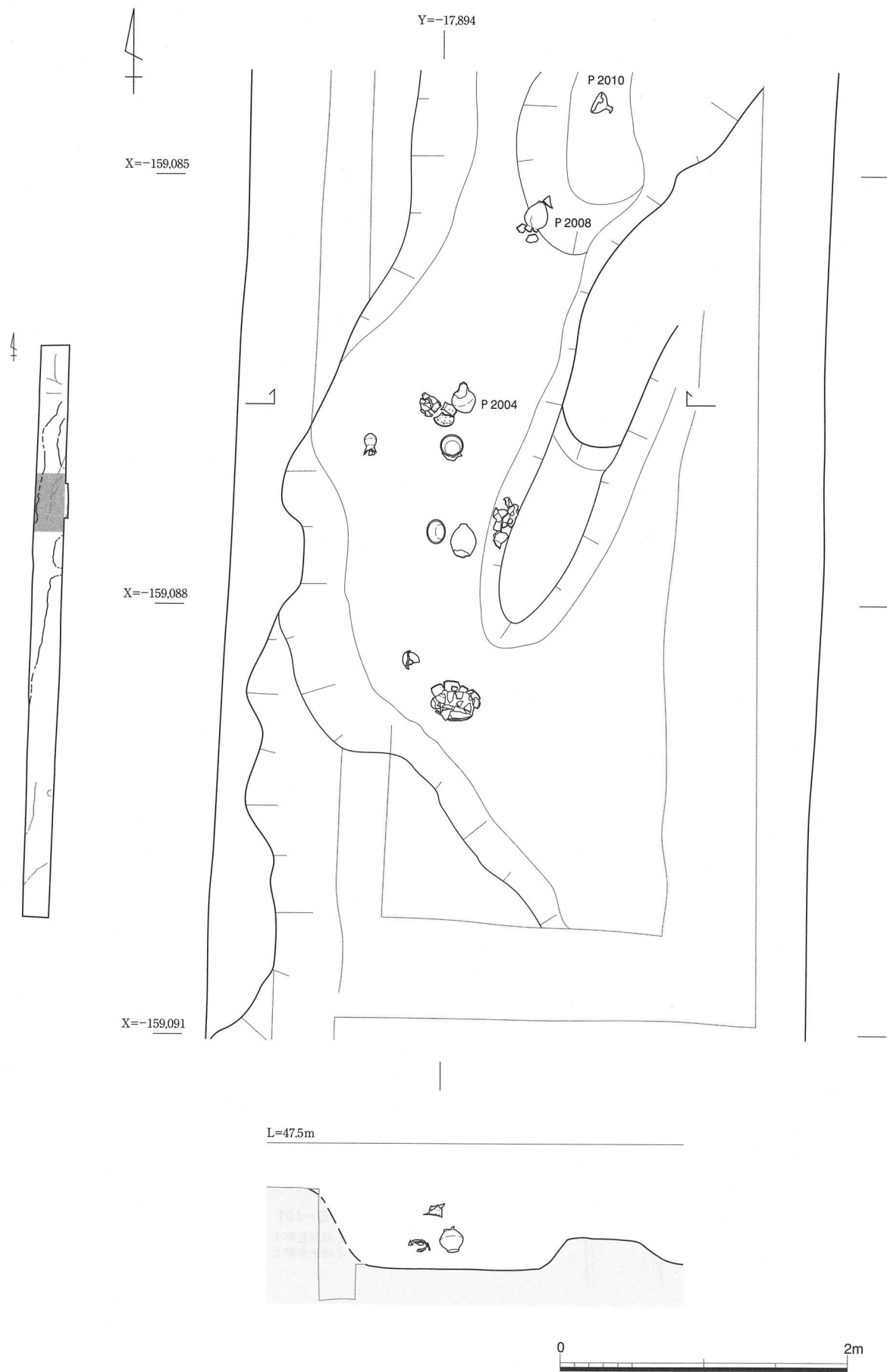
本溝は、S D-101Cの再掘削溝である。本溝は、S D-101Cが南南西-北北東に走行していたのに対しより南北方向にちかく、X = -159,088m付近から北側が新しく付け替えられた環濠である。本溝に関しては、X = -159,079mからX = -159,091mまでの約12mの範囲について底面まで完掘した。溝幅1.60~2.00m以上、断面は逆台形で深さは0.50~1.00mを測る。溝の堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれる。上層はシルトであり、その厚さは0.30mに及ぶ。中層の暗青灰色粘土には、半・完形品の大和第V様式土器(P 2003~2011)が廃棄されていた。下層は、ほとんど遺物を含まない植物層で埋没する。

S D-102B (第261図)

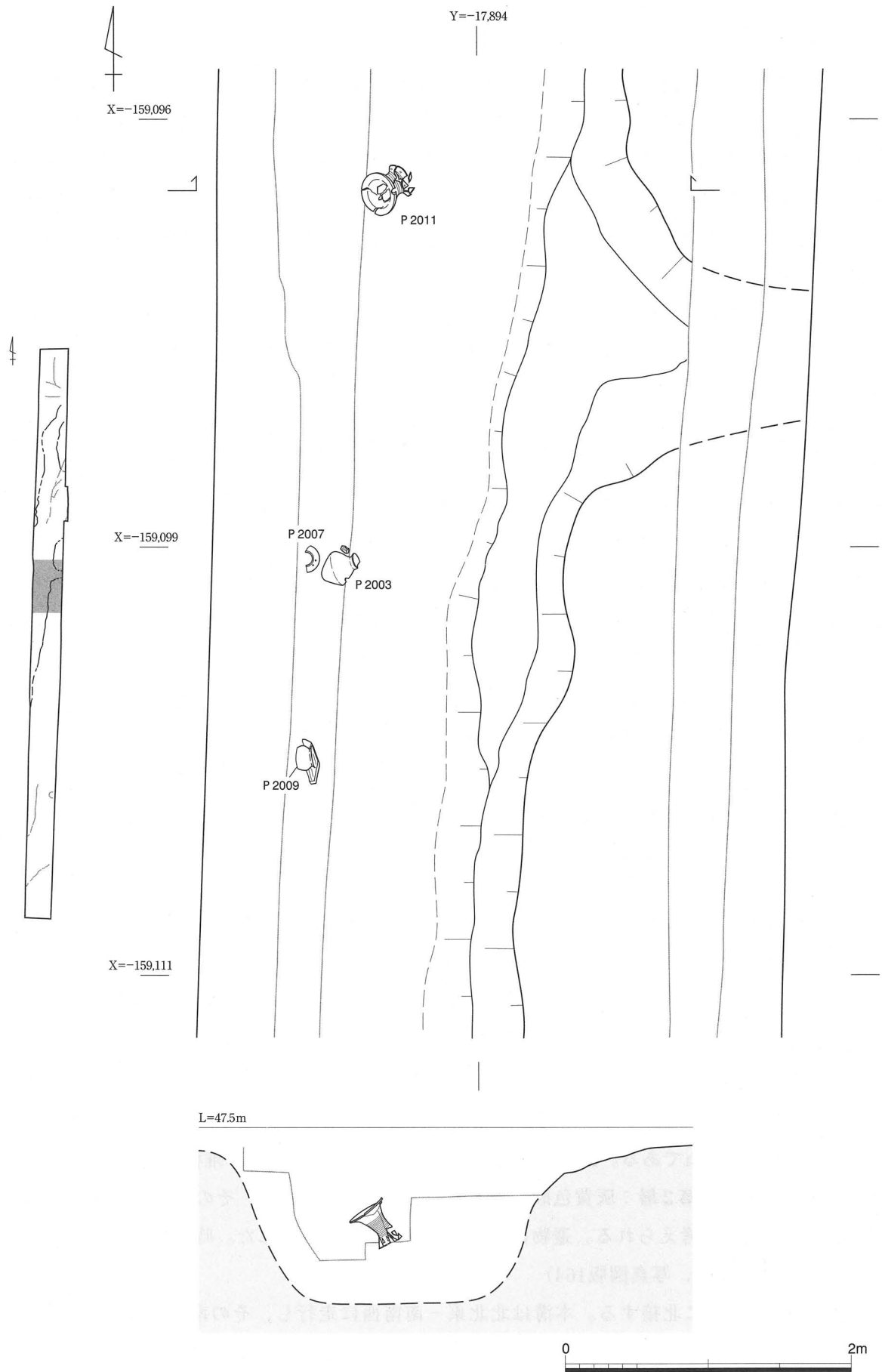
本溝は、S D-101CがS D-101Bの再掘削を受けなかったX = -159,088m付近において、埋没せずに残っていた南南西-北北東方向の環濠痕跡である。S D-101Bの検出時において、中層までは堆積を同じくするが、その下層の植物層が拡がらない溝が東へと枝分かれすることが判明し、S D-102Bとして区別した。本溝は、調査区の東端でS D-101Bとの分岐となるため、西肩のみの検出である。溝幅は2.00m以上である。断面は逆台形で、深さは0.16~0.50mを測る。堆積土は上層のシルトと、下層の暗青灰色粘土である。S D-101Bと同様に厚いシルト層に覆われ埋没する。遺物量は極めて少ない。



第261図 弥生時代後期の遺構 (平面図：S = 1/300、断面図：S = 1/50)



第262図 S D-101B 出土状況図 (1) (S = 1/40)



第263図 S D-101 B 出土状況図 (2) (S = 1/40)

(5) 弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構 (第257図、写真図版156)

調査区北半で検出したS D-101は、S D-101Bを埋没させたシルト層の上面から掘削される。規模は先行溝より縮小し、環濠というよりは排水路にちかい。調査区南半では、弥生時代中期後葉の河跡堆積層である灰色粗砂をベースとしてS D-103・104・105・106を検出した。このうち、S D-103・104・105については、古墳時代初頭の方形周溝墓の可能性もある。

溝

S D-101 (第261図、写真図版162・163)

本溝はS D-101Bの再掘削溝であり、調査区の北半約40mにわたって検出した。その流路方向は、先行溝のS D-101Bにはほぼ一致し南-北に走行するが、部分によっては蛇行している。これは埋没した先行溝のくぼみを利用し、再掘削したことに起因するものであろう。溝幅は1.60～2.20mを測る。断面は皿状から緩いV字形で、深さは0.40～0.50mを測る。堆積土は、場所によって肩部分の堆積が異なるが、大きくは3層に分けることができる。上層は褐色系の粘質土、中層は炭灰を含んだ茶灰色あるいは灰黒色の粘土、下層は炭灰を含んだ灰青色系粘土となる。このうち、下層と中層の間には、溝両肩からのシルトの流れ込みを挟む。中層からは炭化物とともに、布留0式の土器が出土した。なお、溝肩部に接して、弥生時代後期後葉の長頸壺が出土している。

S D-103 (第264図、写真図版164)

本溝は、調査区南半で検出した。本溝は西北西-東南東に走行する。その西半については、後世の耕作により削平されるが、東から西に向かって底面が上がることや西壁でその断面が確認できないことから、西壁手前で収束していたものと考えられる。その幅は0.90mである。断面は皿状で、深さは0.12mを測る。堆積土は黒褐色砂である。

S D-104 (第264図、写真図版164)

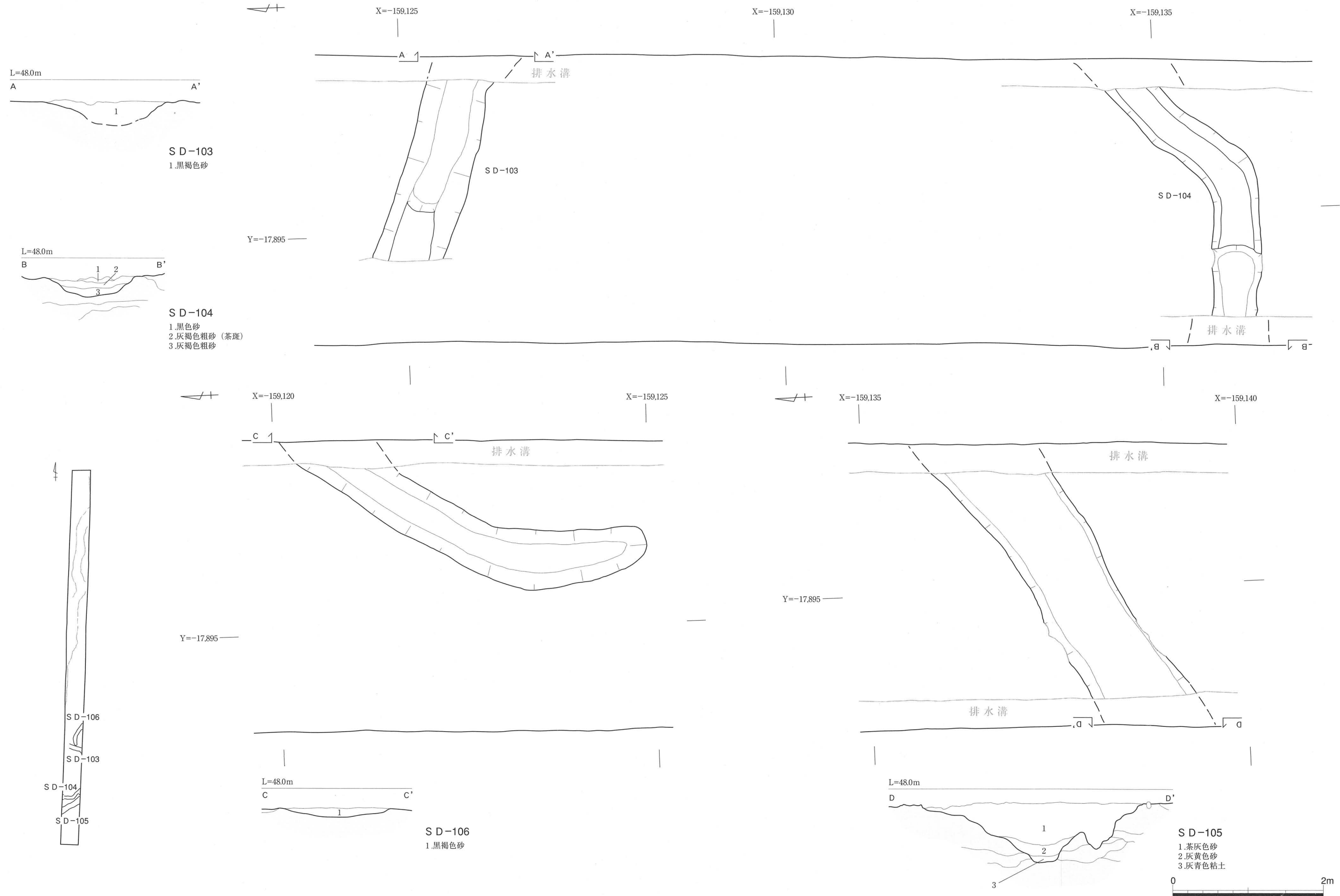
本溝は、S D-103から約10m南において検出した。北に向かって弧を描くように緩く屈曲する。その両端は、どちらも調査区外へと延びる。その幅は1.10～1.40mである。断面は皿状で、深さは0.24mを測る。堆積土は2層からなり、上層は黒色砂、下層は灰褐色粗砂である。上層から小型丸底鉢が出土した。

S D-105 (第264図、写真図版164)

本溝はS D-104に南接する。本溝は東北東-西南西に走行し、その両端は調査区外へと延びる。その幅は1.10mである。断面は逆台形で、深さは0.80mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：茶灰色砂、第2層：灰黄色砂、第3層：灰青色粘土である。その堆積状況から掘削後ただちに埋没したと考えられる。遺物は、弥生土器片が数点出土した。時期は不明である。

S D-106 (第264図、写真図版164)

本溝はS D-103に北接する。本溝は北北東-南南西に走行し、その南端はS D-103の手前で収束する。その幅は0.70mである。断面は皿状で、深さは0.12mを測る。堆積土は黒褐色砂の単層である。遺物は、全く出土しなかった。このため、時期は不明である。



第264図 弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構 (S = 1/50)

5. まとめ

今回の調査によって、唐古・鍵弥生集落における東環濠の一端が明らかとなった。集落を囲んだ環濠1条と、その外（東）側に隣接する河跡1条を検出した。環濠の掘削は、弥生時代中期前葉に遡り、古墳時代初頭まで断続的に再掘削を繰り返している。今回検出した環濠SD-101は、その位置関係から、弥生時代中期における唐古・鍵遺跡の大環濠からまだ外側のものと考えられる。また、環濠に隣接する河跡のSR-101は、弥生時代中期後葉の洪水層と考えられる粗砂を上層堆積土とするが、下層はそれ以前に遡ることから、中期段階は環濠に並行して同時開口していたものと考えられる。

地形

本調査区における弥生時代後期前葉～中世の遺構検出面は、標高47.50mを前後とする。調査区の南半では、灰色粗砂層の上面が対応する。この灰色粗砂層は、南半を流れる河跡SR-101及びそのオーバーフローによって形成されたと考えられる。SR-101の底面は確認していないが深く、その肩となるベース自体が砂層で安定していない。おそらく、弥生時代前期を遡る谷地形が横たわり、そこにSR-101が流れ込んだと考えられる。谷地形は、SR-101の流路方向が示すように、南西から北東に抜けるのであろう。本調査区周辺の地形は、この谷を境として、西が高く東は低かったと考えられる。弥生時代中期前葉の環濠SD-101Cは、谷の西手前、ちょうど地形の落ち際に掘削されていることになる。このため、SD-101Cの周辺は、微高地末端部にあたり安定した土層の堆積状況を示している。しかし、弥生時代後期初頭の環濠であるSD-101Bは、その西肩が第V層：明褐色粘質土を検出面とするが、河跡に面した東肩では厚さ0.30mでシルトが堆積し、検出面はその下の第VI層：暗褐色粘質土である。SD-101Bを埋没させたシルトは、SR-101が埋没したことによって供給されたと考えられる。このシルト層の上面が、弥生時代後期後葉SD-101の遺構検出面である。

遺構

弥生時代中期前葉 今回の調査区で最も古い遺構は、SD-101Cである。SD-101Cは、中層から大和第Ⅱ-3-b様式の土器が出土し、掘削はそれ以前に遡る。しかし、下層からはほとんど土器片が出土せず、上限年代を決定することはできない。SD-101Cは、先の地形でも記述したように、弥生時代中期の河跡SR-101が流入する谷地形に接し、これと沿うように南南西-北北東に走行して地形の落ち際を画している。その規模は、幅2.40m、深さ1.50mを測る。このSD-101Cが、集落東端を画した環濠となることは確実であろう。

なお、唐古・鍵遺跡の周囲には、大和第Ⅱ-3-b様式に大環濠が掘削されたと考えられており、遺跡東側の第24・34・48次調査で大環濠が確認されている。SD-101Cはこの大環濠に先行する環濠と考えられるが、第34次調査から想定される大環濠の推定線よりも外側に位置する。このことは、遺跡西側で大環濠の内側を先行環濠がめぐる位置関係とは逆であり、本調査区の南側で検出した弥生時代中期の河跡SR-101との関係を考慮する必要もあろう。

弥生時代中期中葉～後葉 今回の調査において、弥生時代中期中葉～後葉の遺構・遺物については、ほとんど検出していない。下層遺構の調査をおこなわなかったことも一因であるが、地区的に遺構密度は低いといえよう。弥生時代中期中葉の落ち込みとも溝とも判断のつかない平面的に不明瞭な遺構のSD-107・108・109や、弥生時代中期中葉～中期後葉の河跡であるSR-101、弥生時代中期後葉のSX-101が該当遺構である。環濠SD-101Bからはこの時期の土器は出土しない。ただし、SD-101Bにおける弥生時代後期初頭の土器群は中層からの出土であり、下層が本時期まで遡る可能性は残されている。

このうち注目されるのは、弥生時代中期中葉～後葉の河跡SR-101である。SR-101の上層堆積土である灰色粗砂層は、弥生時代中期中葉の土器を含み、上面には大和第IV-2様式の甕が単体で出土したSX-101が掘り込まれることから、弥生時代中期の短期間に形成されたと想定される。弥生時代中期以前からの谷地形にSR-101が流れ込み、灰色粗砂層を形成したのであろう。弥生時代中期前葉の環濠SD-101C、SD-101B下層の堆積土が粘土であることから、谷地形がSR-101で埋没するまで、SD-101周辺は比較的安定していたと考えられる。

弥生時代後期初頭 SD-101Bは、SD-101Cの再掘削溝であるが、正確にその上面を沿うのではなく、調査区の途中でより北側へと付け替えられている。下層からはほとんど遺物が出土しないため、掘削時期は不明であるが、中層からは半・完形品の大和第V様式土器が並んで出土した。本溝の上層は厚いシルト層で埋没しており、SR-101による谷地形埋没後の影響であろうか、河川氾濫の影響を受けていたことが想定される。

弥生時代後期後葉～古墳時代初頭 SD-101は、シルト層で埋没したSD-101Bを改修するように掘り込まれた溝で、浅く蛇行している。肩からは弥生時代後期後葉の小型長頸壺が出土し、この時期に掘削されたと考えられる。その埋没は、両肩からのシルトの流れ込み後に形成された中層には、炭化物とともに布留0式土器が廃棄される。また、SR-101の堆積土上面には、布留式土器が出土する小溝4条が掘り込まれている。これら小溝が組み合って、古墳時代初頭の方形周溝墓になる可能性も考えられる。

第3節 第78次調査報告

1. 調査の経緯

平成11年度の範囲（内容）確認調査は、第78次とともに第75次の2件をおこなっている。本年度は当初、遺跡南東部における環濠及び遺跡縁辺部の地形を明らかにする目的をもって、南北に長い休耕田で第75次調査を実施した。しかし、表土除去の段階でその調査区は、環濠の走行方向に一致しており北半の大半が一条の環濠内であり、さらに南半の大半は河跡の流路内であることが判明した。縁辺部の地形を復原していくうえで、十分なデータが得られるとは言い難い状況となった。そこで、田原本町教育委員会では第75次調査を必要最低限の掘削に止めることにより、周辺部でもう1ヶ所調査区の追加を検討した。

その結果、第9次調査区の東隣接地である大字鍵202番1の東西に長い水田が休耕地と判明し、第78次調査の候補地となった。本地であれば、今回の第75次調査で検出した環濠と、第9次調査区で検出された大溝との関係を明らかにし、その走行方向に対し直交した調査区を設定することが可能と考えられた。また、第75次調査で検出した環濠の推定線よりも調査区は東側へと延びており、弥生集落南東縁辺部の地形を明らかにできるものと期待できた。



第265図 第78次調査区の位置 (S = 1/2,000)

急遽、関係者と協議し、発掘調査の諸手続をおこなった。唐古・鍵遺跡調査検討委員会の委員には、書面にて本年度の範囲（内容）確認調査が2ヶ所になることを連絡した。この間、田原本町教育委員会は唐古・鍵遺跡で、第76・77次調査をおこなっており、平成11年度の範囲（内容）確認調査は第75・78次と飛び数になった。

2. 調査の方法

調査は、東西に長い休耕田で長さ90m、幅2.5mの調査区を設定した（第265図）。本調査区は遺跡縁辺部のため、砂やシルトの安定しない堆積土層であり、弥生時代遺構を掘り下げ始めたところ壁が次々と崩落を始めた。このため、安全確保を目的として、南北両壁に幅0.5mの犬走りを設け、調査区東半部分については深掘りを断念した。調査面積は約225㎡である。

調査期間は、平成12（2000）年2月3日から3月31日までで、実働日数は38日間である。出土遺物総数はコンテナ29箱である。

3. 層序

第78次調査区は、第75次調査区と同様に唐古・鍵遺跡の東縁辺にあたり、河川による浸食及び堆積作用が激しい。調査区は東西の長さが90mに及び、西半の弥生集落環濠帯部分から東半の弥生集落外までを含み、その土層堆積状況は一様でない。唯一安定した土層の堆積を示すのは、調査区西端で検出したSD-109Cの東肩部分である。SD-109Cは環濠という性格から、遺跡東側の微高地末端部に沿って掘削されている。その東肩部分は、弥生時代の微高地末端にあって一段高く、弥生時代中期河跡であるSR-101の砂層堆積はこの手前で切れることから、河川の浸食・堆積作用をさほど受けなかったと考えられる。この地点を本調査区における基本層序として捉え、以下に示した（第266図）。

第Ⅰ層：茶灰色粘質土	〔水田耕土、	厚さ0.10m：標高48.50m〕
第Ⅱ層：灰色粘質土（シルト質）	〔水田床土1、	厚さ0.12m：標高48.40m〕
第Ⅲ層：灰色粘質土	〔水田床土2、	厚さ0.16m：標高48.28m〕
第Ⅳ層：灰色砂質土	〔中世遺物包含層、	厚さ0.22m：標高48.12m〕
第Ⅶ層：暗褐色粘質土	〔古墳時代遺構検出面、	厚さ0.27m：標高47.90m〕
第Ⅷ層：灰色粘質土（茶斑）	〔弥生時代後期遺構検出面、	厚さ0.27m：標高47.63m〕
第Ⅸ層：暗灰色粘土（炭・砂混）	〔弥生時代遺物包含層、	厚さ0.18m：標高47.35m〕
第Ⅹ層：暗灰色粘土（炭混）	〔弥生時代遺物包含層、	厚さ0.54m：標高47.17m〕
第Ⅺ層：緑灰色粘土	〔ベース、	厚さ0.28m：標高46.63m〕
第Ⅻ層：黒褐色粘土（植物層）	〔ベース、	厚さ0.68m：標高46.35m〕
第Ⅼ層：青灰色シルト	〔ベース	：標高45.67m〕

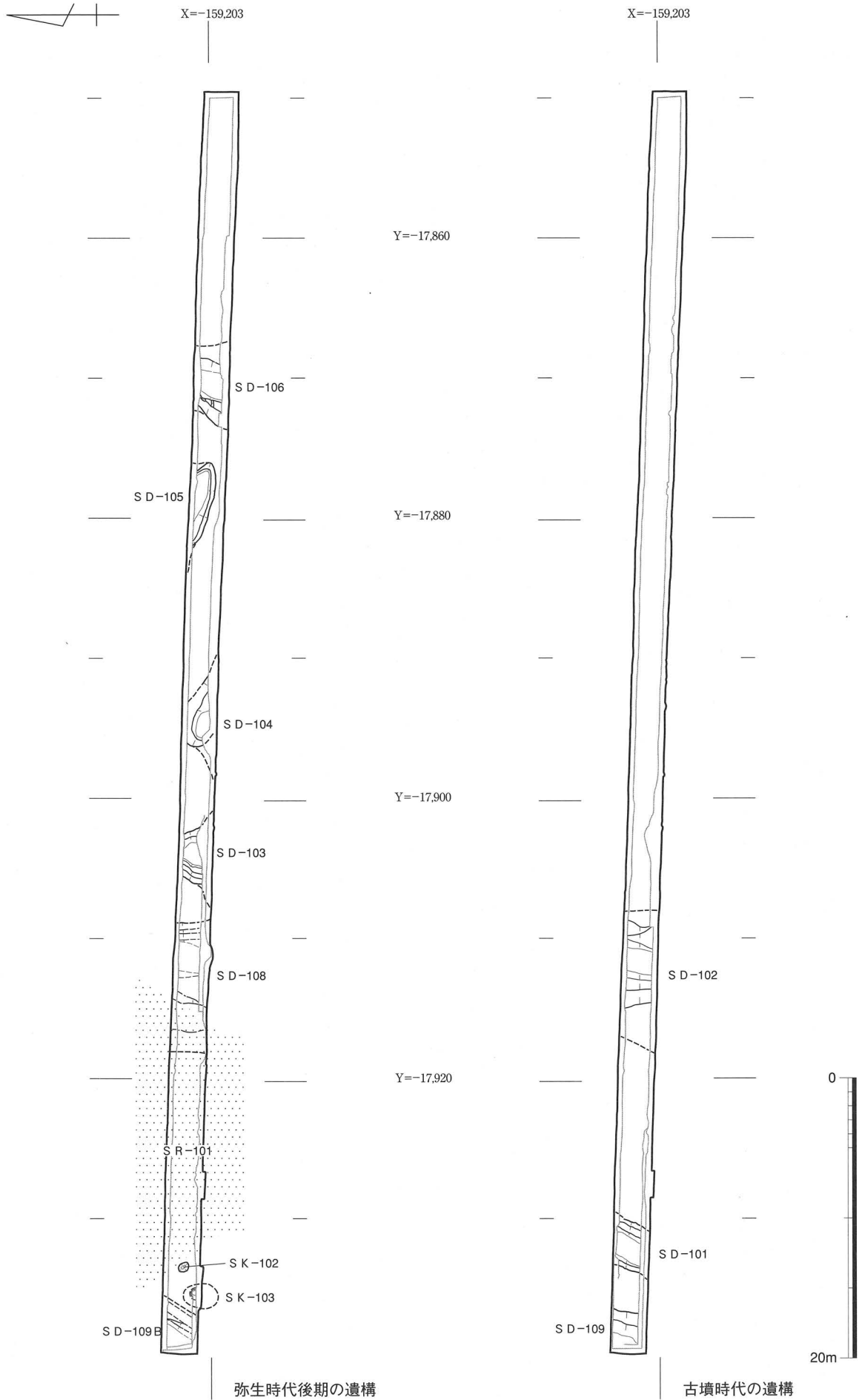
上記の基本層序のうち、調査区全般に互って共通するのは、中世遺物包含層の第Ⅳ層：灰色砂質土までで、これより下の層を対応させることはほとんど不可能である。調査区東半では、地形による西から東への傾斜に従って中世遺物包含層の堆積が約0.4mと厚くなり、第Ⅳ層の下位で第Ⅴ層：灰色粘土（茶斑）が分層できる。さらに調査区東半は、中世遺物包含層以下の堆積は不安定で、弥生時代後期遺構の上面を第Ⅵ層：灰褐色粘質土（砂混）あるいは色調の変色した対応層が覆っている。この層は遺構の埋没状況に応じて厚さを変じ、S D - 103・104・105・106の上面においては暗灰色粘土（砂混）の溜まりとなっていた。第Ⅵ層及びその対応層は、古墳時代後期の遺物包含層と考えられる。調査区東半では第Ⅵ層の直下において、調査区西端の第Ⅷ層に対応すると考えられる褐色系粘質土の上面で弥生時代後期遺構の検出をおこなっている。しかし、この対応層についても、遺構検出面をもって同一としているが、地点によって色調・土質が異なり、安定した堆積ではない。

これに対し、基本層序を示した調査区西端は堆積が安定している。古墳時代と弥生時代では遺構検出面を違え、古墳時代後期溝のS D - 101は第Ⅶ層：暗褐色粘質土の上面で、弥生時代後期溝のS D - 109は第Ⅷ層：灰色粘質土（茶斑）の上面で検出している。第Ⅶ層：暗褐色粘質土は、調査区西端にのみ堆積する弥生時代～古墳時代初頭の遺物包含層である。おそらくは、微高地末端にのみ堆積したものであろう。この直下において検出された第Ⅷ層：灰色粘質土（茶斑）は、上面を弥生時代後期遺構検出面とし、調査区東半とは同時期遺構の検出をもって層を対応させているが、それらとは異なる安定した粘質土である。これに続く、第Ⅸ層：暗灰色粘土（炭・砂混）、第Ⅹ層：暗灰色粘土（炭混）については遺物包含層であるが、部分的な深掘りのため遺物は少なく、時期決定の手がかりを欠いている。ただし、第Ⅹ層：暗灰色粘土（炭混）については、唐古・鍵遺跡の縁辺部に堆積する弥生時代前期の遺物包含層と同一のものである可能性が高い。第Ⅺ層：緑灰色粘土はベースであるが、S D - 108の西肩でも検出しており、周辺部に拡がる可能性がある。

この他、Y = -17,877mからY = -17,915mまでの範囲で、排水溝において無遺物層の黒色粘土や青灰色粘土を検出している。しかし、壁崩落により本当に弥生時代以前の堆積層であるか確認しておらず、アルファベットで表記し確実なベースとの区別を計った。

4. 遺構

本調査区では、環濠と考えられる大溝を3条検出した。このうち、最も居住域にちかい西端のS D - 109は、微高地東末端を切って弥生時代中期前葉に掘削され、幾度かの再掘削を経て古墳時代初頭まで機能する。このS D - 109の東側には、弥生時代前期あるいはそれ以前の谷地形があり、集落縁辺部的な様相を呈していたと考えられる。この谷地形は、弥生時代中期後葉にS R - 101の砂層に覆われ埋没する。その埋没後の弥生時代後期初頭には、S D - 109の再掘削及び居住域の外側である東へ向かってS D - 108・106が掘削される。この時期の遺構



第267図 調査区遺構配置図 (S = 1/400)